



Cisco APIC 基本設定ガイド、リリース 5.2.x

最終更新：2025 年 5 月 26 日

シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター
0120-092-255（フリーコール、携帯・PHS含む）

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00

<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>



Trademarks

THE SPECIFICATIONS AND INFORMATION REGARDING THE PRODUCTS REFERENCED IN THIS DOCUMENTATION ARE SUBJECT TO CHANGE WITHOUT NOTICE. EXCEPT AS MAY OTHERWISE BE AGREED BY CISCO IN WRITING, ALL STATEMENTS, INFORMATION, AND RECOMMENDATIONS IN THIS DOCUMENTATION ARE PRESENTED WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED.

The Cisco End User License Agreement and any supplemental license terms govern your use of any Cisco software, including this product documentation, and are located at: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/cloud-and-software/software-terms.html>. Cisco product warranty information is available at <https://www.cisco.com/c/en/us/products/warranty-listing.html>. US Federal Communications Commission Notices are found here <https://www.cisco.com/c/en/us/products/us-fcc-notice.html>.

IN NO EVENT SHALL CISCO OR ITS SUPPLIERS BE LIABLE FOR ANY INDIRECT, SPECIAL, CONSEQUENTIAL, OR INCIDENTAL DAMAGES, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, LOST PROFITS OR LOSS OR DAMAGE TO DATA ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THIS MANUAL, EVEN IF CISCO OR ITS SUPPLIERS HAVE BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

Any products and features described herein as in development or available at a future date remain in varying stages of development and will be offered on a when-and-if-available basis. Any such product or feature roadmaps are subject to change at the sole discretion of Cisco and Cisco will have no liability for delay in the delivery or failure to deliver any products or feature roadmap items that may be set forth in this document.

Any Internet Protocol (IP) addresses and phone numbers used in this document are not intended to be actual addresses and phone numbers. Any examples, command display output, network topology diagrams, and other figures included in the document are shown for illustrative purposes only. Any use of actual IP addresses or phone numbers in illustrative content is unintentional and coincidental.

The documentation set for this product strives to use bias-free language. For the purposes of this documentation set, bias-free is defined as language that does not imply discrimination based on age, disability, gender, racial identity, ethnic identity, sexual orientation, socioeconomic status, and intersectionality. Exceptions may be present in the documentation due to language that is hardcoded in the user interfaces of the product software, language used based on RFP documentation, or language that is used by a referenced third-party product.

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/trademarks.html>. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners.

The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company.
(1721R)



目次

はじめに :	Trademarks iii
--------	-----------------------

第 1 章	新機能および変更された機能に関する情報 1
	新機能および変更された機能に関する情報 1

第 2 章	Cisco APIC の設定 3
	Cisco Application Policy Infrastructure Controller 設定の推薦構成 3
	Cisco Application Policy Infrastructure Controller のインターフェイス 4
	ユーザーインターフェイスの混在に関する制限 5
	コンフィギュレーションの検証 8

第 3 章	初回セットアップウィザード 9
	初回セットアップウィザードについて 9
	[Fabric Membership (ファブリックメンバーシップ)] 10
	管理 11
	vPC ペア 12
	BGP 12
	DNS 13
	NTP 14
	プロキシ 14
	グローバル設定 15

第 4 章	ユーザアクセス、認証およびアカウントिंग 19
	アクセス権のワークフローの依存関係 19

ユーザ アクセス、認可およびアカウントिंग	20
マルチテナントのサポート	20
ユーザ アクセス：ロール、権限、セキュリティ ドメイン	20
ログイン ドメイン	22
GUI を使用してローカル ドメインを作成する	23
プロバイダーを作成する	26
ローカル ユーザの設定	31
GUI を使用したローカル ユーザの設定	31
GUI を使用した SSH 公開キー認証の設定	34
リモート ユーザの設定	35
外部認証サーバの AV ペア	35
外部認証サーバの AV ペアの設定	36
TACACS+ アクセス用の APIC の設定	37
RADIUS アクセス用の APIC の設定	38
APIC への RADIUS および TACACS+ アクセス用の Cisco Secure Access Control Server の設定	39
Cisco AVPair を使用した APIC アクセス用の Windows Server 2012 LDAP の設定	41
LDAP アクセス用の APIC の設定	43
Cisco AV ペアが欠落しているか不良であるリモート ユーザのデフォルトの動作の変更	44
署名ベースのトランザクションについて	44
注意事項と制約事項	45
X.509 証明書と秘密キーの生成	45
ローカル ユーザの設定	46
GUI を使用したローカル ユーザの作成とユーザ証明書の追加	46
Python SDK を使用したローカル ユーザの作成	47
秘密キーを使用した署名の計算	49
アカウントिंग	51
共有サービスとしての外部ネットワークへのルーテッド接続の課金と統計情報	52
第 5 章	管理 55
	管理のワークフロー 55

ACI 管理アクセスのワークフロー	55
管理アクセスの追加	57
GUI での管理アクセスの追加	57
IPv4/IPv6 アドレスおよびインバンド ポリシー	58
アウトオブバンド ポリシーの IPv4/IPv6 アドレス	59
既存の IP tables 機能をミラーリングする IPv6 の変更	59
管理アクセスの注意事項および制約事項	60
ウィザードによるインバンドおよびアウトオブバンド管理アクセスの設定	61
Cisco APIC GUI を使用したインバンド管理アクセスの設定	62
Cisco APIC GUI を使用したアウトオブバンド管理アクセスの設定	65
テクニカル サポート、統計情報、およびコア ファイルのエクスポート	67
ファイルのエクスポートについて	67
ファイルのエクスポートに関するガイドラインと制約事項	67
ファイル エクスポート用のリモート ロケーションの作成	68
GUI を使用したオンデマンド テクニカル サポート ファイルの送信	69
概要	69
設定ファイルの暗号化	70
GUI を使用したリモート ロケーションの設定	72
GUI を使用したエクスポート ポリシーの設定	72
GUI を使用したインポート ポリシーの設定	74
GUI を使用した設定ファイルの暗号化	74
コントローラ コンフィギュレーションのバックアップ、復元、およびロールバック	77
設定ファイルのバックアップ、復元、およびロールバックのワークフロー	77
fileRemotePath オブジェクトについて	78
コントローラへの設定のエクスポート	78
コントローラへの設定のインポート	81
スナップショット	83
スナップショット マネージャ ポリシー	84
ロールバック	86
Syslog の使用	88
Syslog について	88

Syslog の宛先および宛先グループの作成	89
Syslog 送信元の作成	91
アトミック カウンタの使用	92
アトミック カウンタについて	92
アトミック カウンタに関する注意事項および制約事項	94
アトミック カウンタの構成	96
SNMP の使用	97
SNMP について	97
Cisco ACI での SNMP アクセスのサポート	97
SNMP トラップ集約機能	98
SNMP の設定	99
GUI による SNMP ポリシーの設定	99
GUI による SNMP トラップ通知先の設定	101
GUI による SNMP トラップ ソースの設定	102
SNMP を使用したシステムのモニタリング	103
SPAN の使用	103
SPAN の概要	103
マルチノード SPAN	104
SPAN の注意事項と制約事項	105
GUI を使用した SPAN の設定	110
Cisco APIC GUI を使用したテナント SPAN セッションの設定	110
APIC GUI を使用した SPAN フィルタ グループの設定	111
APIC GUI を使用したアクセス SPAN ポリシーの設定	113
Cisco APIC GUI を使用したファブリック SPAN ポリシーの設定	114
APIC GUI を使用した外部アクセス用のレイヤ 3 EPG SPAN セッションの設定	115
Cisco APIC GUI を使用したテナント SPAN ポリシーの宛先グループの構成	116
Cisco APIC GUI を使用したアクセス SPAN ポリシーの宛先グループの設定	118
Cisco APIC GUI を使用したファブリック SPAN ポリシーの宛先グループの設定	119
NX-OS スタイルの CLI を使用した SPAN の構成	120
NX-OS スタイルの CLI を使用したアクセス モードでのローカル SPAN の設定	120
NX-OS スタイルの CLI を使用した SPAN フィルタ グループの設定	123

NX-OS スタイルの CLI を使用した SPAN フィルタ グループの関連付け	125
NX-OS スタイルの CLI を使用したアクセス モードでの ERSPAN の設定	126
NX-OS スタイルの CLI を使用したファブリック モードでの ERSPAN の設定	130
NX-OS スタイルの CLI を使用したテナント モードでの ERSPAN の設定	133
NX-OS スタイルの CLI を使用したグローバル SPAN-On-Drop セッションの設定	135
REST API を使用した SPAN の構成	137
REST API を使用した ERSPAN 宛先のファブリック宛先グループの設定	137
REST API を使用したグローバル ドロップ送信元グループの設定	137
REST API を使用した SPAN 宛先としてのリーフ ポートの設定	138
REST API を使用した SPAN アクセス送信元グループの設定	138
REST API を使用した SPAN ファブリック送信元グループの設定	139
REST API を使用した ERSPAN 宛先のアクセス宛先グループの設定	139
トレースルートの使用	140
トレースルートの概要	140
トレースルートの注意事項および制約事項	140
エンドポイント 間での traceroute の実行	141
acidiag コマンド	142
第 6 章	
コア ACI ファブリック サービスのプロビジョニング	153
リンク レベル ポリシー	153
電磁場干渉に対する再トレーニング	153
GUI を使用したリンク レベル ポリシーの設定	154
ポート起動遅延	154
リンク レベル ポリシーの制限	154
リンク デバウンス間隔	155
リンク フラップ ポリシー	155
GUI を使用したリンク フラップ ポリシーの設定	156
時刻同期と NTP	156
インバンドの管理 NTP	157
NTP over IPv6	157
GUI を使用した NTP の設定	158

REST API を使用した NTP の設定	159
GUI を使用した NTP の動作の確認	160
NTPサーバ	160
GUI を使用した NTP サーバの有効化	161
GUI を使用した日時形式の設定	163
DHCP リレー ポリシーの設定	164
DHCP リレー ポリシーの注意事項と制約事項	167
GUI を使用した APIC インフラストラクチャに対する DHCP サーバ ポリシーの設定	168
REST API を使用してオプション 79 を設定する	171
NX-OS スタイル CLI を使用した APIC インフラストラクチャの DHCP サーバ ポリシー の設定	172
GUI を使用した APIC インフラストラクチャ用 DHCP サーバ ポリシーの設定	173
DNS サービス ポリシーの設定	174
インバンド DNS サービス ポリシーによる外部宛先の設定	175
デュアルスタック IPv4 および IPv6 DNS サーバ	176
デュアルスタック IPv4 および IPv6 環境	177
DNS プロファイルの IPv4 または IPv6 の優先順位のポリシー	177
GUI を使用した DNS プロバイダーと接続するための DNS サービス ポリシーの設定	178
カスタム証明書の設定	179
カスタム証明書の設定のガイドライン	179
GUI を使用した Cisco ACI HTTPS アクセス用カスタム証明書の設定	180
ファブリック全体のシステム設定のプロビジョニング	184
APIC インバンドまたはアウトオブバンド接続設定 (preferences) の設定	184
クォータ管理ポリシーの設定	185
適用 BD 例外リストの作成	185
BGP ルータ リフレクタ ポリシーとルート リフレクタ ノード エンドポイントの作成	186
ファブリック全体のコントロールプレーンの MTU ポリシーを設定する	187
エンドポイントループ保護の設定	188
不正エンドポイント制御ポリシー	189
不正なエンドポイントの制御ポリシーについて	189
不正エンドポイント制御ポリシーの制限事項	189

GUIを使用した不正エンドポイント制御ポリシーの設定	190
NX-OS スタイル CLI を使用している不正エンドポイント制御ポリシーの設定	191
不正/COOP 例外リストについて	192
不正/COOP 例外リストのガイドラインと制限事項	192
GUIを使用したブリッジドメイン作成時の不正/COOP 例外リストの設定	193
GUIを使用した既存のブリッジドメインの不正/COOP 例外リストの設定	194
GUIを使用したL3Out SVIの不正エンドポイント制御の例外リストの構成	195
GUIを使用したファブリックの不正エンドポイント制御のMACアドレス例外を構成	196
最大IPアドレスフロー制御について	196
COOPの設定	197
COOPについて	197
GUIを使用したCOOP減衰エンドポイントの表示	199
スイッチCLIを使用したCOOP減衰エンドポイントの表示	199
GUIを使用したCOOP減衰エンドポイントのクリア	200
スイッチCLIを使用したCOOP減衰エンドポイントのクリア	200
RESTAPIを使用したCOOPエンドポイントダンプニングの無効化	200
APIC GUIを使用したCOOP認証の設定	201
Cisco NX OS スタイル CLI を使用したCOOP認証の設定	201
REST APIを使用したCOOP認証の設定	201
エンドポイントリッスンポリシー	202
エンドポイントリッスンポリシーについて	202
GUIを使用したエンドポイントリッスンポリシーの設定	202
IP エージングの設定	203
リモートエンドポイントの学習を無効にする	203
サブネットチェックのグローバルな適用	204
GIPoの再割り当て	205
ドメインの検証のグローバルな適用	206
OpFlexクライアント認証を有効にする	206
ファブリックロードバランシング	207
Cisco APIC GUIを使用したロードバランサポリシーの作成	209

CLI を使用したロード バランサ ポリシーの作成	210
REST API を使用したロード バランサ ポリシーの作成	212
時間精度ポリシーの有効化	212
グローバル システム GIPo ポリシーの有効化	213
ファブリック ポート トラッキング ポリシーの設定	213
グローバル ファブリック アクセス ポリシーのプロビジョニング	214
グローバル接続可能アクセス エンティティ プロファイルの作成	214
QoS クラスのグローバル ポリシーを設定します。	216
グローバル DHCP リレー ポリシーの作成	216
グローバル MCP インスタンス ポリシーの有効化にします。	219
作成エラーには、回復ポリシーが無効になっています	219
ポート単位ポリシー	220
ポート単位ポリシーについて	220
GUI を使用したポート ポリシーごとの設定	220
GUI を使用したポート ポリシーごとの確認	221
GUI を使用した非表示ポリシーの表示	222
GUI を使用した誤配線プロトコル インターフェイス ポリシーの作成 (任意)	222

第 7 章

基本ユーザ テナント設定 225

テナント	225
テナント内のルーティング	226
サブネット間のテナント トラフィックの転送を促進するレイヤ 3 VNID	227
ルータ ピ어링およびルート配布	229
外部ルータへのブリッジド インターフェイス	230
ルート リフレクタの設定	231
Layer 3 Out を使用した外部接続の設定	232
GUI を使用した MP-BGP ルート リフレクタの設定	232
ACI ファブリックの MP-BGP ルート リフレクタの設定	233
REST API を使用した MP-BGP ルート リフレクタの設定	233
MP-BGP ルート リフレクタ設定の確認	234
GUI を使用した管理テナントの OSPF L3Out の作成	235

NX-OS CLI を使用したテナントの OSPF 外部ルーテッド ネットワークの作成	237
テナント、VRF、およびブリッジ ドメインの作成	239
テナントの概要	239
テナントの作成	240
VRF およびブリッジ ドメイン	240
GUI を使用したテナント、VRF およびブリッジ ドメインの作成	240
EPG の導入	242
特定のポートへの EPG の静的な導入	242
GUI を使用して特定のノードまたはポートへ EPG を導入する	242
特定のポートに EPG を導入するためのドメイン、接続可能アクセス エンティティプロファイル、および VLAN の作成	244
GUI を使用して特定のポートに EPG を展開するためのドメインおよび VLAN の作成	244
AEP を使用してアプリケーション EPG を複数のポートに展開する	246
APIC GUI を使用した AEP による複数のインターフェイスへの EPG の導入	246
マイクロセグメント EPG	249
ベア メタルでのネットワークベースの属性によるマイクロセグメンテーションの使用	249
GUI を使用したベアメタル環境でのネットワークベースのマイクロセグメント EPG の設定	249
共有リソースとしての IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG	252
GUI を使用した共有リソースとしての IP ベースのマイクロセグメント EPG の設定	252
GUI を使用した共有リソースとしての IP ベースのマイクロセグメント EPG の設定解除	253
アプリケーションプロファイルと契約の導入	254
セキュリティ ポリシーの適用	254
セキュリティ ポリシー仕様を含むコントラクト	255
Three-Tier アプリケーションの展開	258
http 用のフィルタを作成するパラメータ	259
rmi および sql 用のフィルタを作成するパラメータ	259
アプリケーションプロファイルデータベースの例	260
GUI を使用したアプリケーションプロファイルの作成	260
GUI を使用した EPG の作成	260

APIC GUI を使用したコントラクトの設定	262
コントラクトとフィルタの注意事項と制約事項	262
GUI を使用したフィルタの作成	262
GUI を使用した契約の作成	263
GUI を使用した契約の消費と提供	263
コントラクト パフォーマンスの最適化	264
契約のパフォーマンスの最適化	264
GUI を使用して TCAM の使用が最適化された契約を設定する	267
契約とサブジェクトの例外	268
コントラクトまたはコントラクトの件名の例外の設定	268
GUI を使用したコントラクトまたはサブジェクトの例外の設定	269
EPG 内契約	270
EPG 内契約	270
EPG 内契約の注意事項と制約事項	271
GUI を使用したアプリケーション EPG への EPG 内契約の追加	272
NX-OS スタイル CLI を使用したアプリケーション EPG への EPG 内契約の追加	274
REST API を使用したアプリケーション EPG への EPG 内契約の追加	275
EPG のコントラクト継承	279
コントラクト継承について	279
GUI を使用した EPG のコントラクト継承の設定	281
GUI を使用したアプリケーション EPG のコントラクト継承の設定	281
GUI を使用した uSeg EPG のコントラクト継承の設定	282
GUI を使用した L2Out EPG のコントラクト継承の設定	282
GUI を使用して外部 L3Out EPG コントラクト継承	283
優先グループ契約	284
契約優先グループについて	284
契約優先グループの注意事項	286
GUI を使用した契約優先グループの設定	286
GUI を使用した L4-L7 サービス EPG ポリシーの作成	287
許可ルールと拒否ルールを含む契約	288
許可ルールおよび拒否ルールを含む契約の概要	288

GUIを使用してACL 契約の許可とロギングの拒否を有効にする	289
NX-OS CLI を使用した ACL 契約許可ロギングの有効化	290
REST API を使用した ACL 契約許可ロギングの有効化	290
GUIを使用した禁止契約拒否ロギングの有効化	291
NX-OS CLI を使用した禁止契約拒否ロギングの有効化	292
REST API を使用した禁止契約拒否ロギングの有効化	293
GUIを使用した ACL 許可および拒否ログの表示	293
REST API を使用した ACL 許可および拒否ログ	294
NX-OS CLI を使用した ACL 許可および拒否ログの表示	295

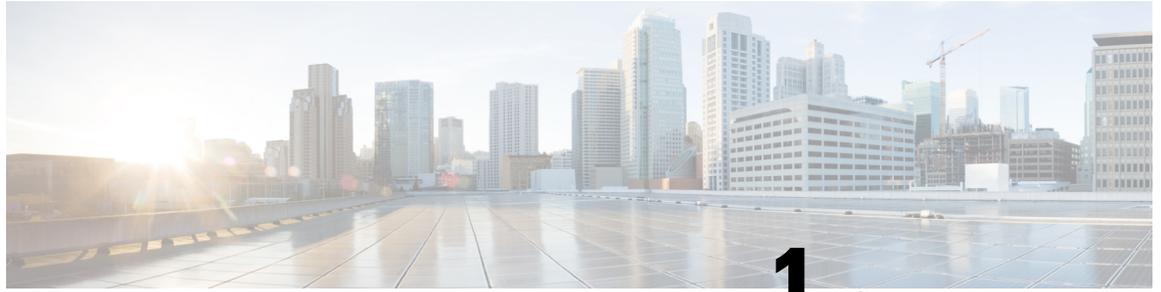
付録 A :

CLI を使用している Cisco APIC の設定	299
クラスタ管理の注意事項	299
CLI を使用した、クラスタ内の Cisco APIC の交換	301
APIC クラスタのサイズ縮小	302
Cisco APIC クラスタの縮小	303
CLI を使用してスタンバイ apic 内でアクティブな APIC 経由でスイッチング	304
CLI を使用して Cold Standby ステータスを確認する	304
CLI を使用した未登録スイッチの登録	305
CLI を使用したディスカバリ前のスイッチの追加	305
CLI を使用してメンテナンス モードにスイッチを移行する	306
CLI を使用して操作モードにスイッチを挿入する	306
NX-OS スタイルの CLI を使用したリモート ロケーションの設定	307
NX-OS CLI を使用したスイッチインベントリの検索	308
CLI を使用した Cisco APIC クラスタの確認	310

付録 B :

REST API を使用した Cisco APIC の設定	315
REST API を使用した APIC クラスタの拡大	315
REST API を使用した APIC クラスタの縮小	316
APIC クラスタのサイズ縮小	318
REST API を使用してアクティブ APIC とスタンバイ APIC を切り替える	319
REST API を使用した未登録スイッチの登録	320

REST API を使用したディスカバリ前のスイッチの追加	320
REST API を使用して、メンテナンス モードにスイッチを削除	321
REST API を使用した操作モードへのスイッチの挿入	322
REST API を使用したリモート ロケーションの設定	322
REST API を使用したオンデマンド テクニカル サポート ファイルの送信	323
REST API を使用したスイッチ インベントリの検索	323



第 1 章

新機能および変更された機能に関する情報

この章は、次の内容で構成されています。

- [新機能および変更された機能に関する情報 \(1 ページ\)](#)

新機能および変更された機能に関する情報

次の表は、この最新リリースまでのガイドでの主な変更点の概要を示したものです。ただし、今リリースまでのガイドにおける変更点や新機能の一部は表に記載されていません。

表 1: Cisco APIC リリース 6.1(2) の新機能および変更された機能に関する情報

特長	説明	参照先
ACI アクセス スパン L3Out 上の ERSPAN 接続先	SPAN 宛先グループ機能を使用して、ERSPAN トラフィックを L3Out の背後にあるリモートエンドポイントに転送します。	Cisco APIC GUI を使用したテナント SPAN ポリシーの宛先グループの構成 (116 ページ)

表 2: Cisco APIC リリース 6.1(1) の新機能および変更された機能に関する情報

特長	説明	参照先
Cisco APIC OOB 管理サブネット IP アドレスが OOB IP アドレスにアクセスするのを制限します	Cisco APIC アウトオブバンド (OOB) サブネットで厳格なセキュリティを有効にすることで、Cisco APIC へのアクセスを制限できます。以前のリリースでは、ユーザーの構成に関係なく、ユーザは ICMP、SSH、HTTP、HTTPS、または TCP 4200 を使用して同じサブネットから OOB IP アドレスを使用して Cisco APIC にアクセスできました。	GUI での管理アクセスの追加 (57 ページ)
ネットワーク タイムプロトコルの AES128-CMAC のサポート	Network Time Protocol (NTP) の AES128-CMAC 認証方式を使用できます。	時刻同期と NTP (156 ページ)



第 2 章

Cisco APIC の設定

- [Cisco Application Policy Infrastructure Controller 設定の推薦構成](#) (3 ページ)
- [Cisco Application Policy Infrastructure Controller のインターフェイス](#) (4 ページ)
- [ユーザー インターフェイスの混在に関する制限](#) (5 ページ)
- [コンフィギュレーションの検証](#) (8 ページ)

Cisco Application Policy Infrastructure Controller 設定の推薦構成

特定の Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) 設定を有効にすることをお勧めします。

Enforce Subnet Check

サブネット チェックの適用機能は、Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) が IP アドレスをデータ プレーンからエンドポイントとして学習した場合、VRF インスタンス レベルでサブネットのチェックを適用します。サブネット チェックの範囲は VRF インスタンスですが、ファブリック全体での設定ポリシーの下では、この機能をグローバルにのみ有効または無効にすることができます。このオプションを有効にすると、ファブリックはブリッジドメインに構成されている 1 つのサブネット以外からは IP アドレスを学習しません。この機能は、このようなシナリオで、ファブリックがエンドポイント情報を学習しないようにします。

サブネットチェックの適用に関するガイドラインと制限事項

1 つの VRF インスタンスだけでこのオプションを有効にすることはできません。オプションを有効にすると、すべての VRF インスタンスで有効になります。

サブネット チェックの適用を有効にする

1. [システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] > [ファブリック全体での設定 (Fabric Wide Setting)]
2. [サブネット チェックの適用 (Enforce Subnet Check)] ボックスをオンにします。

IP エージング ポリシー

IP エージング ポリシーは、エンドポイント上の使用されていない IP アドレスを追跡し、その寿命を管理します。Cisco APIC は、ローカルのエンドポイントエージング間隔の 75% で、IPv4 の場合には ARP リクエスト、IPv6 の場合にはネイバー誘導を送信する、ブリッジドメイン用に構成されたエンドポイント保持ポリシーを使用して追跡を実行します。Cisco APIC が IP アドレスから応答を受信しなかった場合、その IP アドレスはエージングアウトします。

IP エージング ポリシーを有効にする

1. [システム (System)]>[システム設定 (System Settings)]>[エンドポイント制御 (Endpoint Controls)] に移動します。
2. [IP エージング (IP Aging)] タブをクリックします。
3. [管理状態 (Administrative State)] で [有効 (Enabled)] を選択します。

ミスケーブル プロトコル

ミスケーブルプロトコル (MCP) は、リンク層検出プロトコル (LLDP) やスパンニングツリープロトコル (STP) では検出できない、さまざまな問題 (構成ミスなど) によって発生する可能性のあるループを検出します。このオプションは、MCP が EPG 単位でパケットを送信できるようにします。

ミスケーブル プロトコルを有効にする

1. [ファブリック (Fabric)]>[アクセスポリシー (Access Policies)]>>[ポリシー (Policies)]>[グローバル (Global)]>[MCP インスタンス ポリシー デフォルト (MCP Instance Policy default)] に移動します。
2. [管理状態 (Administrative State)] で [有効 (Enabled)] を選択します。
3. [VLAN 単位での MCP PDU を有効にする (Enable MCP PDU per VLAN)] ボックスをオンにします。

Cisco Application Policy Infrastructure Controller のインターフェイス

次のインターフェイスを使用して、アプリケーションプログラミングインターフェイス (API) を介して Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) のすべての機能にアクセスまたは構成できます。

GUI

Cisco APIC GUI は、内部的に REST API メッセージを交換することによって Cisco APIC エンジンと通信する、Cisco APIC へのブラウザベースのグラフィカルインターフェイスです。大規模な構成、展開、および運用には GUI を使用します。GUI を使用すれば、大規模なファブリック構成と展開を自動化するための、インスイッチ プロファイル、インターフェイス プロファ

イル、ポリシー グループ、アクセス エンティティ プロファイル (AEP) などのきめ細かなポリシー制御が可能です。

Cisco APIC GUI の詳細については、『*Cisco APIC Getting Started Guide*』 「」 および 「」 を参照して *Cisco APIC* ベーシック コンフィギュレーション ガイドください。

NX-OS スタイルの CLI

NX-OS スタイルのコマンドラインインターフェイス (CLI) は、Cisco APIC の構成、展開、および運用に使用できます。CLI は、EXEC モードをルートとするコマンドモードの階層にまとめられています。グローバル構成モードで始まる構成サブモードのツリーとなっています。使用できるコマンドは実行しているモードによって異なります。

Cisco APIC を構成するために、NX-OS スタイルの CLI と APIC GUI の両方を使用する場合の重要な注意事項については、[ユーザー インターフェイスの混在に関する制限 \(5 ページ\)](#) を参照してください。

REST API

REST API は設定の変更を受け入れ、コントローラの管理機能へのアクセスを提供します。このインターフェイスは、GUI や CLI の重要なコンポーネントであり、自動化ツール、プロビジョニング スクリプト、およびサードパーティのモニタリング ツールや管理ツールへのアクセス ポイントにもなっています。

Cisco APIC REST API は、REST アーキテクチャを使用するプログラマチック インターフェイスです。API は JavaScript オブジェクトの表記 (JSON) または拡張マークアップ言語 (XML) のドキュメントを含む HTTP (デフォルトでは無効) または HTTPS のメッセージを受け入れ、返します。任意のプログラミング言語を使用して、API メソッドまたは管理対象オブジェクトに関する記述を含むメッセージや、JSON または XML ドキュメントを生成できます。

REST API の詳細については、[Cisco APIC REST API 設定ガイド](#)を参照してください。

ユーザー インターフェイスの混在に関する制限

Cisco APIC は構成のための複数のユーザー インターフェイス (UI) をサポートしているので、ある UI を使用して構成を作成し、その後別の UI を使用して構成を変更することは可能ですが、予期しない結果になることがあります。たとえば、NX-OS スタイル CLI を使用して実行された構成も、APIC GUI で表示できます。これらを表示できますが、時折 GUI で編集できない可能性があります。同様に、APIC GUI で行われた変更も、NX-OS スタイル CLI で確認はできますが、部分的にしか変更できないことがあります。

インターフェイスごとに設定する場合の NX-OS スタイルの CLI と Cisco APIC GUI の混在による制限

インターフェイスごとに設定する場合、Cisco APIC GUI で実行する設定は、NX-OS スタイルの CLI では部分的にしか機能しない場合があります。

たとえば、GUI の [テナント (Tenants)] > [tenant-name] > [アプリケーション プロファイル (Application Profiles)] > [application-profile-name] > [アプリケーション EPG (Application EPGs)] > [EPG-name] > [スタティック ポート (Static Ports)] > [PC、VPC、インターフェイス上に静的 EPG を展開 (Deploy Static EPG on PC, VPC, or Interface)] でスイッチ ポートを構成したとします。次に NX-OS スタイルの CLI で **show running-config** コマンドを使用すると、以下のように出力されます。

```
leaf 102
interface ethernet 1/15
switchport trunk allowed vlan 201 tenant t1 application ap1 epg ep1
exit
exit
```

NX-OS スタイルの CLI でこれらのコマンドを使用してスタティック ポートを設定すると、次のエラーが発生します。

```
apic1(config)# leaf 102
apic1(config-leaf)# interface ethernet 1/15
apic1(config-leaf-if)# switchport trunk allowed vlan 201 tenant t1 application ap1 epg ep1
No vlan-domain associated to node 102 interface ethernet1/15 encap vlan-201
```

これは、CLI に APIC GUI では実行されない検証があることが原因です。 **show running-config** コマンドによって出力されたコマンドが NX-OS CLI で機能するためには、vlan ドメインが事前に構成されている必要があります。設定の順序は GUI に適用されません。

レイヤ 3 外部接続コンフィギュレーションモードのユーザ インターフェイスの混在に関する制限

ここでは、さらに他のユーザ インターフェイスを使用していた場合、NX-OS スタイルの CLI を使用してレイヤ 3 外部接続を構成するための考慮事項を説明します。

APIC NX-OS スタイルの CLI を使用してレイヤ 3 外部接続を設定する場合、次の 2 つのモードを選択することができます。

- **暗黙モード**：シンプルなモードですが、APIC GUI または REST API と互換性がありません。
- **名前付き (または明示) モード**：APIC GUI および REST API と互換性があります。

いずれの場合も、設定は互換性がない UI では読み取り専用であると考えてください。

レイヤ 3 外部接続構成モードの違い

どちらのモードでも、構成設定は API の `I3extOut` クラスのインスタンスである内部コンテナオブジェクト「Layer 3 Outside」 (または「L3Out」) 内で定義されます。2 つのモード間の主な違いは、このコンテナ オブジェクト インスタンスの命名にあります。

- **暗黙モード**：コンテナの命名は暗黙的であり、CLI コマンドには表示されません。CLI は、これらのオブジェクトを内部的に作成し保持します。
- **名前付きモード**：コンテナの命名を指定します。名前付きモードの CLI コマンドには、追加の `I3Out` フィールドがあります。名前付き L3Out を正常に構成し、障害を回避するた

めには、ユーザーが外部レイヤ 3 構成用の API オブジェクト モデルを理解する必要があります。



(注) 「名前付きモードを使用したレイヤ 3 外部接続の構成」セクションの手順を除き、このガイドでは、暗黙モードの手順を説明します。

レイヤ 3 外部接続構成モードの注意事項と制約事項

次の注意事項と制約事項は、レイヤ 3 外部接続構成モードに適用されます。

暗黙モードと名前付きモードの併用

同じ Cisco APIC インスタンスで、両方のモードを一緒に使用してレイヤ 3 外部接続を設定できます。ただし、テナント、VRF インスタンス、およびリーフ スイッチの特定の組み合わせに対するレイヤ 3 外部接続設定は、1つのモードでのみ実行できます。

レイヤ 3 外部接続用に展開されたテナント VRF インスタンスに 1つのモードを使用します。

特定のテナント VRF インスタンスの場合、外部 EPG を配置できるポリシー ドメインは、名前付きモードまたは暗黙モードのいずれかになります。推奨する構成方式は、特定のテナント VRF インスタンスがレイヤ 3 外部接続用に展開されるすべてのノード全体で、その特定のテナント VRF インスタンスの組み合わせに対する 1つのモードだけを使用することです。モードは、異なるテナントまたは異なる VRF インスタンス全体で異なったものにすることができ、制限は適用されません。

構成は不整合に対して検証される可能性がある

場合によっては、Cisco APIC クラスターへの着信設定で不整合が検証されます。外部から確認できる設定 (L3Out を通過するノースバウンドトラフィック) も検証の対象です。構成が無効な状況では、構成が無効であるとのエラー メッセージが表示されます。

外部レイヤ 3 機能でサポートされる構成モード

外部レイヤ 3 機能は、次の例外を除き、両方の構成モードでサポートされます。レイヤ 4～レイヤ 7 サービス アプライアンスを使用したルート ピアリングおよびルート ヘルプ インジェクション (RHI) は、指定されたモードでのみサポートされます。ルート ピアリングが関係するテナント VRF インスタンスのすべてのボーダー リーフ スイッチでは、名前付きモードを使用する必要があります。

暗黙モード CLI を使用して作成された L3Out は、GUI では読み取り専用です。

暗黙モード CLI 手順を使用して作成されたレイヤ 3 外部ネットワーク オブジェクト (L3Out と呼ばれる) は、「_ui_」で始まる名前でも識別され、GUI で読み取り専用としてマークされます。

暗黙モード CLI を使用して作成された L3Outs は、REST API を使用して変更された場合、CLI で変更できなくなる可能性がある

CLIは、インターフェイス、プロトコル、ルートマップ、EPGなどの機能で、L3Outを分割します。REST APIを使用してL3Outの構成を変更すると、この構造が壊れ、CLIを使用してL3Outを変更できなくなる可能性があります。

変更できないL3Outを削除するには、*Cisco APIC Troubleshooting Guide*の「不要な_ui_オブジェクトのトラブルシューティング」セクションを参照してください。

コンフィギュレーションの検証

管理者がCisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC)で構成を入力すると、Cisco APICはチェックを実行して、構成が有効であるかどうかを確認します。これは検証と呼ばれます。Cisco APICが構成を受け入れても、その構成が既存の構成と競合する場合、Cisco APICまたはリーフスイッチで障害が発生する可能性があります。構成を受け入れる前にCisco APICが実行するチェックの量は、リリースによって異なります。新しいリリースは、非同期的に障害が発生だけではなく、設定を受け入れられる前に、複数のチェックを実行する拡張されています。

これらの検証の目的を減らすか、設定を受け入れると、非同期的に障害を発生させるのではなく設定時に、エラーのユーザを知らせるによって設定エラーを排除します。

また、Cisco APICは、「アトミック」モードではなく「ベストエフォート」モードで既存の構成をインポートするオプションも提供しています。このオプションは、無効な部分がある場合も、設定を承認する機能を提供します。Cisco APICは、構成の有効な部分はプッシュし、検証と不整合な部分は無視します。不整合だった部分については、次のコマンドを実行すると、Cisco APICはエラーメッセージを表示します。

```
show snapshot jobs import_job
```



第 3 章

初回セットアップウィザード

この章は、次の項で構成されています。

- [初回セットアップウィザードについて \(9 ページ\)](#)

初回セットアップウィザードについて

初回セットアップウィザードを使用して、Cisco APIC の初回セットアップを実行します。

- GUI を使用して Cisco APIC に初めてログインすると、初回セットアップウィザードが自動的に表示されます。



- Cisco APIC リリース 4.2(3) 以降では、GUI ウィンドウの右上隅にある [システムツール (System Tools)] アイコン (Cisco APIC) をクリックし、[APIC_release_number の新機能 (What's New in APIC_release_number)] を選択すると、初期設定ウィザードにアクセスできます。

[APIC へようこそ (Welcome to APIC)] ウィンドウが表示され、この特定のリリースに含まれる新機能に関する情報が示されます。

初回セットアップウィザードにアクセスするには、ウィンドウの右下にある [初回セットアップの開始 (Begin First Time Setup)] または [初回セットアップの確認 (Review First Time Setup)] をクリックします。[基本の設定 (Let's Configure the Basics)] ウィンドウが表示され、Cisco APIC の設定に使用できる個々のページへのリンクが示されます。

少なくとも1つのBGPルートリフレクタを含む初期設定が完了すると、[サマ리를続行 (Proceed to Summary)] ボタンが有効になります。設定のサマリータイルを表示するには、このボタンをクリックします。追加のタイルが [以下がお望みですか (You Might want to ...)] 見出しの下に表示されます。これらの追加トピックはオプションですが、推奨されます。

次の項では、このウィンドウから使用できる各初期設定ページの詳細について説明します。

[Fabric Membership (ファブリックメンバーシップ)]

[ファブリックメンバーシップ (Fabric Membership)] ウィンドウを使用して、ACIファブリックによって検出されたリーフおよびスパインスイッチを登録します。ボックスに記載されているシリアル番号を使用して、リーフスイッチとスパインスイッチをファブリックに手動で追加することもできます。



- (注) 少なくとも2つのリーフスイッチと2つのスパインスイッチを登録することを推奨します。初回セットアップウィザードを進めるには、少なくとも1つのリーフスイッチと1つのスパインスイッチを登録する必要があります。

[ファブリックメンバーシップ (Fabric Membership)] ウィンドウには、次の2つのセクションがあります。

- **検出済み**：このセクションでは、新しく検出されたが未登録のスイッチについて説明します。これらのノードのノードIDは0で、IPアドレスはありません。
- **登録済み**：このセクションでは、ACIファブリックに登録されているすべてのスイッチに関する情報を提供します。

次のいずれかの方法でスイッチを登録できます。

- スイッチが **[検出済み (Discovered)]** セクションに表示されている場合は、そのスイッチの横にある **[登録 (Register)]** ボタンをクリックして、**[ファブリックノードメンバーの作成 (Create Fabric Node Member)]** ウィンドウを開きます。この場合、**[ポッドID (Pod ID)]** フィールドと **[シリアル番号 (Serial Number)]** フィールドは **[ファブリックノードメンバーの作成 (Create Fabric Node Member)]** ウィンドウに自動的に入力されます。
- スイッチが **[検出済み (Discovered)]** セクションに表示されない場合は、**[アクション (Action)]** アイコン () をクリックし、ドロップダウンリストから **[ファブリックノードメンバーの作成 (Create Fabric Node Member)]** を選択します。

[ファブリックノードメンバーの作成 (Create Fabric Node Member)] ウィンドウで、次の情報を入力します。

フィールド	設定
ポッドID	ノードが存在するポッドを特定します。
シリアル番号 (Serial Number)	必須：新しいスイッチのシリアル番号を入力します。

フィールド	設定
ノード ID (Node ID)	<p>必須：100 以上の数字を入力します。最初の 100 ID は、APIC アプライアンス ノードのために予約されています。</p> <p>(注) リーフ ノードとスパイン ノードには異なる数字をつけることをお勧めします。たとえば、100 の範囲の番号リーフ (例：101、102) と 200 の範囲の番号スパイン (例：201、202)。</p> <p>(注) ノード ID が割り当てられた後は、更新できません。ノードが [登録済みノード (Registered Nodes)] タブ表に追加された後、表の行を右クリックし、[ノードとラック名の編集 (Edit Node and Rack Name)] を選択してノードを更新できます。</p>
Switch Name	leaf1 または spine3 などのノード名。
ノードタイプ (Node Type)	<p>割り当てられたノードの役割を選択します。次のオプションがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> • leaf <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて、次のボックスのいずれかをオンにします。 <ul style="list-style-type: none"> • リモート • 仮想 • 階層 2 リーフ • spine <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて、次のボックスをオンにします。 <ul style="list-style-type: none"> • 仮想 • unknown

[ファブリック ノード メンバーの作成 (Create Fabric Node Member)] ウィンドウで情報を入力したら、[送信 (Submit)] をクリックし、[ファブリック メンバーシップ (Fabric Membership)] で [続行 (Continue)] をクリックして、初回セットアップウィザードの次のウィンドウに進みます。

管理

[アウトオブバンド管理 (Out of Band Management)] ウィンドウを使用して、アウトオブバンド (OOB) ネットワークに接続するリーフ スイッチ、スパイン スイッチ、および APIC ノードの管理インターフェイス IP アドレスを設定します。複数のノードを選択して、IP アドレスの割り当てを開始します。



- (注) 初回セットアップウィザードは、アウトオブバンド管理用にまだ設定されていないノードの設定に役立ちます。

次のフィールドにゲートウェイのアドレスを入力すると、検出されたノードごとに IP アドレスが自動的に提案されます。

- **IPv4 ゲートウェイ** : アウトオブバンド管理を使用した外部ネットワークへの通信用の IPv4 デフォルト ゲートウェイ アドレス。
- **IPv6 ゲートウェイ** : アウトオブバンド管理を使用した外部ネットワークへの通信用の IPv6 デフォルト ゲートウェイ アドレス。

[属性によるフィルタ (Filter by attributes)] 領域では、検出されたノードを属性でフィルタ処理できます。アウトオブバンド管理用に設定するために選択したノードを変更する場合は、[編集 (Edit)] をクリックします。

[保存する (Save)] をクリックし、初期セットアップウィザードの次のウィンドウに進みます。

vPC ペア

[セットアップ - vPC ペア (Setup - vPC Pairs)] ウィンドウは、ファブリック ポリシー ノード エンドポイントを使用してグループのメンバーノードを明示的に構成するために使用します。

[属性によるフィルタ (Filter by attributes)] 領域で、属性によって vPC ペアをフィルタリングできます。vPC ペアを設定するために選択した vPC ペアを変更する場合は、[編集 (Edit)] をクリックします。

vPC ペア中央ペインで、[アクション (Actions)] ドロップダウンリストを展開し、[vPC リーフスイッチ ペアの作成 (Create vPC Leaf Switch Pair)]、[vPC リーフスイッチ ペアの削除 (Delete vPC Leaf Switch Pair)]、[すべてダウンロード (Download All)]、または [オブジェクトストア ブラウザで開く (Open in Object Store Browser)] を選択します。

[保存する (Save)] をクリックし、初期セットアップウィザードの次のウィンドウに進みます。

BGP

BGP ウィンドウを使用して、ACI ファブリックのルート リフレクタを設定し、マルチプロトコル BGP (MP-BGP) を使用してファブリック内に外部ルートを配布します。ACI ファブリックのルート リフレクタを有効にすると、外部ネットワークへの接続を設定できます。



- (注) ルートリフレクタとして設定するスパインスイッチを選択します。初回セットアップウィザードを進めるには、少なくとも1つのルートリフレクタを設定する必要があります。このウィンドウのテーブルにスパインスイッチが表示されない場合は、スイッチが正しいタイプで登録されているか、APICによって検出されていることを確認します。

[BGP] ウィンドウで、ルートリフレクタとして使用するスパインスイッチの横にあるボックスをオンにし、[自律システム番号 (Autonomous System Number)] フィールドにこのスパインスイッチのASNを入力します。[保存して続行 (Save and Continue)] をクリックし、初期セットアップウィザードの次のウィンドウに進みます。

DNS

DNS ウィンドウを使用して、リーフスイッチ、スパインスイッチ、および APIC ノードが DNS 名を照会できるように DNS サーバと検索ドメインを設定します。OOB 接続は DNS 通信に使用されます。



- (注) 初回セットアップウィザードは、デフォルトの DNS ポリシーで DNS サーバと DNS ドメインを設定します。

DNS サーバを設定するには、[DNS サーバ (DNS Servers)] 領域で [+] をクリックし、次の情報を入力します。

- **アドレス** : プロバイダアドレスを入力します。
- **希望** : 優先するプロバイダとしてこのアドレスが必要な場合は、チェックボックスをオンにします。
- **ステータス** : 設定要求のステータスを提供します。

[更新 (Update)] をクリックし、必要に応じてこのプロセスを繰り返して追加の DNS サーバを設定します。

検索ドメインを設定するには、[ドメインの検索 (Search Domains)] 領域で [+] をクリックし、次の情報を入力します。

- **名前** : ドメイン名 (cisco.com) を入力します。
- **デフォルト** : チェックボックスをオンにして、このドメインをデフォルトドメインにします。デフォルトとして指定できるドメイン名は1つだけです。
- **ステータス** : 設定要求のステータスを提供します。

[更新 (Update)] をクリックし、必要に応じてこのプロセスを繰り返して追加の検索ドメインを設定します。

[DNS サーバ (DNS Servers)] テーブルまたは [ドメインの検索 (Search Domains)] テーブルからエントリを削除するには、削除するエントリを選択し、そのテーブルのゴミ箱アイコンをクリックします。

[保存して続行 (Save and Continue)] をクリックし、初期セットアップウィザードの次のウィンドウに進みます。

NTP

NTP ウィンドウを使用してタイムゾーンを設定し、リーフ スイッチ、スパイン スイッチ、および APIC ノードを有効な時刻源に同期するように NTP サーバを割り当てます。OOB 接続は NTP 通信に使用されます。



(注) 初期セットアップウィザードは、**デフォルト**の NTP ポリシーでサーバを設定します。

[表示形式 (Display Format)] 領域で、[local] をクリックして日付と時刻をローカルタイムゾーン形式で表示するか、[utc] をクリックして日付と時刻を UTC タイムゾーン形式で表示します。デフォルトは [local] です。

上記で [local] を選択した場合は、[タイムゾーン (Time Zone)] 領域で、ドロップダウン矢印をクリックしてドメインのタイムゾーンを選択します。ドロップダウンメニュー領域に入力して、ドロップダウンオプションをフィルタリングすることもできます。デフォルトは [協定世界時 (Coordinated Universal Time)] です。

NTP サーバを設定するには、[NTP サーバ (NTP Servers)] 領域で [+] をクリックし、次の情報を入力します。

- **ホスト名/IPAddress** : NTP サーバのホスト名と IP アドレスを入力します。
- **希望** : 複数のプロバイダーを作成する場合は、最も信頼できる NTP 時刻源の [希望 (Preferred)] チェックボックスをオンにします。
- **ステータス** : 設定要求のステータスを提供します。

[更新 (Update)] をクリックし、必要に応じてこのプロセスを繰り返して追加の NTP サーバを設定します。

NTP サーバテーブルからエントリを削除するには、削除するエントリを選択し、そのテーブルのゴミ箱アイコンをクリックします。

[保存して続行 (Save and Continue)] をクリックし、初期セットアップウィザードの次のウィンドウに進みます。

プロキシ

[プロキシ (Proxy)] ウィンドウを使用して、HTTP または HTTPS プロキシポリシーを構成します。設定すると、一部の Cisco Cloud Application Policy Infrastructure Controller (APIC) 機能、

主に Cisco Intersight 接続などのインターネットアクセスを必要とする機能が、HTTP または HTTPS プロキシを介してトラフィックを送信します。詳細については、Cisco APIC システム管理設定ガイドを参照してください。

グローバル設定

[**グローバル設定 (Global Configurations)**] ウィンドウを使用して、特定のエリアを設定します。これは、Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックの初回セットアップ中のベストプラクティスとして推奨されます。**[OK]** をクリックします。次の領域を設定する準備ができたなら、

- [サブネットチェック \(15 ページ\)](#)
- [ドメイン検証 \(16 ページ\)](#)
- [再配布されたルートの中間システムから中間システム \(16 ページ\)](#)
- [IP エージングの管理状態 \(16 ページ\)](#)
- [不正なエンドポイントの制御 \(16 ページ\)](#)
- [COOP グループポリシー \(17 ページ\)](#)



(注) このウィンドウの一部の設定は、[Fabric Wide Setting Policy] ページ ([System] [System Settings] [Fabric-Wide Settings]) で設定できる [Subnet Check] および [Domain Validation] の設定など、初回セットアップ後に設定できます。>>ただし、初回セットアップ後にこれらの設定を行うと、他の既存の設定で問題が発生する可能性があります。たとえば、[ファブリック全体の設定ポリシー (Fabric Wide Setting Policy)] ページで [サブネットチェックの適用 (Enforce Subnet Check)] および [ドメイン検証の適用 (Enforce Domain Validation)] の設定を有効にすると、インターフェイスまたは EPG にスタティックに割り当てられたポートに適切なポリシーチェーンがない場合、設定済みの L3Out 接続が切断される可能性があります。

サブネットチェック

この機能では、ある VRF で設定されたサブネットの外、つまり他のすべての VRF では、IP アドレス学習が無効になります。

この機能は、Cisco ACI () が IP アドレスをデータプレーンからエンドポイントとして学習した場合、VRF インスタンス レベルでサブネットのチェックを適用します。このオプションをオンにすると、ファブリックは、ブリッジドメインで構成されたもの以外のサブネットからの IP アドレスを学習しなくなります。この機能は、このようなシナリオで、ファブリックがエンドポイント情報を学習しないようにします。

[**適用 (Enforce)**] の横にあるチェックボックスをオンにして、サブネットチェック機能を有効にします。

ドメイン検証

この機能は、スタティックパスが追加されているが、ドメインが EPG に関連付けられていない場合に検証チェックを実行します。

有効な場合、スタティックパスが EPG に追加されているときに検証チェックが実行され、パスが EPG に関連付けられているドメインの一部であるか判断します。このポリシーの適用範囲は、ファブリック全体です。を設定した後、ポリシーは起動に各リーフスイッチにプッシュされます。

[適用 (Enforce)]の横のチェックボックスをオンにして、ドメイン検証機能を有効にします。これは強く推奨されています。

再配布されたルートの中間システムから中間システム

これは、IS-IS にすべてインポートされたルートに使用されている IS-IS メトリックです。このオプションで 64 (最大) 未満のメトリック (63 など) を設定すると、Cisco ACI では新しいスパインでルーティングコンバージェンスが達成されるまで、スイッチは安定したスパインからのルートを優先できます。

[IS-IS メトリック (IS-IS metric)] フィールドに適切な値を入力します。

IP エージングの管理状態

このポリシーを有効にすると、Cisco ACI では各 IP アドレスを個別に追跡し、未使用のアドレスを効率的にエージングアウトできます。それ以外の場合、未使用の IP アドレスは、ベース MAC アドレスが期限切れになるまで学習されたままになります。これはリモートエンドポイントには影響しません。

有効な場合、IP エージングポリシーは、エンドポイント上の未使用の IP アドレスをエージングします。この状況では、IP エージングポリシーは、エンドポイントの IP アドレスを追跡する ARP 要求 (IPv4) とネイバー要請 (IPv6) を送信します。応答が指定されていない場合、ポリシーは未使用の IPs アドレスをエージングします。

このフィールドのオプションは次のとおりです。

- **無効** : デフォルト設定。Cisco APICでは、IP エージングポリシーを無視します。
- **有効** : Cisco APIC は IP エージングポリシーを監視します。

この機能を有効にすることを強くお勧めします。

不正なエンドポイントの制御

不正なエンドポイントは、リーフスイッチを頻繁に攻撃し、異なるリーフスイッチポートにパケットを繰り返し挿入し、802.1Q タグを変更し (エンドポイントの移動をエミュレート)、その結果、IP アドレスと MAC アドレスが異なる EPG とポートで迅速に学習されます。誤設定により頻繁に IP アドレスと MAC アドレスが変更 (移動する) されることとなります。

不正エンドポイント制御機能は、この脆弱性に対処します。このポリシーを有効にすると、Cisco ACI で不正なエンドポイントを検出して削除できます。

このフィールドのオプションは次のとおりです。

- **無効**：デフォルト設定。Cisco APIC は、不正なエンドポイント制御ポリシーを無視します。
- **有効**：Cisco APIC は、不正エンドポイント制御ポリシーを監視します。

この機能を有効にすることを強くお勧めします。

[不正 EP 検出間隔 (Rogue EP Detection Interval)]、[不正 EP 検出倍数係数 (Rogue EP Detection Multiplication Factor)]、[保持間隔 (Hold Interval)]などの不正エンドポイント制御の追加設定は、[エンドポイント制御 (Endpoint Controls)]パネルから使用できます。[エンドポイント制御 (Endpoint Controls)]パネルにアクセスするには、メニューバーで[システム (System)]> [システム設定 (System Settings)]> [エンドポイント制御 (Endpoint Controls)]をクリックし、[不正 EP 制御 (Rogue EP Control)]タブをクリックします。

次に、[エンドポイント制御 (Endpoint Controls)]ウィンドウの[不正 EP 制御 (Rogue EP Control)]タブのフィールドの有効なデフォルト設定を示します。

- **不正 EP 検出間隔**：有効な値は 0 – 65535 秒です。デフォルト値は 60 です。
- **不正 EP 検出倍数係数**：有効な値は 2 – 65535 です。デフォルト値は 4 です。
- **保持時間**：5.2(1) および 5.2(2) リリースでは、有効な値は 1800 – 3600 秒です。5.2(3) リリース以降、有効な値は 300 – 3600 秒です。デフォルト値は 1800 です。

COOP グループポリシー

マッピング情報 (ロケーションおよび ID) をスパインプロキシに伝達するために、Council of Oracles Protocol (COOP) を使用します。リーフスイッチは、Zero Message Queue (ZMQ) を使用して、エンドポイントアドレス情報をスパインスイッチ「Oracle」に転送します。スパインノードで実行している COOP によって、すべてのスパインノードがエンドポイントの一貫したコピーと、マッピングデータベースの場所情報を保持していることを確認します。

COOP プロトコルは、次の 2 つの ZMQ 認証モードをサポートします。

- **互換性タイプ**：デフォルト設定。COOP は、メッセージ転送のために MD5 認証および非認証 ZMQ 接続の両方を受け入れます。



(注) Cisco APIC は、COOP の MD5 パスワードとして使用されるトークンを管理します。このトークンは、Cisco APIC 1 時間ごとに自動的にローテーションされます。このトークンは表示できません。

- **厳密タイプ**：COOP は MD5 認証 ZMQ 接続のみを許可します。

COOP グループポリシーの[厳密タイプ (Strict Type)]設定を強く推奨します。



第 4 章

ユーザアクセス、認証およびアカウントティング

この章は、次の内容で構成されています。

- [アクセス権のワークフローの依存関係 \(19 ページ\)](#)
- [ユーザアクセス、認可およびアカウントティング \(20 ページ\)](#)
- [ログインドメイン \(22 ページ\)](#)
- [GUI を使用してローカルドメインを作成する \(23 ページ\)](#)
- [プロバイダーを作成する \(26 ページ\)](#)
- [ローカルユーザの設定 \(31 ページ\)](#)
- [リモートユーザの設定 \(35 ページ\)](#)
- [Cisco AVPair を使用した APIC アクセス用の Windows Server 2012 LDAP の設定 \(41 ページ\)](#)
- [LDAP アクセス用の APIC の設定 \(43 ページ\)](#)
- [Cisco AV ペアが欠落しているか不良であるリモートユーザのデフォルトの動作の変更 \(44 ページ\)](#)
- [署名ベースのトランザクションについて \(44 ページ\)](#)
- [アカウントティング \(51 ページ\)](#)
- [共有サービスとしての外部ネットワークへのルーテッド接続の課金と統計情報 \(52 ページ\)](#)

アクセス権のワークフローの依存関係

Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) RBAC のルールによって、ファブリック全体へのアクセスを有効にするか、一部へのアクセスに制限します。たとえば、ベアメタルサーバアクセス用のリーフスイッチを設定するには、ログインしている管理者が `infra` ドメインに対する権限を持っている必要があります。デフォルトでは、テナント管理者は `infra` ドメインに対する権限を持っていません。この場合、リーフスイッチに接続されているベアメタルサーバの使用を計画しているテナント管理者は、そのために必要なすべての手順を実行することはできません。テナント管理者は、`infra` ドメインに対する権限を持っているファブリック管理者と連携する必要があります。ファブリック管理者は、テナント管理者が ACI リーフスイッチに

接続されたベアメタルサーバを使用するアプリケーションポリシーを導入するために使用するスイッチ設定ポリシーをセットアップします。

ユーザアクセス、認可およびアカウントिंग

Application Policy Infrastructure Controller (APIC) ポリシーは、Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックの認証、認可、およびアカウントिंग (AAA) 機能を管理します。ユーザ権限、ロール、およびドメインとアクセス権限の継承を組み合わせることにより、管理者は細分化された方法で管理対象オブジェクトレベルでAAA機能を設定することができます。これらの設定は、REST API、CLI、またはGUIを使用して実行できます。



(注) ログインドメイン名に32文字を超えることはできないという既知の制限があります。また、ログインドメイン名とユーザ名を合わせた文字数は64文字を超えることはできません。

マルチテナントのサポート

コア Application Policy Infrastructure Controller (APIC) の内部データアクセスコントロールシステムにより、マルチテナント分離が提供され、テナント間での個人情報の漏洩が防止されます。読み取り/書き込みの制約により、テナントによる他のテナントの設定、統計情報、障害、またはイベントデータの参照が防止されます。管理者によって読み取り権限が割り当てられない限り、テナントはファブリックの設定、ポリシー、統計情報、障害、またはイベントの読み取りが制限されます。

ユーザアクセス：ロール、権限、セキュリティドメイン

APICでは、ロールベースアクセスコントロール (RBAC) を介してユーザのロールに従ってアクセスが提供されます。Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックユーザは、次に関連付けられています。

- 事前定義またはカスタムロール。ユーザに割り当てられた1つ以上の権限のセットです。
- 権限のセット。ユーザがアクセスできる管理対象オブジェクト (MO) を決定します。
- ロールごとの権限タイプ：アクセスなし、読み取り専用、または読み取り/書き込み
- ユーザがアクセスできる管理情報ツリー (MIT) の一部を識別する1つ以上のセキュリティドメインタグ

ロールと権限

権限はシステム内の特定の機能に対するアクセス権を制御します。ACIファブリックは、管理対象オブジェクト (MO) レベルでアクセス権限を管理します。すべてのオブジェクトは、読み取り可能な権限のリストと、書き込み可能な権限のリストを保持しています。特定の機能に対

応するすべてのオブジェクトには、その機能の読み取りまたは書き込みリストの権限が付与されます。オブジェクトは追加の機能に対応する必要があるため、そのリストには複数の権限が含まれている場合があります。権限を含むロールがユーザに割り当てられると、そのユーザには、読み取りリストが読み取りアクセスを指定する関連オブジェクトへの読み取りアクセス権が付与され、書き込みリストが書き込みアクセスを指定するオブジェクトへの書き込みアクセス権が付与されます。

たとえば、「fabric-equipment」は、物理ファブリック内の機器に対応するすべてのオブジェクトへのアクセスを制御する権限です。物理ファブリック内の機器に対応するオブジェクト（「eqptBoard」など）には、特権リストに「fabric-equipment」が含まれます。「eqptBoard」オブジェクトは、「fabric-equipment」権限の読み取り専用アクセスを許可します。「fabric-admin」などの権限「fabric-equipment」が割り当てられているユーザには、「eqptBoard」オブジェクトへの読み取り専用アクセスなど、これらの機器オブジェクトへのアクセス権が付与されます。



- (注) 一部のロールには他のロールが含まれています。たとえば、テナント管理者、ファブリック管理者、アクセス管理者などの「-admin」ロールは、同じベース名を持つロールのグループです。たとえば、「access-admin」は「access-connectivity」、「access-equipment」、「access-protocol」、および「access-qos」のグループです。同様に、tenant-adminは「テナント」ベースのロールのグループで、fabric-adminは「ファブリック」ベースのロールのグループです。

「admin」ロールにはすべての権限が含まれます。

ロールと権限の詳細については、『[APIC ロールと権限マトリクス](#)』を参照してください。

セキュリティドメイン

セキュリティドメインは、ACI MIT オブジェクト階層の特定のサブツリーに関連付けられたタグです。たとえば、デフォルトのテナント「common」にはドメインタグ common が付いています。同様に、特殊なドメインタグ all の場合、MIT オブジェクトツリー全体が含まれます。管理者は、MIT オブジェクト階層にカスタムドメインタグを割り当てることができます。たとえば、管理者は「solar」という名前のテナントにドメインタグ「solar」を割り当てることができます。MIT 内では、特定のオブジェクトだけがセキュリティドメインとしてタグ付けできます。たとえば、テナントにはセキュリティドメインとしてタグ付けすることができますが、テナント内のオブジェクトにはできません。



- (注) (R6.1.2まで) セキュリティドメイン内のパスワード強度パラメータは、[カスタム条件 (Custom Conditions)] を作成するか、または提供されている [いずれかの 3 つの条件 (Any Three Conditions)] を選択して構成できます。



- (注) (R6.1.3以降) セキュリティドメイン内のパスワード強度パラメータは、[カスタム条件 (Custom Conditions)] を作成するか、小文字、数字、特殊文字を含む [デフォルトの3つの条件 (Default Three Conditions)] を選択することで構成できます。

ユーザを作成してロールを割り当てても、アクセス権は有効になりません。1つ以上のセキュリティドメインにそのユーザを割り当てることも必要です。デフォルトでは、ACIファブリックには事前作成された次の特殊なドメインが含まれています。

- All : MIT 全体へのアクセスを許可
- Common : ファブリックの共通オブジェクト/サブツリーへのアクセスを許可
- Mgmt : ファブリック管理オブジェクト/サブツリーへのアクセスを許可



- (注) ユーザのクレデンシャルが許可しない管理対象オブジェクトの読み取り操作の場合、「DN/Class Unauthorized to read」ではなく「DN/Class Not Found」というエラーが返されます。ユーザのクレデンシャルが許可しない管理対象オブジェクトへの書き込み操作の場合、「HTTP 401 Unauthorized」というエラーが返されます。GUIでは、ユーザのクレデンシャルが許可しないアクションの場合、表示されないか、またはグレー表示されます。

事前に定義された一連の管理対象オブジェクトクラスをドメインに関連付けることができます。これらのクラスがオーバーラップすることはできません。ドメインの関連付けをサポートするクラスの例：

- レイヤ2およびレイヤ3のネットワークで管理されたオブジェクト
- ネットワークプロファイル (物理、レイヤ2、レイヤ3、管理など)
- Quality of Service (QoS) ポリシー

ドメインに関連付けることができるオブジェクトが作成されると、ユーザは、ユーザのアクセス権の範囲内でオブジェクトにドメインを割り当てる必要があります。ドメインの割り当てはいつでも変更できます。

仮想マシン管理 (VMM) ドメインがセキュリティドメインとしてタグ付けされている場合、セキュリティドメイン内のユーザは、対応するタグ付き VMM ドメインにアクセスできます。たとえば、solar という名前のテナントに sun というセキュリティドメインのタグが付いており、VMM ドメインにも sun というセキュリティドメインのタグが付いている場合、solar テナント内のユーザは各自のアクセス権限に従って VMM ドメインにアクセスできます。

ログインドメイン

ログインドメインは、ユーザの認証ドメインを定義します。ログインドメインは、ローカル、LDAP、RADIUS、TACACS+、DUO、SAML、RSA、または OAuth 2 認証メカニズムを設定で

きます。REST、CLI、または GUI からシステムにアクセスすると、APIC によりユーザは正しい認証ドメインを選択できます。

たとえば、REST シナリオでは、完全なログインユーザ名が次のように表示されるようにユーザ名の頭に文字列が付きます。

```
apic:<domain>\<username>
```

システムに GUI からアクセスする場合は、APIC により選択するユーザのドメインのドロップダウンリストが提供されます。apic: domain が指定されない場合は、デフォルトの認証ドメイン サーバがユーザ名の検索に使用されます。

ACI バージョン 1.0(2x) 以降、APIC のログイン ドメイン フォールバックのデフォルトはローカルになっています。デフォルト認証とコンソール認証方法がどちらも非ローカルの方法に設定されており、両方の非ローカル方法がローカル認証に自動的にフォールバックしない場合でも、APIC にはローカル認証を使用してアクセスすることができます。

APIC フォールバック ローカル認証にアクセスするには、次の文字列を使用します。

- APIC とスイッチの両方の REST API、GUI、および CLI で `apic#fallback\username` 文字列を使用します。
- `apic:fallback\username` 文字列は、REST API と GUI にのみ使用し、CLI インターフェイスには使用しません。



(注) フォールバック ログイン ドメインは変更しないでください。変更すると、システムからロックアウトされる可能性があります。

GUI を使用してローカル ドメインを作成する

SAML および OAuth 2 の外部サーバーによる認証は、標準の Cisco AVPair ベースの認証に加え、ユーザーグループのマップルール情報に基づいて行われるようになりました。

始める前に

- Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックが設置され、Application Policy Infrastructure Controller (APIC) がオンラインになっており、APIC クラスタが形成されて正常に動作していること。
- ログインドメイン名、レルム、リモートサーバープロバイダーは、ユーザーに対して認証ドメインを定義できます。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[管理 (Admin)] > [AAA] の順に選択します。
- ステップ 2** ナビゲーションウィンドウで、[認証 (Authentication)] を選択します。
- ステップ 3** 作業ペインで、[ログインドメイン (Login Domains)] タブを選択します。
- ステップ 4** [アクション (Actions)] ボタン > [ログインドメインの作成 (Create Login Domain)] をクリックします。
- ステップ 5** [ログインドメインの作成 (Create Login Domain)] 画面の [一般 (General)] ペインで、次を指定します。

- ユーザーが構成したドメイン名。
- ログインドメインの説明。
- ファブリックデバイスにアクセスするエンティティ (個人またはデバイス) の ID を確認するためのレルム。[レルム (Realm)] ドロップダウンリストにあるオプションは、以下で説明されています。
 1. 認証用 RADIUS プロトコルをサポートするリモートサーバのグループに対する RADIUS プロバイダーグループ。
 2. 認証用 TACACS+ プロトコルをサポートするリモートサーバのグループに対する TACACS+ プロバイダーグループ。
 3. 認証用 LDAP プロトコルをサポートするリモートサーバのグループに対する LDAP プロバイダーグループ。
 4. 認証用 RSA プロトコルをサポートするリモートサーバのグループに対する RSA プロバイダーグループ。
 5. 認証用の SAML プロトコルをサポートする SAML プロバイダー リモートサーバー。
 6. 認証用 OAuth 2 プロトコルをサポートする OAuth 2 プロバイダー リモートサーバー。

(注)

LDAP、RADIUS、TACACS+ がデフォルトのセキュリティメソッドとして指定されており、このダイアログで指定された関連するプロバイダーグループがユーザログイン中に使用できない場合、特にそうするように構成されていない限り、Cisco APIC サーバーではフォールバックローカル認証は実行されません。

Cisco APIC が ID プロバイダーに到達するためにプロキシサーバーを必要とする場合は、対応するプロキシアドレスを構成します。プロキシ設定の構成は、[システム (System)] >> [システム設定 (System Setting)] >> [プロキシポリシー (Proxy Policy)] の下にあります。[プロキシポリシー (Proxy Policy)] ペインで、必要な URL を [HTTP URL] または [HTTPS URL] フィールドに入力します。

ステップ 6 表示されたオプションの詳細を入力します。表示されるオプションは動的で、選択したレルムに基づいています。

選択したレルムが RADIUS または LDAP の場合、次のオプションが表示されます。

- レルムサブタイプとして [デフォルト (Default)] または [デュオ (Duo)] を選択します。
- [設定 (Settings)] ペインで、[RADIUS (または LDAP) プロバイダーの追加 (Add RADIUS (or LDAP) Provider)] をクリックしてプロバイダーを選択または作成します (上記の [デフォルト (Default)] オプションを選択した場合)。[デュオ (Duo)] オプションを選択した場合は、[RADIUS (または LDAP) プロバイダーの追加 (Add RADIUS (or LDAP) Provider)] をクリックしてプロバイダーを選択または作成します。

選択したレルムが TACACS+ または RSA の場合、次のオプションが表示されます。

- [設定 (Settings)] ペインで、[RSA (または TACACS+) プロバイダーの追加 (Add RSA (or TACACS+) Provider)] をクリックして、プロバイダーを選択または作成します。

選択したレルムが SAML または OAuth 2 の場合、次のオプションが表示されます。

- [設定 (Settings)] ペインで、[SAML (または OAuth 2) プロバイダーの選択 (Select SAML (or OAuth 2) Provider)] をクリックして、プロバイダーを選択または作成します。
- [SAML (または OAuth 2) 認証の選択 (SAML (or OAuth 2) Authorization Choice)] には、CiscoAVPair または GroupMap のいずれかを選択します。

- CiscoAVPair を選択した場合、外部認証サーバーで設定された CiscoAVpair の値/文字列に基づいて承認されます。外部 IDP から CiscoAVPair の値を受信すると、それに応じて Cisco APIC ではリモートユーザに権限を割り当てます。
- GroupMap を選択した場合、外部認証サーバーで構成されたグループ情報に基づいて承認されます。Cisco APIC では、外部 IDP からユーザーグループ情報を受信すると、Cisco APIC に構成されたユーザーグループ名と照合し、それに応じてリモートユーザ権限を割り当てます。

GroupMap を使用した承認には、次の 2 つの追加パラメータが必要です。

- [グループ属性 (Group Attribute)] を入力します。ここで入力するグループ属性は、外部認証サーバーのグループ属性と一致している必要があります。SAML の場合、グループ属性は、SAML IdP サーバーによって送信される応答のグループアサーションの名前と一致する必要があります。OAuth2 の場合、グループ属性は、OAuth2 サーバーによって送信される JWT (JSON Web トークン) のグループ要求と一致する必要があります。

Example: memberOf (used in Active directory), Groups or groups (used in ping ID/Okta)

また、OAuth2 の場合、IDP からグループ情報を適切に受信するには、対応するスコープが OAuth2 プロバイダー構成で構成されていることを確認してください。例: openid profile groups

- [ユーザーグループマッピングルール (User Group Map Rule)] を、[ユーザーグループマッピングルールの追加 (Add User Group Map Rule)] をクリックして、追加します。

[ユーザーグループマッピングルールの作成 (Create User Group Map Rule)] 画面で、次の詳細を入力します。

1. [名前 (Name)] フィールドにユーザーグループマッピングルールの名前を入力します。
2. [説明 (Description)] フィールドに、説明を入力します。
3. [グループ名 (Group Name)] フィールドに、ユーザーが属するユーザーグループの名前を入力します。

ここで入力したユーザーグループが、外部サーバーのユーザーグループと一致していることを確認してください。これは、外部サーバーから受信した認証情報を検証するために Cisco APIC によって使用されます。権限は、ユーザーが属するユーザーグループに基づいて設定されます。
4. [ユーザー権限 (User Privileges)] を設定するには、[ユーザー権限の追加 (Add User Privileges)] をクリックします。
5. セキュリティドメインを追加するには、[セキュリティドメインの選択 (Select Security Domain)] をクリックして、表示されたリストからセキュリティドメインを選択します。
6. [ロールの選択 (Select Role)] をクリックしてロールを選択し、権限タイプ (読み取りまたは書き込み) を関連付け、チェックマークをクリックして、権限をロールに関連付けます。

さらにロールを追加するには、[ロールの追加 (Add Role)] をクリックし、権限を関連付けます。
7. [ユーザ権限の追加 (Add User Privileges)] ウィンドウで、[追加 (Add)] をクリックします。
8. [ユーザーグループマッピングルールの追加 (Add User Group Map Rule)] ウィンドウで、[適用 (Apply)] をクリックします。

ステップ7 [ログインドメインの作成 (Create Login Domain 画面)] で、[保存 (Save)] をクリックします。

プロバイダーを作成する

この手順に従って、認証/承認プロトコルのプロバイダーを作成します。

始める前に

認証/承認プロトコルのプロバイダーを作成する前の関連する前提条件については、関連するプロトコルのセクションで説明します。

手順

- ステップ 1 メニューバーで、[管理 (Admin)] > [AAA] の順に選択します。
- ステップ 2 ナビゲーションウィンドウで、[認証 (Authentication)] を選択します。
- ステップ 3 作業ペインで、[プロバイダ (Providers)] を選択します。
- ステップ 4 [アクション (Actions)] > [プロバイダの作成 (Create Provider)] をクリックします。
- ステップ 5 表示された [プロバイダの作成 (Create Provider)] 画面で、[ホスト名/IP アドレス (Hostname/IP Address)]、[説明 (Description)] を入力し、ドロップダウンリストから [レルム (Realm)] を選択します。レルム で使用可能な選択肢は次のとおりです。

- RADIUS
- TACACS+
- LDAP
- SAML
- RSA
- OAuth 2

プロバイダーを構成するためのオプションは動的であり、選択したレルムに応じて変化します。各レルムで使用できるオプションについては、以降の手順で詳しく説明します。

- ステップ 6 (任意) RADIUS にのみ適用可能：レルム サブタイプを選択します。[レルム サブタイプ (Realm Subtype)] を選択します。オプションは、[デフォルト (Default)] または [デュオ (Duo)] です。次に、以下を指定します。
 - RADIUS サーバーのパスワード：確認のためにもう一度パスワードを入力してください。
 - [到達可能 EPG の選択 (Select Reachability EPG)] をクリックして、エンドポイントグループを選択します。
 - RADIUS のサービスポート番号。指定できる範囲は 1 ~ 65535 です。デフォルト値は 1812 です。
 - 認証プロトコルのオプションは、[PAP]、[CHAP]、[MS-CHAP] です。このオプションは、[デフォルト (Default)] を [レルム サブタイプ (Realm Subtype)] として選択した場合にのみ、表示されます。
 - RADIUS サーバーとの通信タイムアウト。有効な範囲は 0 ~ 60 秒です。デフォルトは 5 秒です (レルム サブタイプ：デフォルトの場合)。デフォルトは 30 秒です (レルム サブタイプ：Duo)。

- RADIUS エンドポイントに接続する際の再試行回数。
- 定期的なサーバー監視を有効にするには、**[有効 (Enabled)]** チェックボックスをオンにして、同じユーザ名とパスワードを入力します。

この手順は、RADIUS プロバイダー構成用です。これで、手順 12 に進むことができます。

ステップ 7 (オプションの手順で TACACS+ にのみ適用) 次を指定します。

- TACACS+ サーバーのパスワード：確認のためにもう一度パスワードを入力してください。
- **[到達可能 EPG の選択 (Select Reachability EPG)]** をクリックして、エンドポイントグループを選択します。
- TACACS+ のサービスポート番号。指定できる範囲は 1 ~ 65535 です。デフォルト値は 49 です。
- 認証プロトコルのオプションは、PAP、CHAP、MS-CHAP です。
- TACACS+ サーバーとの通信タイムアウト。有効な範囲は 0 ~ 60 秒です。デフォルトは 5 秒です。
- TACACS+ エンドポイントに接続する際の再試行回数。
- 定期的なサーバー監視を有効にするには、**[有効 (Enabled)]** チェックボックスをオンにして、同じユーザー名とパスワードを入力します。

この手順は、TACACS+ プロバイダーの設定用です。これで、手順 12 に進むことができます。

ステップ 8 (オプションの手順で LDAP にのみ適用) レルム サブタイプを選択します。オプションは、**[デフォルト (Default)]** または **[デュオ (Duo)]** です。次に、以下を指定します。

- LDAP ディレクトリのルート識別名 (DN)。
- LDAP ベース DN：APIC がリモートユーザーアカウントを検索する LDAP サーバー内のコンテナ名とパスです。これはパスワードが検証される場所です。フィルタを使用して、APIC が *Cisco AVPair* に使用するために要求している属性を見つけます。
- LDAP サーバーのパスワード。確認のためにもう一度パスワードを入力してください。
- LDAP のサービスポート番号。指定できる範囲は 1 ~ 65535 です。デフォルト値は 389 です。
- **[到達可能 EPG の選択 (Select Reachability EPG)]** をクリックして、エンドポイントグループを選択します。
- LDAP サーバーとの通信タイムアウト。有効な範囲は 0 ~ 60 秒です。デフォルトは 30 秒です。
- LDAP エンドポイントに接続する際の再試行回数。
- **[有効 (Enable)]** チェックボックスをオンにして、SSL を有効にします。
- SSL 証明書の検証レベル。次のオプションがあります。

- 寛容：DUO LDAP SSL証明書の問題の診断に役立つデバッグノブ。
- 厳密：実稼働環境で使用するレベル。

- LDAP 属性。
- 認証方式。次のオプションがあります。
 - LDAPバインド
 - パスワード比較

- フィルタタイプフィルタは、検索要求のエントリの識別に使用される条件を定義する、主要なエレメントです。例：(cn=*)。これは、1つ以上のcn値を含むエントリを意味します。次のオプションがあります。
 - デフォルト
 - Microsoft Active Directory
 - カスタム (Custom)

- LDAPフィルタこのフィールドは、選択したフィルタタイプに基づいて自動入力されます (カスタム オプションの [フィルタ タイプ (Filter Type)] を選択した場合を除く)。デフォルトを選択した場合、フィルタは cn=Suserid です。Microsoft Active Directory を選択した場合、フィルタは sAMAccountName=Suserid です。
- 定期的なサーバー監視を有効にするには、[有効 (Enabled)] チェックボックスをオンにして、同じユーザー名とパスワードを入力します。

この手順は、LDAP プロバイダー構成用です。これで、手順 12 に進むことができます。

ステップ 9 (オプションの手順で RSA にのみ適用) 次を指定します。

- RSA サーバーのパスワード：確認のためにもう一度パスワードを入力してください。
- [到達可能 EPG の選択 (Select Reachability EPG)] をクリックして、エンドポイントグループを選択します。
- RSA のサービスポート番号。指定できる範囲は 1 ~ 65535 です。デフォルト値は 1812 です。
- RSA サーバーとの通信タイムアウト。有効な範囲は 0 ~ 60 秒です。デフォルトは 5 秒です。
- RSA エンドポイントに接続する際の再試行回数。
- 定期的なサーバー監視を有効にするには、[有効 (Enabled)] チェックボックスをオンにして、同じユーザー名とパスワードを入力します。

この手順は、RSA プロバイダー構成用です。これで、手順 12 に進むことができます。

ステップ 10 (オプションの手順で SAML にのみ適用) 以下を指定します。

- **[ID プロバイダ (Identity Provider)] (IdP)** 。オプションは、ADFS、OKTA、PING IDENTITY です。
- **[IDP が提供するメタデータ URL (Metadata URL provided by IDP)]**。
ADFS の場合、**IDP が提供するメタデータ URL** は `https://<FQDN of ADFS>/FederationMetadata/2007-06/FederationMetadata.xml` という形式になります。
Ping ID については、Ping ID サーバーの構成セクション (SAML アプリケーションの下) メタデータ URL リンクをコピーします。
- SAML ベースのサービスの **[IdP エンティティ ID (IdP Entity ID)]**。
- サービス プロバイダ エンティティ ID である **[SP エンティティ ID (SP Entity ID)]** を入力します。ID はサービス プロバイダから取得できます。形式は次のとおりです。
`https://apic-id/api/aaaLoginSSO.json?name=domain-name`
- IdP がプライベート CA によって署名されている場合は、**[認証局の選択 (Select Certificate Authority)]** をクリックして認証局を選択します。
- GUI リダイレクトバナー。これは URL またはメッセージが可能です。この情報は、認証のためにユーザーが ID プロバイダーのログインページにリダイレクトされる前に表示されます。
- SAML サーバーとの通信タイムアウト。有効な範囲は 0 ~ 60 秒です。デフォルトは 5 秒です。
- ドロップダウンリストから **[署名アルゴリズム (Signature Algorithm)]** を選択します。
- **[有効 (Enabled)]** チェック ボックスをオンにして、暗号化された SAML アサーション、SAML 応答の署名のアサーション、SAML 認証要求の署名、SAML 応答メッセージの署名のすべてまたは一部を有効にできます。

この手順は、SAML プロバイダー構成用です。これで、手順 12 に進むことができます。

ステップ 11 (オプションの手順で OAuth 2 にのみ適用) 以下を指定します。

- クライアント ID : IdP 上の APIC アプリケーションのクライアント識別子。
- APIC アプリケーションのクライアント シークレット。確認のため、もう一度クライアント シークレットを入力します。
- ユーザー名要求。トークンのユーザー名属性。例 : メール、サブ。
- 範囲。OAuth 2 範囲のリスト。例 : 「openid プロファイル」。ユーザー グループ情報を受信するには、IdP プロバイダーで構成された対応するスコープを追加します。例 : 「openid プロファイル グループ」。
- OIDC プロトコルの **[有効化 (Enable)]** または **[無効化 (Disable)]** を選択します。
- **[有効化 (Enabled)]** チェック ボックスをオンにして、トークンの署名を検証します。

- JWKS エンドポイント。トークンを検証するための JSON Web キーセット (JWKS)。このフィールドは、トークン署名の検証を有効にしている場合にのみ表示されます。
- 認証エンドポイント。IdP エンドポイント認証 URL。IdP サーバーから認可エンドポイントを取得します。このフィールドは、OIDC プロトコルが無効な場合にのみ表示されます。
- トークンエンドポイント。IdP エンドポイントトークンの URL。IdP サーバーからトークンエンドポイントを取得します。このフィールドは、OIDC プロトコルが無効な場合にのみ表示されます。
- 発行元 URL IdP サーバーから発行者の URL を取得します。このフィールドは、OIDC プロトコルが有効な場合にのみ表示されます。
- IdP がプライベート CA によって署名されている場合は、[認証局の選択 (Select Certificate Authority)] をクリックして、認証局を選択します。
- [到達可能 EPG の選択 (Select Reachability EPG)] をクリックして、エンドポイントグループを選択します。
- OAuth 2 サーバーとの通信タイムアウト。有効な範囲は 0 ~ 60 秒です。デフォルトは 5 秒です。
- GUI リダイレクトバナー。これは URL またはメッセージが可能です。この情報は、認証のためにユーザーが ID プロバイダーのログインページにリダイレクトされる前に表示されます。

この手順は、OAuth 2 プロバイダー構成用です。これで、手順 12 に進むことができます。

ステップ 12 [保存 (Save)] をクリックします。

ローカル ユーザの設定

初期の設定スクリプトで、管理者アカウントが設定され、管理者はシステム起動時の唯一のユーザとなります。APIC は、きめ細かなロールベースのアクセスコントロールシステムをサポートしており、そのシステムでは、権限が少ない管理者以外のユーザを含め、ユーザアカウントをさまざまなロールで作成することができます。

GUI を使用したローカル ユーザの設定

始める前に

- ACI ファブリックが設置され、APIC コントローラがオンラインになっており、APIC クラスタが形成されて正常に動作していること。

- 必要に応じて、ユーザがアクセスするセキュリティドメインが定義されていること。たとえば、新しいユーザアカウントがテナントへのアクセスに制限される場合、テナントドメインはそれに応じてタグ付けされます。
- 以下を行うことができる APIC ユーザアカウントを使用できること。
 - TACACS+ プロバイダーの作成。
 - ターゲットセキュリティドメインでのローカルユーザアカウントの作成。ターゲットドメインが `all` である場合、新しいローカルユーザの作成に使用するログインアカウントは、`all` にアクセスできるファブリック全体の管理者である必要があります。ターゲットドメインがテナントである場合、新しいローカルユーザの作成に使用するログインアカウントは、ターゲットテナントドメインに対する完全な読み取り/書き込みアクセス権を持つテナント管理者である必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、**[管理 (Admin)] >> [AAA]** の順に選択します。

ステップ 2 **[Navigation]** ペインで、**[Users]** をクリックします。

[Work] ペインで、**[Local Users]** タブを表示していることを確認します。

ステップ 3 **[作業 (Work)]** ペインで、タスクアイコンのドロップダウンリストをクリックし、**[ローカルユーザの作成 (Create Local User)]** を選択します。

ステップ 4 **[ステップ 1 > ユーザ ID (STEP 1 > User Identity)]** ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

a) **[Login ID]** フィールドで、ID を追加します。

ログイン ID は、次のガイドラインを満たしている必要があります。

- APIC 内で一意である必要があります。
- 先頭は英字にする必要があります。
- 1 – 32 文字を使用できます。
- 英数字、アンダースコア、ハイフンを使用してください。

ユーザアカウントの作成後は、ログイン ID を変更できません。ユーザアカウントを削除し、新しいユーザアカウントを作成する必要があります。

b) **[Password]** フィールドにパスワードを入力します。

ユーザがパスワードを設定する時点で、Cisco APIC によって以下の基準が検証されます。

- パスワードの最小長は 8 文字です。
- パスワードの最大長は 64 文字です。
- 連続して繰り返される文字は 3 文字未満です。

- (R6.1.1 まで) パスワードには、小文字、大文字、数字、記号のうち、3 つ以上の文字タイプが含まれる必要があります。
 - (R6.1.2 以降) パスワード強度チェックの条件に応じて、次の要件を満たす必要があります。
 - デフォルト条件が有効の場合：
 - パスワードには、小文字、大文字、数字、記号のうち、3 つ以上の文字タイプが含まれる必要があります。R6.1.3 から、パスワードには小文字、数字、記号の3 つすべての文字タイプが含まれる必要があります。
 - カスタム条件が有効の場合は、次の条件から3 つ以上を選択します。
 - パスワードには少なくとも1 つの大文字を含める必要があります。
 - パスワードには少なくとも1 つの小文字を含める必要があります。
 - パスワードには、数字が少なくとも1 つ含まれている必要があります。
 - パスワードには、少なくとも1 つの記号を含める必要があります。
 - パスワードには3 回以上連続して繰り返される文字を含めることはできません。
 - パスワードには、QWERTY キーボードレイアウトから3 文字以上連続する文字を含めることはできません。これは、小文字、大文字、数字にのみ適用されます。
 - 簡単に推測できるパスワードは使用しません。
 - ユーザ名やユーザ名を逆にしたものは使用できません。
 - cisco、isco、またはこれらの文字列の並べ替えを変化させたものや、それらの文字の大文字化の変更により取得される変形語であってはなりません。
- c) [Confirm Password] フィールドで、パスワードを確認します。
- d) (任意) 証明書ベースの認証の場合は、[ユーザ証明書の属性 (User Certificate Attribute)] フィールドに、認証証明書からのユーザ ID を入力します。
- e) [次へ (Next)] をクリックします。
- ステップ 5** [アカウントステータス (Account Status)] コントロールを使用してユーザアカウントをアクティブまたは非アクティブにできます。また、[アカウントの有効期限 (Account Expires)] コントロールを使用して有効期限を設定できます。
- ステップ 6** [ステップ 2 > セキュリティ (STEP 2 > Security)] ダイアログボックスの [セキュリティドメイン (Security Domain)] で、ユーザの機能のセキュリティドメインを選択し、[次へ (Next)] をクリックします。
- ステップ 7** [ステップ 3 > ロール (STEP 3 > Roles)] ダイアログボックスで、次のアクションを実行します。
- a) [+] をクリックして、ユーザをドメインに関連付けます。

- b) ドロップダウン リストから、ユーザーの**ロール名**と**ロール権限タイプ**を選択します。
 - c) **[更新 (Update)]** をクリックします。
- 読み取り専用または読み取り/書き込み権限を提供できます。

ステップ 8 **[完了 (Finish)]** をクリックします。

GUI を使用した SSH 公開キー認証の設定

始める前に

- ターゲットセキュリティドメインでローカルユーザーアカウントを作成します。ターゲットドメインが `all` である場合、新しいローカルユーザーの作成に使用するログインアカウントは、`all` にアクセスできるファブリック全体の管理者である必要があります。ターゲットドメインがテナントである場合、新しいローカルユーザーの作成に使用するログインアカウントは、ターゲットテナントドメインに対する完全な読み取り/書き込みアクセス権を持つテナント管理者である必要があります。
- UNIX コマンド `ssh-keygen` を使用して公開キーを生成します。
デフォルトのログインドメインは `local` に設定する必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、**[管理者 (Admin)]** > **[ユーザー (Users)]** を選択し、**[ローカル (Local)]** タブが表示されていることを確認します。

ステップ 2 作業ペインで、事前に作成したユーザーの名前をクリックします。

ユーザーに関する情報を含むウィンドウが右側に表示されます。

ステップ 3 **[詳細 (Details)]** アイコンをクリックすると、新しい画面に  およびユーザーの詳細が表示されます。

下方向にスクロールして SSH 認証の詳細を確認します。

ステップ 4 **[編集 (Edit)]** アイコンをクリックすると、、および**[ローカルユーザーの編集 (Edit Local User)]** 画面が表示されます。必要に応じて、SSH の詳細を変更できます。

(注)

リモートロケーションにダウンロードするための SSH 秘密キーファイルを作成するには、メニューバーで、**[ファイル名 (Firmware)]** > **[タスクのダウンロード (Download Tasks)]** を展開します。

ステップ5 [保存 (Save)] をクリックします。

リモートユーザの設定

ローカルユーザを設定する代わりに、APIC を一元化された企業クレデンシャルのデータセンターに向けることができます。APIC は、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)、Active Directory、RADIUS、および TACACS+ をサポートしています。



(注) APIC が少数側である (クラスタから切断されている) 場合、ACI は分散システムであり、ユーザ情報が APICs に分散されるため、リモートログインは失敗する可能性があります。ただし、ローカルログインは APIC に対してローカルであるため、この場合も機能します。

3.1 (1) のリリース以降、サーバモニタリングは RADIUS、TACACS+、LDAP、および RSA を介して設定され、個別の AAA サーバがアクティブかを判断できます。サーバモニタリング機能は、サーバがアクティブかどうか確認するためそれぞれのプロトコルのログインを使用します。たとえば、LDAP サーバは `ldap1` ログインを使用し、Radius サーバはサーバがアクティブか判断するサーバモニタリング機能を持つ `radius` のログインを使用します。

外部認証プロバイダーを通じて認証されたリモートユーザを設定するには、次の前提条件を満たす必要があります。

- DNS 設定は、RADIUS サーバのホスト名ですでに名前解決されている必要があります。
- 管理サブネットを設定する必要があります。

外部認証サーバの AV ペア

Cisco APIC では、管理者が外部認証サーバで Cisco AV ペアを設定する必要があります。Cisco AV ペアは、ユーザの RBAC ロールおよび権限に必要な APIC を指定します。Cisco AV ペアの形式は、RADIUS、LDAP、または TACACS+ のものと同じです。

外部認証サーバで Cisco AV ペアを設定するには、管理者が既存のユーザレコードに Cisco AV ペアを追加します。Cisco AV ペアの形式は次のとおりです。

```
shell:domains =
domainA/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2,
domainB/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2
shell:domains =
domainA/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2,
domainB/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2(16003)
```

Cisco APIC リリース 2.1 より、AV ペアで UNIX ID が指定されていない場合は、APIC が固有の UNIX ユーザー ID を内部的に割り当てます。



- (注) APIC の Cisco AV ペアの形式は互換性があり、他の Cisco AV ペアの形式と共存できます。APIC はすべての AV ペアから最初に一致した AV ペアを選択します。

リリース 3.1(x) 以降、AV Pair `shell:domains=all/admin` を使用すると、ユーザに読み取り専用権限を割り当て、スイッチにアクセスしてコマンドを実行できます。

APIC は、次の正規表現をサポートしています。

```
shell:domains\s*[:]\s*(\\S+?/\\S*?/\\S*?) (,\\S+?/\\S*?/\\S*?) {0,31}) (\\(\\d+\\))$
shell:domains\s*[:]\s*(\\S+?/\\S*?/\\S*?) (,\\S+?/\\S*?/\\S*?) {0,31})$
```

例：

- 例 1 : `writeRoles` のみを持つ単一のセキュリティドメインを含む Cisco AV ペア：

```
shell:domains=domainA/writeRole1|writeRole2/
```

- 例 2 : `readRoles` のみを持つ単一のセキュリティドメインを含む Cisco AV ペア：

```
shell:domains=domainA//readRole1|readRole2
```



- (注) 「/」文字は、セキュリティドメインごとの `writeRoles` と `readRoles` の間の区切り文字であり、1 つのタイプのロールのみを使用する場合でも必要です。

Cisco AV ペアの文字列は、大文字と小文字が区別されます。エラーが表示されなくても、使用する大文字と小文字がドメイン名またはロールに一致していない場合は、予期しない権限が付与されることがあります。

オープン RADIUS サーバ (`/etc/raddb/users`) の設定例は次のとおりです。

```
aaa-network-admin Cleartext-Password := "<password>"
Cisco-avpair = "shell:domains = all/aaa/read-all(16001)"
```

外部認証サーバの AV ペアの設定

属性/値 (AV) のペア文字列のカッコ内の数字は、セキュアシェル (SSH) または telnet を使用してログインしたユーザーの UNIX ユーザー ID として使用されます。



- (注) 6.0(2) リリース以降、telnet はサポートされていません。

手順

外部認証サーバの AV ペアを設定します。

Cisco AV ペアの定義は次のとおりです（シスコは、UNIX ユーザ ID が指定されているかどうかにかかわらず AV ペアをサポートします）

例：

```
shell:domains =
domainA/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2,domainB/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2
shell:domains =
domainA/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2,domainB/writeRole1|writeRole2|writeRole3/readRole1|readRole2(8101)
```

These are the boost regexes supported by APIC:

```
uid_regex("shell:domains\\s*[:]=:]\\s*((\\S+?/\\S*?/\\S*?) (,\\S+?/\\S*?/\\S*?) {0,31}) (\\(\\d+\\))$");
regex("shell:domains\\s*[:]=:]\\s*((\\S+?/\\S*?/\\S*?) (,\\S+?/\\S*?/\\S*?) {0,31})$");
```

次に、例を示します。

```
shell:domains = coke/tenant-admin/read-all,pepsi//read-all(16001)
```

TACACS+ アクセス用の APIC の設定

始める前に

- Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックが設置され、Application Policy Infrastructure Controller (APIC) がオンラインになっており、APIC クラスタが形成されて正常に動作していること。
- TACACS+ サーバのホスト名または IP アドレス、ポート、およびキーを使用できること。
- APIC 管理エンドポイント グループを使用できること。

手順

ステップ 1 APIC で、TACACS+ プロバイダーを作成します。

TACACS+ プロバイダーの設定については、[プロバイダーを作成する \(26 ページ\)](#) を参照してください。

APIC GUI のインバンドまたはアウトオブバンド管理のトグル：

ナビゲーションウィンドウで、[システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] > [APIC 接続設定 (APIC Connectivity Preferences)] の順に選択します。作業ペインで、[インバンド (inband)] または [アウトオブバンド (ooband)] のいずれかを選択します。

ステップ 2 TACACS+ の [Login Domain] を作成します。

手順については、[GUI を使用してローカル ドメインを作成する \(23 ページ\)](#) を参照してください。

次のタスク

これで、APIC TACACS+ 設定手順は完了です。次に、RADIUS サーバも使用する場合は、RADIUS 用の APIC の設定も行います。TACACS+ サーバのみを使用する場合は、次の ACS サーバ設定に関するトピックに進みます。

RADIUS アクセス用の APIC の設定

始める前に

- ACI ファブリックが設置され、Application Policy Infrastructure Controller (APIC) がオンラインになっており、APIC クラスタが形成されて正常に動作していること。
- RADIUS サーバのホスト名または IP アドレス、ポート、認証プロトコル、およびキーを使用できること。
- APIC 管理エンドポイント グループを使用できること。

手順

ステップ 1 APIC で、RADIUS プロバイダーを作成します。

RADIUS プロバイダーの設定については、[プロバイダーを作成する \(26 ページ\)](#) を参照してください。

APIC GUI のインバンドまたはアウトオブバンド管理のトグル：

ナビゲーションウィンドウで、[システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] > [APIC 接続設定 (APIC Connectivity Preferences)] の順に選択します。作業ペインで、[インバンド (inband)] または [アウトオブバンド (ooband)] のいずれかを選択します。

ステップ 2 RADIUS のログインドメインを作成します。

手順については、[GUI を使用してローカル ドメインを作成する \(23 ページ\)](#) を参照してください。

次のタスク

これで、APIC RADIUS 設定手順は完了です。次に、RADIUS サーバを設定します。

APIC への RADIUS および TACACS+ アクセス用の Cisco Secure Access Control Server の設定

始める前に

- Cisco Secure Access Control Server (ACS) バージョン 5.5 がインストールされ、オンラインになっていること。



(注) ここでは手順の説明に ACS v5.5 が使用されています。ACS の他のバージョンでもこのタスクを実行できる可能性がありますが、GUI の手順はバージョンによって異なる場合があります。

- Cisco Application Policy Infrastructure Controller (Cisco APIC) の RADIUS キーまたは TACACS+ キーを使用できること (両方を設定する場合は両方のキー)。
- APIC が設置されオンラインになっており、APIC クラスタが形成されて正常に動作していること。
- RADIUS または TACACS+ のポート、認証プロトコル、およびキーを使用できること。

手順

ステップ 1 APIC をクライアントとして設定するには、ACS サーバにログインします。

- a) **[Network Resources] > [Network Devices Groups] > [Network Devices and AAA Clients]** に移動します。
- b) クライアント名、APIC インバンド IP アドレスを指定し、TACACS+ または RADIUS (または両方) の認証オプションを選択します。

(注)

RADIUS または TACACS+ のみの認証が必要な場合は、必要なオプションのみを選択します。

- c) 共有秘密 (キー) や認証オプションに適したポートなど、認証の詳細を指定します。

(注)

[共有秘密 (Shared Secret)] は **[プロバイダ (Provider)]** キーと一致する必要があります。

ステップ 2 ID グループを作成します。

- a) **[Users and Identity Stores] > [Internal Groups]** オプションに移動します。
- b) 必要に応じて、**[Name]** と **[Parent Group]** を指定します。

ステップ 3 ユーザを ID グループにマッピングします。

- a) **[Navigation]** ペインで、**[Users and Identity Stores]** > **[Internal Identity Stores]** > **[Users]** オプションをクリックします。
- b) 必要に応じて、ユーザの **[Name]** と **[Identity Group]** を指定します。

ステップ 4 ポリシー要素を作成します。

- a) **[Policy Elements]** オプションに移動します。
- b) RADIUS の場合、**[Authorization and Permissions]** > **[Network Access]** > **[Authorization Profiles Name]** を指定します。TACACS+ の場合、必要に応じて、**[Authorization and Permissions]** > **[Device Administration]** > **[Shell Profile Name]** を指定します。
- c) RADIUS の場合、必要に応じて、**[Attribute]** には「cisco-av-pair」、**[Type]** には「string」、**[Value]** には「`shell:domains = <domain>/<role>/,<domain>// role`」と指定します。TACACS+ の場合、必要に応じて、**[Attribute]** には「cisco-av-pair」、**[Requirement]** には「Mandatory」、**[Value]** には「`shell:domains = <domain>/<role>/,<domain>// role`」と指定します。

[値 (Value)] フィールドの構文は、書き込み権限を付与するかどうかを決定します。

- 読み取り/書き込み権限の場合、構文は `shell:domains = <domain>/<role>/` です。
- 読み取り専用権限の場合、構文は `shell:domains = <domain>// <role>` です。

たとえば、*cisco-av-pair* の値が `shell:domains = solar/admin/,common// read-all` である場合、*solar* はセキュリティドメイン、*admin* は *solar* というセキュリティドメインに対する書き込み権限をこのユーザに付与するルールであり、*common* はテナント共通であり *read-all* はテナント共通のすべてに対する読み取り権限をこのユーザに付与するルールです。

ステップ 5 サービス選択ルールを作成します。

- a) RADIUS の場合、サービス選択ルールを作成して ID グループをポリシー要素に関連付けるには、**[Access Policies]** > **[Default Device Network Access Identity]** > **[Authorization]** に移動し、ルールの **[Name]**、**[Status]**、および **[Conditions]** を指定し、必要に応じて「`Internal Users:UserIdentityGroup in ALL Groups:<identity group name>`」を追加します。
- b) TACACS+ の場合、サービス選択ルールを作成して ID グループをシェルプロファイルに関連付けるには、**[Access Policies]** > **[Default Device Admin Identity]** > **[Authorization]** に移動します。ルールの **[Name]** と **[Conditions]** を指定し、必要に応じて **[Shell Profile]** を選択します。

次のタスク

新しく作成した RADIUS および TACACS+ ユーザを使用して APIC にログインします。割り当てられた RBAC のルールと権限に従って、ユーザが正しい APIC セキュリティドメインにアクセスできることを確認します。ユーザは、明示的に許可されていない項目にアクセスできたりはなりません。読み取り/書き込みアクセス権が、そのユーザに設定されたものと一致している必要があります。

Cisco AVPair を使用した APIC アクセス用の Windows Server 2012 LDAP の設定

始める前に

- 最初に LDAP サーバを設定し、次に Cisco Application Policy Infrastructure Controller (Cisco APIC) を LDAP アクセス用に設定する。
- Microsoft Windows Server 2012 がインストールされ、オンラインになっていること。
- Microsoft Windows Server 2012 サーバマネージャの ADSI Edit ツールがインストールされていること。ADSI Edit をインストールするには、Windows Server 2012 サーバマネージャのヘルプに記載されている手順に従ってください。
- CiscoAVPair の属性の指定 : Common Name = **CiscoAVPair**, LDAP Display Name = **CiscoAVPair**, Unique X500 Object ID = 1.3.6.1.4.1.9.22.1, Description = **CiscoAVPair**, Syntax = **Case Sensitive String**。



(注) LDAP 設定のベスト プラクティスは、属性文字列として **CiscoAVPair** を使用することです。顧客がオブジェクト ID 1.3.6.1.4.1.9.22.1 を使用して問題が発生した場合、その他のオブジェクト ID 1.3.6.1.4.1.9.2742.1-5 が LDAPサーバにも使用できません。

- 以下を行うことができる Microsoft Windows Server 2012 ユーザ アカウントを使用できること。
 - ADSI Edit を実行して CiscoAVPair 属性を Active Directory (AD) スキーマに追加します。
 - CiscoAVPair 属性パラメータに対するアクセス許可を持つように Active Directory LDAP ユーザーを設定します。
- ポート 636 は、SSL/TLS と LDAP の連携設定に必要です。

手順

ステップ 1 ドメイン管理者として Active Directory (AD) サーバにログインします。

ステップ 2 AD スキーマに CiscoAVPair 属性を追加します。

- a) [Start] > [Run] に移動し、「mmc」と入力し、Enter を押します。Microsoft Management Console (MMC) が開きます。

- b) [File] > [Add/Remove Snap-in] > [Add] に移動します。
- c) [Add Standalone Snap-in] ダイアログボックスで、[Active Directory Schema] を選択し、[Add] をクリックします。
MMC コンソールが開きます。
- d) [属性] フォルダを右クリックし、[属性の作成] オプションを選択します。
[Create New Attribute] ダイアログボックスが開きます。
- e) [共通名] に「CiscoAVPair」、[LDAP 表示名] に「CiscoAVPair」、[Unique X500 Object ID] に「1.3.6.1.4.1.9.22.1」と入力し、[構文] で「Case Sensitive String」を選択します。
- f) [OK] をクリックして、属性を保存します。

ステップ 3 [User Properties] クラスを [CiscoAVPair] 属性が含まれるように更新します。

- a) MMC コンソールで、[Classes] フォルダを展開し、[user] クラスを右クリックし、[Properties] を選択します。
[user Properties] ダイアログボックスが開きます。
- b) [属性] タブをクリックし、[追加] をクリックして [スキーマのオブジェクトを選択する] ウィンドウを開きます。
- c) [Select a schema object:] リストで、「CiscoAVPair」を選択し、[Apply] をクリックします。
- d) MMC コンソールで、[Active Directory Schema] を右クリックし、[Reload the Schema] を選択します。

ステップ 4 CiscoAVPair 属性のアクセス許可を設定します。

LDAP には CiscoAVPair 属性が含まれているため、LDAP ユーザーに Cisco APIC RBAC ロールを割り当てることにより Cisco APIC アクセス許可を付与する必要があります。

- a) [ADSI Edit] ダイアログボックスで、Cisco APIC にアクセスする必要があるユーザを見つけます。
- b) ユーザ名を右クリックし、[Properties] を選択します。
[<user> Properties] ダイアログボックスが開きます。
- c) [属性エディタ] タブをクリックし、「CiscoAVPair」属性を選択し、[値] に「`shell:domains = <domain>/<role>/,<domain>// role`」と入力します。

たとえば、CiscoAVPair の値が `shell:domains = solar/admin/,common// read-all(16001)` である場合、solar はセキュリティドメイン、admin は solar というセキュリティドメインに対する書き込み権限をこのユーザーに付与するロールであり、common は Cisco Application Centric Infrastructure (Cisco ACI) テナント共通であり read-all(16001) は Cisco ACI テナント共通のすべてに対する読み取り権限をこのユーザーに付与するロールです。

- d) [OK] をクリックして変更を保存し、[<user> Properties] ダイアログボックスを閉じます。

LDAP サーバは Cisco APIC にアクセスするように設定されます。

次のタスク

Cisco APIC を LDAP アクセス用に設定します。

LDAP アクセス用の APIC の設定

始める前に

- Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックがインストールされていて、Application Policy Infrastructure コントローラがオンラインになっており、APIC クラスタが形成されていて正常に動作していること。
- LDAP サーバのホスト名または IP アドレス、ポート、バインド DN、ベース DN、およびパスワードを使用できること。
- APIC 管理エンドポイント グループを使用できること。

手順

ステップ 1 APIC で、LDAP プロバイダーを設定します。

LDAP プロバイダーの設定については、[プロバイダーを作成する \(26 ページ\)](#) を参照してください。

APIC GUI のインバンドまたはアウトオブバンド管理のトグル：

ナビゲーションウィンドウで、[システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] > [APIC 接続設定 (APIC Connectivity Preferences)] の順に選択します。作業ペインで、[インバンド (inband)] または [アウトオブバンド (ooband)] のいずれかを選択します。

ステップ 2 LDAP の ログイン ドメイン を作成します。

手順については、[GUI を使用してローカル ドメインを作成する \(23 ページ\)](#) を参照してください。

次のタスク

これで、APIC LDAP 設定手順は完了です。次に、APIC LDAP ログインアクセスをテストします。

Cisco AV ペアが欠落しているか不良であるリモートユーザのデフォルトの動作の変更

手順

-
- ステップ1** メニューバーで、[管理 (Admin)] > [認証 (Authentication)] > [AAA] > [ポリシー (Policy)] タブを選択します。
- ステップ2** [リモートユーザー ログインポリシー (Remote user login policy)] ドロップダウン リストから、[デフォルト ロールの割り当て (Assign Default Role)] を選択します。

デフォルト値は [No Login] です。[Assign Default Role] オプションは、Cisco AV ペアが欠落しているか不良であるユーザに最小限の読み取り専用権限を割り当てます。不正な AV ペアは、解析ルール適用時に問題があった AV ペアです。

署名ベースのトランザクションについて

Cisco ACI ファブリックの APIC コントローラは、ユーザを認証するためにさまざまな方法を提供します。

主要な認証方式ではユーザ名とパスワードが使用され、APIC REST API は APIC に対するその後のアクセスに使用できる認証トークンを返します。これは、HTTPS が使用不可であるか有効でない状況では安全でないと見なされます。

提供されている別の認証形式では、トランザクションごとに計算される署名が活用されます。その署名の計算には秘密キーが使用され、そのキーは安全な場所に保管して秘密にしておく必要があります。APIC がトークン以外の署名が付いた要求を受信すると、APIC は X.509 証明書を活用して署名を確認します。署名ベースの認証では、APIC に対するすべてのトランザクションに新しく計算された署名が必要です。これは、ユーザがトランザクションごとに手動で行うタスクではありません。理想的には、この機能は APIC と通信するスクリプトまたはアプリケーションで使用する必要があります。この方法では、攻撃者がユーザクレデンシャルを偽装またはなりすますためには RSA/DSA キーを解読する必要があるため、最も安全です。



(注) また、リプレイ攻撃を防ぐためには HTTPS を使用する必要があります。

認証に X.509 証明書ベースの署名を使用する前に、次の必須タスクが完了していることを確認します。

1. OpenSSL または同様のツールを使用して X.509 証明書と秘密キーを作成します。

2. APIC のローカル ユーザを作成します（ローカル ユーザがすでに利用可能である場合、このタスクはオプションです）。
3. APIC のローカル ユーザに X.509 証明書を追加します。

注意事項と制約事項

次の注意事項と制約事項に従ってください。

- ローカル ユーザはサポートされます。リモート AAA ユーザはサポートされません。
- APIC GUI は証明書認証方式をサポートしません。
- WebSocket と eventchannel は X.509 要求では動作しません。
- サードパーティにより署名された証明書はサポートされません。自己署名証明書を使用します。

X.509 証明書と秘密キーの生成

手順

ステップ 1 OpenSSL コマンドを入力して、X.509 証明書と秘密キーを生成します。

例：

```
$ openssl req -new -newkey rsa:1024 -days 36500 -nodes -x509 -keyout userabc.key -out userabc.crt -subj '/CN=User ABC/O=Cisco Systems/C=US'
```

(注)

- X.509 証明書が生成されると、APIC のユーザ プロファイルに追加され、署名の確認に使用されます。秘密キーは、署名を生成するためにクライアントによって使用されます。
- 証明書には公開キーは含まれていますが、秘密キーは含まれていません。公開キーは、計算された署名を確認するために APIC によって使用される主要な情報です。秘密キーが APIC に保存されることはありません。このキーを秘密にしておく必要があります。

ステップ 2 OpenSSL を使用して証明書のフィールドを表示します。

例：

```
$ openssl x509 -text -in userabc.crt
Certificate:
    Data:
        Version: 3 (0x2)
        Serial Number:
            c4:27:6c:4d:69:7c:d2:b6
        Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
        Issuer: CN=User ABC, O=Cisco Systems, C=US
        Validity
            Not Before: Jan 12 16:36:14 2015 GMT
```

```

Not After : Dec 19 16:36:14 2114 GMT
Subject: CN=User ABC, O=Cisco Systems, C=US
Subject Public Key Info:
  Public Key Algorithm: rsaEncryption
  RSA Public Key: (1024 bit)
    Modulus (1024 bit):
      00:92:35:12:cd:2b:78:ef:9d:ca:0e:11:77:77:3a:
      99:d3:25:42:94:b5:3e:8a:32:55:ce:e9:21:2a:ff:
      e0:e4:22:58:6d:40:98:b1:0d:42:21:db:cd:44:26:
      50:77:e5:fa:b6:10:57:d1:ec:95:e9:86:d7:3c:99:
      ce:c4:7f:61:1d:3c:9e:ae:d8:88:be:80:a0:4a:90:
      d2:22:e9:1b:25:27:cd:7d:f3:a5:8f:cf:16:a8:e1:
      3a:3f:68:0b:9c:7c:cb:70:b9:c7:3f:e8:db:85:d8:
      98:f6:e3:70:4e:47:e2:59:03:49:01:83:8e:50:4a:
      5f:bc:35:d2:b1:07:be:ec:e1
    Exponent: 65537 (0x10001)
X509v3 extensions:
  X509v3 Subject Key Identifier:
    0B:E4:11:C7:23:46:10:4F:D1:10:4C:C1:58:C2:1E:18:E8:6D:85:34
  X509v3 Authority Key Identifier:
    keyid:0B:E4:11:C7:23:46:10:4F:D1:10:4C:C1:58:C2:1E:18:E8:6D:85:34

  DirName:/CN=User ABC/O=Cisco Systems/C=US
  serial:C4:27:6C:4D:69:7C:D2:B6

  X509v3 Basic Constraints:
    CA:TRUE
Signature Algorithm: sha1WithRSAEncryption
  8f:c4:9f:84:06:30:59:0c:d2:8a:09:96:a2:69:3d:cf:ef:79:
  91:ea:cd:ae:80:16:df:16:31:3b:69:89:f7:5a:24:1f:fd:9f:
  d1:d9:b2:02:41:01:b9:e9:8d:da:a8:4c:1e:e5:9b:3e:1d:65:
  84:ff:e8:ad:55:3e:90:a0:a2:fb:3e:3e:ef:c2:11:3d:1b:e6:
  f4:5e:d2:92:e8:24:61:43:59:ec:ea:d2:bb:c9:9a:7a:04:91:
  8e:91:bb:9d:33:d4:28:b5:13:ce:dc:fe:c3:e5:33:97:5d:37:
  cc:5f:ad:af:5a:aa:f4:a3:a8:50:66:7d:f4:fb:78:72:9d:56:
  91:2c

```

[snip]

ローカルユーザの設定

GUIを使用したローカルユーザの作成とユーザ証明書の追加

手順

- ステップ1 メニューバーで、**[ADMIN]** > **[AAA]** を選択します。
- ステップ2 [Navigation] ペインの [Work] ペインで、**[Users]** と **[Local Users]** をクリックします。
- ステップ3 [Work] ペインで、**[Local Users]** タブを表示していることを確認します。
デフォルトでは **admin** ユーザが存在します。
- ステップ4 [Work] ペインで、タスク アイコンのドロップダウン リストをクリックし、**[Create Local User]** を選択します。

- ステップ 5** [Security] ダイアログボックスで、ユーザに必要なセキュリティ ドメインを選択し、[Next] をクリックします。
- ステップ 6** [Roles] ダイアログボックスで、ユーザのロールを選択するためのオプション ボタンをクリックし、[Next] をクリックします。
- 読み取り専用または読み取り/書き込み権限を提供できます。
- ステップ 7** [User Identity] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- [Login ID] フィールドで、ID を追加します。
 - [Password] フィールドにパスワードを入力します。
 - [Confirm Password] フィールドで、パスワードを確認します。
 - (オプション) 証明書ベースの認証の場合は、[User Certificate Attribute] フィールドに、認証証明書からのユーザ ID を入力します。
 - [Finish] をクリックします。
- ステップ 8** [Navigation] ペインで、作成したユーザの名前をクリックします。[Work] ペインで、[Security Domains] 領域のユーザの横にある [+] 記号を展開します。ユーザのアクセス権限が表示されます。
- ステップ 9** [Work] ペインの [User Certificates] 領域で、ユーザ証明書の [+] 記号をクリックし、[Create X509 Certificate] ダイアログ ボックスで次の操作を実行します。
- [Name] フィールドに、証明書の名前を入力します。
 - [Data] フィールドに、ユーザ証明書の詳細を入力します。
 - Submit** をクリックします。
- X509 証明書がローカル ユーザ用に作成されます。

Python SDK を使用したローカル ユーザの作成

手順

ローカル ユーザを作成します。

例：

```
#!/usr/bin/env python
from cobra.model.pol import Uni as PolUni
from cobra.model.aaa import UserEp as AaaUserEp
from cobra.model.aaa import User as AaaUser
from cobra.model.aaa import UserCert as AaaUserCert
from cobra.model.aaa import UserDomain as AaaUserDomain
from cobra.model.aaa import UserRole as AaaUserRole
from cobra.mit.access import MoDirectory
from cobra.mit.session import LoginSession
from cobra.internal.codec.jsoncodec import toJSONStr

APIC = 'http://10.10.10.1'
username = 'admin'
password = 'p@$w0rd'
```

```

session = LoginSession(APIC, username, password)
modir = MoDirectory(session)
modir.login()

def readFile(fileName=None, mode="r"):
    if fileName is None:
        return ""
    fileData = ""
    with open(fileName, mode) as aFile:
        fileData = aFile.read()
    return fileData

# Use a dictionary to define the domain and a list of tuples to define
# our aaaUserRoles (roleName, privType)
# This can further be abstracted by doing a query to get the valid
# roles, that is what the GUI does

userRoles = {'all': [
    ('aaa', 'writePriv'),
    ('access-admin', 'writePriv'),
    ('admin', 'writePriv'),
    ('fabric-admin', 'writePriv'),
    ('nw-svc-admin', 'writePriv'),
    ('ops', 'writePriv'),
    ('read-all', 'writePriv'),
    ('tenant-admin', 'writePriv'),
    ('tenant-ext-admin', 'writePriv'),
    ('vmm-admin', 'writePriv'),
],
}

uni = PolUni('') # '' is the Dn string for topRoot
aaaUserEp = AaaUserEp(uni)
aaaUser = AaaUser(aaaUserEp, 'userabc', firstName='Adam',
                  email='userabc@cisco.com')

aaaUser.lastName = 'BC'
aaaUser.phone = '555-111-2222'
aaaUserCert = AaaUserCert(aaaUser, 'userabc.crt')
aaaUserCert.data = readFile("/tmp/userabc.crt")
# Now add each aaaUserRole to the aaaUserDomains which are added to the
# aaaUserCert
for domain, roles in userRoles.items():
    aaaUserDomain = AaaUserDomain(aaaUser, domain)
    for roleName, privType in roles:
        aaaUserRole = AaaUserRole(aaaUserDomain, roleName,
                                   privType=privType)
print toJSONStr(aaaUser, prettyPrint=True)

cr = ConfigRequest()
cr.addMo(aaaUser)
modir.commit(cr)
# End of Script to create a user

```

秘密キーを使用した署名の計算

始める前に

次の情報が用意されている必要があります。

- HTTP メソッド : GET、POST、DELETE
- 要求される REST API URI (クエリ オプションを含む)
- POST 要求の場合、APIC に送信される実際のペイロード
- ユーザの X.509 証明書の生成に使用される秘密キー
- APIC のユーザ X.509 証明書の宛先名

手順

ステップ 1 HTTP メソッド、REST API URI、およびペイロードをこの順序で連結し、ファイルに保存します。

OpenSSL で署名を計算するには、この連結データをファイルに保存する必要があります。この例では、ファイル名 `payload.txt` を使用します。秘密キーは `userabc.key` というファイルにあることに注意してください。

例 :

GET の例 :

```
GET http://10.10.10.1/api/class/fvTenant.json?rsp-subtree=children
```

POST の例 :

```
POST http://10.10.10.1/api/mo/tn-test.json{"fvTenant": {"attributes": {"status": "deleted", "name": "test"}}
```

ステップ 2 `payload.txt` ファイルに正しい情報が含まれていることを確認します。

たとえば、前の手順で示したような取得例を使用します。

```
GET http://10.10.10.1/api/class/fvTenant.json?rsp-subtree=children
```

`payload.txt` ファイルには、次の情報のみ含める必要があります。

```
GET/api/class/fvTenant.json?rsp-subtree=children
```

ステップ 3 `payload` ファイルを作成するときに新しい行を間違えて作成していないことを確認します。

例 :

```
# cat -e payload.txt
```

次と同じように出力の最後に `$` 記号があるか確認します。

```
GET/api/class/fvTenant.json?rsp= subtree=children$
```

ある場合、Payload ファイルを作成したときに新しい行が作成されたことを意味します。payload ファイルの生成時に新しい行が作成されることを防ぐには、次のようなコマンドを使用します。

```
echo -n "GET/api/class/fvTenant.json?rsp-subtree=children" >payload.txt
```

ステップ 4 OpenSSL を使用して、秘密キーとペイロード ファイルを使用して署名を計算します。

例：

```
openssl dgst -sha256 -sign userabc.key payload.txt > payload_sig.bin
```

生成されたファイルには、複数行に印字された署名があります。

ステップ 5 base64 形式に署名を変換します。

例：

```
openssl base64 -A -in payload_sig.bin -out payload_sig.base64
```

ステップ 6 Bash を使用して、署名から改行文字を取り除きます。

例：

```
$ tr -d '\n' < payload_sig.base64
P+OTqK0CeAZj17+Gute2R1Ww8OGgtzE0wsLlx8fIXX14V79Z17
Ou8IdJH9CB4W6CEvdICXqkv3KaQszCIC0+Bn07o3qF//BsIplZmYChD6gCX3f7q
IcjGX+R6HAqGeK7k97cNhXlWEoobFPe/oajtPjOu3tdOjhf/9ujG6Jv6Ro=
```

(注)

これは、この特定の要求に関して APIC に送信される署名です。その他の要求では、独自の署名を計算する必要があります。

ステップ 7 署名を文字列内に配置し、APIC が署名をペイロードと照合して確認できるようにします。

この完全な署名が、要求のヘッダー内のクッキーとして APIC に送信されます。

例：

```
APIC-Request-Signature=P+OTqK0CeAZj17+Gute2R1Ww8OGgtzE0wsLlx8f
IXX14V79Z17Ou8IdJH9CB4W6CEvdICXqkv3KaQszCIC0+Bn07o3qF//BsIplZmYChD6gCX3f
7qIcjGX+R6HAqGeK7k97cNhXlWEoobFPe/oajtPjOu3tdOjhf/9ujG6Jv6Ro=;
APIC-Certificate-Algorithm=v1.0; APIC-Certificate-Fingerprint=fingerprint;
APIC-Certificate-DN=uni/userext/user-userabc/usercert-userabc.crt
```

(注)

ここで使用される DN が、次のステップの x509 証明書を含むユーザ認定オブジェクトの DN に一致する必要があります。

ステップ 8 署名を使用して APIC と通信するには、Python SDK の CertSession クラスを使用します。

次のスクリプトは、ACI Python SDK の CertSession クラスを使用して、署名を使用して APIC に要求する方法の例です。

例：

```
#!/usr/bin/env python
# It is assumed the user has the X.509 certificate already added to
# their local user configuration on the APIC
from cobra.mit.session import CertSession
from cobra.mit.access import MoDirectory
```

```
def readFile(fileName=None, mode="r"):
    if fileName is None:
        return ""
    fileData = ""
    with open(fileName, mode) as aFile:
        fileData = aFile.read()
    return fileData

pkey = readFile("/tmp/userabc.key")
csession = CertSession("https://ApicIPorHostname/",
                       "uni/userext/user-userabc/usercert-userabc", pkey)

modir = MoDirectory(csession)
resp = modir.lookupByDn('uni/fabric')
pring resp.dn
# End of script
```

(注)

前のステップで使用した DN が、このステップの x509 証明書を含むユーザ認定オブジェクトの DN に一致する必要があります。

アカウントティング

Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリック アカウントティングは、障害およびイベントと同じメカニズムで処理される以下の2つの管理対象オブジェクトによって処理されます。

- `aaaSessionLR` 管理対象オブジェクトは、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) APIC およびスイッチでのユーザー アカウントのログイン/ログアウトセッション、およびトークン更新を追跡します。Cisco ACI ファブリック セッションアラート機能は、次のような情報を保存します。
 - ユーザ名
 - セッションを開始した IP アドレス
 - タイプ (telnet、HTTPS、REST など)



(注) 5.3(1) リリース以降、telnet はサポートされていません。

- セッションの時間と長さ
- トークン更新：ユーザー アカウントのログイン イベントは、ユーザー アカウントが Cisco ACI ファブリックの権利を行使するために必要な、有効なアクティブ トークンを生成します。



(注) トークンはログインに関係なく期限切れになります。ユーザはログアウトできますが、トークンは含まれているタイマー値の期間に従って期限切れになります。

- aaaModLR 管理対象オブジェクトは、ユーザーがオブジェクトに対して行う変更、およびいつ変更が発生したかを追跡します。
- AAA サーバが ping 可能でない場合は、使用不可としてマークされ、エラーが表示されません。

aaaSessionLR と aaaModLR の両方のイベントログが、Cisco APIC シャードに保存されます。データがプリセットされているストレージ割り当てサイズを超えると、古いものから順にレコードが上書きされます。



(注) Cisco APIC クラスタ ノードを破壊するディスククラッシュや出火などの破壊的なイベントが発生した場合、イベントログは失われ、イベントログはクラスタ全体で複製されません。

aaaModLR MO と aaaSessionLR 管理対象オブジェクトは、クラスまたは識別名 (DN) でクエリできます。クラスのクエリは、ファブリック全体のすべてのログレコードを提供します。ファブリック全体の aaaModLR レコードはすべて、GUI の [ファブリック (Fabric)] > [インベントリ (Inventory)] > [POD] > [履歴 (History)] > [監査ログ (Audit Log)] セクションから入手できます。Cisco APIC GUI の [履歴 (History)] > [監査ログ (Audit Log)] オプションを使用すると、GUI に示された特定のオブジェクトのイベントログを表示できます。

標準の syslog、callhome、REST クエリ、および CLI エクスポートメカニズムは、aaaModLR と aaaSessionLR 管理対象オブジェクトのクエリデータで完全にサポートされます。このデータをエクスポートするデフォルトポリシーはありません。

Cisco APIC には、一連のオブジェクトまたはシステム全体のデータの集約を報告する、事前設定されたクエリはありません。ファブリック管理者は、aaaModLR および aaaSessionLR のクエリデータを定期的に syslog サーバにエクスポートするエクスポートポリシーを設定できます。エクスポートされたデータを定期的にアーカイブし、システムの一部またはシステムログ全体のカスタム レポートを生成するために使用できます。

共有サービスとしての外部ネットワークへのルーテッド接続の課金と統計情報

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) は、共有サービスとして外部ネットワークへのルーテッド接続用に設定されたポートからバイトカウントおよびパケットカウント課金統計情報を収集するように設定できます。外部ネットワークは、Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) 内の外部 L3Out エンドポイントグループ (l3extInstP 管理対象オブジェク

ト) として表されます。任意のテナントの任意の EPG は、外部ネットワークへのルーテッド接続のために外部 L3Out EPG を共有できます。課金統計情報は、共有サービスとして外部 L3Out EPG を使用するテナントの各 EPG について収集できます。外部 L3Out EPG がプロビジョニングされているリーフスイッチは、課金統計情報を集約先である Cisco APIC に転送します。アカウントिंगポリシーは、これらの課金統計情報を定期的にサーバにエクスポートするように設定できます。



第 5 章

管理

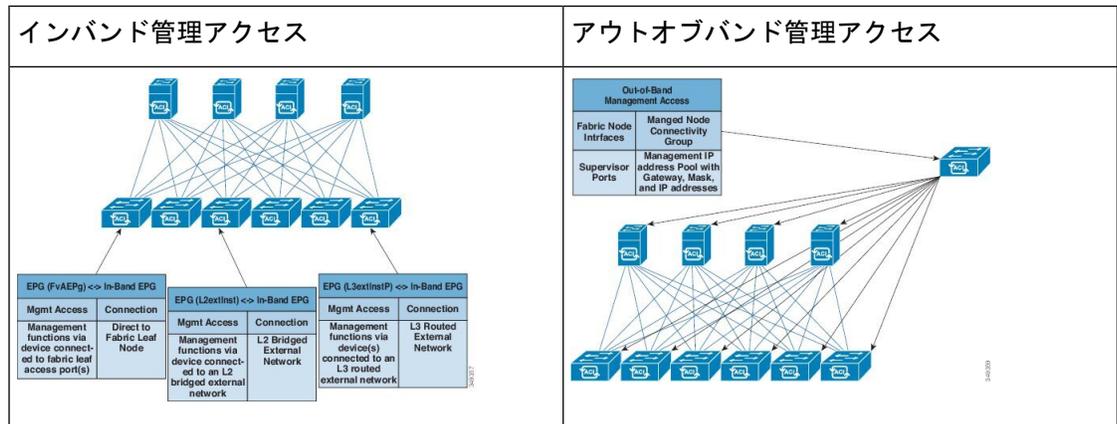
この章は、次の内容で構成されています。

- [管理のワークフロー](#) (55 ページ)
- [管理アクセスの追加](#) (57 ページ)
- [テクニカル サポート、統計情報、およびコア ファイルのエクスポート](#) (67 ページ)
- [概要](#) (69 ページ)
- [コントローラ コンフィギュレーションのバックアップ、復元、およびロールバック](#) (77 ページ)
- [Syslog の使用](#) (88 ページ)
- [アトミック カウンタの使用](#) (92 ページ)
- [SNMP の使用](#) (97 ページ)
- [SPAN の使用](#) (103 ページ)
- [トレースルートの使用](#) (140 ページ)
- [acidiaog コマンド](#) (142 ページ)

管理のワークフロー

ACI 管理アクセスのワークフロー

このワークフローでは、ACI ファブリック内のスイッチへの管理接続を設定するために必要な手順の概要を示します。



1. 前提条件

- インフラセキュリティドメインに読み取り/書き込みアクセス権限があることを確認します。
- 必要なインターフェイスを持つターゲットリーフスイッチが使用できることを確認します。

2. ACI リーフスイッチのアクセスポートの設定

次の管理アクセスシナリオのいずれかを選択します。

- インバンド管理の場合は、『*APIC Basic Configuration Guide*』のインバンド設定向けに推奨されるトピックに従います。
- アウトオブバンド管理の場合は、『*APIC Basic Configuration Guide*』のアウトオブバンド設定向けに推奨されるトピックに従います。

推奨されるトピック

詳細については、『*APIC Basic Configuration Guide*』の以下のトピックを参照してください。

- 拡張 GUI を使用したインバンド管理アクセスの設定
- NX-OS スタイルの CLI を使用したインバンド管理アクセスの設定
- REST API を使用したインバンド管理アクセスの設定
- 拡張 GUI を使用したアウトオブバンド管理アクセスの設定
- NX-OS スタイルの CLI を使用したアウトオブバンド管理アクセスの設定
- REST API を使用したアウトオブバンド管理アクセスの設定

管理アクセスの追加

インバンドの管理テナントで外部管理インスタンスプロファイルを設定しても、ファブリック全体の通信ポリシーで設定されているプロトコルには影響しません。外部管理インスタンスプロファイルで指定されているサブネットおよびコントラクトは、HTTP/HTTPSまたはSSH/Telnetには影響しません。5.3(1) リリース以降、Telnet はサポートされていません。

GUI での管理アクセスの追加

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) コントローラには、管理ネットワークに到達するルートが 2 つあります。1 つはインバンド管理インターフェイスを使用し、もう 1 つはアウトオブバンド管理インターフェイスを使用します。

インバンド管理ネットワークでは、Cisco APIC が Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックを使用してリーフスイッチや外部と通信でき、外部管理デバイスがファブリック自体を使用して Cisco APIC またはリーフスイッチおよびスパインスイッチと通信できます。

アウトオブバンド管理ネットワークの設定は、コントローラ、リーフスイッチ、およびスパインスイッチの管理ポートの設定を定義します。

Cisco APIC コントローラは、インバンド管理インターフェイスが設定されている場合は、アウトオブバンド管理インターフェイスを通してインバンド管理インターフェイスを常に選択します。アウトオブバンド管理インターフェイスは、インバンド管理インターフェイスが設定されていない場合、または宛先アドレスが Cisco APIC のアウトオブバンド管理サブネットと同じサブネットにある場合にのみ使用されます。

Cisco ACI には、管理テナントおよびインバンド VRF インスタンスのブリッジドメインのサブネット設定に基づいて、インバンド管理用のルートをプログラムする機能があります。これらのルートは、ブリッジドメインからサブネット設定が削除されると削除されます。

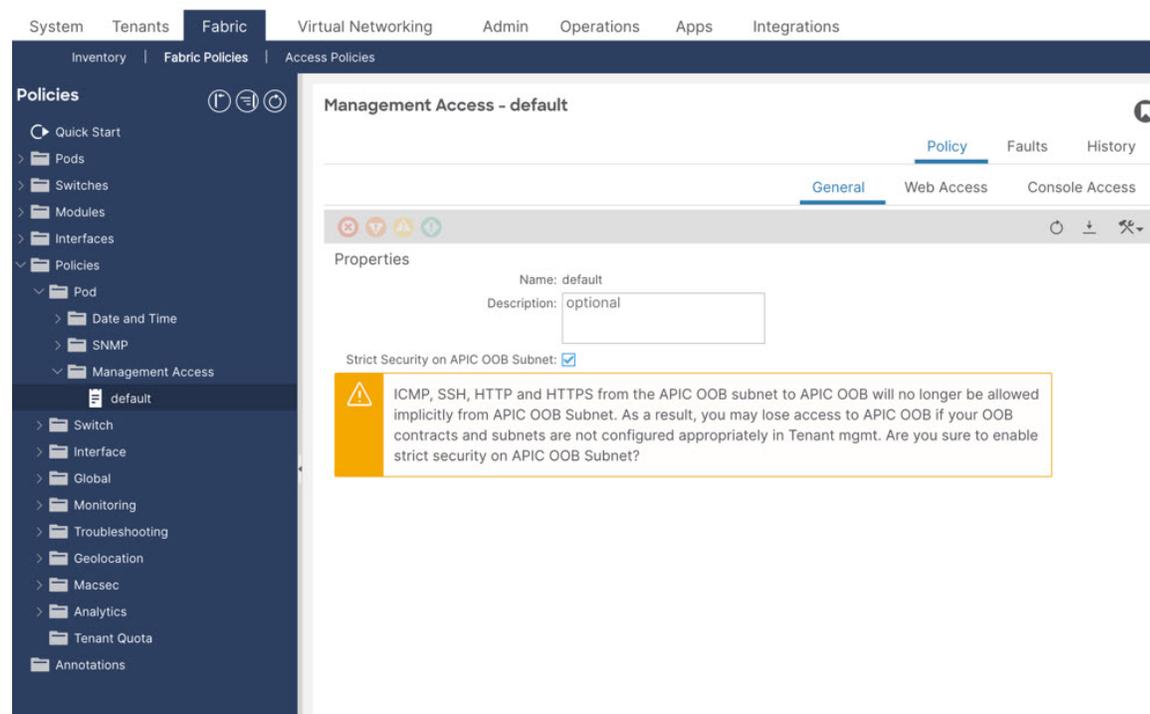
Cisco APIC アウトオブバンド管理接続のリンクは、1 Gbps である必要があります。

OOB 管理 IP を使用した APIC へのアクセスは、コントラクトと許可されたサブネットを構成することで制限できます。ただし、APIC OOB サブネットに属する IP アドレスは、コントラクトとサブネットの構成に関係なく、ICMP、SSH、HTTP、HTTPS、および TCP 4200 を使用した APIC OOB へのアクセスが常に許可されます。このセーフガードは、構成ミスによる APIC アクセスの偶発的な損失を防ぐために導入されています。Cisco APIC リリース 6.1(1) 以降では、APIC GUI の [ファブリック (Fabric)] > [ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] > [ポリシー (Policies)] > [ポッド (Pod)] > [管理アクセス (Management Access)] にあるデフォルトの管理アクセスを構成する際に [APIC OOB サブネットでの厳格なセキュリティ (Strict Security on APIC OOB Subnet)] オプションを有効にすることで、このセーフガードを削除できます。

厳密モードを有効にするとすぐに、[管理アクセス (Management Access)] 画面に警告が表示されます (以下を参照)。厳格モードの有効化に関する同様の警告は、[外部管理ネットワークプロファイル (External Management Network Profile)] 画面にも表示されます ([テナント

(Tenants)] > [管理 (mgmt)] > [ネットワーク インスタンス プロファイル (External Management Network Instance Profiles)] の下にあります)。

図 1: 厳密セキュリティ モードを有効にした後に表示される警告



IP アドレスによる APIC へのアクセスを許可しないコントラクトとサブネット（外部管理ネットワーク インスタンス プロファイル内）を使用して **[APIC OOB サブネットで厳格なセキュリティ (Strict Security on APIC OOB Subnet)]** を有効にすると、OOB IP アドレスを介した APIC へのアクセスが失われます。APIC OOB サブネットと同じネットワークから APIC にアクセスすることもできません。このような場合は、コンソールにログインし、`acidia enableoobrecovery` コマンドを使用して、**[APIC OOB サブネットの厳格なセキュリティ (Strict Security on APIC OOB Subnet)]** を無効にします。



(注) ARP 情報をキャッシュする重複する IP アドレスとファイアウォールは、管理ネットワークではサポートされません。これらの条件が存在すると、アップグレード後に Cisco APIC 管理アクセスが完全に失われる可能性があります。

IPv4/IPv6 アドレスおよびインバンド ポリシー

インバンド管理アドレスは、ポリシーによってのみ (Postman REST API、NX-OS スタイル CLI、または GUI) APIC コントローラにプロビジョニングできます。また、インバンド管理アドレスは、各ノードに静的に設定する必要があります。

アウトオブバンドポリシーの IPv4/IPv6 アドレス

アウトオブバンド管理アドレスは、ブートストラップ時に、またはポリシーを使用して (Postman REST API、NX-OS スタイル CLI、GUI) APIC コントローラにプロビジョニングできます。また、アウトオブバンド管理アドレスは、各ノードに静的にまたはクラスタ全体にアドレスの範囲 (IPv4/IPv6) を指定することによって設定する必要があります。IP アドレスは、範囲からクラスタ内のノードにランダムに割り当てられます。

既存の IP tables 機能をミラーリングする IPv6 の変更

すべての IPv6 は、ネットワーク アドレス変換 (NAT) を除いて、既存の IP tables 機能をミラーリングします。

既存の IP tables

1. 以前は、IPv6 テーブルのすべてのルールが一度に 1 つずつ実行され、すべてのルールの追加または削除に対してシステム コールが行われていました。
2. 新しいポリシーが追加されるたびに、ルールが既存の IP tables ファイルに追加され、ファイルへの追加変更は行われませんでした。
3. 新しい送信元ポートがアウトオブバンドポリシーで設定されると、同じポート番号で送信元と宛先のルールを追加しました。

IP tables への変更

1. IP tables が作成されると、はじめにハッシュ マップに書き込まれ、次に中間ファイル IP tables-new に書き込まれてこれが復元されます。保存すると、新しい IP tables ファイルが /etc/sysconfig/ フォルダに作成されます。これら両方のファイルは同じ場所にあります。すべてのルールにシステム コールを行う代わりに、ファイルを復元および保存している時のみシステム コールを行う必要があります。
2. ルールを追加する代わりに新しいポリシーがファイルに追加されると、hashmaps にデフォルトポリシーをロードし、新しいポリシーを確認し、hashmaps に追加することによって、IP テーブルがゼロから作成されます。その後、中間ファイル (/etc/sysconfig/iptables-new) に書き込まれて保存されます。
3. アウトオブバンドポリシーのルールの送信元ポートだけを設定することはできません。宛先ポートまたは送信元ポートいずれかを宛先ポートとともにルールに追加できます。
4. 新しいポリシーが追加されると、新しいルールが IP tables ファイルに追加されます。このルールは、IP tables デフォルト ルールのアクセス フローを変更します。

```
-A INPUT -s <OOB Address Ipv4/Ipv6> -j apic-default
```
5. 新しいルールが追加された場合、これは IP tables-new ファイルに存在して IP tables ファイルには存在せず、IP tables-new ファイルにエラーがあることを意味します。復元が正常な場合に限り、ファイルが保存され、新しいルールを IP tables ファイルで確認できます。



- (注)
- IPv4 のみ有効な場合、IPv6 ポリシーを設定しないでください。
 - IPv6 のみ有効な場合、IPv4 ポリシーを設定しないでください。
 - IPv4 と IPv6 の両方が有効な場合にポリシーが追加されると、両方のバージョンに設定されます。したがって、IPv4 サブネットを追加すると IP tables に追加され、同様に IPv6 サブネットは IPv6 tables に追加されます。

管理アクセスの注意事項および制約事項

- vzAny は共有サービスのコンシューマとしてサポートされますが、共有サービスのプロバイダとしてはサポートされません。vzAny 共有サービス コンシューマと vzAny プロバイダはサポートされていません。
- アウトオブバンド管理アクセスを設定する場合、アウトオブバンドコントラクトのログインオプション (ACL コントラクトおよび許可/拒否ログの有効化と表示) はサポートされません。
- インバンド管理 VRF をリーフ ノードにプッシュするには、リーフ ノードのインバンド管理アドレスを設定する必要があります。
- ゲートウェイ サブネットに [この IP アドレスをプライマリにする (Make this IP address primary)] が選択されていない限り、インバンド管理 VRF のブリッジドメインサブネット IP アドレスをセカンダリ IP アドレスとして割り当てることができます。
- 次のポートはアウトオブバンド コントラクトで拒否できません。
 - プロトコル icmp、レート制限、設定不可
 - tcp dpt : 22、レート制限、構成不可
 - tcp dpt : 80、デフォルトではリスニング プロセスなし
 - tcp dpt : 443、デフォルトの UI/API
 - tcp dpt : 4200、Web 経由の SSH アクセス、デフォルトではリッスン プロセスなし

外部ネットワーク インスタンス プロファイルでサブネットを定義すると、上記のポートリストは、構成された OOB サブネットの送信元に制限されます。

IPv4 または IPv6 サブネットが外部ネットワーク インスタンス プロファイルで定義されていない場合、対応するアドレス ファミリに対して OOB 契約は有効になりません。

IPv4 と IPv6 の両方の OOB コントラクトを有効にするには、外部ネットワーク インスタンス プロファイルの下で、少なくとも 1 つの IPv4 サブネットと 1 つの IPv6 サブネットを構成する必要があります。

リーフスイッチおよびスパインスイッチの SNMP の場合、[ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] > [ポッド (Pod)] > [SNMP] で構成されている [クライアント エントリ (Client

Entries)]サブネットは、OOB コントラクトの前に一致します。[クライアント エントリ (Client Entries)]の下にサブネットが構成されていない場合は、どの送信元でも SNMP が許可されます。たとえば、UDP **dpt:161** です。

デフォルトでは、リーフスイッチとスパインスイッチの管理インターフェイスには IP アドレスが割り当てられていません。ただし、IPアドレスが割り当てられると、帯域外契約で拒否できないポートがいくつかあります。これらは、ACIの組み込み機能に必要です。たとえば、NTP、DHCP、ICMP などです。

外部ネットワーク インスタンスプロファイルで定義されているサブネットは、APICにのみ適用されます。リーフスイッチとスパインスイッチでは、任意の送信元 (0.0.0.0/0) が許可されます。

- スパインスイッチは、インバンド管理 IP アドレスの ARP を解決しません。このため、インバンド管理ネットワーク内のデバイスはスパインスイッチと通信できません。スパインスイッチへのアクセスは、レイヤ 3 ネットワーク経由でのみ可能です。

ウィザードによるインバンドおよびアウトオブバンド管理アクセスの設定

APIC、リリース 3.1(x)では、管理アクセスの設定を簡略化するためのウィザードが追加されました。このドキュメントに含まれる、管理アクセスを設定する他の方法も引き続き使用できます。

手順

ステップ 1 In-Band Management Access を設定するには、次の手順を実行します:

- a) メニューバーで、**Tenants > mgmt** をクリックします。
- b) **Quick Start** を展開します。
- c) **In-Band Management Access > Configure In-Band Management Access > Start** をクリックします。
- d) **Nodes** を管理ネットワークに、**IP addresses** をノードに、通信フィルタを **Connected Devices** に、そして通信フィルタを **Remote Attached Devices** に追加する手順に従います。

ステップ 2 Out-of-Band Management Access を設定するには、次の手順を実行します:

- a) メニューバーで、**Tenants > mgmt** をクリックします。
- b) **Quick Start** を展開します。
- c) **Out-of-Band Management Access > Configure Out-of-Band Management Access > Start** をクリックします。

- d) **Nodes** をアウトオブバンド管理ネットワークに、**IP addresses** をノードに、許可されたサブネットを **External Hosts** に追加する手順に従います。そうすると、通信フィルタが **Access** のための通信を決定します。

Cisco APIC GUI を使用したインバンド管理アクセスの設定



- (注) インバンド管理アクセスでは、IPv4 アドレスと IPv6 アドレスがサポートされます。スタティック設定を使用した IPv6 設定がサポートされます (インバンドとアウトバンドの両方)。IPv4 および IPv6 のインバンドおよびアウトオブバンドのデュアル設定は、スタティック設定を使用する場合にのみサポートされます。詳細については、「*Configuring Static Management Access in Cisco APIC*」の KB 記事を参照してください。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[ファブリック (FABRIC)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順に選択します。
- ステップ 2** [Navigation] ペインで、[インターフェイス] を右クリックし、[Configure Interface, PC and VPC] を選択します。
- ステップ 3** [Configure Interface, PC, and VPC] ダイアログボックスで、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) に接続されるスイッチ ポートを設定し、次の操作を実行します。
- スイッチ図の横にある大きい [+] アイコンをクリックし、新しいプロファイルを作成して VLAN を Cisco APIC 用に設定します。
 - [Switches] フィールドのドロップダウン リストから、Cisco APIC を接続するスイッチのチェックボックスをオンにします (leaf1 および leaf2)。
 - [Switch Profile Name] フィールドに、プロファイルの名前 (apicConnectedLeaves) を入力します。
 - [+] アイコンをクリックして、ポートを設定します。
 - [Interface Type] 領域で、[Individual] オプション ボタンが選択されていることを確認します。
 - [インターフェイス (Interfaces)] フィールドで、Cisco APIC が接続されるポートを入力します。
 - [Interface Selector Name] フィールドに、ポートプロファイルの名前 (apicConnectedPorts) を入力します。
 - [Interface Policy Group] フィールドで、[Create One] オプション ボタンをクリックします。
 - [Attached Device Type] フィールドで、適切なデバイス タイプを選択してドメイン (ベアメタル) を設定します。
 - [Domain] フィールドで、[Create One] オプション ボタンをクリックします。

- k) [Domain Name] フィールドに、ドメイン名を入力します (inband)。
- l) [VLAN] フィールドで、[Create One] オプション ボタンを選択します。
- m) [VLAN Range] フィールドに、VLAN 範囲を入力します。[Save] をクリックし、[Save] をもう一度クリックします。[送信 (Submit)] をクリックします。

ステップ 4 [Navigation] ペインで、[Switch Policies] を右クリックし、[Configure Interface, PC and VPC] を選択します。

ステップ 5 [Configure Interface, PC, and VPC] ダイアログ ボックスで、次のアクションを実行します。

- a) スイッチ図の横にある大きい [+] アイコンをクリックして、新しいプロファイルを作成して VLAN をサーバ用に設定します。
- b) [Switches] フィールドのドロップダウン リストから、サーバが接続されているスイッチのチェックボックスをオンにします (leaf1)。
- c) [Switch Profile Name] フィールドに、プロファイルの名前 (vmmConnectedLeaves) を入力します。
- d) [+] アイコンをクリックして、ポートを設定します。
- e) [Interface Type] 領域で、[Individual] オプション ボタンが選択されていることを確認します。
- f) [Interfaces] フィールドで、サーバが接続されているポートを入力します (1/40)。
- g) [Interface Selector Name] フィールドに、ポート プロファイルの名前を入力します。
- h) [Interface Policy Group] フィールドで、[Create One] オプション ボタンをクリックします。
- i) [Attached Device Type] フィールドで、適切なデバイス タイプを選択してドメイン (ベアメタル) を設定します。
- j) [Domain] フィールドのドロップダウン リストから、[Choose One] オプション ボタンをクリックします。
- k) [Physical Domain] ドロップダウン リストから、前に作成したドメインを選択します。
- l) [Domain Name] フィールドに、ドメイン名を入力します。
- m) [Save] をクリックし、[Save] をもう一度クリックします。

ステップ 6 [Configure Interface, PC, and VPC] ダイアログボックスで、[Submit] をクリックします。

ステップ 7 メニューバーで、[テナント (TENANTS)] > [管理 (mgmt)] をクリックします。[ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[テナント管理 (Tenant mgmt)] > [ネットワークング (Networking)] > [ブリッジドメイン (Bridge Domains)] を展開し、インバンド接続のブリッジドメインを設定します。

ステップ 8 インバンドブリッジドメイン (inb) を展開します。[Subnets] を右クリックします。[Create Subnets] をクリックし、次の操作を実行してインバンド ゲートウェイを設定します。

- a) [Create Subnet] ダイアログボックスで、[Gateway IP] フィールドに、インバンド管理ゲートウェイ IP アドレスとマスクを入力します。
- b) **Submit** をクリックします。

ステップ 9 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[テナント管理 (Tenant mgmt)] > [ノード管理 EPG (Node Management EPGs)] を展開します。[Node Management EPGs] を右クリックし、[Create In-Band Management EPG] を選択します。Cisco APIC と通信するために使用するインバンド EPG の VLAN を設定するには、次の操作を実行します。

- a) [Name] フィールドに、インバンド管理 EPG 名を入力します。
- b) [Encap] フィールドで、VLAN (vlan-10) を入力します。
- c) [Bridge Domain] ドロップダウンフィールドから、ブリッジドメインを選択します。 **Submit** をクリックします。
- d) [Navigation] ペインで、新しく作成したインバンド EPG を選択します。
- e) [Provided Contracts] を展開します。 [Name] フィールドで、ドロップダウンリストから、デフォルトのコントラクトを選択し、VMM サーバが存在する EPG で消費されるデフォルトのコントラクトを EPG が提供できるようにします。
- f) [Update] をクリックし、[Submit] をクリックします。

ステップ 10 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ノード管理アドレス (Node Management Addresses)] を右クリックし、[ノード管理アドレスの作成 (Create Node Management Addresses)] をクリックし、次の操作を実行してファブリック内の Cisco APIC コントローラに割り当てる IP アドレスを設定します。

- a) [Create Node Management Addresses] ダイアログボックスで、[Policy Name] フィールドに、ポリシー名 (apicInb) を入力します。
- b) [Nodes] フィールドの [Select] 列で、このファブリックの一部となるノードのチェックボックスをオンにします (apic1、apic2、apic3) 。
- c) [Config] フィールドで、[In-Band Addresses] チェックボックスをオンにします。
- d) [Node Range] フィールドに、範囲を入力します。
- e) [In-Band IP Addresses] 領域の [In-Band Management EPG] フィールドで、ドロップダウンリストから [default] を選択します。これで、デフォルトのインバンド管理 EPG が関連付けられます。
- f) [In-Band IP Addresses] フィールドと [Gateway] フィールドに、必要に応じて IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを入力します。
- g) **Submit** をクリックします。Cisco APIC の IP アドレスが設定されました。

ステップ 11 [Navigation] ペインで、[Node Management Addresses] を右クリックします。[Create Node Management Addresses] をクリックし、次の操作を実行して、ファブリック内のリーフスイッチおよびスパインスイッチの IP アドレスを設定します。

- a) [Create Node Management Addresses] ダイアログボックスで、[Policy Name] フィールドに、ポリシー名 (switchInb) を入力します。
- b) [Nodes] フィールドの [Select] 列で、このファブリックの一部となるノードの横のチェックボックスをオンにします (leaf1、leaf2、spine1、spine2) 。
- c) [Config] フィールドで、[In-Band Addresses] チェックボックスをクリックします。
- d) [Node Range] フィールドに、範囲を入力します。
- e) [In-Band IP Addresses] 領域の [In-Band Management EPG] フィールドで、ドロップダウンリストから [default] を選択します。デフォルトのインバンド管理 EPG が関連付けられました。
- f) [In-Band IP Addresses] フィールドと [Gateway] フィールドに、必要に応じて IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを入力します。
- g) **Submit** をクリックします。[Confirm] ダイアログボックスで、[Yes] をクリックします。リーフおよびスパインスイッチの IP アドレスが設定されました。

ステップ 12 [ナビゲーション (Navigation)] ペインの [ノード管理アドレス (Node Management Addresses)] の下で、Cisco APIC のポリシー名 (apicInb) をクリックして設定を確認します。[Work] ペインに、さまざまなノードに割り当てられた IP アドレスが表示されます。

ステップ 13 [Navigation] ペインの [Node Management Addresses] 下で、スイッチ ポリシー名 (switchInb) をクリックします。[Work] ペインに、スイッチに割り当てられている IP アドレスと使用しているゲートウェイアドレスが表示されます。

(注)

[システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] > [APIC 接続設定 (APIC Connectivity Preferences)] をクリックして、アウトオブバンド管理アクセスを Cisco APIC サーバのデフォルトの管理接続モードに設定できます。次に、[Connectivity Preferences] ページで [inband] をクリックします。

Cisco APIC GUI を使用したアウトオブバンド管理アクセスの設定



(注) アウトオブバンド管理アクセスでは、IPv4 アドレスと IPv6 アドレスがサポートされます。

リーフスイッチとスパインスイッチ、および Cisco APIC のアウトオブバンド管理アクセスアドレスを設定する必要があります。

始める前に

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) アウトオブバンド管理接続のリンクは、1 Gbps である必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[テナント (Tenants)] > [管理 (mgmt)] を選択します。[Navigation] ペインで、[Tenant mgmt] を展開します。

ステップ 2 [Node Management Addresses] を右クリックし、[Create Node Management Addresses] をクリックします。

ステップ 3 [Create Node Management Addresses] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- [Policy Name] フィールドに、ポリシー名 (switchOob) を入力します。
- [Nodes] フィールドで、適切なリーフおよびスパインスイッチ (leaf1、leaf2、spine1) の横にあるチェックボックスをオンにします。
- [Config] フィールドで、[Out of-Band Addresses] のチェックボックスをオンにします。

(注)

[Out-of-Band IP addresses] 領域が表示されます。

- d) [Out-of-Band Management EPG] フィールドで、ドロップダウンリストから EPG を選択します (デフォルト)。
- e) **アウトオブバンド ゲートウェイ** フィールドで、外部アウトオブバンド管理ネットワークの IP アドレスとネットワーク マスクを入力します。
- f) **[アウトオブバンド IP アドレス]** フィールドに、スイッチに割り当てられる希望の IPv4 または Ipv6 アドレスの範囲を入力します。[Submit] をクリックします。

ノード管理 IP アドレスが設定されます。

ステップ 4 [Navigation] ペインで、[Node Management Addresses] を展開し、作成したポリシーをクリックします。

[Work] ペインに、スイッチに対するアウトオブバンド管理アドレスが表示されます。

ステップ 5 [Navigation] ペインで、[コントラクト (Contracts)] > [アウトオブバンド コントラクト (Out-of-Band Contracts)] を展開します。

ステップ 6 [Out-of-Band Contracts] を右クリックし、[Create Out-of-Band Contract] をクリックします。

ステップ 7 [Create Out-of-Band Contract] ダイアログボックスで、次のタスクを実行します。

- a) [Name] フィールドに、コントラクトの名前 (oob-default) を入力します。
- b) [Subjects] を展開します。[Create Contract Subject] ダイアログボックスで、[Name] フィールドに、サブジェクト名 (oob-default) を入力します。
- c) [フィルタ] を展開し、[名前] フィールドで、ドロップダウンリストから、フィルタの名前 (default) を選択します。[Update] をクリックし、[OK] をクリックします。
- d) [Create Out-of-Band Contract] ダイアログボックスで、[Submit] をクリックします。

アウトオブバンド EPG に適用できるアウトオブバンド コントラクトが作成されます。

ステップ 8 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ノード管理 EPG (Node Management EPG)] > [アウトオブバンド EPG - デフォルト (Out-of-Band EPG - default)] を展開します。

ステップ 9 [Work] ペインで、[Provided Out-of-Band Contracts] を展開します。

ステップ 10 [OOB Contract] カラムで、ドロップダウンリストから、作成したアウトオブバンド コントラクト (oob-default) を選択します。[Update] をクリックし、[Submit] をクリックします。コントラクトがノード管理 EPG に関連付けられます。

ステップ 11 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[外部ネットワーク インスタンス プロファイル (External Network Instance Profile)] を右クリックし、[外部管理エンティティ インスタンスの作成 (Create External Management Entity Instance)] をクリックします。

ステップ 12 [Create External Management Entity Instance] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) [Name] フィールドに、名前 (oob-mgmt-ext) を入力します。
- b) [Consumed Out-of-Band Contracts] フィールドを展開します。[Out-of-Band Contract] ドロップダウンリストから、作成したコントラクト (oob-default) を選択します。[Update] をクリックします。
アウトオブバンド管理によって提供された同じコントラクトを選択します。
- c) [Subnets] フィールドに、サブネットアドレスを入力します。[Submit] をクリックします。
ここで選択したサブネットアドレスだけがスイッチの管理に使用されます。含まれていないサブネットアドレスはスイッチの管理に使用できません。

ノード管理 EPG は外部 EPG に接続されます。アウトオブバンド管理接続が設定されます。

(注)
[システム (System)]>[システム設定 (System Settings)]>[APIC接続設定 (APIC Connectivity Preferences)]をクリックして、アウトオブバンド管理アクセスを Cisco APIC サーバのデフォルトの管理接続モードに設定できます。次に、[Connectivity Preferences] ページで [ooband] をクリックします。

テクニカルサポート、統計情報、およびコアファイルのエクスポート

ファイルのエクスポートについて

管理者は、APIC 内で、コアファイルとデバッグデータを処理するために、統計情報、テクニカルサポートの収集、障害およびイベントをファブリック (APIC およびスイッチ) から外部ホストにエクスポートするようエクスポート ポリシーを設定できます。エクスポートは XML、JSON、Web ソケット、Secure Copy Protocol (SCP)、HTTP などのさまざまな形式にできます。ストリーミング、定期的、またはオンデマンドの各形式でエクスポートを登録できます。

管理者は、転送プロトコル、圧縮アルゴリズム、転送の頻度などポリシーの詳細を設定できます。ポリシーは、AAA を使用して認証されたユーザによって設定できます。実際の転送のセキュリティメカニズムは、ユーザ名とパスワードに基づいています。内部的に、ポリシー要素はデータのトリガーを処理します。

ファイルのエクスポートに関するガイドラインと制約事項

- HTTP エクスポートとストリーミング API 形式は、統計情報の場合にのみサポートされません。コアおよびテクニカル サポート データはサポートされていません。
- エクスポートされるファイルの宛先 IP アドレスは、IPv6 アドレスであってはなりません。
- 5つを超えるノードからのテクニカルサポートを同時にトリガーしないでください。特に Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) にエクスポートする場合、または帯域幅とコンピューティングリソースが不十分な外部サーバにエクスポートする場合は、トリガーを実行しないでください。
- ファブリック内のすべてのノードからテクニカルサポートを定期的に収集するには、複数のポリシーを作成する必要があります。各ポリシーは、ノードのサブセットをカバーする必要があり、時間をずらしてトリガーされるようにスケジュールします (少なくとも 30 分離す)。
- Cisco APIC の同じノードに対して複数のテクニカル サポート ポリシーをスケジュールしないでください。同じノードで複数のテクニカル サポート ポリシーのインスタンスを同

時に実行すると、Cisco APIC が大量に消費されたり、CPU サイクルやその他のリソースが切り替えられたりする可能性があります。

- メンテナンスモードになっているノードについては、オンデマンドテクニカルサポートポリシーではなく、通常のテクニカルサポートポリシーを使用することをお勧めします。
- メンテナンスモードのノードに対する進行中のテクニカルサポートのステータスは、Cisco APIC GUI の [管理 (Admin)] > [テクニカルサポート (Tech Support)] > [policy_name] > [操作 (Operational)] > [ステータス (Status)] セクションでは使用できません。テクニカルサポートポリシーの [コントローラへのエクスポート (Export to Controller)] または [エクスポート先 (Export Destination)] に基づいて、コントローラ (/data/techsupport) または宛先サーバを確認し、テクニカルサポートがキャプチャされていることを確認できます。
- Cisco APIC からのテクニカルサポートの収集は、リーフスイッチ上のコアがビジー状態の場合にはタイムアウトすることがあります。BGP などのルーティングプロセスや HAL などのプラットフォームプロセスが CPU を占有すると、コアがビジーになる可能性があります。テクニカルサポートの収集がタイムアウトした場合は、CPU 使用率を調べて、CPU 占有が発生しているかどうかを確認します。そのような場合には、リーフスイッチのテクニカルサポートを直接収集すれば、タイムアウトの問題を回避できます。

ファイルエクスポート用のリモートロケーションの作成

この手順では、エクスポートされたファイルを受け取るリモートホストのホスト情報とファイル転送設定を設定します。

手順

- ステップ 1 メニューバーで、[Admin] をクリックします。
- ステップ 2 サブメニューバーで、[Import/Export] をクリックします。
- ステップ 3 [Navigation] ペインで、[Export Policies] を展開します。
- ステップ 4 [Remote Locations] を右クリックし、[Create Remote Path of a File] を選択します。
- ステップ 5 [Create Remote Path of a File] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
 - a) [Name] フィールドに、リモートロケーションの名前を入力します。
 - b) [Host Name/IP] フィールドに、送信先ホストの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名を入力します。
 - c) [Protocol] フィールドで、必要なファイル転送プロトコルのオプションボタンをクリックします。
 - d) [Remote Path] フィールドで、リモートホストでファイルが保存されるパスを入力します。
 - e) リモートホストにログインするためのユーザ名とパスワードを入力し、パスワードを確認します。
 - f) [Management EPG] ドロップダウンリストから管理 EPG を選択します。

g) [送信 (Submit)] をクリックします。

GUI を使用したオンデマンドテクニカル サポート ファイルの送信

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[Admin] をクリックします。
- ステップ 2** サブメニューバーで、[Import/Export] をクリックします。
- ステップ 3** [Navigation] ペインで、[Export Policies] を展開します。
- ステップ 4** [オンデマンドテクニカル サポート (On-demand Tech Support)] を右クリックし、[オンデマンドテクニカル サポートの作成 (Create On-demand Tech Support)] を選択します。
- [オンデマンドテクニカル サポートの作成 (Create On-demand Tech Support)] ダイアログボックスが表示されます。
- ステップ 5** [オンデマンドテクニカル サポートの作成 (Create On-demand Tech Support)] ダイアログボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- (注)
フィールドの説明については、[オンデマンドテクニカル サポートの作成 (Create On-demand Tech Support)] ダイアログボックスのヘルプアイコンをクリックします。ヘルプファイルが開いてプロパティの説明ページが表示されます。
- ステップ 6** [送信 (Submit)] をクリックし、テクニカル サポート ファイルを送信します。
- (注)
オンデマンドのテクニカルサポート ファイルは別の APIC に保存し、ストレージと CPU 条件のバランスを取ることができます。場所を確認するには、[ナビゲーション (Navigation)] ペインでオンデマンドのテクニカル サポート ポリシーをクリックし、[作業 (Work)] ペインで [操作 (OPERATIONAL)] タブをクリックします。コントローラが [EXPORT LOCATION] フィールドに表示されます。
- ステップ 7** ポリシー名を右クリックし、[Collect Tech Support] を選択します。
- ステップ 8** [Yes] を選択して、テクニカル サポート情報の収集を開始します。
-

概要

このトピックでは、次の情報を提供します。

- Cisco APIC の設定のインポートとエクスポートを使用して、設定の状態を最新の既知の良好な状態に回復する方法

- Cisco APIC の設定ファイルのセキュア プロパティを暗号化する方法

ユーザ設定のスケジュール バックアップとオンデマンド バックアップの両方を行うことができます。設定の状態を回復すると（「ロールバック」とも呼ばれます）、以前良好であった既知の状態に戻ることができます。そのためのオプションは、アトミック置換と呼ばれます。設定インポート ポリシー（configImportP）は、アトミック + 置換（importMode=atomic、importType=replace）をサポートします。これらの値に設定すると、インポートされる設定が既存の設定を上書きし、インポートされるファイルに存在しない既存の設定があれば削除されます。定期的に設定のバックアップとエクスポートを行うか、既知の良好な設定のエクスポートを明示的にトリガーすれば、後で以下の CLI、REST API、および GUI 用の手順を使用してこの設定を復元できます。

Cisco APIC を使用した設定状態の回復に関する詳細な概念情報については、『Cisco Application Centric Infrastructure Fundamentals Guide』を参照してください。

次の項では、設定ファイルのセキュア プロパティの暗号化に関する概念情報を提供します。

設定ファイルの暗号化

リリース 1.1(2)以降では、AES-256 暗号化を有効にすることにより APIC 設定ファイルのセキュア プロパティを暗号化できます。AES 暗号化はグローバル設定オプションです。すべてのセキュア プロパティは AES 構成設定に従っています。テナント設定などの ACI ファブリック設定のサブセットを AES 暗号化を使用してエクスポートするが、ファブリック設定の残りの部分は暗号化しないということはありません。セキュア プロパティのリストについては、『Cisco Application Centric Infrastructure Fundamentals』の「Appendix K: Secure Properties」を参照してください。

APIC は、16 ～ 32 文字のパスフレーズを使用して AES-256 キーを生成します。APIC GUI には、AES パスフレーズのハッシュが表示されます。このハッシュを使用して、2つの ACI ファブリックで同じパスフレーズが使用されているかどうかを確認できます。このハッシュをクライアント コンピュータにコピーして、別の ACI ファブリックのパスフレーズ ハッシュと比較できます。これにより、それらのハッシュが同じパスフレーズを使用して生成されたかどうかを確認できます。ハッシュを使用して、元のパスフレーズまたは AES-256 キーを再構築することはできません。

暗号化された設定ファイルを使用する際は、次のガイドラインに従ってください。

- AES 暗号化設定オプションを使用しているファブリックに古い ACI 設定をインポートするための後方互換性がサポートされています。



(注) 逆の互換性はサポートされていません。AES 暗号化が有効になっている ACI ファブリックからエクスポートされた設定を古いバージョンの APIC ソフトウェアにインポートすることはできません。

- ファブリック バックアップ設定のエクスポートを実行するときは、必ず AES 暗号化を有効にします。これにより、ファブリックを復元するときに、設定のすべてのセキュアプロパティが正常にインポートされるようになります。



(注) AES暗号化を有効にせずにファブリックバックアップ設定がエクスポートされると、どのセキュアプロパティもエクスポートに含まれません。そのような暗号化されていないバックアップにはセキュアプロパティは何も含まれていないため、そのようなファイルをインポートしてシステムを復元すると、ファブリックの管理者およびすべてのユーザがシステムからロックアウトされてしまう可能性があります。

- 暗号化キーを生成する AES パスフレーズは、ACI 管理者やその他のユーザが復元したり読み取ったりすることはできません。AES パスフレーズは保存されません。APIC は AES パスフレーズを使用して AES キーを生成した後、そのパスフレーズを廃棄します。AES キーはエクスポートされません。AES キーは、エクスポートされず、REST API を使用して取得できないため、復元できません。
- 同じ AES-256 パスフレーズは、常に同じ AES-256 キーを生成します。設定のエクスポートファイルは、同じ AES パスフレーズを使用する他の ACI ファブリックにインポートできます。
- トラブルシューティングを目的として、セキュアプロパティの暗号化データが含まれていない設定ファイルをエクスポートします。設定のエクスポートを実行する前に一時的に暗号化をオフにすると、エクスポートされた設定からすべてのセキュアプロパティ値が削除されます。すべてのセキュアプロパティが削除されたそのような設定ファイルをインポートするには、インポート マージモードを使用します。インポート置換モードは使用しません。インポート マージモードを使用すると、ACI ファブリック内の既存セキュアプロパティが保持されます。
- デフォルトで、APIC は復号できないフィールドが含まれているファイルの設定のインポートを拒否します。この設定をオフにするときは注意してください。このデフォルト設定がオフになっているときに設定のインポートが適切に実行されないと、ファブリックの AES 暗号化設定に一致しない設定ファイルのインポート時に ACI ファブリックのすべてのパスワードが削除される可能性があります。



(注) このガイドラインに従わないと、ファブリック管理者を含むすべてのユーザがシステムからロックアウトされる可能性があります。

GUI を使用したリモート ロケーションの設定

この手順では、APIC GUI を使用してリモート ロケーションを作成する方法について説明します。

手順

-
- ステップ1 メニューバーで、[ADMIN] > [Import/Export] の順に選択します。
 - ステップ2 ナビゲーション ペインで、[Remote Locations] を右クリックして [Create Remote Location] を選択します。
[Create Remote Location] ダイアログが表示されます。
 - ステップ3 [Create Remote Location] ダイアログのフィールドに適切な値を入力します。
(注)
フィールドの説明については、[i] アイコンをクリックするとヘルプファイルが表示されます。
 - ステップ4 [Create Remote Location] ダイアログのフィールドに値を入力したら、[Submit] をクリックします。
これで、データをバックアップするためのリモート ロケーションが作成されました。
-

GUI を使用したエクスポート ポリシーの設定

この手順では、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) を使用してエクスポートポリシーを設定する方法について説明します。次の手順を使用して、データのバックアップをトリガーします。



-
- (注) スケジューラ ポリシーで設定されている **[最大同時ノード数 (Maximum Concurrent Nodes)]** の値によって、スケジューラ ポリシーで指定された時間に動作する設定エクスポートポリシーの数が決まります。

たとえば、スケジューラ ポリシーで **[最大同時ノード数 (Maximum Concurrent Nodes)]** が 1 に設定され、同じスケジューラ ポリシーを使用する 2 つのエクスポートポリシーが設定されている場合、1 つのエクスポートポリシーは成功し、もう 1 つは失敗します。ただし、**[最大同時ノード数 (Maximum Concurrent Nodes)]** を 2 に設定すると、両方の設定が成功します。

ユーザが読み取り専用権限でログインしている場合でも、**[オンデマンドテクニカルサポート (On-Demand Tech Support)]** ポリシーまたは **[設定のエクスポート (Configuration Export)]** ポリシーを右クリックして **[トリガー (Trigger)]** を選択すると、テクニカルサポートデータをエクスポートできます。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[管理 (Admin)] > [インポート/エクスポート (Import/Export)] の順に選択します。

ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシーのインポート (Import Policies)] を右クリックして、[設定のインポートポリシーの作成 (Create Configuration Import Policy)] を選択します。

[Create Configuration Export Policy] ダイアログが表示されます。

ステップ 3 [Create Configuration Export Policy] ダイアログのフィールドに適切な値を入力します。

フィールドの説明については、ヘルプ (?) アイコンをクリックするとヘルプファイルが表示されます。

ステップ 4 [設定インポートポリシーの作成 (Create Configuration Import Policy)] ダイアログのフィールドに値を入力したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

これで、バックアップが作成されました。これは [設定 (Configuration)] タブで確認できます。バックアップファイルが右側の [設定 (Configuration)] ペインに表示されます。

(注)

Cisco Network Assurance Engine (NAE) を展開して必要な設定を行った場合も、一定間隔でデータを収集するための Cisco APIC のエクスポートポリシーが Cisco APIC に作成されます。Cisco NAE エクスポートポリシーは、アシュアランスコントロール設定に基づく名前で識別できません。Cisco APIC で Cisco NAE エクスポートポリシーを削除すると、Cisco NAE エクスポートポリシーが Cisco APIC に再表示されます。Cisco NAE エクスポートポリシーを削除しないことをお勧めします。

ステップ 5 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシーのエクスポート (Export Policies)] > [設定 (Configuration)] > [policy_name] の順に選択します。

ステップ 6 [作業 (Work)] ペインで、[操作 (Operational)] > [ジョブステータス (Job Status)] タブをクリックします。

この画面では、ジョブのエクスポートに関する情報を含むテーブルを表示できます。ジョブのエクスポートをトリガーしなかった場合、テーブルは空になります。[状態 (State)] カラムは、ジョブのエクスポートステータスを示します。設定可能な値は次のとおりです。

- success : ジョブが成功しました。
- failed : ジョブが失敗しました。
- success-with-warnings : ジョブは成功しましたが、いくつかの問題がありました。

[詳細 (Details)] カラムは、整合性検証が成功したか失敗したかを示します。

バックアップを作成した場合、Cisco APIC は作成されたバックアップファイルの [操作 (Operational)] ビューに表示されるファイルを作成します。そのデータをインポートする場合は、インポート ポリシーを作成する必要があります。

GUI を使用したインポート ポリシーの設定

この手順では、APIC GUI を使用してインポート ポリシーを設定する方法について説明します。バックアップデータをインポートするには、次の手順に従います。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[ADMIN] > [Import/Export] の順に選択します。
- ステップ 2 ナビゲーション ペインで、[Import Policies] を右クリックして [Create Configuration Import Policy] を選択します。
[Create Configuration Import Policy] ダイアログが表示されます。
- ステップ 3 [Create Configuration Import Policy] ダイアログのフィールドに適切な値を入力します。
(注)
フィールドの説明については、[i] アイコンをクリックするとヘルプファイルが表示されます。[Replace]、[Merge]、[Best Effort]、[Atomic] などのインポート タイプやモードの詳細については、『Cisco Application Centric Infrastructure Fundamentals Guide』を参照してください。
- ステップ 4 [Create Configuration Import Policy] ダイアログのフィールドに値を入力したら、[Submit] をクリックします。
(注)
ファブリックのクリーンリロードを実行し、以前に保存した設定をインポートすると、タイムゾーンはデフォルトで UTC に変更されます。このような状況では、APIC クラスタの設定のインポート後に、タイムゾーンをローカル タイムゾーンにリセットします。

GUI を使用した設定ファイルの暗号化

AES-256 暗号化はグローバル設定オプションです。有効にすると、すべてのセキュア プロパティは AES の構成設定に準拠します。特定の targetDn を持つ設定エクスポートを使用して、ACI ファブリック設定の一部をエクスポートできます。ただし、REST API を使用して、セキュア プロパティと AES 暗号化を含むテナント設定などの ACI ファブリック部分のみをエクスポートすることはできません。REST API 要求時にはセキュア プロパティは含まれません。

この項では、AES-256 暗号化を有効にする方法について説明します。

手順

- ステップ 1** メニュー バーで、[ADMIN]>[AAA] を選択します。
- ステップ 2** ナビゲーション ペインで、[AES Encryption Passphrase and Keys for Config Export (and Import)] をクリックします。
右側のペインに、[Global AES Encryption Settings for all Configurations Import and Export] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 3** パスフレーズを作成します（16 ～ 32 文字の長さ）。使用される文字のタイプに制限はありません。
- ステップ 4** [Submit] をクリックします。

(注)

パスフレーズを作成して送信すると、バックエンドでキーが生成され、パスフレーズを復元することはできません。したがって、パスフレーズは、キーを自動的に生成した後で削除されるため、誰にも表示されません。バックアップは、パスフレーズを知っている場合にのみ動作します（他のユーザは誰も開くことはできません）。

[Key Configured] フィールドには [yes] と表示されます。[Encrypted Passphrase] フィールドには暗号化されたハッシュ（実際のパスフレーズではなく、そのハッシュでしかありません）が表示されます。

- ステップ 5** パスフレーズを設定および確認したら、[Enable Encryption] の横にあるチェックボックスをオンにして AES 暗号化機能を有効にします（オンにします）。

これで、エクスポートおよびインポート ポリシーの [Global AES Encryption Settings] フィールドはデフォルトで有効になります。

(注)

- インポートおよびエクスポート ポリシーで [Fail Import if secure fields cannot be decrypted] チェックボックスがオンになっていることを確認します（デフォルトではオンになっています）。設定をインポートするときにこのチェックボックスをオフにしないことを強くお勧めします。このチェックボックスをオフにすると、システムがすべてのフィールドをインポートしようとしても、暗号化できないフィールドはブランクまたは欠落となります。その結果、管理者のパスワードがブランクまたは欠落となると、システムからロックアウトされる可能性があります（システムからロックアウトされた場合は、『Cisco APIC Troubleshooting Guide』を参照してください）。このチェックボックスをオフにすると、警告メッセージが表示されます。このボックスをオンにすると、ロックアウトを予防するためのセキュリティ チェックが行われ、その設定はインポートされません。
- [Enable Encryption] チェックボックスが選択されていない（オフ）場合は、暗号化が無効になり、エクスポートされるすべての設定（エクスポート）でセキュアフィールド（パスワードや証明書など）が欠落します。このチェックボックスを選択する（オン）と、暗号化が有効になり、すべてのエクスポートでセキュアフィールドが表示されます。
- 暗号化を有効にした後は、新しいインポートまたはエクスポート ポリシーの作成時にパスフレーズを設定することはできません。前に設定したパスフレーズは、このボックス内のすべての設定およびすべてのテナントにわたってグローバルになっています。このタブか

ら設定をエクスポートすると（パスフレーズが設定され、暗号化は有効）、完全なバックアップファイルが得られます。暗号化が有効になっていない場合、セキュアプロパティが削除されたバックアップファイルが得られます。これらのバックアップファイルは、TAC サポート エンジニア向けにエクスポートする場合に役立ちます（たとえば、すべてのセキュアフィールドが欠落しているため）。これは、設定内のすべてのセキュアプロパティに該当します。また、暗号化キーをクリアするクリア オプションもあります。

次の表で、設定インポートの動作と関連する結果のリストに注意してください。

設定インポートの動作シナリオ	結果
以前のリリースからの古い設定	古いリリースの設定のインポートは完全にサポートされ、古い設定に保存されているすべてのセキュアフィールドが正常にインポートされます。
AES 暗号化が設定されていないときの設定インポート	セキュアフィールドがない設定のインポートである場合は、前に説明した動作で正常に行われます。インポートされる設定にセキュアフィールドがある場合は、拒否されます。
AES パスフレーズが一致しないときの設定インポート	セキュアフィールドがない設定のインポートである場合は、前に説明した動作で正常に行われます。インポートされる設定にセキュアフィールドがある場合は、拒否されます。
AES パスフレーズが一致するときの設定インポート	正常にインポートされます。
コピー/ペーストされたフィールドで AES パスフレーズが一致しないときの設定インポート	この特殊なケースは、別のパスフレーズを使用してエクスポートされた他の設定からセキュアフィールドをコピー/ペーストした場合に発生します。最初のパスでインポートされるバックアップファイルを解析しているときに、正しく復号できないプロパティがあった場合、インポートはどのシャードもインポートせずに失敗します。したがって、あるシャードですべてのプロパティを復号することができない場合、すべてのシャードが拒否されます。

コントローラ コンフィギュレーションのバックアップ、復元、およびロールバック

ここでは、コントローラ コンフィギュレーションのバックアップ（スナップショットの作成）、復元、およびロールバックのための一連の機能について説明します。

設定ファイルのバックアップ、復元、およびロールバックのワークフロー

この項では、設定ファイルのバックアップ、復元、およびロールバックのワークフローについて説明します。本書で説明されている機能はすべて同じワークフローパターンに従います。対応するポリシーを設定すると、ジョブをトリガーするために **adminSt** を **triggered** に設定する必要があります。

ジョブがトリガーされると、**configJobCont** タイプのコンテナ オブジェクトで **configJob** タイプのオブジェクト（実行を表す）が作成されます（**Naming** プロパティの値はポリシー DN に設定されます）。コンテナの **lastJobName** フィールドを使用して、そのポリシーに対してトリガーされた最後のジョブを確認することができます。



(注) 同時に最大 5 つの **configJob** オブジェクトが単一ジョブ コンテナに保持され、それぞれの新規ジョブがトリガーされます。そのために、最も古いジョブは削除されます。

configJob オブジェクトには、次の情報が含まれています。

- 実行時間
- 処理または生成されるファイルの名前
- 以下のステータス：
 - Pending
 - Running
 - 失敗 (Failed)
 - Fail-no-data
 - Success
 - Success-with-warnings
- 詳細の文字列（障害メッセージと警告）
- 進捗率 = $100 * \text{lastStepIndex} / \text{totalStepCount}$

- 最後に行われた内容を示す lastStepDescr フィールド

fileRemotePath オブジェクトについて

fileRemotePath オブジェクトは、以下のリモート ロケーションパスのパラメータを保持しています。

- ホスト名または IP
- ポート
- プロトコル : FTP、SCP など
- リモート ディレクトリ (ファイルパスではない)
- ユーザー名
- パスワード



(注) パスワードは、変更するたびに再送信する必要があります。

設定例

以下に設定サンプルを示します。

fabricInst (uni/fabric) の下に、次のように入力します。

```
<fileRemotePath name="path-name" host="host name or ip" protocol="scp"
remotePath="path/to/some/folder" userName="user-name" userpasswd="password" />
```

コントローラへの設定のエクスポート

設定のエクスポートでは、クラスタ内の 32 個のシャードすべてからユーザ設定可能な管理対象オブジェクト (MO) のツリーを抽出して別々のファイルに書き込み、tar gzip に圧縮します。次に、tar gzip を、事前設定されているリモート ロケーション (**fileRemotePath** オブジェクトを指す **configRsRemotePath** を使用して設定) にアップロードするか、またはコントローラ上のスナップショットとして保存します。



(注) 詳細については、「スナップショット」の項を参照してください。

configExportP ポリシーは次のように設定されます。

- **name** : ポリシー名

- **format** : エクスポートされたアーカイブ内にデータを保存する形式 (xml または json)
- **targetDn** : エクスポートする特定のオブジェクトのドメイン名 (DN) (空はすべてを意味します)
- **snapshot** : true に設定されている場合、ファイルはコントローラ上に保存され、リモートロケーションの設定は不要です。
- **includeSecureFields** : デフォルトで true に設定され、暗号化されたフィールド (パスワードなど) をエクスポートのアーカイブに含めるかどうかを示します。



- (注) このスナップショットに関する情報を保持する **configSnapshot** オブジェクトが作成されます (「スナップショット」の項を参照)。

エクスポートのスケジューリング

エクスポートポリシーは、事前設定されたスケジュールに基づいて自動的にエクスポートをトリガーするスケジューラーにリンクできます。これは、ポリシーから **trigSchedP** オブジェクトへの **configRsExportScheduler** 関係によって行われます (後の「設定例」の項を参照)。



- (注) スケジューラーはオプションです。ポリシーは、**adminSt** を **triggered** に設定することにより、いつでもトリガーできます。

トラブルシューティング

生成されたアーカイブをリモートロケーションにアップロードできないことを示すエラーメッセージが表示された場合は、接続の問題に関する項を参照してください。

NX-OS スタイルの CLI を使用した設定例

以下に、NX-OS スタイルの CLI を使用した設定例を示します。

```

apicl(config)# snapshot
download Configuration snapshot download setup mode
export Configuration export setup mode
import Configuration import setup mode
rollback Configuration rollback setup mode
upload Configuration snapshot upload setup mode
apicl(config)# snapshot export policy-name
apicl(config-export)#
format Snapshot format: xml or json
no Negate a command or set its defaults
remote Set the remote path configuration will get exported to
schedule Schedule snapshot export
target Snapshot target

bash bash shell for unix commands
end Exit to the exec mode
exit Exit from current mode

```

```

fabric      show fabric related information
show        Show running system information
where       show the current mode
apic1(config-export)# format xml
apic1(config-export)# no remote path           [If no remote path is specified, the file
is exported locally to a folder in the controller]
apic1(config-export)# target                   [Assigns the target of the export, which
can be fabric, infra, a specific tenant, or none. If no target is specified, all
configuration information is exported.]
WORD infra, fabric or tenant-x
apic1(config-export)#
apic1# trigger snapshot export policy-name     [Executes the snapshot export task]
apic1# ls /data2                               [If no remote path is specified, the
configuration export file is saved locally to the controller under the folder data2]
ce_Dailybackup.tgz

```

GUI を使用した設定例

以下に、GUI を使用した設定例を示します。

1. メニューバーで、[Admin] タブをクリックします。
2. [インポート/エクスポート (IMPORT / EXPORT)] を選択します。
3. [ポリシーのエクスポート (Export Policies)] の下で、[設定 (Configuration)] を選択します。
4. [Configuration] の下で、ロールバック先の設定をクリックします。たとえば、デフォルトである [defaultOneTime] をクリックできます。
5. [形式 (Format)] の横で、JSON 形式または XML 形式のいずれかに対するボタンを選択します。
6. [今すぐ開始 (Start Now)] の横で、[いいえ (No)] または [はい (Yes)] のボタンを選択し、今すぐトリガーするかスケジュールに基づいてトリガーするかを示します最も簡単な方法は、ただちにトリガーすることを選択することです。
7. [Target DN] フィールドに、エクスポートするテナント設定の名前を入力します。
8. 設定をコントローラ自体に保存する場合は、[Snapshot] オプションをオンにします。リモート ロケーションを設定する場合は、このオプションをオフにします。
9. [Scheduler] フィールドでは、オプションで、設定をエクスポートする時間と方法を指示するスケジューラを作成できます。
10. [暗号化 (Encryption)] フィールドでは、設定ファイルの暗号化を有効または無効にするオプションがあります。
11. 設定が完了したら、[Start Now] をクリックします。
12. [送信 (SUBMIT)] をクリックして、設定のエクスポートをトリガーします。

REST API を使用した設定例

以下に、REST API を使用した設定例を示します。

```
<configExportP name="policy-name" format="xml" targetDn="/some/dn or empty which means
everything"
snapshot="false" adminSt="triggered">
<configRsRemotePath tnFileRemotePathName="some remote path name" />
<configRsExportScheduler tnTrigSchedPName="some scheduler name" />
</configExportP>
```



- (注) リモートロケーションを指定するときに、スナップショットを `True` に設定すると、バックアップはリモートパスを無視し、ファイルをコントローラに保存します。

コントローラへの設定のインポート

設定のインポートでは、指定されている以前にエクスポートされたアーカイブのダウンロード、抽出、解析、分析、および適用を、一度に1つのシャードずつ行います (`infra`、`fabric`、`tn-common`、その他すべて、の順)。`fileRemotePath` 設定は、エクスポートの場合と同様に実行されます (`configRsRemotePath` を使用)。スナップショットのインポートもサポートされます。

configImportP ポリシーは次のように設定されます。

- **name** : ポリシー名
- **fileName** : インポートするアーカイブファイルの名前 (パスファイルではない)
- **importMode**
 - ベストエフォートモード : 各 MO は個々に適用され、エラーがあっても無効な MO がスキップされるだけです。



- (注) オブジェクトがコントローラに存在しない場合、そのオブジェクトの子は設定されません。ベストエフォートモードでは、オブジェクトの子を設定しようとします。

- **atomicMode** : 設定はシャード全体で適用されます。1つのエラーがあると、シャード全体が元の状態にロールバックされます。
- **importType**
 - **replace** : 現在のシステム設定は、インポートされる内容またはアーカイブで置換されます (アトミックモードのみをサポート)
 - **merge** : 何も削除されず、アーカイブの内容が既存のシステム設定上に適用されます。
- **snapshot** : `true` の場合、ファイルはコントローラから取得され、リモートロケーションの設定は不要です。
- **failOnDecryptErrors** : (デフォルトで `true`) 現在システムに設定されているキーとは異なるキーでアーカイブが暗号化されている場合、ファイルはインポートされません。

トラブルシューティング

以下のシナリオでは、トラブルシューティングが必要な可能性があります。

- 生成されたアーカイブをリモートロケーションからダウンロードできなかった場合は、接続の問題に関する項を参照してください。
- インポートは正常に終了したが警告が表示された場合は、詳細を確認してください。
- ファイルを解析できなかった場合は、以下のシナリオを参照してください。
 - ファイルが有効なXMLまたはJSONファイルでない場合は、エクスポートされたアーカイブから取得したファイルが手動で変更されたかどうかを確認してください。
 - オブジェクトプロパティに未知のプロパティまたはプロパティ値がある場合は、以下の原因が考えられます。
 - プロパティが削除されたか、または未知のプロパティ値が手動で入力された
 - モデルタイプの範囲が変更された（後方互換性がないモデル変更）
 - 名前付けプロパティリストが変更された
- MOを設定できなかった場合は、以下に注意してください。
 - ベストエフォートモードでは、エラーをログに記録し、そのMOをスキップします
 - アトミックモードでは、エラーをログに記録し、シャードをスキップします

NX-OS スタイルの CLI を使用した設定例

以下に、NX-OS スタイルの CLI を使用した設定例を示します。

```

apicl# configure
apicl(config)# snapshot
  download Configuration snapshot download setup mode
export Configuration export setup mode
import Configuration import setup mode
rollback Configuration rollback setup mode
upload Configuration snapshot upload setup mode
apicl(config)# snapshot import
  WORD Import configuration name
default
rest-user
apicl(config)# snapshot import policy-name
apicl(config-import)#
  action Snapshot import action merge|replace
file Snapshot file name
mode Snapshot import mode atomic|best-effort
no Negate a command or set its defaults
remote Set the remote path configuration will get imported from

bash bash shell for unix commands
end Exit to the exec mode
exit Exit from current mode
fabric show fabric related information
show Show running system information

```

```

where show the current mode
apic1(config-import)# file < from "show snapshot files" >
apic1(config-import)# no remote path
apic1(config-import)#
apic1# trigger snapshot import policy-name [Executes the snapshot import task]

```

GUI を使用した設定例

以下に、GUI を使用した設定例を示します。

1. メニュー バーで、[ADMIN] タブをクリックします。
2. [IMPORT/EXPORT] を選択します。
3. [Import Policies] の下で、[Configuration] を選択します。
4. [Configuration] の下で、[Create Configuration Import Policy] を選択します。[CREATE CONFIGURATION IMPORT POLICY] ウィンドウが表示されます。
5. [Name] フィールドでは、ファイル名は、バックアップされたファイル名と一致する必要があり、かなり固有の形式です。ファイル名は、バックアップを行った担当者が知っています。
6. 次の 2 つのオプションは、設定の状態の回復に関連しています（「ロールバック」とも呼ばれる）。これらのオプションは、[Input Type] と [Input Mode] です。設定の状態を回復する場合、以前良好であった既知の状態にロールバックします。そのためのオプションは [Atomic Replace] です。
7. 設定をコントローラ自体に保存する場合は、[Snapshot] オプションをオンにします。リモート ロケーションを設定する場合は、このオプションをオフにします。
8. [Import Source] フィールドで、作成済みのリモート ロケーションと同じ値を指定します。
9. [Encryption] フィールドでは、オプションで、設定ファイルの暗号化を有効または無効にすることができます。
10. [SUBMIT] をクリックして、設定のインポートをトリガーします。

REST API を使用した設定例

以下に、REST API を使用した設定例を示します。

```

<configImportP name="policy-name" fileName="someexportfile.tgz" importMode="atomic"
importType="replace" snapshot="false" adminSt="triggered">
<configRsRemotePath tnFileRemotePathName="some remote path name" />
</configImportP>

```

スナップショット

スナップショットは設定のバックアップのアーカイブであり、コントローラで管理されているフォルダに保存（および複製）されます。スナップショットを作成するには、**snapshot** プロパティを **true** に設定してエクスポートを実行します。この場合、リモートパスの設定は不要で

す。スナップショットをユーザに公開するために、**configSnapshot** タイプのオブジェクトが作成されます。

有効になっている場合、繰り返しスナップショットは **[管理 (Admin)] > [インポート/エクスポート (Import/Export)] > [ポリシーのエクスポート (Export Policies)] > [設定 (Configuration)] > [defaultAuto]** に保存できます

configSnapshot オブジェクトは以下を提供します。

- ファイル名
- ファイル サイズ
- 作成日
- 何のスナップショットであるかを示すルート DN (ファブリック、インフラ、特定のテナントなど)
- スナップショットを削除する機能 (retire フィールドを true に設定)

スナップショットをインポートするには、最初にインポートポリシーを作成します。 **[管理 (Admin)] > [インポート/エクスポート (Import/Export)]** に移動し、 **[ポリシーのインポート (Import Policies)]** をクリックします。右クリックし、 **[設定のインポートポリシーの作成]** を選択して、インポートポリシーの属性を設定します。

スナップショット マネージャ ポリシー

configSnapshotManagerP ポリシーを使用すると、リモートで保存したエクスポートアーカイブのスナップショットを作成することができます。ポリシーにリモートパスを付加し、ファイル名 (configImportP と同じ) を指定し、モードをダウンロードに設定し、トリガーすることができます。マネージャは、ファイルをダウンロードし、そのファイルを分析してアーカイブが有効であることを確認し、そのファイルをコントローラに保存し、対応する configSnapshot オブジェクトを作成します。

繰り返しスナップショットを作成することもできます。



(注) 有効になっている場合、繰り返しスナップショットは **Admin > Import/Export > Export Policies > Configuration > defaultAuto** で保存されます。

スナップショット マネージャを使用すると、リモートロケーションにスナップショットアーカイブをアップロードすることもできます。この場合、モードをアップロードに設定する必要があります。

トラブルシューティング

トラブルシューティングについては、接続の問題に関する項を参照してください。

NX-OS CLI を使用した、コントローラからリモートパスへのスナップショットのアップロード

```
apicl(config)# snapshot upload policy-name
apicl(config-upload)#
  file      Snapshot file name
no         Negate a command or set its defaults
remote     Set the remote path configuration will get uploaded to

bash      bash shell for unix commands
end       Exit to the exec mode
exit      Exit from current mode
fabric    show fabric related information
show      Show running system information
where     show the current mode
apicl(config-upload)# file <file name from "show snapshot files">
apicl(config-upload)# remote path remote-path-name
apicl# trigger snapshot upload policy-name      [Executes the snapshot upload task]
```

NX-OS CLI を使用した、コントローラからリモートパスへのスナップショットのダウンロード

```
apicl(config)# snapshot download policy-name
apicl(config-download)#
  file      Snapshot file name
no         Negate a command or set its defaults
remote     Set the remote path configuration will get downloaded from

bash      bash shell for unix commands
end       Exit to the exec mode
exit      Exit from current mode
fabric    show fabric related information
show      Show running system information
where     show the current mode
apicl(config-download)# file < file from remote path>
apicl(config-download)# remote path remote-path-name
apicl# trigger snapshot download policy-name    [Executes the snapshot download task]
```

GUI を使用したスナップショットのアップロードとダウンロード

スナップショット ファイルをリモート ロケーションにアップロードするには、次の手順に従います。

1. [Config Rollbacks] ペインにリストされているスナップショットを右クリックし、[Upload to Remote Location option] を選択します。[Upload snapshot to remote location] ボックスが表示されます。
2. [Submit] をクリックします。

リモート ロケーションからスナップショット ファイルをダウンロードするには、次の手順に従います。

1. 画面の右上にあるインポート アイコンをクリックします。[Import remotely stored export archive to snapshot] ボックスが表示されます。
2. [File Name] フィールドにファイル名を入力します。
3. [Import Source] プルダウンからリモート ロケーションを選択するか、または [Or create a new one] の横にあるボックスをオンにして新しいリモート ロケーションを作成します。
4. [Submit] をクリックします。

REST API を使用したスナップショットのアップロードとダウンロード

```
<configSnapshotManagerP name="policy-name" fileName="someexportfile.tgz"
mode="upload|download" adminSt="triggered">
<configRsRemotePath tnFileRemotePathName="some remote path name" />
</configSnapshotManagerP>
```

ロールバック

configRollbackP ポリシーを使用すると、2つのスナップショットの間で行われた変更を元に戻して、以前に保存したスナップショットに対する設定変更を効果的にロールバックすることができます。ポリシーがトリガーされると、次のようにオブジェクトが処理されます。

- 削除された MO を再作成します
- 作成された MO を削除します
- 変更された MO を元に戻します



- (注)
- ロールバック機能はスナップショットに対してのみ動作します。
 - リモートアーカイブは直接的にはサポートされていません。ただし、スナップショットマネージャポリシー (**configSnapshotMgrP**) を使用して、リモートで保存されたエクスポートをスナップショットにすることができます。詳細については、[スナップショットマネージャポリシー \(84 ページ\)](#) を参照してください。
 - **configRollbackP** ポリシーでは、リモートパス設定は不要です。リモートパスが指定されている場合は無視されます。

ロールバックのワークフロー

ポリシーの **snapshotOneDn** フィールドと **snapshotTwoDn** フィールドには、最初のスナップショット (S1) と次のスナップショット2 (S2) を設定する必要があります。トリガーされると、スナップショットが抽出および分析され、スナップショット間の違いが算出されて適用されます。

MO は次のように処理されます。

- S1 には存在するが S2 には存在しない MO：これらの MO は S2 の前に削除されました。ロールバックではこれらの MO が再作成されます。
- S2 には存在するが S1 には存在しない MO：これらの MO は S1 の後に作成されました。ロールバックでは、次の場合にこれらの MO が削除されます。
 - S2 の取得後に MO が変更されていない。
 - S2 の取得後に作成または変更された MO の子孫がない。

- S1 と S2 の両方に存在するがプロパティ値が異なる MO : S2 の取得後にプロパティが別の値に変更されている場合、プロパティはそのまま残ります。変更されていない場合は、ロールバックによってこれらのプロパティは S1 の値に戻ります。

ロールバック機能では、これらの計算の結果として生成された設定が含まれている diff ファイルも生成されます。この設定の適用は、ロールバック プロセスの最後のステップです。このファイルの内容は、readiff と呼ばれる特殊な REST API を使用して取得できます。

```
apichost/mqapi2/snapshots.readiff.xml?jobdn=SNAPSHOT_JOB_DN
```

ロールバックは予測が困難なため、ロールバックによる実際の変更が行われないプレビューモード (preview を true に設定) も利用できます。このモードでは算出と diff ファイルの生成のみが行われ、ロールバックを実際に行った場合の状況を正確にプレビューできます。

Diff ツール

2 つのスナップショット間の diff 機能を提供する別の特殊な REST API を使用できます。
apichost/mqapi2/snapshots.diff.xml?s1dn=SNAPSHOT_ONE_DN&s2dn=SNAPSHOT_TWO_DN

NX-OS スタイルの CLI を使用した設定例

この例では、NX-OS スタイルの CLI を使用してロールバックを設定および実行する方法を示します。

```
apicl# show snapshot files
File      : ce2_DailyAutoBackup-2015-11-21T01-00-17.tar.gz
Created   : 2015-11-21T01:00:21.167+00:00
Root      :
Size      : 22926

File      : ce2_DailyAutoBackup-2015-11-21T09-00-21.tar.gz
Created   : 2015-11-21T09:00:24.025+00:00
Root      :
Size      : 23588

apicl# configure
apicl(config)# snapshot rollback myRollbackPolicy
apicl(config-rollback)# first-file ce2_DailyAutoBackup-2015-11-21T01-00-17.tar.gz
apicl(config-rollback)# second-file ce2_DailyAutoBackup-2015-11-21T09-00-21.tar.gz
apicl(config-rollback)# preview
apicl(config-rollback)# end
apicl# trigger snapshot rollback myRollbackPolicy
```

GUI を使用した設定例

この例では、GUI を使用してロールバックを設定および実行する方法を示します。

1. メニューバーで、[Admin] タブをクリックします。
2. [Admin] タブにある [Config Rollbacks] をクリックします。
3. [Config Rollbacks] リスト (左側のペイン) で最初の設定ファイルを選択します。
4. [Configuration for selected snapshot] ペイン (右側のペイン) で 2 番目の設定ファイルを選択します。

5. [Compare with previous snapshot] ドロップダウンメニュー（右側のペインの下部）をクリックし、リストから 2 番目の設定ファイルを選択します。その後、2 つのスナップショット間の違いを比較できるように diff ファイルが生成されます。



(注) ファイルが生成された後、これらの変更を元に戻すことができます。

REST API を使用した設定例

この例では、REST API を使用してロールバックを設定および実行する方法を示します。

```
<configRollbackP name="policy-name" snapshotOneDn="dn/of/snapshot/one"
snapshotOneDn="dn/of/snapshot/two" preview="false" adminSt="triggered" />
```

Syslog の使用

Syslog について

稼働中、シスコアプリケーションセントリック インフラストラクチャ (ACI) システムでの障害またはイベントは、コンソール、ローカル ファイル、および別のシステム上のロギングサーバへのシステム ログ (syslog) の送信をトリガーできます。システム ログメッセージには、通常、障害またはイベントに関する情報のサブセットが含まれます。システム ログメッセージには、監査ログとセッションログのエントリを含めることもできます。



- (注) APIC およびファブリック ノードが生成できる syslog メッセージのリストについては、https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/switches/datacenter/apic/sw/1-x/syslog/guide/aci_syslog/ACI_SysMsg.html を参照してください。

多くのシステム ログメッセージは、ユーザが実行している処理、あるいはユーザが設定または管理しているオブジェクトに固有のものです。これらのメッセージには次のようなものがあります。

- 情報メッセージ。実行している処理のヘルプおよびヒントを提供します。
- 警告メッセージ。ユーザが設定または管理しているオブジェクト（ユーザ アカウントやサービス プロファイルなど）に関連するシステム エラーの情報を提供します。

システム ログメッセージを受信してモニタするためには、syslog 宛先（コンソール、ローカル ファイル、または syslog サーバを実行している 1 つ以上のリモート ホスト）を指定する必要があります。また、コンソールに表示されるか、ファイルまたはホストによってキャプチャされるメッセージのシビラティ（重大度）の最小値を指定できます。syslog メッセージを受信するローカル ファイルは /var/log/external/messages です。

Syslog 送信元は、オブジェクト モニタリング ポリシーを適用できる任意のオブジェクトにすることができます。送信されるメッセージのシビラティ（重大度）の最小値、syslog メッセージに含める項目、および syslog の宛先を指定できます。

Syslog の表示形式を NX-OS スタイル形式に変更できます。

これらのシステム メッセージを生成する障害またはイベントの詳細は、『*Cisco APIC Faults, Events, and System Messages Management Guide*』で説明しています。システム ログ メッセージのリストについては『*Cisco ACI System Messages Reference Guide*』を参照してください。



- (注) システム ログ メッセージは、必ずしもシステムに問題があることを示しているとは限りません。単に情報を通知するだけのメッセージもありますし、通信回線、内部ハードウェア、またはシステム ソフトウェアに関する問題点の診断に役立つメッセージもあります。

Syslog の宛先および宛先グループの作成

この手順では、ロギングおよび評価用の syslog データの宛先を設定します。syslog データは、コンソール、ローカル ファイル、または宛先グループ内の 1 つまたは複数の syslog サーバにエクスポートできます。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[Admin] をクリックします。
- ステップ 2 サブメニュー バーで、[External Data Collectors] をクリックします。
- ステップ 3 [Navigation] ペインで、[Monitoring Destinations] を展開します。
- ステップ 4 [Syslog] を右クリックし、[Create Syslog Monitoring Destination Group] を選択します。
- ステップ 5 [Create Syslog Monitoring Destination Group] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
 - a) グループおよびプロファイルの [Name] フィールドに、モニタリングの宛先グループおよびプロファイルの名前を入力します。
 - b) グループおよびプロファイルの [Format] フィールドで、Syslog メッセージの形式を選択します。

デフォルトは [aci]、または RFC 3164 準拠のメッセージ形式ですが、NX-OS スタイル形式に設定することもできます。
 - c) グループおよびプロファイルの [Admin State] ドロップダウン リストで、[enabled] を選択します。
 - d) ローカル ファイルへの syslog メッセージの送信を有効にするには、[Local File Destination] の [Admin State] ドロップダウン リストから [enabled] を選択し、[Local File Destination] の [Severity] ドロップダウン リストからシビラティ（重大度）の最小値を選択します。

syslog メッセージを受信するローカル ファイルは /var/log/external/messages です。

- e) コンソールへの syslog メッセージの送信を有効にするには、[Console Destination] の [Admin State] ドロップダウン リストから [enabled] を選択し、[Console Destination] の [Severity] ドロップダウン リストからシビラティ（重大度）の最小値を選択します。
- f) [Next] をクリックします。
- g) [Create Remote Destinations] 領域で、[+] をクリックしてリモート宛先を追加します。

注意

指定した DNS サーバがインバンド接続を介して到達可能に設定されている場合、リモート syslog 宛先のホスト名解決に失敗するリスクがあります。この問題を回避するには、IP アドレスを使用して syslog サーバを設定します。ホスト名を使用する場合は、アウトオブバンドインターフェイス経由で DNS サーバに到達できることを確認します。

ステップ 6 [Create Syslog Remote Destination] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) [Host] フィールドに、送信先ホストの IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名を入力します。
- b) (任意) [Name] フィールドに、宛先ホストの名前を入力します。
- c) [Admin State] フィールドで、[enabled] オプション ボタンをクリックします。
- d) (任意) 最小シビラティ（重大度）、[シビラティ（重大度）（Severity）]、[ポート（Port）] 番号、および syslog [ファシリティ（Facility）] を選択します。

[ファシリティ（Facility）] は、メッセージを生成したプロセスを示すためにオプションで使用できる番号で、受信側でのメッセージの処理方法を決定するために使用できます。

- e) 5.2 (3) 以降のリリースでは、[トランスポート（Transport）] フィールドで、メッセージに使用するトランスポートプロトコルを選択します。

- リリース 5.2(4) より前のリリースでは、メッセージに使用するトランスポートプロトコルとして **tcp** または **udp** を選択します。

- 5.2(4) リリース以降では、メッセージに使用するトランスポートプロトコルのオプションとして、**ssl** も選択できるようになりました。この機能を使用すると、（クライアントとして機能している）ACI スイッチが、ロギングにセキュアな接続をサポートする（サーバーとして機能している）リモート Syslog サーバーに対してセキュアな暗号化されたアウトバウンド接続を確立できるようになります。認証と暗号化により、この機能では、セキュリティ保護されていないネットワーク上でもセキュアな通信を実現できます。

メッセージに使用するトランスポートプロトコルとして **ssl** を選択した場合は、必要な SSL 証明書もアップロードする必要があります。[認証局の作成（Create Certificate Authority）] ウィンドウに移動して、必要な SSL 証明書をアップロードできます。

[管理（Admin）] > [AAA] > [セキュリティ（Security）] > [公開キー管理（Public Key Management）] > [認証局（Certificate Authorities）] を選択し、その後 [アクション（Actions）] > [認証局の作成（Create Certificate Authority）] を選択します。

トランスポートプロトコルのデフォルト オプションは **udp** です。

- f) [Management EPG] ドロップダウン リストから管理エンドポイントグループを選択します。

g) [OK] をクリックします。

ステップ 7 (任意) リモート宛先グループにリモート宛先を追加するには、もう一度[+]をクリックし、[Create Syslog Remote Destination] ダイアログボックスの手順を繰り返します。

ステップ 8 [完了 (Finish)] をクリックします。

Syslog 送信元の作成

Syslog 送信元は、オブジェクト モニタリング ポリシーを適用できる任意のオブジェクトにすることができます。

始める前に

syslog モニタリング宛先グループを作成します。

手順

ステップ 1 メニュー バーおよびナビゲーション フレームから、関心領域の [Monitoring Policies] メニューに移動します。

テナント、ファブリック、およびアクセスのモニタリング ポリシーを設定できます。

ステップ 2 [Monitoring Policies] を展開し、モニタリング ポリシーを選択して展開します。

[Fabric] > [Fabric Policies] > [Monitoring Policies] > [Common Policy] の下に、基本モニタリングポリシーがあります。このポリシーは、すべての障害とイベントに適用され、ファブリック内のすべてのノードとコントローラに自動的に導入されます。または、スコープが限定された既存のポリシーを指定することもできます。

ステップ 3 モニタリング ポリシーの下で、[Callhome/SNMP/Syslog] をクリックします。

ステップ 4 [Work] ペインで、[Source Type] ドロップダウン リストから [Syslog] を選択します。

ステップ 5 [Monitoring Object] リストから、モニタ対象の管理対象オブジェクトを選択します。

目的のオブジェクトがリストに表示されない場合は、次の手順に従います。

- [Monitoring Object] ドロップダウン リストの右側にある [Edit] アイコンをクリックします。
- [Select Monitoring Package] ドロップダウン リストから、オブジェクト クラス パッケージを選択します。
- モニタ対象の各オブジェクトのチェックボックスをオンにします。
- [Submit] をクリックします。

ステップ 6 テナントモニタリングポリシーでは、[All] ではなく特定のオブジェクトを選択すると、[Scope] 選択が表示されます。

[Scope] フィールドで、オプション ボタンを選択して、このオブジェクトに関して送信するシステム ログ メッセージを指定します。

- [all] : このオブジェクトに関連するすべてのイベントと障害を送信します。
- [specificevent] : このオブジェクトに関連する指定されたイベントのみを送信します。 [Event] ドロップダウンリストからイベントポリシーを選択します。
- [specific fault] : このオブジェクトに関連する指定された障害のみを送信します。 [Fault] ドロップダウンリストから障害ポリシーを選択します。

ステップ7 [+] をクリックして syslog 送信元を作成します。

ステップ8 [Create Syslog Source] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) [Name] フィールドに、syslog 送信元の名前を入力します。
- b) [Min Severity] ドロップダウンリストから、送信するシステムログメッセージのシビラティ（重大度）の最小値を選択します。
- c) [Include] フィールドで、送信するメッセージタイプのチェックボックスをオンにします。
- d) [Dest Group] ドロップダウンリストから、システムログメッセージの送信先の syslog 宛先グループを選択します。
- e) [Submit] をクリックします。

ステップ9 （任意） syslog 送信元を追加するには、もう一度 [+] をクリックし、[Create Syslog Source] ダイアログボックスの手順を繰り返します。

アトミックカウンタの使用

アトミックカウンタについて

アトミックカウンタは、フロー間のトラフィックに関する統計情報を収集できます。アトミックカウンタを使用すると、ファブリック内のドロップとルーティングミスを検出し、アプリケーション接続に関する問題の迅速なデバッグと分離が可能になります。たとえば、管理者はすべてのリーフスイッチでアトミックカウンタを有効にして、エンドポイント1からエンドポイント2のケットをトレースすることができます。送信元と宛先のリーフスイッチ以外のリーフスイッチにゼロ以外のカウンタがある場合、管理者はそれらのリーフにドリルダウンできます。

従来の設定では、ベアメタルNICから特定のIPアドレス（エンドポイント）または任意のIPアドレスへのトラフィックの量をモニタすることはほぼ不可能です。アトミックカウンタでは、データパスに干渉することなく、管理者がベアメタルエンドポイントから受信されたパケットの数を数えることができます。さらに、アトミックカウンタはエンドポイントまたはアプリケーショングループで送受信されるプロトコルごとのトラフィックをモニタリングできます。

リーフ間（TEP間）のアトミックカウンタは次を提供できます。

- 送信パケット、受信パケット、ドロップパケット、および超過パケットのカウンタ

- 送信パケット：送信数は、送信元 TEP（トンネル エンドポイント）から宛先 TEP に送信されたパケット数を表します。
 - 受信パケット：受信数は、宛先 TEP が送信元 TEP から受信したパケット数を表します。
 - ドロップパケット：ドロップ数は、伝送中にドロップされたパケット数を表します。この数値は、送信パケット量と受信パケット量の差です。
 - 超過パケット：超過数は、伝送中に受信された超過パケット数を表します。この数値は、転送の不一致または間違っ場所へのルーティングミスによって予期せず受信されたパケット量です。
- 最後の 30 秒などの短期間のデータ収集、5 分、15 分、またはそれ以上の長期間のデータ収集
 - スパイントラフィックごとの詳細（TEP、リーフ、または VPC の数が 64 未満の場合に使用可能）
 - 継続的なモニタリング



- (注) リーフ間（TEP間）アトミックカウンタは累積であり、クリアできません。ただし、30 秒のアトミックカウンタは 30 秒間隔でリセットされるため、断続的な問題や再発する問題の分離に使用できます。アトミックカウンタには、アクティブなファブリック ネットワーク タイム プロトコル（NTP）ポリシーが必要です。

テナントのアトミックカウンタは次を提供できます。

- 送信、受信、ドロップ、および超過パケットを含む、ファブリック全体のトラフィックのアプリケーション固有カウンタ
- モードは次を含みます。
 - EPtoEP（エンドポイント間）
 - EPGtoEPG（エンドポイントグループ間）



- (注) EPGtoEPG の場合、オプションには ipv4 のみ、ipv6 のみ、ipv4、ipv6 が含まれます。ipv6 オプションがある場合は必ず TCAM エントリを 2 回使用します。これは、スケール数が、純粋な ipv4 ポリシーの場合に予期される数より小さい可能性があることを意味します。

- EPGtoEP（エンドポイントグループ/エンドポイント間）
- EPtoAny（エンドポイント ツー エニー）

- AnytoEP (エニー ツー エンドポイント)
- EPtoIP (エンドポイント グループ/IP 間、外部 IP アドレスの場合にのみ使用)
- EPtoExternalIP (エンドポイント/外部 IP アドレス間)

5.2(3) リリース以降、エンドポイントセキュリティグループ (ESG) は、これらのモードで EPG の代替として使用できます。

アトミックカウンタに関する注意事項および制約事項

- アトミックカウンタの使用は、エンドポイントが異なるテナントまたは同じテナント内の異なるコンテキスト (VRF) にある場合はサポートされません。
- Cisco APIC リリース 3.1(2m) 以降では、ファブリックのライフタイム内のパスで統計情報が生成されなかった場合、そのパスに対するアトミックカウンタは生成されません。また、[トラフィックマップ (Traffic Map)] ([可視化 (Visualization)] タブにあるもので、[操作 (Operations)] > [可視化 (Visualization)] を Cisco APIC GUI で選択する) には、すべてのパスではなく、アクティブなパス、つまりファブリックの寿命のいずれかの時点で、トラフィックがあったパスだけが表示されます。
- IP アドレスが学習されない純粋なレイヤ 2 設定 (IP アドレスは 0.0.0.0) では、エンドポイント/EPG 間および EPG/エンドポイント間のアトミックカウンタポリシーはサポートされません。この場合、エンドポイント間および EPG 間のポリシーはサポートされます。外部ポリシーは学習された IP アドレスが必要な Virtual Routing and Forwarding (VRF) ベースであり、サポートされます。
- アトミックカウンタの送信元または宛先がエンドポイントである場合、そのエンドポイントはスタティックではなくダイナミックである必要があります。ダイナミックエンドポイント (fv:CEp) とは異なり、スタティックエンドポイント (fv:StCEp) にはアトミックカウンタに必要な子オブジェクト (fv:RsCEpToPathEp) がありません。
- 中継トポロジでは、リーフスイッチはすべてのスパインスイッチを使用したフルメッシュではなく、リーフ間 (TEP 間) のカウンタは予期どおりに動作しません。
- リーフ間 (TEP 間) アトミックカウンタの場合、トンネル数がハードウェア制限を上回ると、システムはモードをトルールモードからパスモードに変更し、ユーザにはスパインごとのトラフィックは表示されなくなります。
- アトミックカウンタはスパインプロキシトラフィックはカウントしません。
- ファブリックに入る前、またはリーフポートに転送される前にドロップされたパケット、アトミックカウンタによって無視されます。
- ハイパーバイザで切り替えられるパケット (同じポートグループとホスト) はカウントされません。
- アトミックカウンタには、アクティブなファブリックネットワーク タイム プロトコル (NTP) ポリシーが必要です。

- アトミックカウンタはIPv6の送信元と接続先で動作しますが、IPv4アドレスとIPv6アドレスを混在させて送信元IPアドレスと接続先IPアドレスを構成することはできません。
- 送信元または宛先としてfvCEpを使用して設定されたアトミックカウンタポリシーでは、fvCEp管理対象オブジェクトに存在するMACアドレスおよびIPアドレスからのトラフィックと、両者へのトラフィックだけがカウントされます。fvCEpの管理対象オブジェクトでIPアドレスフィールドが空の場合、そのMACアドレスとの間で送受信されるすべてのトラフィックがIPアドレスに関係なくカウントされます。Cisco APICがfvCEpについて複数のIPアドレスを学習している場合、前述のように、fvCEp管理対象オブジェクト自体にある1つのIPアドレスのみがカウントされます。特定のIPアドレスとの送受信に関連したアトミックカウンタポリシーを設定するには、送信元または宛先としてfvIp管理対象オブジェクトを使用します。
- fvCEpの背後にfvIpが存在する場合は、fvCEpベースのポリシーではなくfvIPベースのポリシーを追加する必要があります。
- エンドポイントが同じEPGに属している場合、IPv6ヘッダーを持つレイヤ2ブリッジドトラフィックの、それらのエンドポイント間でのアトミックカウンタ統計は報告されません。
- EPGまたはESGからL3Out EPGに流れるトラフィックに対してアトミックカウンタが機能するには、すべてのプレフィックスとマッチさせるため、0/0ではなく0/1および128/1を使用してL3Out EPGを設定します。
- Cisco APICのトラフィックマップモードが「trail」に設定されていて、Cisco APICがF1545障害を生成した場合、この障害をクリアできる唯一の方法は、トラフィックマップモードを「path」に設定することです。トラフィックマップモードを変更するには、[操作 (Operations)] > [可視化 (Visualization)] に移動し、[設定 (Settings)] をクリックし、[モード (Mode)] のパスを選択して、[送信 (Submit)] をクリックします。これにより、入力と出力の両方でポートごとのトンネル統計が得られます。

トレイルモードでは、トンネル論理インターフェイスの最大スケールインデックスに到達する可能性が高くなります。このモードは、より多くのソフトウェアおよびハードウェアリソースを消費します。論理インターフェイスは、ハードウェア内のトンネルに関連付けられているIDです。

トレイルモードを指定したトンネルエンドポイント (TEP) 間に単一のトンネルがある場合は、より多くのハードウェアリソースも消費されます。たとえば、6つのファブリックポートと1つのトンネルがある場合、ハードウェアは、トンネルの数にファブリックポートの数を掛けた数に等しいエン트리数を消費します。

ソフトウェアの場合、割り当てられた論理インターフェイスの数が2048を超えると、ハードウェアにエントリを作成できません。その結果、統計情報を取得できません。アトミックカウンタの場合、この問題は減少または超過として表示されることがあります。

パスモードには、TEPのエントリだけがあります。vPCの場合、2つのエントリがインストールされます。したがって、上限に達する可能性は低くなります。

アトミックカウンタの構成

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、[Tenants] をクリックします。
 - ステップ 2 サブメニューバーで、必要なテナントをクリックします。
 - ステップ 3 **Navigation** ウィンドウで、テナントを展開し、**Policies** を展開し、それから **Troubleshoot** を展開します。
 - ステップ 4 **Troubleshoot** の下で、**Atomic Counter Policy** を展開し、トラフィック トポロジを選択します。
エンドポイントの組み合わせ、エンドポイント グループ、外部インターフェイスおよび IP アドレス間のトラフィックを測定できます。
 - ステップ 5 必要なトポロジを右クリックして、**Add topology Policy** を選択し、**Add Policy** ダイアログボックスを開きます。
 - ステップ 6 [Add Policy] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
 - a) [Name] フィールドにポリシーの名前を入力します。
 - b) トラフィックの送信元の識別情報を選択するか、入力します。
必要な識別情報のソース（エンドポイント、エンドポイントのグループ、外部インターフェイス、または IP アドレス）によって異なります。
 - c) トラフィックの宛先の識別情報を選択するか、入力します。
 - d) （任意） （任意） [Filters] テーブルで + アイコンをクリックし、カウントするトラフィックのフィルタリングを指定します。
表示される [Create Atomic Counter Filter] ダイアログボックスで、IP プロトコル番号（たとえば TCP=6）によるフィルタリング、および送信元と宛先の IP ポート番号によるフィルタリングを指定できます。
 - e) [Submit] をクリックし、アトミックカウンタ ポリシーを保存します。
 - ステップ 7 [Navigation] ペインで、選択したトポロジの下で新しいアトミックカウンタ ポリシーを選択します。
ポリシー設定が [Work] ペインに表示されます。
 - ステップ 8 [Work] ペインで [Operational] タブをクリックし、[Traffic] サブタブをクリックして、アトミックカウンタの統計情報を表示します。
-

SNMP の使用

SNMP について

Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) は、管理情報ベース (MIB) と通知 (トラップ) を含む広範な SNMPv1、v2、および v3 のサポートを提供します。SNMP 標準では、Cisco ACI ファブリックを管理しモニタリングする各 MIB をサポートするサードパーティ製アプリケーションを使用できます。

SNMPv3 はさらに広範なセキュリティ機能を提供します。各 SNMPv3 デバイスで SNMP サービスを有効または無効にするように選択できます。また、各デバイスで SNMP v1 および v2 要求の処理方法を設定できます。

5.1(1) リリース以降、SNMPv3 は Secure Hash Algorithm-2 (SHA-2) 認証タイプをサポートします。

SNMP の使用方法の詳細については、『Cisco ACI MIB Quick Reference』を参照してください。

Cisco ACI での SNMP アクセスのサポート



- (注) Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) でサポートされる MIB の完全なリストについては、<https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/switches/datacenter/aci/apic/sw/1-x/mib/list/mib-support.html> を参照してください。

Cisco ACI での SNMP サポートは次のとおりです。

- SNMP 読み取りクエリー (Get、Next、Bulk、Walk) は、リーフおよびスパインスイッチと Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) によってサポートされます。
- SNMP 書き込みコマンド (Set) は、リーフおよびスパインスイッチまたは Cisco APIC によってサポートされません。
- SNMP トラップ (v1、v2c、および v3) は、リーフおよびスパインスイッチと Cisco APIC によってサポートされます。



- (注) Cisco ACI は最大 10 個のトラップ レシーバをサポートします。

- SNMPv3 は、リーフおよびスパインスイッチと Cisco APIC によってサポートされます。
- Cisco APIC IPv6 アドレスを使用した SNMP はサポートされていません。

表 3: Cisco APIC リリースでの SNMP サポートの変更

リリース	説明
6.1(2)	APIC の起動中に SNMP デーモンが起動しません。これは、ユーザーが SNMP ポリシーをポッドプロファイルポリシーにアタッチし、adminSt を「有効」に構成すると開始されます。同様に、ユーザーが adminSt を「無効」に構成するか、ポッドプロファイルポリシーから SNMP ポリシーを削除すると停止します。この動作は、SNMP トラップデーモンにも適用されます。したがって、SNMP トラップ集約機能は、SNMP ポリシー管理状態に依存します。SNMP トラップ集約を機能させるには、すべての APIC をトラップ転送先として追加します。
1.2(2)	SNMP トラップの宛先として IPv6 サポートを追加。
1.2(1)	Cisco APIC コントローラの SNMP サポートを追加。以前のリリースでは、リーフおよびスパインスイッチについてのみ SNMP がサポートされています。

SNMP トラップ集約機能

SNMP トラップ集約機能を使用すると、ファブリック ノードからの SNMP トラップを Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) によって集約でき、ファブリック ノードから受信した SNMP トラップを APIC によって外部宛先に転送できます。

トラップが個々のファブリック ノードからではなく APIC から送信されることが予想される場合は、この機能を使用します。この機能を有効にすると、APIC は SNMP プロキシとして機能します。

考えられる障害を処理するために、クラスタ内のすべての APIC を SNMP トラップアグリゲータとして設定することを強く推奨します。SNMP ポリシーでは、複数のトラップの宛先を設定できます。トラップの集約と転送を設定するには、次の手順を実行します。

1. スイッチからトラップを受信するように各 APIC コントローラを設定します。次の設定を使用した [GUI による SNMP トラップ通知先の設定 \(101 ページ\)](#) の手順に従います。

- [ホスト名/IP (Host Name / IP)] フィールドで、APIC の IPv4 または IPv6 アドレスを指定します。
- [管理 EPG (Management EPG)] リストから、アウトオブバンドまたはインバンド管理 EPG を選択します。

クラスタ内の各 APIC をトラップの宛先として設定するには、この手順を繰り返します。

2. 集約トラップを外部サーバに転送するように APIC を設定します。次の設定を使用した [GUI による SNMP ポリシーの設定 \(99 ページ\)](#) の手順に従います。

- [トラップ転送サーバ (Trap Forward Servers)] テーブルで、外部サーバの IP アドレスを追加します。

トラップの集約と転送では、転送されるトラップの送信元 IP アドレスは、実際の送信元ノードではなく、アグリゲータのアドレス（この場合は APIC）になります。実際の送信元を特定するには、OID で検索する必要があります。次の例では、アドレス 10.202.0.1 が APIC IP アドレスで、アドレス 10.202.0.201 が元の送信元リーフスイッチの IP アドレスです。

```
08:53:10.372378 IP
(tos 0x0, ttl 60, id 59067, offset 0, flags [DF], proto UDP (17), length 300)
 10.202.0.1.45419 > 192.168.254.200.162: [udp sum ok]
 { SNMPv2c C="SNMP-ACI" { V2Trap(252) R=609795065
 .1.3.6.1.2.1.1.3.0=25847714 .1.3.6.1.6.3.1.1.4.1.0=.1.3.6.1.4.1.9.9.276.0.1
 .1.3.6.1.2.1.2.2.1.1.436207616=436207616 .1.3.6.1.2.1.2.2.1.7.436207616=2
 .1.3.6.1.2.1.2.2.1.8.436207616=2 .1.3.6.1.2.1.31.1.1.1.1.436207616="eth1/1"
 .1.3.6.1.2.1.2.2.1.3.436207616=6 .1.3.6.1.2.1.2.2.1.2.436207616="eth1/1"
 .1.3.6.1.2.1.31.1.1.1.18.436207616=""
 .1.3.6.1.4.1.9.10.22.1.4.1.1.6="10.202.0.201" } }
```

SNMP トラップ集約機能は、SNMPV2 トラップ集約および転送をサポートする Cisco APIC リリース 3.1(1) で導入されました。Cisco APIC リリース 4.2(6) および 5.1(1)以降では、SNMPv3 トラップの集約および転送がサポートされています。



- (注) APIC がデコミッションされた場合、ユーザは廃止された APIC をクリーン再起動する必要があります。SNMP トラップ集約機能はデコミッションされた APIC でアクティブであるため、デコミッションされた APIC がクリーン再起動されない場合、ユーザはトラップ宛先で重複トラップを受信する可能性があります。

SNMP の設定

GUI による SNMP ポリシーの設定

この手順では、Cisco ACI モードスイッチの SNMP ポリシーを構成し、有効にします。

始める前に

SNMP 通信を有効にするには、以下の設定が必要です。

- アウトオブバンドコントラクトを設定して SNMP トラフィックを許可します。SNMP トラフィックは、通常、SNMP 要求に UDP ポート 161 を使用します。
- 「mgmt」テナントで Cisco APIC アウトオブバンド IP アドレスを構成します。Cisco APIC セットアップ中にアウトオブバンドアドレスを構成した場合は、「mgmt」テナントのアドレスを再度設定しないでください。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[Fabric] をクリックします。

ステップ 2 サブメニューバーで、[Fabric Policies] をクリックします。

ステップ 3 [Navigation] ペインで、[Pod Policies] を展開します。

ステップ 4 [Pod Policies] の下で [Policies] を展開します。

ステップ 5 [SNMP] を右クリックし、[Create SNMP Policy] を選択します。

新しい SNMP ポリシーを作成する代わりに、次の手順で示されるものと同じ方法で [default] ポリシー フィールドを編集できます。

ステップ 6 SNMP ポリシーのダイアログボックスで、次の操作を実行します。

a) [Name] フィールドに、SNMP ポリシーの名前を入力します。

b) [Admin State] フィールドで、[Enabled] を選択します。

c) (任意) [SNMP v3 Users] テーブルで [+] アイコンをクリックし、名前を入力して、ユーザの認証データを入力し、[Update] をクリックします。

この手順は SNMPv3 アクセスが必要な場合のみ実行します。

d) [コミュニティ ポリシー (Community Policies)] テーブルで [+] アイコンをクリックし、[名前 (Name)] を入力して、[更新 (Update)] をクリックします。

コミュニティポリシー名の最大長は32文字です。名前には、アンダースコア (_)、ハイフン (-)、またはピリオド (.) の文字、数字、および特殊文字のみを使用できます。名前に @ 記号を含めることはできません。

e) [Trap Forward Servers] テーブルで、[+] アイコンをクリックし、外部サーバの [IP Address] を入力し、[Update] をクリックします。

ステップ 7 必須: 許可された SNMP 管理ステーションを設定するには、SNMP ポリシーのダイアログボックスで、次の操作を実行します。

a) [Client Group Policies] テーブルで [+] アイコンをクリックし、[Create SNMP Client Group Profile] ダイアログボックスを開きます。

b) [Name] フィールドに、SNMP クライアント グループのプロファイル名を入力します。

c) [Associated Management EPG] ドロップダウンリストから管理 EPG を選択します。

d) [Client Entries] テーブルで [+] アイコンをクリックします。

e) [Name] フィールドにクライアントの名前を入力し、[Address] のフィールドにクライアントの IP アドレスを入力して、[Update] をクリックします。

(注)

SNMP 管理ステーションが SNMPv3 を使用して APIC と接続する場合、APIC は SNMP クライアント グループのプロファイルに指定されたクライアント IP アドレスを強制しません。SNMPv3 の場合、管理ステーションが [Client Entries] リストに含まれている必要がありますが、SNMPv3 クレデンシャルのみでアクセス可能なため、IP アドレスが一致している必要はありません。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

ステップ 9 [送信 (Submit)] をクリックします。

ステップ 10 [Pod Policies] の下で [Policy Groups] を展開して、ポリシー グループを選択するか、または [Policy Groups] を右クリックし、[Create POD Policy Group] を選択します。

新しいポッドポリシーグループを作成することも、既存のグループを使用することもできます。ポッドポリシーグループには、SNMPポリシーに加えて他のポッドポリシーを含めることができます。

- ステップ 11** ポッドポリシーグループのダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- [Name]** フィールドに、ポッドポリシーグループの名前を入力します。
 - [SNMP Policy]** ドロップダウンリストから、設定したSNMPポリシーを選択して、**[Submit]** をクリックします。
- ステップ 12** **[Pod Policies]** の下で **[Profiles]** を展開し、**[default]** をクリックします。
- ステップ 13** **[Work]** ペインで、**[Fabric Policy Group]** ドロップダウンリストから、作成したポッドポリシーグループを選択します。
- ステップ 14** [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ 15** **[OK]** をクリックします。

GUIによるSNMPトラップ通知先の設定

この手順では、SNMPトラップ通知を受信するSNMPマネージャのホスト情報を設定します。



- (注) ACIは最大10個のトラップレシーバをサポートします。10個より多く設定すると、一部では通知が受信されません。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、**[Admin]** をクリックします。
- ステップ 2** サブメニューバーで、**[External Data Collectors]** をクリックします。
- ステップ 3** **[Navigation]** ペインで、**[Monitoring Destinations]** を展開します。
- ステップ 4** **[SNMP]** を右クリックし、**[Create SNMP Monitoring Destination Group]** を選択します。
- ステップ 5** **[Create SNMP Monitoring Destination Group]** ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- [Name]** フィールドに、SNMP通知先の名前を入力し、**[Next]** をクリックします。
 - [Create Destinations]** テーブルで **[+]** アイコンをクリックし、**[Create SNMP Trap Destination]** ダイアログボックスを開きます。
 - [ホスト名/IP (Host Name/IP)]** フィールドに、IPv4 または IPv6 アドレスまたは宛先ホストの完全修飾ドメイン名を入力します。
 - 通知先のポート番号とSNMPバージョンを選択します。
 - SNMP v1 または v2c 通知先の場合、**[Security Name]** として設定したコミュニティ名の1つを入力し、**[v3 Security Level]** として **[noauth]** を選択します。

SNMP v1 または v2c セキュリティ名の最大長は 32 文字です。名前には、アンダースコア (_)、ハイフン (-)、またはピリオド (.) の文字、数字、および特殊文字のみを使用できます。SNMP v2c の場合、@ 記号も使用できます。

- f) SNMP v3 通知先の場合、[Security Name] として設定したユーザ名の 1 つを入力し、必要な [v3 Security Level] を選択します。

SNMP v3 セキュリティ名の最大長は 32 文字です。名前は大文字または小文字で始まる必要があり、文字、数字、およびアンダースコア (_)、ハイフン (-)、ピリオド (.)、または@記号の特殊文字のみを使用できます。

- g) [Management EPG] ドロップダウンリストから管理 EPG を選択します。
h) [OK] をクリックします。
i) [完了 (Finish)] をクリックします。

GUIによるSNMPトラップソースの設定

この手順では、ファブリック内のソースオブジェクトを選択して有効にし、SNMPトラップ通知を生成します。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[Fabric] をクリックします。
- ステップ 2** サブメニューバーで、[Fabric Policies] をクリックします。
- ステップ 3** [Navigation] ペインで、[Monitoring Policies] を展開します。
共通ポリシー、デフォルト ポリシーで SNMP ソースを作成することも、または新しいモニタリングポリシーを作成することもできます。
- ステップ 4** 必要なモニタリングポリシーを展開し、[Callhome/SNMP/Syslog] を選択します。
[Common Policy] を選択する場合は、[Common Policy] を右クリックして、[Create SNMP Source] を選択し、そのダイアログボックスで次の手順に従ってください。
- ステップ 5** [Work] ペインで、[Monitoring Object] ドロップダウンリストから [ALL] を選択します。
- ステップ 6** [Source Type] ドロップダウンリストから、[SNMP] を選択します。
- ステップ 7** テーブルで+アイコンをクリックし、[Create SNMP Source] ダイアログボックスを開きます。
- ステップ 8** [Create SNMP Source] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- a) [Name] フィールドに、SNMP ポリシーの名前を入力します。
 - b) [Dest Group] ドロップダウンリストから、通知を送信する既存の宛先を選択するか、または [Create SNMP Monitoring Destination Group] を選択して、新しい宛先を作成します。
SNMP の通知先グループを作成する手順は、別項で説明します。
 - c) [送信 (Submit)] をクリックします。
-

SNMP を使用したシステムのモニタリング

個々のホスト（APIC またはその他のホスト）をリモートでモニタし、特定のノードの状態を確認できます。

SNMP を使用してシステムの CPU とメモリの使用状況をチェックし、CPU のスパイクが発生しているかどうかを確認できます。SNMP（ネットワーク管理システム）は、SNMP クライアントを使用して APIC の情報にアクセスし、情報を取得します。

リモートでシステムにアクセスして、情報がネットワーク管理システムのコンテキストに属するものかどうかを確認し、CPU またはメモリの使用量が多すぎないか、またはシステムやパフォーマンスの問題が発生しているかどうかを調べることができます。問題の原因がわかると、システムの正常性をチェックし、メモリまたは CPU の使用量が多すぎないかどうかを確認できます。

詳細については、「*Cisco ACI MIB Quick Reference Manual*」を参照してください。

SPAN の使用

SPAN の概要

スイッチドポートアナライザ（SPAN）ユーティリティを使って、詳細なトラブルシューティングの実行または特定のアプリケーションホストからトラフィックのサンプルを取得し、プロアクティブなモニタリングと分析を行うことができます。

SPAN は 1 つ以上のポート、VLAN、またはエンドポイントグループ（EPG）からのトラフィックをコピーし、ネットワークアナライザによる分析のためにコピーしたトラフィックを 1 つ以上の送信先に送信します。このプロセスはどの接続デバイスも中断せず、ハードウェア内で実施されるので不要な CPU 負荷を防ぎます。

SPAN セッションはソースが受信したトラフィック（入力トラフィック）、ソースから送信したトラフィック（出力トラフィック）、またはその両方をモニタリングするように設定できます。デフォルトでは、SPAN はすべてのトラフィックをモニタリングしますが、選択したトラフィックだけをモニタリングするようにフィルタを設定できます。

テナントまたはスイッチで SPAN を設定できます。スイッチ上で設定する場合、SPAN をファブリックポリシーまたはアクセスポリシーとして設定できます。

APIC は、SPAN（ERSPAN）のカプセル化されたリモート拡張をサポートします。

リリース 4.1(i) 以降、次の機能がサポートされるようになりました。

- 送信元とポートチャネルが同じスイッチ上でローカルである限り、宛先として静的ポートチャネルを使用した、ローカル SPAN に対するサポート。



(注) APIC リリース 4.1(1i) 以降を実行していて、宛先として静的ポートチャンネルを設定した後、4.1(1i) より前のリリースにダウングレードすると、これが原因で SPAN セッションが管理者無効状態になります。この機能は、リリース 4.1(1i) より前には利用できませんでした。機能への影響はありません。

- レイヤ 3 インターフェイス フィルタリングを使用して送信元 SPAN を設定するときに、レイヤ 3 インターフェイスの IP プレフィックスを含める必要がなくなりました。
- 1 つ以上のフィルタエントリのグループであるフィルタグループ設定のサポート。フィルタグループを使用すれば、受信したパケットを SPAN を使用して分析する必要があるかどうかを判断するために使用される一致基準が指定できます。
- ASIC の入力での転送が原因でドロップされたパケットをキャプチャし、事前設定された SPAN 宛先に送信する SPAN-on-drop 機能。SPAN-on-drop 設定には、アクセスポートを SPAN 送信元として使用するアクセス ドロップ、ファブリックポートを SPAN 送信元として使用するファブリック ドロップ、およびノード上のすべてのポートを SPAN 送信元として使用するグローバルドロップの 3 種類があります。SPAN-on-drop は、通常の SPAN を使用し (CLI、GUI、および REST API 経由) とトラブルシューティング SPAN を使用して (CLI および REST API のみを経由) 設定されます。この機能の設定の詳細については、GUI を使用した SPAN の設定、NX-OS スタイル CLI を使用した SPAN の設定、および REST API を使用した SPAN の設定を参照してください。

マルチノード SPAN

APIC のトラフィックのモニタリングポリシーは、各アプリケーショングループのすべてのメンバーと彼らが接続する場所を追跡するために、適切な範囲にポリシーのスパンを広げることが可能です。メンバーが移動すると、APIC は新しいリーフにポリシーを自動的にプッシュします。たとえば、エンドポイントが新しいリーフスイッチに VMotion により移動すると、スパンの設定は自動的に調整されます。

ACI ファブリックは、カプセル化リモート SPAN (ERSPAN) 形式の次の 2 つの拡張をサポートします。

- アクセスまたはテナント SPAN : VLAN をフィルタとして使用するかどうかにかかわらず、リーフスイッチのフロントパネルポートに対して実行されます。リーフスイッチの Broadcom Trident 2 ASIC は、ERSPAN タイプ 1 形式とはわずかに異なるバージョンをサポートします。上記で参照したドキュメントで定義されている ERSPAN タイプ 1 フォーマットとは、GRE ヘッダーが 4 バイトのみであり、シーケンスフィールドがないという点で異なります。GRE ヘッダーは常に次のようにエンコードされます - 0x000088be。0x88be は ERSPAN タイプ 2 を示していますが、フィールドの残りの 2 バイトにより、これは 4 バイトの GRE ヘッダーを持つ ERSPAN タイプ 1 パケットとして識別されます。
- ファブリック SPAN : リーフスイッチの Northstar ASIC により、またはスパインスイッチの Alpine ASIC により実行されます。これらの ASIC は ERSPAN タイプ 2 および 3 フォー

マットをサポートしていますが、ACI ファブリックは現在、ファブリック SPAN の ERSPAN タイプ 2 のみをサポートしています。これについては、上記のベースラインドキュメントに記載されています。

ERSPAN ヘッダーの説明については、次の URL にある IETF インターネット ドラフトを参照してください。 <https://tools.ietf.org/html/draft-foschiano-erspan-00>

SPAN の注意事項と制約事項



- (注) 多くのガイドラインと制約事項は、スイッチが第 1 世代スイッチか第 2 世代スイッチかによって異なります。スイッチの生成は次のように定義されます。
- 第 1 世代スイッチは、スイッチ名の末尾に「EX」、「FX」、「FX2」などのサフィックスがないことで識別されます (N9K-9312TX など)。
 - 第 2 世代スイッチは、スイッチ名の末尾に「EX」、「FX」、「FX2」などのサフィックスが付いています。
-
- サポートされる SPAN のタイプはさまざまです。
 - 第 1 世代のスイッチの場合、テナントおよびアクセス SPAN は、カプセル化された SPAN (ERSPAN) タイプ I を使用します (Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI のバージョン 1 オプション)。
 - 第 2 世代スイッチの場合、テナントおよびアクセス SPAN は、カプセル化された SPAN (ERSPAN) タイプ II (Cisco APIC GUI のバージョン 2 オプション) を使用します。
 - ファブリック SPAN は ERSPAN タイプ II を使用します。
 - リリース 5.2(3) 以降、ERSPAN は IPv6 接続先をサポートしています。
 - 6.0(3) リリースは、次の SPAN 制限がある Cisco N9K-C9808 スイッチをサポートします。
 - 出力 (トランジット (Tx)) SPAN はサポートされていません。
 - ドロップ時の SPAN はサポートされていません。
 - 複数のセッションで同じ SPAN 送信元を使用することはできません。
 - SPAN は、最大 343 バイトの MTU をサポートします。
 - uSeg EPG または ESG は、SPAN 送信元 EPG として使用できません。これは、SPAN 送信元フィルタが VLAN ID に基づいているためです。したがって、エンドポイントが uSeg EPG または ESG に分類されている場合でも、その VLAN が SPAN 送信元 EPG の VLAN である場合、エンドポイントからのトラフィックはミラーリングされます。
 - ERSPAN セッションを構成するときに、SPAN ソースに GOLF VRF インスタンス内のスパインスイッチからの宛先とインターフェイスが含まれている場合、L3Out プレフィックス

が間違った BGP ネクストホップで GOLF ルータに送信され、GOLF からその L3Out への接続が切断されます。

- SPAN 送信元として l3extLIIP のレイヤ 3 サブインターフェイスを指定することはできません。外部ソースからのトラフィックをモニタリングするためにはポート全体を使用します。
- FEX インターフェイスのローカル SPAN では、FEX インターフェイスは SPAN 送信元としてのみ使用でき、SPAN 宛先としては使用できません。
 - 第 1 世代スイッチでは、レイヤ 3 スイッチドトラフィックに対して Tx SPAN は機能しません。
 - 第 2 世代のスイッチでは、トラフィックがレイヤ 2 またはレイヤ 3 のどちらかでスイッチングされているかにかかわらず、Tx SPAN は機能しません。

Rx SPAN に制限はありません。

FEX ファブリック ポートチャネル (NIF) の SPAN の場合、メンバーインターフェイスは第 1 世代リーフスイッチの SPAN 送信元インターフェイスとしてサポートされます。



- (注) 第 2 世代スイッチで FEX ファブリック ポートチャネル (NIF) メンバーインターフェイスを SPAN 送信元インターフェイスとして設定することもできますが、これは Cisco APIC リリース 4.1 より前のリリースではサポートされていません。

ERSPAN ヘッダーについては、IETF の Internet Draft (<https://tools.ietf.org/html/draft-foschiano-erspan-00>) を参照してください。

- ERSPAN 宛先 IP アドレスは、エンドポイントとしてファブリックで学習する必要があります。
- APIC リリース 6.1(2) 以降、ERSPAN 宛先 IP アドレスは、L3Out (ERSPAN over L3Out) から学習され、到達可能なアドレスにすることもできます。
- SPAN は IPv6 トラフィックをサポートします。
- ポート チャネルまたは vPC の個別ポート メンバーは送信元として設定されます。ポートチャネル、vPC、または vPC コンポーネントを SPAN セッションの送信元として使用します。
- 宛先 EPG が削除されるか使用できない場合、ERSPAN 送信元グループで障害は発生しません。
- SPAN フィルタは、第 2 世代のリーフスイッチでのみサポートされます。アクセス SPAN 送信元は、特定の時点で次のいずれかのフィルタのみをサポートします。
 - EPG
 - 外部ルーティング (L3Out)

- L3Out フィルタを使用してアクセス SPAN 送信元を展開する場合は、L3Out が一致するインターフェイスにも展開されていることを確認します。
 - L3Out がポートに展開されている場合、SPAN 送信元は同じポートに展開する必要があります。
 - L3Out が PC に展開されている場合、SPAN 送信元は同じ PC に展開する必要があります。
 - L3Out が vPC に展開されている場合、SPAN 送信元は同じ vPC に展開する必要があります。
 - L3Out ルーテッドインターフェイスおよびルーテッドサブインターフェイスはポートまたは PC に導入できますが、L3Out SVI はポート、PC、または vPC に導入できます。L3Out フィルタを使用する SPAN 送信元は、それに応じて展開する必要があります。
 - L3Out フィルタは、ファブリック SPAN またはテナント SPAN セッションではサポートされません。
 - EPG ブリッジドメインの [L3 設定 (L3 Configuration)] タブで正しい L3Out を選択する必要があります。そうしないと、基本的な L3Out のパケットフローが機能しません。
 - カプセル化値は、ルーテッドサブインターフェイスおよび SVI には必須ですが、ルーテッドインターフェイスには適用されません。L3Out サブインターフェイスまたは SVI カプセル化値は、EPG カプセル化値とは異なる必要があります。
- SPAN セッション内で EPG フィルタが有効になっている場合、中継、つまり tx 方向のインターフェイスから送信される ARP パケットはスパンされません。
- 次の場合、SPAN フィルタはサポートされません。
 - ファブリック ポート
 - ファブリックおよびテナント SPAN セッション
 - スパイン スイッチ
 - 公式にサポートされているよりも多くの L4 ポート範囲を追加しようとしても、L4 ポート範囲フィルタ エントリは追加されません。
 - SPAN 送信元グループ レベルまたは個々の SPAN 送信元レベルで、サポートされているフィルタ エントリより多くのエントリを関連付けようとする、SPAN セッションは起動しません。
 - 公式にサポートされているよりも多くのフィルタ エントリを追加または削除すると、削除されたフィルタ エントリは TCAM に残ります。
 - アクティブな SPAN セッションの最大数や、SPAN フィルタ制限など、SPAN 関連の制限については、『*Verified Scalability Guide for Cisco ACI*』ドキュメントを参照してください。
 - SPAN-on-drop 機能では、次の注意事項と制限事項が適用されます。
 - SPAN-on-drop 機能は、第 2 世代リーフ スイッチでサポートされます。

- SPAN-on-drop 機能は、LUX ブロック内の転送ドロップがあるパケットのみをキャプチャします。これは、入力での転送ドロップパケットをキャプチャします。SPAN-on-drop 機能は、BMX（バッファ）ドロップおよび RWX（出力）ドロップをキャプチャできません。
- トラブルシューティング CLI を使用して SPAN-on-drop と Cisco APIC を有効にして宛先として SPAN セッションを作成する場合、100 MB のデータがキャプチャされるとセッションは無効になります。
- モジュラ シャーシでは、SPAN-on-drop 機能はラインカードでドロップされたパケットに対してのみ機能します。ファブリックカードでドロップされたパケットはスパンされません。
- SPAN-on-drop ACL と他の SPAN ACL はマージされません。SPAN-on-drop セッションが ACL ベースの SPAN とともにインターフェイスで設定されている場合、そのインターフェイスでドロップされたパケットは SPAN-on-drop セッションにのみ送信されます。
- SPAN on drop と SPAN ACL を同じセッションで設定することはできません。
- アクセスまたはファブリックポートドロップセッションとグローバルドロップセッションが設定されている場合、アクセスまたはファブリックポートドロップセッションがグローバルドロップセッションよりも優先されます。
- TCAM でサポートされるフィルタエントリの数 = $(M * S1 * 1 + N * S2 * 2) + (S3 * 2)$ 。これは、rx SPAN または tx SPAN に個別に適用されます。現在この式に従うと、tx または rx SPAN でサポートされる最大フィルタエントリは各方向で 480 です（また、フィルタグループアソシエーション（ $S3 = 0$ を意味する）なしで、16 個のポート範囲を含む他の送信元が設定されていない場合）。フィルタエントリの数が最大許容数を超えると、障害が発生します。フィルタエントリでレイヤ 4 ポート範囲を指定できることに注意してください。ただし、16 個のレイヤ 4 ポートが単一のフィルタエントリとしてハードウェアにプログラムされます。



(注)

- M = IPv4 フィルタの数
- S1 = IPv4 フィルタを使用した送信元の数
- N = IPv6 フィルタの数
- S2 = IPv6 フィルタを使用した送信元の数
- S3 = フィルタグループが関連付けられていない送信元の数

- PC または vPC の LACP ポリシーで MAC ピニングを設定すると、PC メンバーポートは LACP 個別ポートモードになり、PC は動作しません。したがって、このような PC での SPAN 送信元設定は失敗し、「No operating src / dst」障害が生成されます。MAC ピニングモードが設定されている場合、SPAN は個々のポートでのみ設定できます。

- Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) リーフスイッチで受信されたパケットは、スパインインターフェイスが入力インターフェイスと出力インターフェイスの両方で設定されている場合でも、一度だけスパンされます。
- ルーテッド外部 SPAN 送信元フィルタを使用すると、Tx 方向のユニキャストのみが表示されます。Rx 方向では、ユニキャスト、ブロードキャスト、およびマルチキャストを確認できます。
- L3Out フィルタは、送信マルチキャスト SPAN ではサポートされません。L3Out は、入力 ACL フィルタでは `sclass / dclass` の組み合わせとして表されるため、ユニキャストトラフィックのみを照合できます。送信マルチキャストトラフィックは、ポートおよびポートチャネルでのみスパンできます。
- ポートチャネルインターフェイスを SPAN 宛先として使用できるのは、-EX 以降のスイッチだけです。
- SPAN フィルタ (5 タプルフィルタ) が適用されている場合、同じ送信元インターフェイスで複数の SPAN セッションを設定することはできません。

リーフスイッチのローカル SPAN 宛先ポートは、着信トラフィックを予期しません。レイヤ2インターフェイスポリシーを設定し、**VLAN 範囲**プロパティを**グローバル範囲**ではなく**ポート ローカル範囲**に設定することで、スイッチが着信 SPAN 宛先ポートトラフィックをドロップするようにできます。このポリシーを SPAN 宛先ポートに適用します。レイヤ2インターフェイスポリシーを設定するには、GUIで次の場所に移動します。**[ファブリック (Fabric)] > [アクセスポリシー (Access Policies)] > [ポリシー (Policies)] > [インターフェイス (Interface)] > [L2 インターフェイス (L2 Interface)]**

特定の packets に SPAN を設定すると、SPAN はその packets に対して 1 回だけサポートされます。最初の SSN の Rx の SPAN によってトラフィックが選択された場合、2 番目の SSN の Tx の SPAN によってトラフィックが再度選択されることはありません。したがって、SPAN セッションの入力ポートと出力ポートが単一のスイッチ上にある場合、SPAN セッションのキャプチャは一方のみです。SPAN セッションは双方向トラフィックを表示できません。

- フィルタグループに設定された SPAN ACL フィルタは、アクセスインターフェイスから出力されるブロードキャスト、不明ユニキャスト、およびマルチキャスト (BUM) トラフィックをフィルタリングしません。出力方向の SPAN ACL は、ユニキャスト IPv4 または IPv6 トラフィックに対してのみ機能します。

SPAN 宛先をローカルポートとして設定する場合、EPG はそのインターフェイスに展開できません。

リーフスイッチでは、VRF フィルタを持つ SPAN 送信元は、VRF インスタンスの下のすべての通常のブリッジドメインとすべてのレイヤ3 SVI にマッチします。

スパインスイッチでは、VRF を持つ SPAN 送信元は、設定された VRF VNID トラフィックのみにマッチします。また、ブリッジドメインフィルタは、ブリッジドメイン VNID トラフィックのみにマッチします。

- 独自の SPAN 拡張フィルタ エントリを作成する場合、拡張フィルタ エントリの管理対象オブジェクトを識別するために、`_UI_AUTO_CONFIG_DEFAULT_EXTENDED_MO` をオブジェクト名として使用することはできません。
- 同じ速度の SPAN 接続先インターフェイスを使用します。SPAN セッションによってモニターされるトラフィックは、接続先ポートがオーバーサブスクライブされていないが、他の SPAN 接続先ポートの 1 つがオーバーサブスクライブされている場合でも、SPAN バッファのドロップが原因でトラフィック損失が発生する可能性があります。SPAN トラフィック レートは、接続先インターフェイスの速度が異なる場合、およびそれらの 1 つがオーバーサブスクライブされている場合、最も遅い SPAN 接続先インターフェイス速度に制限されます。
- 構成されているどの送信元インターフェイスよりも高い SPAN 接続先インターフェイス速度を使用し、マイクロバーストに十分な余裕がある速度を選択します。クラウドスケール ASIC は、SPAN クラスのマイクロバースト モニタリング オプションを提供しません。
- SPAN 宛先グループ機能では、次の注意事項と制限事項が適用されます。
 - [ERSPAN over L3Out] : 宛先が Infra L3Out の背後にある場合、サポートされません。
 - [ERSPAN over L3Out] : スパン送信元がスパイン ノードのファブリック ポートである場合、サポートされません。
 - インフラ SR-MPLS L3out を介した ERSPAN はサポートされていません。
 - 宛先がリモート リーフ アップリンク ファブリック ポートのユーザー テナント L3out を介して到達可能な場合、リモート リーフの L3out を介した ERSPAN はサポートされません。

GUI を使用した SPAN の設定

Cisco APIC GUI を使用したテナント SPAN セッションの設定

SPAN は、スイッチまたはテナントで設定できます。このセクションでは、Cisco APIC GUI を使用して、複製された送信元パケットをリモート トラフィック アナライザに転送するようにテナントの SPAN ポリシーを設定する方法について説明します。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログボックスのフィールドに値を入力する必要があります。フィールドを理解し、有効な値を決定するには、ダイアログボックスの右上隅にあるヘルプアイコン (?) をクリックしてヘルプ ファイルを表示します。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[Tenants] をクリックします。

ステップ 2 サブメニュー バーで、送信元エンドポイントを含むテナントをクリックします。

- ステップ3 [ナビゲーション (Navigation)] ペインでテナントを展開し、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] > を展開して、[SPAN] を展開します。
- [SPAN] に表示される 2 つのノード: [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] と [SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]。
- ステップ4 [ナビゲーション (Navigation)] の下で [SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)] を右クリックし、[SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Group)] を選択します。
- [Create SPAN Source Group] ダイアログが表示されます。
- ステップ5 [SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Group)] ダイアログボックスの必須フィールドに適切な値を入力します。
- ステップ6 [送信元の作成 (Create Sources)] テーブルを展開し、[SPAN 送信元の作成] ダイアログボックスを開きます。
- ステップ7 [SPAN 送信元の作成 (Create SPAN Source)] ダイアログボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ8 SPAN送信元の作成が完了したら、[OK] をクリックします。
- [SPAN 送信元グループの作成 (Create VRF)] ダイアログボックスに戻ります。
- ステップ9 [リモート場所の作成 (Create Remote Location)] ダイアログのフィールドに値を入力したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

次のタスク

SPAN 送信先のトラフィック アナライザを使用して、SPAN 送信元 EPGからのデータパケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。

APIC GUI を使用した SPAN フィルタ グループの設定

手順

-
- ステップ1 メニューバーで [ファブリック (Fabric)] をクリックし、サブメニューバーで [アクセス ポリシー (Access Policies)] をクリックします。
- ステップ2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] を展開し、[SPAN] を展開します。
- ステップ3 [SPAN] の下で [SPAN フィルタ グループ (SPAN Filter Groups)] を右クリックし、[SPAN フィルタ グループの作成 (Create SPAN Filter Group)] を選択します。
- [フィルタ グループの作成 (Create Filter Group)] ダイアログボックスが表示されます。
- ステップ4 SPAN フィルタ グループの名前を入力します。[フィルタ エントリ (Filter Entries)] テーブルで、[+] をクリックし、次のフィールドに値を入力します。
- [送信元 IP プレフィックス (Source IP Prefix)]: IP アドレス/マスクの形式で送信元 IP アドレスを入力します。IPv4 アドレスおよび IPv6 アドレスのどちらもサポートされています。

す。0.0.0.0の値は、このフィールドで任意のIPv4アドレスエントリを指定するために、::の値は、任意のIPv6アドレスエントリを指定するために使用します。

- [最初の送信元ポート (First Source Port)] 最初の送信元レイヤー4ポートを入力します。このフィールドは、[最後の送信元ポート (Last Source Port)] フィールドとともに、送信元ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値0は、このフィールドで任意のエントリを指定するために使用します。
- [最後の送信元ポート (Last Source Port)] 最後の送信元レイヤー4ポートを入力します。このフィールドは、[最初の送信元ポート (First Source Port)] フィールドとともに、送信元ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値0は、このフィールドで任意のエントリを指定するために使用します。
- [宛先 IP プレフィックス (Destination IP Prefix)] : IP アドレス/マスクの形式で宛先 IP アドレスを入力します。IPv4 アドレスおよび IPv6 アドレスのどちらもサポートされています。0.0.0.0の値は、このフィールドで任意のIPv4アドレスエントリを指定するために、::の値は、任意のIPv6アドレスエントリを指定するために使用します。
- [最初の宛先ポート (First Destination Port)] : 最初の宛先レイヤー4ポートを入力します。このフィールドは、[最後の宛先ポート (Last Destination Port)] フィールドとともに、宛先ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値0は、このフィールドで任意のエントリを指定するために使用します。
- [最後の宛先ポート (Last Destination Port)] : 最後の宛先レイヤー4ポートを入力します。このフィールドは、[最初の宛先ポート (First Destination Port)] フィールドとともに、宛先ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値0は、このフィールドで任意のエントリを指定するために使用します。
- [IP プロトコル (IP Protocol)] : IP プロトコルを入力します。値0は、このフィールドで任意のエントリを指定するために使用します。
- [拡張フィルタ エントリ (Extended Filter Entries)] テーブルで、[+] をクリックし、次のフィールドに値を入力します。
 - [名前 (Name)] : 拡張フィルタ エントリの名前を入力します。
 - [最初の DSCP (DSCP From)] : DSCP 値を入力します。このフィールドは、[最後の DSCP (DSCP To)] フィールドとともに、DSCP 値をフィルタリングする範囲を指定します。
 - [最後の DSCP (DSCP To)] : DSCP 値を入力します。このフィールドは、[最初の DSCP (DSCP From)] フィールドとともに、DSCP 値をフィルタリングする範囲を指定します。
 - [最初の Dot1P (Dot1P From)] : Dot1P 値を入力します。このフィールドは、[最後の Dot1P (Dot1P To)] フィールドとともに、Dot1P 値をフィルタリングする範囲を指定します。

- **[最後の Dot1P (Dot1P To)]** : Dot1P 値を入力します。このフィールドは、**[最初の Dot1P (Dot1P From)]** フィールドとともに、Dot1P 値をフィルタリングする範囲を指定します。
送信元ポートと宛先ポートの範囲、または DSCP と Dot1P の範囲の値を指定できます。送信元ポートと宛先ポートの範囲、および DSCP と Dot1P の範囲の両方を指定すると、障害が表示されます。
DSCP または Dot1P は、出力方向ではサポートされていません。方向として **[両方 (Both)]** を選択した場合、DSCP または Dot1P のいずれかが入力方向のみでサポートされ、出力方向ではサポートされません。
- **[TCP フラグ (TCP Flags)]** ドロップダウンリストで、**TCP フラグ** を選択します。
TCP フラグ を設定できるのは、フィルタ グループのドロップダウン リストで **[未指定 (Unspecified)]** または **[TCP]** を **[IP プロトコル (IP Protocol)]** として選択した場合だけです。
- **[パケットタイプ (Packet Type)]** : パケットタイプを選択します。 **[ルート/スイッチ (Routed/Switched)]**、**[ルート (Routed)]**、または **[スイッチのみ (Switched Only)]** のいずれかを選択します。

ステップ 5 このフォームの各フィールドに適切な値を入力したら、**[更新 (Update)]** をクリックし、**[送信 (Submit)]** をクリックします。

APIC GUI を使用したアクセス SPAN ポリシーの設定

この手順では、Cisco APIC GUI を使用してアクセス SPAN ポリシーを設定します。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログ ボックスのフィールドに値を入力する必要があります。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、**[ファブリック (Fabric)]** > **[アクセス ポリシー (Access Policies)]** をクリックします。
- ステップ 2** **[ナビゲーション (Navigation)]** ペインで、**[ポリシー (Policies)]** > **[トラブルシューティング (Troubleshooting)]** > **[SPAN]** を展開します。
[SPAN] の下には、**[SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]**、**[SPAN フィルタ グループ (SPAN Filter Groups)]**、および **[SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)]** の 3 つのノードが表示されます。
- ステップ 3** **[SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]** を右クリックし、**[SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Groups)]** を選択します。
[Create SPAN Source Group] ダイアログが表示されます。

- ステップ 4 [SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Group)] ダイアログ ボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ 5 [送信元の作成 (Create Sources)] テーブルを展開し、[SPAN 送信元の作成 (Create SPAN Source)] ダイアログ ボックスを開いて、必須のフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ 6 [Create SPAN Source] ダイアログ ボックスで、[Add Source Access Paths] を展開して、ソースパスを指定します。
- [送信元をパスに関連付ける (Associate Source to Path)] ダイアログ ボックスが表示されます。
- ステップ 7 [送信元をパスに関連付ける (Associate Source to Path)] ダイアログ ボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ 8 送信元とパスの関連付けが完了したら、[OK] をクリックします。
- [SPAN 送信元の作成 (Create SPAN Source)] ダイアログ ボックスに戻ります。
- ステップ 9 SPAN 送信元の作成が完了したら、[OK] をクリックします。
- [SPAN 送信元グループの作成 (Create VRF)] ダイアログ ボックスに戻ります。
- ステップ 10 SPAN 送信元グループの設定が完了したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

次のタスク

SPAN 宛先のトラフィック アナライザを使用して、SPAN 送信元からのデータ パケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。

Cisco APIC GUI を使用したファブリック SPAN ポリシーの設定

このセクションでは、Cisco APIC GUI を使用してファブリック SPAN ポリシーを作成する方法について説明します。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログ ボックスのフィールドに値を入力する必要があります。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] をクリックします。
- ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] > [SPAN] を展開します。
- [SPAN] の下には、[SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]、[SPAN フィルタ グループ (SPAN Filter Groups)]、および [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] の 3 つのノードが表示されます。
- ステップ 3 [SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)] を右クリックし、[SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Groups)] を選択します。
- [Create SPAN Source Group] ダイアログが表示されます。

- ステップ 4 [SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Group)] ダイアログ ボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ 5 [送信元の作成 (Create Sources)] テーブルを展開し、[SPAN 送信元の作成] ダイアログ ボックスを開きます。
- ステップ 6 [SPAN 送信元の作成 (Create SPAN Source)] ダイアログ ボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ 7 完了したら、[OK] をクリックします。
[SPAN 送信元グループの作成 (Create VRF)] ダイアログ ボックスに戻ります。
- ステップ 8 [リモート場所の作成 (Create Remote Location)] ダイアログのフィールドに値を入力したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

次のタスク

SPAN 宛先のトラフィック アナライザを使用して、SPAN 送信元からのデータ パケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。

APIC GUI を使用した外部アクセス用のレイヤ 3 EPG SPAN セッションの設定

この手順は、Cisco APIC GUI を使用して外部アクセス用のレイヤ 3 EPG SPAN ポリシーを設定する方法を示しています。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログ ボックスのフィールドに値を入力する必要があります。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] をクリックします。
- ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] > [SPAN] を展開します。
[SPAN] の下には、[SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]、[SPAN フィルタ グループ (SPAN Filter Groups)]、および [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] の 3 つのノードが表示されます。
- ステップ 3 [SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)] を右クリックし、[SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Groups)] を選択します。
[Create SPAN Source Group] ダイアログが表示されます。
- ステップ 4 [SPAN 送信元グループの作成 (Create SPAN Source Group)] ダイアログ ボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- ステップ 5 [フィルタ グループ (Filter Group)] フィールドで、フィルタ グループを選択または作成します。

詳細については、[APIC GUI を使用した SPAN フィルタ グループの設定 \(111 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 6 [送信元の作成 (Create Sources)] テーブルを展開し、[SPAN 送信元の作成 (Create SPAN Source)] ダイアログ ボックスを開き、以下の操作を実行します。

- a) 送信元ポリシーの[名前 (Name)]を入力します。
- b) トラフィック フローの[方向 (Direction)] オプションを選択します。
- c) (オプション)[ドロップ パケットのスパニング (Span Drop Packets)] チェックボックスをクリックしてチェックマークを付けます。オンにすると、SPAN-on-drop機能が有効になります。
- d) 外部アクセスの場合は、[外部にルーティング (Routed Outside)] ([タイプ (Type)] フィールド) をクリックします。

(注)

外部アクセスで[外部にルーティング (Routed Outside)]を選択した場合、[名前 (Name)]、[アドレス (Address)]、および[Encap] フィールドが表示されて、[L3 Outside]を設定できるようになります。

- e) [送信元アクセス パスの追加 (Add Source Access Paths)] を展開して、送信元パスを指定します。

[送信元をパスに関連付ける (Associate Source to Path)] ダイアログ ボックスが表示されます。

- f) [送信元をパスに関連付ける (Associate Source to Path)] ダイアログ ボックスのフィールドに適切な値を入力します。
- g) 送信元とパスの関連付けが完了したら、[OK] をクリックします。

[SPAN 送信元の作成 (Create SPAN Source)] ダイアログ ボックスに戻ります。

- h) SPAN 送信元の作成が完了したら、[OK] をクリックします。

[SPAN 送信元グループの作成 (Create VRF)] ダイアログ ボックスに戻ります。

ステップ 7 SPAN 送信元グループの設定が完了したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

次のタスク

SPAN 宛先のトラフィック アナライザを使用して、SPAN 送信元からのデータ パケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。

Cisco APIC GUI を使用したテナント SPAN ポリシーの宛先グループの構成

このセクションでは、Cisco APIC GUI を使用して、テナント SPAN ポリシーの宛先グループを作成する方法について説明します。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログ ボックスのフィールドに値を入力する必要があります。

SPAN宛先グループと送信元を作成すれば、SPAN宛先のトラフィックアナライザを使用して、SPAN送信元からのデータパケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[Tenants] をクリックします。
- ステップ 2** サブメニューバーで、送信元エンドポイントを含むテナントをクリックします。
- ステップ 3** [ナビゲーション (Navigation)] ペインでテナントを展開し、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] > を展開して、[SPAN] を展開します。
- [SPAN] に表示される 2 つのノード：[SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] と [SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]。
- ステップ 4** [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] を右クリックして、[SPAN 宛先グループの作成 (Create SPAN Destination Groups)] を選択します。[Create SPAN Destination Group] ダイアログが表示されます。
- [Name] フィールドに、SPAN 宛先グループの名前を入力します。
 - オプション。[説明 (Description)] フィールドに、グループの説明を入力します。
 - [宛先タイプ (Destination Type)] で、[アプリケーション EPG (Application EPG)] または [L3Out EPG (L3Out EPG)] を選択します。
- SPAN パケットの [宛先タイプ (Destination Type)] として [アプリケーション EPG (Application EPG)] を指定する場合は、テナント、アプリケーションプロファイル、および宛先 EPG も含める必要があります。
- SPAN パケットの [宛先タイプ (Destination Type)] として [L3Out EPG] を指定する場合は、テナント、L3Out 名、および外部 EPG ネットワークも含める必要があります。
- 複製されたパケットを受信するリモート サーバの [宛先 IP (Destination IP)] を指定します。
 - [送信元 IP/プレフィックス (Source IP/Prefix)]：送信元パケットの IP サブネットのベース IP アドレスです。
 - SPAN パケットの [フロー ID (Flow ID)] を指定します。指定できる範囲は 1 ~ 1023 です。デフォルトは 1 です。
 - [TTL] またはホップ制限を指定します。範囲は 1 ~ 255 ホップです。ゼロに設定する場合、TTL は指定されません。デフォルトは 64 ホップです。
 - [MTU] 値を指定します。範囲は 64 ~ 9216 です。デフォルトは、1518 です。
 - SPAN 宛先の [DSCP] レベルを指定します。
- ステップ 5** 完了したら、[送信 (Submit)] をクリックします。
- 宛先グループが作成されます。
-

Cisco APIC GUI を使用したアクセス SPAN ポリシーの宛先グループの設定

このセクションでは、Cisco APIC GUI を使用して、アクセス SPAN ポリシーの宛先グループを作成する方法について説明します。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログ ボックスのフィールドに値を入力する必要があります。

SPAN宛先グループと送信元を作成すれば、SPAN宛先のトラフィックアナライザを使用して、SPAN送信元からのデータパケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] をクリックします。

ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] > [SPAN] を展開します。

[SPAN] の下には、[SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]、[SPAN フィルタ グループ (SPAN Filter Groups)]、および [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] の 3 つのノードが表示されます。

ステップ 3 [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] を右クリックして、[SPAN 宛先グループの作成 (Create SPAN Destination Groups)] を選択します。[Create SPAN Destination Group] ダイアログが表示されます。

- [Name] フィールドに、SPAN 宛先グループの名前を入力します。
- オプション。[説明 (Description)] フィールドに、グループの説明を入力します。
- [宛先タイプ (Destination Type)] で、[アプリケーション EPG (Application EPG)] または [L3Out EPG (L3Out EPG)] を選択します。

SPAN パケットの [宛先タイプ (Destination Type)] として [アプリケーション EPG (Application EPG)] を指定する場合は、テナント、アプリケーション プロファイル、および宛先 EPG も含める必要があります。

SPAN パケットの [宛先タイプ (Destination Type)] として [L3Out EPG] を指定する場合は、テナント、L3Out プロファイル、および外部ネットワークも含める必要があります。

- 複製されたパケットを受信するリモート サーバの [宛先 IP (Destination IP)] を指定します。
- [送信元 IP/プレフィックス (Source IP/Prefix)] : 送信元パケットの IP サブネットのベース IP アドレスです。
- SPAN パケットの [フロー ID (Flow ID)] を指定します。指定できる範囲は 1 ~ 1023 です。デフォルトは 1 です。
- [TTL] またはホップ制限を指定します。範囲は 1 ~ 255 ホップです。ゼロに設定する場合、TTL は指定されません。デフォルトは 64 ホップです。
- [MTU] 値を指定します。範囲は 64 ~ 9216 です。デフォルトは、1518 です。
- SPAN 宛先の [DSCP] レベルを指定します。

ステップ4 完了したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

宛先グループが作成されます。

Cisco APIC GUI を使用したファブリック SPAN ポリシーの宛先グループの設定

このセクションでは、Cisco APIC GUI を使用して、ファブリック SPAN ポリシーの宛先グループを作成する方法について説明します。設定手順では、1 つ以上の GUI ダイアログ ボックスのフィールドに値を入力する必要があります。

SPAN宛先グループと送信元を作成すれば、SPAN宛先のトラフィックアナライザを使用して、SPAN送信元からのデータパケットを観察し、パケット形式、アドレス、プロトコルおよびその他の情報を確認できます。



(注) スパン送信元をスパインポートとして構成し、L3Outを接続先として選択すると、対応するスパインノードで障害が発生し、無効な構成について通知されます。

手順

ステップ1 メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] をクリックします。

ステップ2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [トラブルシューティング (Troubleshooting)] > [SPAN] を展開します。

[SPAN] の下には、[SPAN 送信元グループ (SPAN Source Groups)]、[SPAN フィルタ グループ (SPAN Filter Groups)]、および [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] の 3 つのノードが表示されます。

ステップ3 [SPAN 宛先グループ (SPAN Destination Groups)] を右クリックして、[SPAN 宛先グループの作成 (Create SPAN Destination Groups)] を選択します。[Create SPAN Destination Group] ダイアログが表示されます。

- [Name] フィールドに、SPAN 宛先グループの名前を入力します。
- オプション。[説明 (Description)] フィールドに、グループの説明を入力します。
- [宛先タイプ (Destination Type)] で、[アプリケーション EPG (Application EPG)] または [L3Out EPG (L3Out EPG)] を選択します。

SPAN パケットの [宛先タイプ (Destination Type)] として [アプリケーション EPG (Application EPG)] を指定する場合は、テナント、アプリケーションプロファイル、および宛先 EPG も含める必要があります。

SPAN パケットの [宛先タイプ (Destination Type)] として [L3Out EPG] を指定する場合は、テナント、L3Out プロファイル、および外部ネットワークも含める必要があります。

- d) 複製されたパケットを受信するリモート サーバの [宛先 IP (Destination IP)] を指定します。
- e) [送信元 IP/プレフィックス (Source IP/Prefix)] : 送信元パケットの IP サブネットのベース IP アドレスです。
- f) SPAN パケットの [フロー ID (Flow ID)] を指定します。指定できる範囲は 1 ~ 1023 です。デフォルトは 1 です。
- g) [TTL] またはホップ制限を指定します。範囲は 1 ~ 255 ホップです。ゼロに設定する場合、TTL は指定されません。デフォルトは 64 ホップです。
- h) [MTU] 値を指定します。範囲は 64 ~ 9216 です。デフォルトは、1518 です。
- i) SPAN 宛先の [DSCP] レベルを指定します。

ステップ 4 完了したら、[送信 (Submit)] をクリックします。

宛先グループが作成されます。

次のタスク

まだ作成していない場合は、ファブリック SPAN ポリシーの送信元を設定します。

NX-OS スタイルの CLI を使用した SPAN の構成

NX-OS スタイルの CLI を使用したアクセス モードでのローカル SPAN の設定

これは、アクセスリーフ ノードにローカルな従来の SPAN 設定です。1つ以上のアクセスポートまたはポート チャネルから発信されたトラフィックをモニタリングし、同じリーフ ノードにローカルな宛先ポートに送信できます。

手順

ステップ 1 **configure terminal**

グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

例 :

```
apic1# configure terminal
```

ステップ 2 **[no] monitor access session session-name**

アクセス モニタリング セッション設定を作成します。

例 :

```
apic1(config)# monitor access session mySession
```

ステップ 3 **[no] description text**

このアクセス モニタリング セッションの説明を追加します。テキストにスペースが含まれている場合は、単一引用符で囲む必要があります。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# description "This is my SPAN session"
```

ステップ 4 [no] **destination interface ethernet slot/port leaf node-id**

宛先インターフェイスを指定します。宛先インターフェイスを FEX ポートにすることはできません。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# destination interface ethernet 1/2 leaf 101
```

ステップ 5 [no] **source interface ethernet {[fex]/slot/port | port-range} leaf node-id**

送信元インターフェイス ポートまたはポート範囲を指定します。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# source interface ethernet 1/2 leaf 101
```

ステップ 6 **drop enable**

ASIC でドロップされたすべてのパケットをキャプチャし、事前設定された SPAN 宛先に送信する、SPAN オン ドロップ機能をイネーブルにします。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# drop enable
```

ステップ 7 [no] **direction {rx | tx | both}**

モニタリングするトラフィックの方向を指定します。方向は、送信元ポートごとに独立して設定できます。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# direction tx
```

ステップ 8 [no] **filter tenant tenant-name application application-name epg epg-name**

モニタリングするトラフィックのフィルタ処理を行います。フィルタは、送信元ポート範囲ごとに独立して設定できます。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# filter tenant t1 application appl epg epg1
```

ステップ 9 **exit**

アクセス モニタリング セッション設定モードに戻ります。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# exit
```

ステップ 10 [no] **destination interface port-channel port-channel-name-list leaf node-id**

宛先インターフェイスを指定します。宛先インターフェイスを FEX ポートにすることはできません。

(注)

リリース 4.1(1) 以降、コマンド例に示すように、宛先インターフェイスとしてスタティックポートチャンネルを使用できるようになりました。

例：

```
apic1(config-monitor-access)# destination interface port-channel pc1 leaf 101
```

ステップ 11 [no] source interface port-channel port-channel-name-list leaf node-id [fex fex-id]

送信元インターフェイス ポート チャンネルを指定します。

(トラフィックの方向とフィルタ設定を入力します。ここには表示されていません)。

例：

```
apic1(config-monitor-access)# source interface port-channel pc5 leaf 101
```

ステップ 12 [no] filter tenant tenant-name l3out L3Out-name vlan interface-VLAN

モニタリングするトラフィックのフィルタ処理を行います。フィルタは、送信元ポート範囲ごとに独立して設定できます。

(注)

リリース 4.1(1) 以降、例に示すように、L3Out インターフェイス フィルタリングを設定するときに IP プレフィックスを指定する必要がなくなりました。

例：

```
apic1(config-monitor-access-source)# filter tenant t1 l3out l3out1 vlan 2820
```

ステップ 13 [no] shutdown

モニタリングセッションをディセーブル (またはイネーブル) にします。

例：

```
apic1(config-monitor-access)# no shut
```

例

この例は、ローカル アクセス モニタリング セッションを設定する方法を示しています。

```
apic1# configure terminal
apic1(config)# monitor access session mySession
apic1(config-monitor-access)# description "This is my SPAN session"
apic1(config-monitor-access)# destination interface ethernet 1/2 leaf 101
apic1(config-monitor-access)# source interface ethernet 1/1 leaf 101
apic1(config-monitor-access)# drop enable
apic1(config-monitor-access-source)# direction tx
apic1(config-monitor-access-source)# filter tenant t1 application appl epg epg1
```

```
apicl(config-monitor-access-source)# exit
apicl(config-monitor-access)# no shut
apicl(config-monitor-access)# show run
# Command: show running-config monitor access session mySession
# Time: Fri Nov 6 23:55:35 2015
monitor access session mySession
  description "This is my SPAN session"
  destination interface eth 1/2 leaf 101
  source interface eth 1/1 leaf 101
  direction tx
  filter tenant t1 application appl epg epg
  exit
exit
```

NX-OS スタイルの CLI を使用した SPAN フィルタ グループの設定

次の手順では、SPAN フィルタ グループとフィルタ エントリを設定する方法について説明します。

手順

ステップ 1 **configure**

グローバル設定モードを開始します。

例：

```
apicl# configure
```

ステップ 2 **[no] monitor access filter-group filtergroup-name**

アクセス モニタリング フィルタ グループ設定を作成します。

例：

```
apicl(config)# monitor access filter-group filtergroup1
```

ステップ 3 **[no] filter srcaddress source-address dstaddress destination-address srcport-from source-from-port srcport-to source-to-port dstport-from destination-from-port dstport-to destination-to-port ipproto IP-protocol**

フィルタ グループのフィルタ エントリを設定します。ここで、

- **source-address** は、**IP** アドレス/マスク 形式の送信元 IP アドレスです。IPv4 アドレスおよび IPv6 アドレスのどちらもサポートされています。**0.0.0.0** の値は、このフィールドで **任意の IPv4 アドレス エントリ** を指定するために、**::** の値は、**任意の IPv6 アドレス エントリ** を指定するために使用します。
- **destination-address** は、**IP** アドレス/マスク 形式の宛先 IP アドレスです。IPv4 アドレスおよび IPv6 アドレスのどちらもサポートされています。**0.0.0.0** の値は、このフィールドで **任意の IPv4 アドレス エントリ** を指定するために、**::** の値は、**任意の IPv6 アドレス エントリ** を指定するために使用します。

- *source-from-port* は、最初の送信元レイヤ 4 ポートです。このフィールドは、**srcport-to** フィールドとともに、送信元ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値 **0** は、このフィールドで**任意**のエントリを指定するために使用します。
- *source-to-port* は、最後の送信元レイヤ 4 ポートです。このフィールドは、**srcport-from** フィールドとともに、送信元ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値 **0** は、このフィールドで**任意**のエントリを指定するために使用します。
- *destination-from-port* は、最初の宛先レイヤ 4 ポートです。このフィールドは、**dstport-to** フィールドとともに、宛先ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値 **0** は、このフィールドで**任意**のエントリを指定するために使用します。
- *destination-to-port* は、最後の宛先レイヤ 4 ポートです。このフィールドは、**dstport-from** フィールドとともに、宛先ポートをフィルタリングするためのポート範囲を指定します。値 **0** は、このフィールドで**任意**のエントリを指定するために使用します。
- *IP-protocol* は IP プロトコルです。値 **0** は、このフィールドで**任意**のエントリを指定するために使用します。

例：

```
apic1(config-monitor-fltgrp)# filter srcaddress 1.1.1.0/24 dstaddress 0.0.0.0 srcport-from  
0 srcport-to 0 dstport-from 0 dstport-to 0 ipproto 20
```

ステップ 4 exit

アクセス モニター フィルタ グループ設定モードに戻ります。

例：

```
apic1(config-monitor-fltgrp)# exit
```

ステップ 5 exit

グローバル コンフィギュレーション モードを終了します。

例：

```
apic1(config)# exit
```

例

この例は、SPAN フィルタ グループとフィルタ エントリを設定する方法を示しています。

```
apic1# configure  
apic1(config)# monitor access filter-group filtergroup1  
apic1(config-monitor-fltgrp)# filter srcaddress 1.1.1.0/24 dstaddress 0.0.0.0 srcport-from  
0 srcport-to 0 dstport-from 0 dstport-to 0 ipproto 20  
apic1(config-monitor-fltgrp)# exit  
apic1(config)# exit
```

NX-OS スタイルの CLI を使用した SPAN フィルタ グループの関連付け

次の手順では、フィルタ グループを SPAN 送信元グループに関連付ける方法について説明します。

手順

ステップ 1 **configure**

グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

例：

```
apicl# configure
```

ステップ 2 **[no] monitor access session *session-name***

アクセス モニタリング セッション設定を作成します。

例：

```
apicl(config)# monitor access session session1
```

ステップ 3 **filter-group *filtergroup-name***

フィルタ グループを関連付けます。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# filter-group filtergroup1
```

ステップ 4 **no filter-group**

必要に応じて、フィルタ グループの関連付けを解除します。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# no filter-group
```

ステップ 5 **[no] source interface ethernet {[*fx*]/*slot/port* | *port-range*} leaf *node-id***

送信元インターフェイス ポートまたはポート範囲を指定します。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# source interface ethernet 1/9 leaf 101
```

ステップ 6 **filter-group *filtergroup-name***

フィルタ グループを SPAN 送信元に関連付けます。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# filter-group filtergroup2
```

ステップ 7 **exit**

アクセス モニター フィルタ グループ設定モードに戻ります。

例：

```
apic1(config-monitor-access-source)# exit
```

ステップ 8 no filter-group

必要に応じて、SPAN 送信元からフィルタ グループの関連付けを解除します。

例：

```
apic1(config-monitor-access-source)# no filter-group
```

ステップ 9 exit

アクセス モニター フィルタ グループ設定モードに戻ります。

例：

```
apic1(config-monitor-access)# exit
```

ステップ 10 exit

グローバル コンフィギュレーション モードを終了します。

例：

```
apic1(config)# exit
```

例

この例は、フィルタ グループを関連付ける方法を示しています。

```
apic1# configure
apic1(config)# monitor access session session1
apic1(config-monitor-access)# filter-group filtergroup1
apic1(config-monitor-access)# source interface ethernet 1/9 leaf 101
apic1(config-monitor-access-source)# filter-group filtergroup2
apic1(config-monitor-access-source)# exit
apic1(config-monitor-access-source)# no filter-group
apic1(config-monitor-access)# exit
apic1(config)# exit
```

NX-OS スタイルの CLI を使用したアクセス モードでの ERSPAN の設定

ACI ファブリックでは、アクセス モードの ERSPAN 設定を使用して、1 つ以上のリーフ ノードのアクセス ポート、ポート チャネル、および vPC から発信されたトラフィックを監視できます。

ERSPAN セッションの場合、宛先は常にエンドポイント グループ (EPG) で、これらはファブリック内のどこにでも展開できます。監視対象のトラフィックは、どこであれ、EPG が移動した場所である宛先に転送されます。

手順

ステップ 1 **configure terminal**

グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

例：

```
apicl# configure terminal
```

ステップ 2 **[no] monitor access session session-name**

アクセス モニタリング セッション設定を作成します。

例：

```
apicl(config)# monitor access session mySession
```

ステップ 3 **[no] description text**

このモニタリングセッションの説明を追加します。テキストにスペースが含まれている場合は、単一引用符で囲む必要があります。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# description "This is my access ERSPAN session"
```

ステップ 4 **[no] destination tenant tenant-name application application-name epg epg-name destination-ip dest-ip-address source-ip-prefix src-ip-address**

宛先インターフェイスをテナントとして指定し、宛先コンフィギュレーションモードを開始します。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# destination tenant t1 application appl1 epg epg1 destination-ip 192.0.20.123 source-ip-prefix 10.0.20.1
```

ステップ 5 **[no] erspan-id flow-id**

ERSPAN セッションの ERSPAN ID を設定します。ERSPAN の範囲は 1 ～ 1023 です。

例：

```
apicl(config-monitor-access-dest)# erspan-id 100
```

ステップ 6 **[no] ip dscp dscp-code**

ERSPAN トラフィックのパケットの DiffServ コードポイント (DSCP) 値を設定します。指定できる範囲は 0 ～ 64 です。

例：

```
apicl(config-monitor-access-dest)# ip dscp 42
```

ステップ 7 **[no] ip ttl ttl-value**

ERSPAN トラフィックの IP 存続可能時間 (TTL) 値を設定します。範囲は 1 ～ 255 です。

例：

```
apic1(config-monitor-access-dest)# ip ttl 16
```

ステップ 8 [no] mtu *mtu-value*

ERSPAN セッションの最大伝送単位 (MTU) サイズを設定します。指定できる範囲は 64 ~ 9216 バイトです。

例 :

```
apic1(config-monitor-access-dest)# mtu 9216
```

ステップ 9 exit

モニター アクセス設定モードに戻ります。

例 :

```
apic1(config-monitor-access-dest)#
```

ステップ 10 [no] source interface ethernet {[fex/]slot/port | port-range} leaf *node-id*

送信元インターフェイス ポートまたはポート範囲を指定します。

例 :

```
apic1(config-monitor-access)# source interface eth 1/2 leaf 101
```

ステップ 11 [no] source interface port-channel *port-channel-name-list* leaf *node-id* [fex *fex-id*]

送信元インターフェイスのポートチャンネルを指定します。

例 :

```
apic1(config-monitor-access)# source interface port-channel pc1 leaf 101
```

ステップ 12 [no] source interface vpc *vpc-name-list* leaf *node-id1* *node-id2* [fex *fex-id1* *fex-id2*]

送信元インターフェイス vPC を指定します。

例 :

```
apic1(config-monitor-access)# source interface vpc pc1 leaf 101 102
```

ステップ 13 drop enable

ASIC でドロップされたすべてのパケットをキャプチャし、事前設定された SPAN 宛先に送信する、SPAN オン ドロップ機能をイネーブルにします。

例 :

```
apic1(config-monitor-access-source)# drop enable
```

ステップ 14 [no] direction {rx | tx | both}

モニタリングするトラフィックの方向を指定します。方向は、送信元ポートごとに独立して設定できます。

例 :

```
apic1(config-monitor-access-source)# direction tx
```

ステップ 15 [no] filter tenant *tenant-name* application *application-name* epg *epg-name*

モニタリングするトラフィックのフィルタ処理を行います。フィルタは、送信元ポート範囲ごとに独立して設定できます。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# filter tenant t1 application appl epg epg1
```

ステップ 16 exit

アクセス モニタリング セッション設定モードに戻ります。

例：

```
apicl(config-monitor-access-source)# exit
```

ステップ 17 [no] shutdown

モニタリング セッションをディセーブル（またはイネーブル）にします。

例：

```
apicl(config-monitor-access)# no shut
```

例

この例は、ERSPAN アクセス モニタリング セッションを設定する方法を示しています。

```
apicl# configure terminal
apicl(config)# monitor access session mySession
apicl(config-monitor-access)# description "This is my access ERSPAN session"
apicl(config-monitor-access)# destination tenant t1 application appl epg epg1
apicl(config-monitor-access)# destination-ip 192.0.20.123 source-ip-prefix 10.0.20.1
apicl(config-monitor-access-dest)# erspan-id 100
apicl(config-monitor-access-dest)# ip dscp 42
apicl(config-monitor-access-dest)# ip ttl 16
apicl(config-monitor-access-dest)# mtu 9216
apicl(config-monitor-access-dest)# exit
apicl(config-monitor-access)# source interface eth 1/1 leaf 101
apicl(config-monitor-access-source)# direction tx
apicl(config-monitor-access-source)# drop enable
apicl(config-monitor-access-source)# filter tenant t1 application appl epg epg1
apicl(config-monitor-access-source)# exit
apicl(config-monitor-access)# no shut
apicl(config-monitor-access)# show run
# Command: show running-config monitor access session mySession
# Time: Fri Nov 6 23:55:35 2015
monitor access session mySession
  description "This is my ERSPAN session"
  source interface eth 1/1 leaf 101
  direction tx
  filter tenant t1 application appl epg epg1
  exit
  destination tenant t1 application appl epg epg1 destination-ip 192.0.20.123
source-ip-prefix 10.0.20.1
  ip dscp 42
  ip ttl 16
  erspan-id 9216
```

```

    mtu 9216
    exit
exit

```

この例は、モニタリング送信元としてポート チャネルを設定する方法を示しています。

```
apic1(config-monitor-access)# source interface port-channel pc3 leaf 105
```

この例は、モニタリング送信元として vPC の 1 つのレッグを設定する方法を示しています。

```
apic1(config-monitor-access)# source interface port-channel vpc3 leaf 105
```

次の例は、FEX 101 からのポートの範囲をモニタリング送信元として設定する方法を示しています。

```
apic1(config-monitor-access)# source interface eth 101/1/1-2 leaf 105
```

NX-OS スタイルの CLI を使用したファブリック モードでの ERSPAN の設定

ACI ファブリックでは、ファブリック モードの ERSPAN 設定を使用して、リーフ ノードまたはスパイン ノードの 1 つ以上のファブリック ポートから発信されたトラフィックをモニタリングできます。ローカル SPAN はファブリック モードではサポートされていません。

ERSPAN セッションの場合、宛先は常にエンドポイント グループ (EPG) で、これらはファブリック内のどこにでも展開できます。監視対象のトラフィックは、どこであれ、EPG が移動した場所である宛先に転送されます。ファブリック モードでは、ファブリック ポートのみが送信元として許可されますが、リーフ スイッチとスパイン スイッチの両方が許可されます。

手順

ステップ 1 **configure terminal**

グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

例 :

```
apic1# configure terminal
```

ステップ 2 **[no] monitor fabric session session-name**

ファブリック モニタリング セッション設定を作成します。

例 :

```
apic1(config)# monitor fabric session mySession
```

ステップ 3 **[no] description text**

このモニタリングセッションの説明を追加します。テキストにスペースが含まれている場合は、単一引用符で囲む必要があります。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric)# description "This is my fabric ERSPAN session"
```

ステップ 4 [no] **destination tenant** *tenant-name* **application** *application-name* **epg** *epg-name* **destination-ip** *dest-ip-address* **source-ip-prefix** *src-ip-address*

宛先インターフェイスをテナントとして指定し、宛先コンフィギュレーションモードを開始します。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric)# destination tenant t1 application appl epg epg1
destination-ip 192.0.20.123 source-ip-prefix 10.0.20.1
```

ステップ 5 [no] **erspan-id** *flow-id*

ERSPAN セッションの ERSPAN ID を設定します。ERSPAN の範囲は 1 ～ 1023 です。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric-dest)# erspan-id 100
```

ステップ 6 [no] **ip dscp** *dscp-code*

ERSPAN トラフィックのパケットの DiffServ コードポイント (DSCP) 値を設定します。指定できる範囲は 0 ～ 64 です。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric-dest)# ip dscp 42
```

ステップ 7 [no] **ip ttl** *ttl-value*

ERSPAN トラフィックの IP 存続可能時間 (TTL) 値を設定します。範囲は 1 ～ 255 です。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric-dest)# ip ttl 16
```

ステップ 8 [no] **mtu** *mtu-value*

ERSPAN セッションの最大伝送単位 (MTU) サイズを設定します。指定できる範囲は 64 ～ 9216 バイトです。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric-dest)# mtu 9216
```

ステップ 9 **exit**

モニター アクセス設定モードに戻ります。

例：

```
apicl(config-monitor-fabric-dest)#
```

ステップ 10 [no] **source interface ethernet** *{slot/port | port-range}* **switch** *node-id*

送信元インターフェイス ポートまたはポート範囲を指定します。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric)# source interface eth 1/2 switch 101
```

ステップ 11 drop enable

ASIC でドロップされたすべてのパケットをキャプチャし、事前設定された SPAN 宛先に送信する、SPAN オン ドロップ機能をイネーブルにします。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric-source)# drop enable
```

ステップ 12 [no] direction {rx | tx | both}

モニタリングするトラフィックの方向を指定します。方向は、送信元ポートごとに独立して設定できます。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric-source)# direction tx
```

ステップ 13 [no] filter tenant *tenant-name* **bd** *bd-name*

ブリッジ ドメインでトラフィックをフィルタリングします。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric-source)# filter tenant t1 bd bd1
```

ステップ 14 [no] filter tenant *tenant-name* **vrf** *vrf-name*

VRF でトラフィックをフィルタリングします。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric-source)# filter tenant t1 vrf vrf1
```

ステップ 15 exit

アクセス モニタリング セッション設定モードに戻ります。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric-source)# exit
```

ステップ 16 [no] shutdown

モニタリング セッションをディセーブル (またはイネーブル) にします。

例 :

```
apic1(config-monitor-fabric)# no shut
```

例

この例は、ERSPAN ファブリック モニタリング セッションを設定する方法を示しています。

```
apicl# configure terminal
apicl(config)# monitor fabric session mySession
apicl(config-monitor-fabric)# description "This is my fabric ERSPAN session"
apicl(config-monitor-fabric)# destination tenant t1 application appl epg epg1
destination-ip 192.0.20.123 source-ip-prefix 10.0.20.1
apicl(config-monitor-fabric-dest)# erspan-id 100
apicl(config-monitor-fabric-dest)# ip dscp 42
apicl(config-monitor-fabric-dest)# ip ttl 16
apicl(config-monitor-fabric-dest)# mtu 9216
apicl(config-monitor-fabric-dest)# exit
apicl(config-monitor-fabric)# source interface eth 1/1 switch 101
apicl(config-monitor-fabric-source)# drop enable
apicl(config-monitor-fabric-source)# direction tx
apicl(config-monitor-fabric-source)# filter tenant t1 bd bd1
apicl(config-monitor-fabric-source)# filter tenant t1 vrf vrf1
apicl(config-monitor-fabric-source)# exit
apicl(config-monitor-fabric)# no shut
```

NX-OS スタイルの CLI を使用したテナント モードでの ERSPAN の設定

ACI ファブリックでは、テナントモードの ERSPAN 設定を使用して、テナント内のエンドポイント グループから発信されたトラフィックをモニタリングできます。

テナントモードでは、送信元 EPG から発信されたトラフィックは、同じテナント内の宛先 EPG に送信されます。送信元または宛先の EPG がファブリック内で移動しても、トラフィックのモニタリングには影響しません。

手順

ステップ 1 **configure terminal**

グローバル設定モードを開始します。

例：

```
apicl# configure terminal
```

ステップ 2 **[no] monitor tenant tenant-name session session-name**

テナント モニタリング セッション設定を作成します。

例：

```
apicl(config)# monitor tenant session mySession
```

ステップ 3 **[no] description text**

このアクセス モニタリング セッションの説明を追加します。テキストにスペースが含まれている場合は、単一引用符で囲む必要があります。

例：

```
apicl(config-monitor-tenant)# description "This is my tenant ERSPAN session"
```

ステップ 4 [no] **destination tenant** *tenant-name* **application** *application-name* **epg** *epg-name* **destination-ip** *dest-ip-address* **source-ip-prefix** *src-ip-address*

宛先インターフェイスをテナントとして指定し、宛先コンフィギュレーションモードを開始します。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant)# destination tenant t1 application appl epg epg1
destination-ip 192.0.20.123 source-ip-prefix 10.0.20.1
```

ステップ 5 [no] **erspan-id** *flow-id*

ERSpan セッションの ERSpan ID を設定します。ERSpan の範囲は 1 ～ 1023 です。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant-dest)# erspan-id 100
```

ステップ 6 [no] **ip dscp** *dscp-code*

ERSpan トラフィックのパケットの DiffServ コードポイント (DSCP) 値を設定します。指定できる範囲は 0 ～ 64 です。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant-dest)# ip dscp 42
```

ステップ 7 [no] **ip ttl** *ttl-value*

ERSpan トラフィックの IP 存続可能時間 (TTL) 値を設定します。範囲は 1 ～ 255 です。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant-dest)# ip ttl 16
```

ステップ 8 [no] **mtu** *mtu-value*

ERSpan セッションの最大伝送単位 (MTU) サイズを設定します。指定できる範囲は 64 ～ 9216 バイトです。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant-dest)# mtu 9216
```

ステップ 9 **exit**

モニター アクセス設定モードに戻ります。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant-dest)#
```

ステップ 10 [no] **source application** *application-name* **epg** *epg-name*

送信元インターフェイス ポートまたはポート範囲を指定します。

例：

```
apic1(config-monitor-tenant)# source application app2 epg epg5
```

ステップ 11 [no] **direction** {rx | tx | both}

モニタリングするトラフィックの方向を指定します。方向は、送信元ポートごとに独立して設定できます。

例：

```
apicl(config-monitor-tenant-source)# direction tx
```

ステップ 12 exit

アクセス モニタリング セッション設定モードに戻ります。

例：

```
apicl(config-monitor-tenant-source)# exit
```

ステップ 13 [no] shutdown

モニタリングセッションをディセーブル（またはイネーブル）にします。

例：

```
apicl(config-monitor-tenant)# no shut
```

例

この例は、ERSPAN テナント モニタリングセッションを設定する方法を示しています。

```
apicl# configure terminal
apicl(config)# monitor access session mySession
apicl(config-monitor-tenant)# description "This is my tenant ERSPAN session"
apicl(config-monitor-tenant)# destination tenant t1 application appl1 epg epg1
destination-ip 192.0.20.123 source-ip-prefix 10.0.20.1
apicl(config-monitor-tenant-dest)# erspan-id 100
apicl(config-monitor-tenant-dest)# ip dscp 42
apicl(config-monitor-tenant-dest)# ip ttl 16
apicl(config-monitor-tenant-dest)# mtu 9216
apicl(config-monitor-tenant-dest)# exit
apicl(config-monitor-tenant)# source application app2 epg epg5
apicl(config-monitor-tenant-source)# direction tx
apicl(config-monitor-tenant-source)# exit
apicl(config-monitor-tenant)# no shut
```

NX-OS スタイルの CLI を使用したグローバル SPAN-On-Drop セッションの設定

このセクションでは、ノード上のすべてのポートを SPAN 送信元とするグローバル ドロップを作成する方法を示します。

手順

ステップ 1 configure terminal

グローバル コンフィギュレーション モードを開始します。

例：

```
apic1# configure terminal
```

ステップ 2 [no] monitor fabric session *session-name*

ファブリック モニタリング セッション設定を作成します。

例：

```
apic1(config)# monitor fabric session Spine301-GD-SOD
```

ステップ 3 [no] description *text*

このモニタリング セッションの説明を追加します。テキストにスペースが含まれている場合は、単一引用符で囲む必要があります。

例：

```
apic1(config-monitor-fabric)# description "This is my fabric ERSPAN session"
```

ステップ 4 source global-drop switch

ASIC でドロップされたすべてのパケットをキャプチャし、事前設定された SPAN 宛先に送信する、SPAN オン ドロップ機能をイネーブルにします。

例：

```
apic1(config-monitor-fabric)# source global-drop switch
```

ステップ 5 [no] destination tenant *tenant-name* application *application-name* epg *epg-name* destination-ip *dest-ip-address* source-ip-prefix *src-ip-address*

宛先インターフェイスをテナントとして指定し、宛先コンフィギュレーションモードを開始します。

例：

```
apic1(config-monitor-fabric-dest)# destination tenant ERSPAN application A1 epg E1  
destination-ip 165.10.10.155 source-ip-prefix 22.22.22.22
```

例

次に、SPAN-on-Drop セッションを設定する例を示します。

```
apic1# configure terminal  
apic1(config)# monitor fabric session Spine301-GD-SOD  
apic1(config-monitor-fabric)# source global-drop switch  
apic1(config-monitor-fabric)# destination tenant ERSPAN application A1 epg E1  
destination-ip 179.10.10.179 source-ip-prefix 31.31.31.31
```

REST API を使用した SPAN の構成

REST API を使用した ERSPAN 宛先のファブリック宛先グループの設定

このセクションでは、REST API を使用して、ERSPAN 宛先のファブリック宛先グループを設定することにより、REST API の使用方法を示します。使用可能なプロパティのリストについては、『*APIC 管理情報モデル資料*』を参照してください。

手順

ERSPAN 宛先のファブリック宛先グループを設定します。

```
POST https://<APIC_IP>/api/node/mo/uni/infra.xml
<spanDestGrp annotation="" descr="" name="Dest2" nameAlias="" ownerKey="" ownerTag="">
  <spanDest annotation="" descr="" name="Dest2" nameAlias="" ownerKey="" ownerTag="">
    <spanRsDestEpg annotation="" dscp="unspecified" finalIp="0.0.0.0" flowId="1"
ip="179.10.10.179"
    mtu="1518"srcIpPrefix="20.20.20.2" tDn="uni/tn-ERSPAN/ap-A1/epg-E1" ttl="64"
ver="ver2"
    verEnforced="no"/>
  </spanDest>
</spanDestGrp>
```

REST API を使用したグローバル ドロップ送信元グループの設定

このセクションでは、REST API を使用してグローバル ドロップ送信元グループを構成することにより、REST API の使用方法を示します。使用可能なプロパティのリストについては、『*APIC 管理情報モデル資料*』を参照してください。

手順

グローバル ドロップ送信元グループを構成します。

```
POST https://<APIC_IP>/api/node/mo/uni/infra.xml
<spanSrcGrp adminSt="enabled" annotation="" descr="" name="Spine-402-GD-SOD" nameAlias="">
  <spanSrc annotation="" descr="" dir="both" name="402" nameAlias="" spanOnDrop="yes">
    <spanRsSrcToNode annotation="" tDn="topology/pod-1/node-402"/>
    </spanSrc><spanSpanLbl annotation="" descr="" name="402-dst-179" nameAlias=""
tag="yellow-green"/>
  </spanSrcGrp>
```

REST API を使用した SPAN 宛先としてのリーフポートの設定

このセクションでは、REST API を使用してリーフポートを SPAN 宛先として設定することにより、REST API の使用方法を示します。使用可能なプロパティのリストについては、『*APIC 管理情報モデル資料*』を参照してください。

手順

リーフポートを SPAN 宛先として設定します。

```
POST https://<APIC_IP>/api/node/mo/uni/infra.xml
<spanDestGrp annotation="" descr="" name="Dest4" nameAlias="" ownerKey="" ownerTag="">
  <spanDest annotation="" descr="" name="Dest4" nameAlias="" ownerKey="" ownerTag="">
    <spanRsDestPathEp annotation="" mtu="1518"
tDn="topology/pod-1/paths-301/pathep-[eth1/18]"/>
  </spanDest>
</spanDestGrp>
```

REST API を使用した SPAN アクセス送信元グループの設定

このセクションでは、REST API を使用して SPAN アクセス ソース グループを設定することにより、REST API の使用方法を示します。使用可能なプロパティのリストについては、『*APIC 管理情報モデル資料*』を参照してください。

手順

SPAN アクセス送信元グループを設定します。

```
POST https://<APIC_IP>/api/node/mo/uni/infra.xml
<spanSrcGrp adminSt="enabled" annotation="" descr="" name="Test-Src2" nameAlias=""
ownerKey=""
ownerTag="">
  <spanSrc annotation="" descr="" dir="both" name="Src1" nameAlias="" ownerKey=""
ownerTag=""
spanOnDrop="yes">
    <spanRsSrcToPathEp annotation="" tDn="topology/pod-1/paths-301/pathep-[eth1/1]"/>
  </spanSrc>
  <spanSpanLbl annotation="" descr="" name="Dest1" nameAlias="" ownerKey="" ownerTag=""

tag="yellow-green"/>
</spanSrcGrp>
```

REST API を使用した SPAN ファブリック送信元グループの設定

このセクションでは、REST API を使用して SPAN ファブリック送信元グループを設定することにより、REST API の使用方法を示します。使用可能なプロパティのリストについては、『APIC 管理情報モデル資料』を参照してください。

手順

SPAN ファブリック送信元グループを設定します。

```
POST https://<APIC_IP>/api/node/mo/uni/infra.xml
<spanSrcGrp adminSt="enabled" annotation="" descr="" name="Test-Src2" nameAlias=""
ownerKey=""
ownerTag="">
  <spanSrc annotation="" descr="" dir="both" name="Src1" nameAlias="" ownerKey=""
ownerTag="" spanOnDrop="yes">
  <spanRsSrcToPathEp annotation="" tDn="topology/pod-1/paths-301/pathep-[eth1/51]" />
</spanSrc>
  <spanSpanLbl annotation="" descr="" name="Dest2" nameAlias="" ownerKey="" ownerTag=""
tag="yellow-green" />
</spanSrcGrp>
```

REST API を使用した ERSPAN 宛先のアクセス宛先グループの設定

このセクションでは、REST API を使用して、ERSPAN 宛先のアクセス宛先グループを設定することにより、REST API の使用方法を示します。使用可能なプロパティのリストについては、『APIC 管理情報モデル資料』を参照してください。

手順

ERSPAN 宛先のアクセス宛先グループを設定します。

```
POST https://<APIC_IP>/api/node/mo/uni/infra.xml
<spanDestGrp annotation="" descr="" name="Dest4" nameAlias="" ownerKey=""
ownerTag="">
  <spanDest annotation="" descr="" name="Dest4" nameAlias="" ownerKey=""
ownerTag="">
  <spanRsDestPathEp annotation="" mtu="1518" tDn="topology/pod-1/paths-301/pathep-
[eth1/18]" />
  </spanDest>
</spanDestGrp>
```

トレースルートの使用

トレースルートの概要

トレースルートツールは、パケットが送信先に移動するときに実際に通るルートを検出するために使用されます。tracertでは、ホップごとに使用されるパスが識別され、双方向で各ホップにタイムスタンプが付けられます。tracertを使用すると、発信元のデバイスと送信先に最も近いデバイスの間のパスに沿ってポート接続をテストできます。送信先に到達できない場合は、パス検出によってパスが障害ポイントまで追跡されます。

テナントのエンドポイントから開始されたトレースルートは、入力リーフのスイッチに表示される中間ホップとしてデフォルトゲートウェイを示します。

トレースルートでは、次のようなさまざまなモードがサポートされています。

- エンドポイント間、リーフ間（トンネルエンドポイント、またはTEP間）
- エンドポイントから外部IP
- 外部IPからエンドポイント
- 外部IP間

トレースルートはファブリック全体のすべてのパスを検出し、外部エンドポイントの出口を検出します。パスが妨げられているかどうかを発見するのに役立ちます。

トレースルートの注意事項および制約事項

- トレースルートの送信元または宛先がエンドポイントである場合、そのエンドポイントはスタティックではなくダイナミックである必要があります。ダイナミックエンドポイント（fv:CEp）とは異なり、スタティックエンドポイント（fv:StCEp）にはトレースルートに必要な子オブジェクト（fv:RsCEpToPathEp）がありません。
- トレースルートはIPv6の送信元と宛先で動作しますが、IPv4アドレスとIPv6アドレスを混在させて送信元IPアドレスと宛先IPアドレスを設定することはできません。
- トレースルート関連の制限については、『*Verified Scalability Guide for Cisco ACI*』ドキュメントを参照してください。
- エンドポイントを新しいMACアドレス（トレースルートポリシーを設定する際に指定したMACアドレスと異なる）のToRスイッチに移動すると、トレースルートポリシーでそのエンドポイントに「missing-target」と表示されます。この場合は、新しいMACアドレスを指定して新しいトレースルートポリシーを設定する必要があります。
- ポリシーベースのリダイレクト機能を含むフローに対してトレースルートを実行する場合、パケットがサービスデバイスからリーフスイッチに送信される際に、リーフスイッチが存続時間（TTL）期限切れメッセージを送信元に伝えるために使用するIPアドレス

は、必ずしもサービス デバイスのブリッジ ドメインのスイッチ仮想インターフェイス (SVI) の IP アドレスにはなりません。この動作は表面的なものであり、トラフィックが予期された経路をたどっていないことを示すものではありません。

エンドポイント間での traceroute の実行

手順

- ステップ 1 メニューバーで、[Tenants] をクリックします。
- ステップ 2 サブメニューバーで、送信元エンドポイントを含むテナントをクリックします。
- ステップ 3 [ナビゲーション] ペインでテナントを展開し、[ポリシー]>[トラブルシューティング] を展開します。
- ステップ 4 [Troubleshoot] で次のトレースルート ポリシーのいずれかを右クリックします。
 - [Endpoint-to-Endpoint Traceroute Policies] を右クリックして [Create Endpoint-to-Endpoint Traceroute Policy] を選択する
 - [Endpoint-to-External-IP Traceroute Policies] を右クリックして [Create Endpoint-to-External-IP Traceroute Policy] を選択する
 - [External-IP-to-Endpoint Traceroute Policies] を右クリックして [Create External-IP-to-Endpoint Traceroute Policy] を選択する
 - [External-IP-to-External-IP Traceroute Policies] を右クリックして [Create External-IP-to-External-IP Traceroute Policy] を選択する
- ステップ 5 ダイアログボックスのフィールドに適切な値を入力し、[Submit] をクリックします。

(注)
フィールドの説明については、ダイアログボックスの右上隅にあるヘルプアイコン (?) をクリックしてください。
- ステップ 6 [Navigation] ペインまたは [Traceroute Policies] テーブルで、traceroute ポリシーをクリックします。

トレースルート ポリシーが [Work] ペインに表示されます。
- ステップ 7 [Work] ペインで [Operational] タブをクリックし、[Source Endpoints] タブ、[Results] タブの順にクリックします。
- ステップ 8 [Traceroute Results] テーブルで、追跡に使用された単数または複数のパスを確認します。

(注)
• 複数のパスが、送信元ノードから宛先ノードへの移動に使用されている場合があります。

- [Name] 列など、1 つまたは複数の列の幅を広げると確認しやすくなります。

acidiag コマンド

Cisco APIC でのトラブルシューティング操作では、**acidiag** コマンドを使用します。



注意 このコマンドは、ACIの日常的な操作を目的としたものではありません。コマンドのすべての形式は、非常に混乱を招く可能性があり、適切に使用しないとネットワークに重大な問題が発生する場合があります。実行する前に、ファブリックへの完全な影響を理解してください。

クラスタ コマンド

```
acidiag
```

```
acidiag avread
```

```
acidiag fnvread
```

```
acidiag fnvreadex
```

構文の説明

オプション

機能

avread

クラスタ内の APIC を表示します。avread の出力は次のとおりです。

- **Cluster of** : 動作するクラスタのサイズ
- **out of target** : 必要なクラスタ サイズ
- **active=** : APIC が到達可能かどうかを示します
- **health=** : 全体的な APIC の正常性の概要。正常性スコアが低下しているサービスを表示します。
- **chassisID=** : 所定の APIC に対する既知のシャーシ ID。

(注)

現在クラスタにない APIC については、ピア シャーシ ID が正しくない可能性があります。

オプション	機能
bootcurr	次回の起動時に、APIC システムは Linux パーティション内の現在の APIC イメージを起動します。このオプションは、通常は使用されません。
bootother	次回の起動時に、APIC システムは Linux パーティションの以前の APIC イメージを起動します。このオプションは、通常は使用されません。
bond0test	リーフへの APIC 接続の中断テスト。これは、シスコの内部テスト目的でのみ使用されます。それ以外では、ファブリックへの APIC 接続で問題が発生する可能性があります。
fnvread	ファブリックに登録されているスイッチ ノードのアドレスと状態を表示します。
fnvreadex	ファブリックに登録されているスイッチのノードの追加情報を表示します。
linkflap	指定された APIC インターフェイスを停止およびバックアップします。
preservelogs	APIC は現在のログをアーカイブします。通常の再起動中に、これは自動的に発生します。このオプションは、ハードリブートの前に使用できます。
run	使用可能な 2 つのオプションは、 <code>iptables-list</code> と <code>lldptool</code> です。 <code>iptables-list</code> は、管理テナントコントラクトによって制御される Linux <code>iptables</code> を表示するために使用されます。 <code>lldptool</code> は、APIC によって送受信される <code>lldp</code> 情報を表示するために使用されます。
rvread	データレイヤの状態を要約します。出力には、各サービスのデータレイヤの状態の概要が表示されます。シャードビューには、レプリカが昇順で表示されます。
acidiag rvread <i>service</i>	すべてのレプリカのすべてのシャードでのサービスのデータレイヤの状態を表示します。 (注) 例については、 例 (148 ページ) を参照してください。

オプション	機能
acidiag rvread service shard	すべてのレプリカの特定のシャードでのサービスのデータレイヤの状態を表示します。 (注) 例については、例 (148 ページ) を参照してください。
acidiag rvread service shard replica	特定のシャードとレプリカでのサービスのデータレイヤの状態を表示します。 (注) 例については、例 (148 ページ) を参照してください。
validateimage	イメージをファームウェア リポジトリにロードする前に、イメージを検証できます。この関数は、リポジトリに追加されるイメージのプロセスの通常の一部として実行されることに注意してください。
validateenginxconf	APIC で生成された nginx 構成ファイルを検証して、nginx がその構成ファイルで起動できることを確認します。これは、nginx Web サーバーが APIC で実行されていない場合のデバッグでの使用を目的としています。

サービス ID

次の表にリストされているサービス ID は、**man acidiag** コマンドを入力するときにも表示されます。

表 4: サービス ID

サービス	ID
cliD	1
コントローラ	2
eventmgr	3
extXMLApi	4
ポリシー要素	5
policymgr	6
リーダー	7

サービス	ID
AE	8
topomgr	9
observer	10
dbgr	11
observerelem	12
dbgrelem	13
vmmmgr	14
nxosmock	15
bootmgr	16
appliancedirector	17
adrelay	18 日
ospaagent	19
vleafelem	20
dhcpd	21
scripthandler	22
idmgr	23
ospaelem	24
osh	25
opflexagent	26
opflexelem	27
confelem	28
vtap	29
snmpd	30
opflexp	31
分析	32
policydist	33
plghandler	34
domainmgr	35

サービス	ID
licensemgr	36
なし	37
platformmgr	38
edmgr	39

表 5: データの状態

州	ID
コマトーセ	0
NEWLY_BORN	1
不明ファイル	2
DATA_LAYER_DIVERGED	11
DATA_LAYER_DEGRADED_LEADERSHIP	12
DATA_LAYER_ENTIRELY_DIVERGED	111
DATA_LAYER_PARTIALLY_DIVERGED	112
DATA_LAYER_ENTIRELY_DEGRADED_LEADERSHIP	121
DATA_LAYER_PARTIALLY_DEGRADED_LEADERSHIP	122
FULLY_FIT	255

システムのキーワード

```
acidiag [start|stop|restart] [mgmt|xinetd]
```

```
acidiag installer -u imageurl -c
```

```
acidiag reboot
```

```
acidiag touch [clean|setup]
```

```
acidiag verifyapic
```

構文の説明

オプション	機能
-c	クリーンインストールを指定します
-u	APIC イメージの URL を指定します。
<i>imageurl</i>	APIC イメージを指定します。

オプション	機能
installer	APIC に新しいイメージをインストールします。 -c でクリーンインストールを実行します。
mgmt	上のすべてのサービスを指定します。APIC
reboot	APIC を再起動します。
restart	APIC でサービスを再起動します。
start	APIC でサービスを開始します。
stop	APIC でサービスを停止します。
touch [clean setup]	APIC の構成をリセットします。 <ul style="list-style-type: none"> • clean オプションは、APIC ネットワーク構成（ファブリック名、IP アドレス、ログインなど）を保持しますが、すべてのポリシー データを削除します。 • setup オプションは、ポリシー データと APIC ネットワーク構成の両方を削除します。
verifyapic	APIC ソフトウェアのバージョンを表示します。
xinetd	ssh および telnet デーモンを制御する xinetd（拡張インターネットデーモン）サービスを指定します。5.3(1) リリース以降、telnet はサポートされていません。

診断キーワード

acidiag crashsuspecttracker

acidiag dbgtoken

acidiag version

構文の説明

オプション	機能
crashsuspecttracker	クラッシュを示すサービスまたはデータのサブセットの状態を追跡します。
dbgtoken	root パスワードの生成に使用するトークンを生成します。これは、必要な場合には、TAC と連携しながら、その指示どおりに使用してください。

オプション	機能
version	APIC ISO ソフトウェアのバージョンを表示します。

例

次に、**acidiag** コマンドの使用例を示します。

```
apic1# acidiag version 2.2.1o
```

```
apic1# acidiag verifyapic
openssl_check: certificate details
subject= CN=ABC12345678,serialNumber=PID:APIC-SERVER-L1 SN:ABC12345678
issuer= CN=Cisco Manufacturing CA,O=Cisco Systems
notBefore=Sep 28 17:17:42 2016 GMT
notAfter=Sep 28 17:27:42 2026 GMT
openssl_check: passed
ssh_check: passed
all_checks: passed
```

```
apic1# acidiag avread
Local appliance ID=1 ADDRESS=10.0.0.1 TEP ADDRESS=10.0.0.0/16 ROUTABLE IP ADDRESS=0.0.0.0
  CHASSIS_ID=1009f750-adab-11e9-a044-8dbd212cd556
Cluster of 7 lm(t):1(2019-08-08T01:02:17.961-07:00) appliances (out of targeted 7
lm(t):7(2019-08-08T03:50:57.240-07:00)) with FABRIC_DOMAIN name=ACI Fabric1 set to
version=apic-4.2(0.235j) lm(t):1(2019-08-17T01:09:16.413-07:00); discoveryMode=PERMISSIVE
  lm(t):0(1969-12-31T17:00:00.007-07:00); drrMode=OFF
lm(t):0(1969-12-31T17:00:00.007-07:00); kafkaMode=OFF
lm(t):0(1969-12-31T17:00:00.007-07:00)
  appliance id=1 address=10.0.0.1 lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00) tep
address=10.0.0.0/16 lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):1(zeroTime) oob address=172.23.96.10/21 lm(t):1(2019-08-08T01:02:18.218-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.158-07:00)
chassisId=1009f750-adab-11e9-a044-8dbd212cd556 lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.158-07:00)
capabilities=0X3EEEEEEEEEE--0X2020--0X7F lm(t):1(2019-08-17T01:13:46.997-07:00)
rK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-08T01:02:18.228-07:00)
aK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-08T01:02:18.228-07:00)
oobrK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-08T01:02:18.228-07:00)
oobaK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-08T01:02:18.228-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, FCH1748V0SZ) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.158-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=1
lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00) commissioned=YES lm(t):1(zeroTime) registered=YES
  lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00) standby=NO lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00)
  DRR=NO lm(t):0(zeroTime) apicX=NO lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00) virtual=NO
lm(t):1(2019-08-08T01:02:08.544-07:00) active=YES(2019-08-08T01:02:08.544-07:00)
health=(applnc:255 lm(t):1(2019-08-17T01:39:26.296-07:00) svc's)
  appliance id=2 address=10.0.0.2 lm(t):7(2019-08-08T03:50:55.470-07:00) tep
address=10.0.0.0/16 lm(t):2(2019-07-23T17:51:38.997-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):0(zeroTime) oob address=172.23.96.11/21 lm(t):1(2019-08-18T23:14:28.720-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):2(2019-08-15T15:22:00.300-07:00)
chassisId=694e6a98-adac-11e9-ad79-d1f60e3ee822 lm(t):2(2019-08-15T15:22:00.300-07:00)
capabilities=0X3EEEEEEEEEE--0X2020--0X2 lm(t):2(2019-08-14T07:55:10.074-07:00)
rK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.829-07:00)
aK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.829-07:00)
oobrK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.829-07:00)
oobaK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.829-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, FCH1748V0MS) lm(t):2(2019-08-15T15:22:00.300-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=1
lm(t):2(2019-08-08T01:42:03.670-07:00) commissioned=YES
```

```
lm(t):1(2019-08-08T01:02:17.961-07:00) registered=YES
lm(t):7(2019-07-24T15:24:25.693-07:00) standby=NO lm(t):2(2019-08-08T01:42:03.670-07:00)
  DRR=NO lm(t):1(2019-08-08T01:02:17.961-07:00) apicX=NO
lm(t):2(2019-08-08T01:42:03.670-07:00) virtual=NO lm(t):0(zeroTime)
active=YES(2019-08-13T17:02:32.983-07:00) health=(applnc:255
lm(t):2(2019-08-17T01:32:51.454-07:00) svc's)
  appliance id=3 address=10.0.0.3 lm(t):7(2019-08-08T03:50:55.470-07:00) tep
address=10.0.0.0/16 lm(t):3(2019-07-23T19:05:56.405-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):0(zeroTime) oob address=172.23.96.12/21 lm(t):1(2019-08-18T23:14:28.721-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):3(2019-08-15T15:21:59.893-07:00)
chassisId=1f98b916-adb7-11e9-a6f8-abe00a04e8e6 lm(t):3(2019-08-15T15:21:59.893-07:00)
capabilities=OX3EEEEEEEEEE--OX2020--OX4 lm(t):3(2019-08-14T07:55:22.256-07:00)
rK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
aK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
oobrK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
oobaK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, FCH1930VLX6) lm(t):3(2019-08-15T15:21:59.893-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=1
lm(t):3(2019-08-08T02:15:20.560-07:00) commissioned=YES
lm(t):2(2019-08-08T01:42:15.337-07:00) registered=YES
lm(t):7(2019-07-24T15:24:25.693-07:00) standby=NO lm(t):3(2019-08-08T02:15:20.560-07:00)
  DRR=NO lm(t):2(2019-08-08T01:42:15.337-07:00) apicX=NO
lm(t):3(2019-08-08T02:15:20.560-07:00) virtual=NO lm(t):0(zeroTime)
active=YES(2019-08-13T17:02:33.182-07:00) health=(applnc:255
lm(t):3(2019-08-15T16:08:46.119-07:00) svc's)
  appliance id=4 address=10.0.0.4 lm(t):7(2019-08-08T03:50:55.470-07:00) tep
address=10.0.0.0/16 lm(t):4(2019-07-23T17:46:15.545-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):0(zeroTime) oob address=172.23.97.231/21 lm(t):1(2019-08-18T23:14:28.717-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):4(2019-08-15T15:22:00.669-07:00)
chassisId=3a7f38aa-adac-11e9-8869-a9e520cdc042 lm(t):4(2019-08-15T15:22:00.669-07:00)
capabilities=OX3EEEEEEEEEE--OX2020--OX8 lm(t):4(2019-08-14T07:54:59.490-07:00)
rK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.825-07:00)
aK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.825-07:00)
oobrK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.825-07:00)
oobaK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.825-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, FCH1902V1WW) lm(t):4(2019-08-15T15:22:00.669-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=1
lm(t):4(2019-08-08T02:40:09.610-07:00) commissioned=YES
lm(t):3(2019-08-08T02:15:32.613-07:00) registered=YES
lm(t):7(2019-07-24T15:24:25.693-07:00) standby=NO lm(t):4(2019-08-08T02:40:09.610-07:00)
  DRR=NO lm(t):3(2019-08-08T02:15:32.613-07:00) apicX=NO
lm(t):4(2019-08-08T02:40:09.610-07:00) virtual=NO lm(t):0(zeroTime)
active=YES(2019-08-15T15:21:59.914-07:00) health=(applnc:255
lm(t):4(2019-08-17T01:39:26.477-07:00) svc's)
  appliance id=5 address=10.0.0.5 lm(t):7(2019-08-08T03:50:55.470-07:00) tep
address=10.0.0.0/16 lm(t):5(2019-07-23T19:05:11.089-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):0(zeroTime) oob address=172.23.97.232/21 lm(t):1(2019-08-18T23:14:28.723-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):5(2019-08-15T15:22:00.248-07:00)
chassisId=35428666-adb7-11e9-a315-1d7671b518b3 lm(t):5(2019-08-15T15:22:00.248-07:00)
capabilities=OX3EEEEEEEEEE--OX2020--OX10 lm(t):5(2019-08-14T07:55:19.573-07:00)
rK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.854-07:00)
aK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.854-07:00)
oobrK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.854-07:00)
oobaK=(stable,present,OX206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.854-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, FCH1902V1EG) lm(t):5(2019-08-15T15:22:00.248-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=1
lm(t):5(2019-08-08T03:03:50.338-07:00) commissioned=YES
lm(t):4(2019-08-08T02:40:15.939-07:00) registered=YES
lm(t):7(2019-07-24T15:24:25.693-07:00) standby=NO lm(t):5(2019-08-08T03:03:50.338-07:00)
  DRR=NO lm(t):4(2019-08-08T02:40:15.939-07:00) apicX=NO
lm(t):5(2019-08-08T03:03:50.338-07:00) virtual=NO lm(t):0(zeroTime)
active=YES(2019-08-15T15:21:59.756-07:00) health=(applnc:255
lm(t):5(2019-08-17T01:32:43.730-07:00) svc's)
  appliance id=6 address=10.0.0.6 lm(t):7(2019-08-08T03:50:55.470-07:00) tep
```

```

address=10.0.0.0/16 lm(t):6(2019-07-23T19:39:41.972-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):0(zeroTime) oob address=172.31.170.230/21 lm(t):1(2019-08-18T23:14:28.727-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):6(2019-08-15T15:22:00.562-07:00)
chassisId=066c943a-adbc-11e9-bbed-257398025731 lm(t):6(2019-08-15T15:22:00.562-07:00)
capabilities=0X3EFFFFFFFF--0X2020--0X20 lm(t):6(2019-08-14T07:55:20.053-07:00)
rK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.820-07:00)
aK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.821-07:00)
oobrK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.821-07:00)
oobaK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.821-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, WZP22350JFT) lm(t):6(2019-08-15T15:22:00.562-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=9
lm(t):6(2019-08-08T03:28:11.246-07:00) commissioned=YES
lm(t):5(2019-08-08T03:03:57.387-07:00) registered=YES
lm(t):7(2019-07-24T15:24:25.693-07:00) standby=NO lm(t):6(2019-08-08T03:28:11.246-07:00)
DRR=NO lm(t):5(2019-08-08T03:03:57.387-07:00) apicX=NO
lm(t):6(2019-08-08T03:28:11.246-07:00) virtual=NO lm(t):0(zeroTime)
active=YES(2019-08-13T17:30:37.663-07:00) health=(applnc:255
lm(t):6(2019-08-15T15:57:05.128-07:00) svc's)
  appliance id=7 address=10.0.0.0/16 lm(t):7(2019-08-08T03:50:48.149-07:00) tep
address=10.0.0.0/16 lm(t):7(2019-07-24T15:24:19.988-07:00) routable address=0.0.0.0
lm(t):0(zeroTime) oob address=172.31.172.157/21 lm(t):1(2019-08-18T23:14:28.722-07:00)
version=4.2(0.235j) lm(t):7(2019-08-15T15:22:00.539-07:00)
chassisId=859be4ae-ae61-11e9-9840-7d9d67698989 lm(t):7(2019-08-15T15:22:00.539-07:00)
capabilities=0X3EFFFFFFFF--0X2020--0X40 lm(t):7(2019-08-14T07:55:23.872-07:00)
rK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
aK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
oobrK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
oobaK=(stable,present,0X206173722D687373) lm(t):1(2019-08-15T15:22:00.824-07:00)
cntrlSbst=(APPROVED, FCH2051V116) lm(t):7(2019-08-15T15:22:00.539-07:00) (targetMbSn=
lm(t):0(zeroTime), failoverStatus=0 lm(t):0(zeroTime)) podId=10
lm(t):7(2019-08-08T03:50:48.149-07:00) commissioned=YES
lm(t):6(2019-08-08T03:28:16.727-07:00) registered=YES
lm(t):6(2019-07-24T15:27:25.518-07:00) standby=NO lm(t):7(2019-08-08T03:50:48.149-07:00)
DRR=NO lm(t):6(2019-08-08T03:28:16.727-07:00) apicX=NO
lm(t):7(2019-08-08T03:50:48.149-07:00) virtual=NO lm(t):0(zeroTime)
active=YES(2019-08-13T17:30:45.488-07:00) health=(applnc:255
lm(t):7(2019-08-17T01:39:26.549-07:00) svc's)
-----
clusterTime=<diff=2817 common=2019-08-19T15:33:55.929-07:00
local=2019-08-19T15:33:53.112-07:00 pF=<displForm=0 offsSt=0 offsVlu=-25200
lm(t):7(2019-08-08T03:50:55.925-07:00)>>
-----

apic1# acidiag rvread 6 3 1
(6,3,1) st:6 lm(t):3(2014-10-16T08:48:20.238+00:00) le: reSt:LEADER voGr:0 cuTerm:0x19
lCoTe:0x18
  lCoIn:0x18000000000001b2a veFiSt:0x31 veFiEn:0x31 lm(t):3(2014-10-16T08:48:20.120+00:00)

  lastUpdt 2014-10-16T09:07:00.214+00:00
-----
clusterTime=<diff=65247252 common=2014-10-16T09:07:01.837+00:00
local=2014-10-15T14:59:34.585+00:00
pF=<displForm=0 offsSt=0 offsVlu=0 lm(t):3(2014-10-16T04:50:08.714+00:00)>>

apic1# acidiag rvread 6 3
(6,3,1) st:6 lm(t):3(2014-10-16T08:48:20.238+00:00) le: reSt:LEADER voGr:0 cuTerm:0x19
lCoTe:0x18
  lCoIn:0x18000000000001b2a veFiSt:0x31 veFiEn:0x31 lm(t):3(2014-10-16T08:48:20.120+00:00)

  lastUpdt 2014-10-16T09:08:30.240+00:00
(6,3,2) st:6 lm(t):1(2014-10-16T08:47:25.323+00:00) le: reSt:FOLLOWER voGr:0 cuTerm:0x19
lCoTe:0x18
  lCoIn:0x18000000000001b2a veFiSt:0x49 veFiEn:0x49 lm(t):1(2014-10-16T08:48:20.384+00:00)

```

```
lp: clSt:2
  lm(t):1(2014-10-16T08:47:03.286+00:00) dbSt:2 lm(t):1(2014-10-16T08:47:02.143+00:00)
stMmt:1
  lm(t):0(zeroTime) dbCrTs:2014-10-16T08:47:02.143+00:00 lastUpdt
2014-10-16T08:48:20.384+00:00
(6,3,3) st:6 lm(t):2(2014-10-16T08:47:13.576+00:00) le: reSt:FOLLOWER voGr:0 cuTerm:0x19
lCoTe:0x18
  lCoIn:0x18000000000001b2a veFiSt:0x43 veFiEn:0x43 lm(t):2(2014-10-16T08:48:20.376+00:00)

  lastUpdt 2014-10-16T09:08:30.240+00:00
-----
clusterTime=<diff=65247251 common=2014-10-16T09:08:30.445+00:00
local=2014-10-15T15:01:03.194+00:00
  pF=<displForm=0 offsSt=0 offsVlu=0 lm(t):3(2014-10-16T04:50:08.714+00:00)>>
```




第 6 章

コア ACI ファブリック サービスのプロビジョニング

この章は、次の内容で構成されています。

- [リンク レベル ポリシー \(153 ページ\)](#)
- [リンク フラップ ポリシー \(155 ページ\)](#)
- [時刻同期と NTP \(156 ページ\)](#)
- [DHCP リレー ポリシーの設定 \(164 ページ\)](#)
- [DNS サービス ポリシーの設定 \(174 ページ\)](#)
- [カスタム証明書の設定 \(179 ページ\)](#)
- [ファブリック全体のシステム設定のプロビジョニング \(184 ページ\)](#)
- [グローバル ファブリック アクセス ポリシーのプロビジョニング \(214 ページ\)](#)
- [ポート単位ポリシー \(220 ページ\)](#)
- [GUI を使用した誤配線プロトコルインターフェイス ポリシーの作成 \(任意\) \(222 ページ\)](#)

リンク レベル ポリシー

アクセス ポリシーの一種であるリンク レベル ポリシーを設定できます。リンク レベル ポリシーには、自動ネゴシエーション、ポート速度、リンク デバウンスなどの物理層 (レイヤ1) インターフェイス設定が含まれます。

電磁場干渉に対する再トレーニング

5.2(4) 以降のリリースには、電磁干渉 (EMI) 再トレーニング機能があり、電磁干渉からのリンク上のノイズのフィルタリングを行い、リンク フラップを回避するようにリンクを再トレーニングできます。データセンター環境に大量の EMI ノイズが存在する場合は、EMI 再トレーニングを有効にしてください。

リンク レベル ポリシーを構成するときに、EMI 再トレーニング プロパティの有効化を選択することで、EMI 再トレーニングを有効にすることができます。この機能は、銅ケーブルを使用

する Cisco N9K-C93108TC-EX および N9K-C93108TC-FX リーフ スイッチでのみサポートされます。

GUI を使用したリンク レベル ポリシーの設定

手順

-
- ステップ 1** メニュー バーで、[ファブリック (FABRIC)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順に選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [インターフェイス (Interface)] > [リンク レベル (Link Level)] を選択します。
- ステップ 3** [リンク レベル (Link Level)] を右クリックし、[リンク レベル ポリシー (Create Link Level Policy)] を選択します。
- ステップ 4** [リンク レベル ポリシーの作成 (Create Link Level Policy)] ダイアログで、必要な設定に応じてフィールドに入力します。
- [速度 (Speed)] には、デフォルト値である [継承 (inherit)] を選択することをお勧めします。この値を使用して、Cisco APIC はスイッチに挿入されたトランシーバに基づいて速度を決定します。
- フィールドの詳細については、ツールチップを参照してください。
- ステップ 5** [送信 (Submit)] をクリックします。
-

ポート起動遅延

リリース 4.2 (5) から、リンク レベル ポリシーを構成する場合は、ポートの起動時に判定フィードバック イコライザ (DFE) の調整が遅延する時間をミリ秒単位で指定する [ポート起動遅延 (ミリ秒) (Port bring-up delay (milliseconds))] パラメータを設定します。遅延は、一部のサードパーティ製アダプタを使用する場合に、リンクの起動中に CRC エラーを回避するために使用されます。遅延は必要な場合のみ設定してください。ほとんどの場合、遅延を設定する必要はありません。



(注) ファブリック エクステンダ (FEX) ポートでは、ポートの起動遅延 (ミリ秒) パラメータは適用されません。

リンク レベル ポリシーの制限

Nexus 9408 ACI モード スイッチの N9K-X9400-22L ライン カード上の 50G-SR-S (短距離) トランシーバと 25G-SR-S トランシーバ間で APIC ファブリックへのリンクを起動することはで

きません。これは、リンクの起動に 25G の速度ポリシーを構成し、この組み合わせが N9K スイッチと暗号化された対称キー（ESK）の間でのみ機能するためです。

いずれかのリンクが APIC に接続されている場合、デフォルト ポリシーがリーフ ポートに適用され、速度ポリシーが削除されます。

この動作は 10G-GLCT トランシーバにも適用されるため、APIC の起動に 10G-GLCT トランシーバを使用することはできません。

リンク デバウンス間隔

リンク レベルポリシーは、リンク レベルでファブリック インターフェイス（リーフ スイッチ アップリンク ポートおよびスパイン スイッチ ポート）に適用され、リンク ノイズまたは一時的なフラップが発生する可能性がある場合にこのポリシーを使用します。3.2(9f) リリース以降、このポリシーでは、リンクにフラップがある場合のファブリック インターフェイスの待機時間を指定するリンク デバウンス間隔を設定できます。間隔が経過すると、Cisco Application Centric Infrastructure（ACI）はリンクステータスを再度チェックしてイベントを再確認します。この時点でリンクが正常な場合、インターフェイスはアップ状態のままになります。

Cisco Application Policy Infrastructure Controller（APIC）GUI または `[no] link debounce time<time>` CLI コマンドの `[リンク デバウンス間隔（ミリ秒）（Link debounce interval（msec））]` フィールドを使用して、リンク レベル ポリシーの間隔を設定します。デフォルトのデバウンス間隔は 0 ms です。推奨値は 100 ミリ秒ですが、ファブリックに適した値を選択することを推奨します。

リンク フラップ ポリシー

リンクフラップは、スイッチ上の物理インターフェイスが一定期間にわたって継続的にアップおよびダウンする状況です。原因は通常、不良、サポート対象外、または非標準のケーブルまたは Small Form-Factor Pluggable（SFP）に関連しているか、または他のリンク同期の問題に関連しており、原因は断続的または永続的です。

リンクフラップポリシーは、リンクフラッピングエラーのためにスイッチポートを無効にするタイミングを指定します。リンクフラップポリシーでは、スイッチのポートが指定した時間内にフラップできる最大回数を指定します。ポートが指定された時間内に指定された回数以上フラップした場合、ポートは「error-disable」状態になります。Cisco Application Policy Infrastructure Controller（APIC）を使用してポートで手動フラップを実行し、ポートを無効または有効にするまで、ポートはこの状態のままです。



-
- (注) リンクフラップポリシーは、ファブリックエクステンダ（FEX）ホストインターフェイス（HIF）ポート、および製品 ID に -EX、-FX、-FX2、-GX が指定されていないリーフスイッチモデルでは適用されません。
-

GUI を使用したリンク フラップ ポリシーの設定

次の手順では、GUI を使用してリンク フラップ ポリシーを設定します。これを任意のリーフまたはスパインノードインターフェイス ポリシーに接続して、ノードのアクセスポートにリンク フラップ ポリシーを展開できます。

手順

- ステップ 1 メニューバーで、[ファブリック (FABRIC)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順に選択します。
- ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [インターフェイス (Interface)] > [リンク フラップ (Link Flap)] を選択します。
- ステップ 3 [リンク フラップ (Link Flap)] を右クリックし、[リンク フラップ ポリシーの作成 (Create Link Flap Policy)] を選択します。
- ステップ 4 [リンク レベル ポリシーの作成 (Create Link Level Policy)] ダイアログで、必要な設定に応じてフィールドに入力します。
フィールドの詳細については、ツールチップとオンラインヘルプを参照してください。
- ステップ 5 [送信 (Submit)] をクリックします。

時刻同期と NTP

シスコアプリケーションセントリックインフラストラクチャ (ACI) ファブリックにおいて、時刻の同期は、モニタリング、運用、トラブルシューティングなどの多数のタスクが依存している重要な機能です。クロック同期は、トラフィックフローの適切な分析にとって重要であり、複数のファブリックノード間でデバッグとフォールトのタイムスタンプを関連付けるためにも重要です。

1 つ以上のデバイスでオフセットが生じると、多くの一般的な運用問題を適切に診断して解決する機能がブロックされる可能性があります。また、クロック同期によって、アプリケーションのヘルススコアが依存している ACI の内蔵アトミックカウンタ機能をフル活用できません。時刻同期が存在しない場合や不適切に設定されている場合でも、エラーやヘルススコアの低下が引き起こされるわけではありません。これらの機能を適切に使用できるように、ファブリックやアプリケーションを完全に展開する前に、時刻同期を設定する必要があります。デバイスのクロックを同期させる最も一般的な方法は、ネットワークタイムプロトコル (NTP) を使用することです。

NTP を設定する前に、どの管理 IP アドレススキームを ACI ファブリックに配置するかを検討してください。すべての ACI ノードと Application Policy Infrastructure Controller (APIC) の管理を設定するために、インバンド管理とアウトオブバンド管理の 2 つのオプションがあります。ファブリックに対して選択した管理オプションに応じて、NTP の設定が異なります。時刻同期の展開に関するもう 1 つの考慮事項は、時刻源の場所です。プライベート内部時刻または

外部パブリック時刻の使用を決定する際は、時刻源の信頼性について慎重に検討する必要があります。

Cisco APIC リリース 6.1(1) より前は、MD5 および SHA-1 認証方式のみがサポートされていました。Cisco APIC リリース 6.1(1) 以降では、AES128-CMAC 認証方式がサポートされています。MD5 は脆弱で安全ではないと考えられるため、AES128-CMAC が推奨される認証方式です。詳細については、RFC 8573 を参照してください。



- (注) FIPS モードが有効になっている場合、AES128-CMAC および SHA-1 認証スキームがサポートされます。

インバンドの管理 NTP



- (注) インバンド管理アクセスについては、本書の「管理アクセスの追加」という項を参照してください。

- インバンド管理 NTP : ACI ファブリックをインバンド管理とともに展開する場合は、ACI のインバンド管理ネットワーク内から NTP サーバへの到達可能性を検討します。ACI ファブリック内で使用されるインバンド IP アドレッシングには、ファブリックの外部から到達できません。インバンド管理されているファブリックの外部の NTP サーバを使用するには、その通信を可能にするポリシーを作成します。。



- (注) スタンバイ APIC の場合、モニタリングまたは NTP ポリシーがインバンドに適用されている場合に障害が発生します。障害をクリアするには、スタンバイ APIC にもインバンド構成が必要です。

NTP over IPv6

NTP over IPv6 アドレスは、ホスト名とピアアドレスでサポートされます。gai.conf も、IPv4 アドレスのプロバイダーまたはピアの IPv6 アドレスが優先されるように設定できます。ユーザは、IP アドレス（インストールまたは優先順位によって IPv4、IPv6、または両方）を提供することによって解決できるホスト名を設定できます。

GUI を使用した NTP の設定



- (注) 使用する DNS サーバがインバンドまたはアウトオブバンド接続で到達可能に設定されている場合、ホスト名ベースの NTP サーバのホスト名解決に失敗するリスクがあります。ホスト名を使用する場合は、DNS プロバイダと接続する DNS サービス ポリシーが設定されていることを確認します。また、DNS プロファイル ポリシーの設定時に選択した管理 EPG のインバンドまたはアウトオブバンド VRF インスタンスに適切な DNS ラベルが設定されていることを確認します。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] を選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [ポッド (Pod)] > [日付と時刻 (Date and Time)] を選択します。
- ステップ 3** [Work] ペインで、[Actions] > [Create Date and Time Policy] の順に選択します。
- ステップ 4** [Create Date and Time Policy] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- 環境内のさまざまな NTP 設定を区別するポリシーの名前を入力します。
 - をクリックして **有効になっている** の **認証状態** フィールドおよび展開、**NTP クライアントの認証キー** テーブルが表示され、重要な情報を入力します。
 - [+] をクリックすると、新しいキーを作成できます。**ID**、**キー**を入力し、[信頼済み (Trusted)] 列のチェックボックス (True) を選択し、[認証タイプ (Authentication Type)] のアルゴリズムを選択します。ドロップダウンリストで使用可能なオプションは、SHA-1、MD5、AES128-CMAC のアルゴリズムです。
 - Update** と **Next** をクリックします。
 - [+] 記号をクリックし、使用する NTP サーバ情報 (プロバイダー) を指定します。
 - [Create Providers] ダイアログボックスで、次のフィールドを含めて、すべての関連情報を入力します。[Name]、[Description]、[Minimum Polling Intervals]、[Maximum Polling Intervals]。
 - 複数のプロバイダーを作成する場合は、最も信頼できる NTP 時刻源の [Preferred] チェックボックスをオンにします。
 - ファブリックのすべてのノードがアウトオブバンド管理によって NTP サーバに到達できる場合は、[管理 EPG (Management EPG)] ドロップダウンリストで、[アウトオブバンド (Out-of-Band)] を選択します。インバンド管理を導入した場合は、インバンド管理 NTP の詳細を参照してください。[OK] をクリックします。

作成するプロバイダーごとに、この手順を繰り返します。

- ステップ 5** [Navigation] ペインで、[Pod Policies] > [Policy Groups] の順に選択します。

- ステップ 6** [Work] ペインで、[Actions] > [Create Pod Policy Group] の順に選択します。
- ステップ 7** [Create Pod Policy Group] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- ポリシー グループの名前を入力します。
 - [日付と時刻のポリシー (Date Time Policy)] フィールドのドロップダウン リストから、前に作成した NTP ポリシーを選択します。[Submit] をクリックします。
ポッドポリシー グループが作成されます。または、デフォルトのポッドポリシー グループを使用することもできます。
- ステップ 8** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポッドポリシー (Pod Policies)] > [プロファイル (Profiles)] を選択します。
- ステップ 9** [Work] ペインで、目的のポッドセクタ名をダブルクリックします。
- ステップ 10** [プロパティ (Properties)] エリアの [ファブリック ポリシー グループ (Fabric Policy Group)] ドロップダウンリストから、作成したポッドポリシーグループを選択します。[送信 (Submit)] をクリックします。

REST API を使用した NTP の設定



- (注) 使用する DNS サーバがインバンドまたはアウトオブバンド接続で到達可能に設定されている場合、ホスト名ベースの NTP サーバのホスト名解決に失敗するリスクがあります。ホスト名を使用する場合は、DNS プロバイダと接続する DNS サービス ポリシーが設定されていることを確認します。また、DNS プロファイル ポリシーの設定時に選択した管理 EPG のインバンドまたはアウトオブバンド VRF インスタンスに適切な DNS ラベルが設定されていることを確認します。

手順

- ステップ 1** NTP を設定します。

例：

```
POST url: https://APIC-IP/api/node/mo/uni/fabric/time-test.xml

<imdata totalCount="1">
  <datetimePol adminSt="enabled" authSt="disabled" descr=""
dn="uni/fabric/time-CiscoNTPPol" name="CiscoNTPPol" ownerKey="" ownerTag="">
    <datetimeNtpProv descr="" keyId="0" maxPoll="6" minPoll="4" name="10.10.10.11"
preferred="yes">
      <datetimeRsNtpProvToEpg tDn="uni/tn-mgmt/mgmt-ntp-default/inb-default"/>
    </datetimeNtpProv>
  </datetimePol>
</imdata>
```

- ステップ 2** デフォルトの日付と時刻のポリシーをポッドポリシーグループに追加します。

例：

```
POST url: https://APIC-IP/api/node/mo/uni/fabric/funcprof/podpgrp-calol/rsTimePol.xml

POST payload: <imdata totalCount="1">
<fabricRsTimePol tnDatetimePolName="CiscoNTPPol">
</fabricRsTimePol>
</imdata>
```

ステップ 3 ポッドポリシー グループをデフォルトのポッドプロファイルに追加します。

例 :

```
POST url:
https://APIC-IP/api/node/mo/uni/fabric/podprof-default/pods-default-tyt-ALL/rspodPGrp.xml

payload: <imdata totalCount="1">
<fabricRsPodPGrp tDn="uni/fabric/funcprof/podpgrp-calol" status="created">
</fabricRsPodPGrp>
</imdata>
```

GUI を使用した NTP の動作の確認

手順

ステップ 1 メニューバーで、**[FABRIC] > [Fabric Policies]** を選択します。

ステップ 2 [Navigation] ペインで、**[Pod Policies] > [Policies] > [Date and Time] > [ntp_policy] > [server_name]** の順に選択します。

ntp_policy は前に作成したポリシーです。[Host Name] フィールドまたは [IP address] フィールドでは IPv6 アドレスがサポートされます。入力したホスト名に IPv6 アドレスが設定されている場合、IPv6 アドレスが IPv4 アドレスより優先されるように実装する必要があります。

ステップ 3 [Work] ペインで、サーバの詳細を確認します。

NTPサーバ

NTP サーバ機能は、クライアントのスイッチも NTPサーバとして動作して、下流のクライアントに NTP の時間情報を提供できるようにします。NTP サーバを有効にすると、スイッチ上の NTP デーモンは、NTP クライアントからのすべてのユニキャスト (IPv4 または IPv6) リクエストに対し、が時間情報によって応答します。NTP サーバの実装は、NTP RFCv3 に準拠しています。NTP RFC に従い、サーバはクライアントに関連する状態情報は維持しません。

- NTP サーバは、すべてのテナント VRF とインバンド/アウトオブバンド管理 VRF の IP アドレスを有効にして、NTP クライアントにサービスを提供します。
- NTP サーバは、両方の管理 VRF またはテナント VRF に着信した NTP 要求に応答し、同じ VRF を使用して応答を返します。

- NTP サーバはIPv4 と IPv6 の両方をポートします。
- スイッチは、IPv4 クライアントとして同期して IPv6 サーバとして動作すること、およびその逆が可能です。
- スイッチは、アウトオブバンド管理またはインバンド管理 VRF を使用して NTP クライアントとして同期でき、管理 VRF またはテナント VRF のいずれかから NTP クライアントにサービスを提供します。
- 追加コントラクトまたは IP テーブルの設定は必要ありません。
- スイッチは上流のサーバと同期すると、サーバとして時間情報をストラタム番号とともに送信します。この番号はシステムのピアのストラタム番号から1増えたものになります。
- スイッチクロックが非統制 (アップストリームサーバに同期されていない) の場合、サーバはストラタム 16 で時間情報を送信します。クライアントはこのサーバには同期できません。

デフォルトでは、NTP サーバ機能は無効になっています。これはポリシーの設定によって明示的に有効にする必要があります。



- (注) クライアントは、リーフスイッチのインバンド、アウトオブバンドの IP アドレスを NTP サーバ IP アドレスとして使用できます。クライアントはまた、自身が一部となっている EPG のブリッジドメイン SVI または任意の L3Out IP アドレスを、ファブリック外のクライアントの NTP サーバ IP アドレスとして使用できます。

ファブリックのスイッチは、同じファブリックの他のスイッチに同期するべきではありません。ファブリックスイッチは常に、外部の NTP サーバに同期するべきです。

GUI を使用した NTP サーバの有効化

このセクションでは、APIC GUI で NTP を設定して NTP サーバを有効にする方法について説明します。

手順

- ステップ 1 メニューバーで、**FABRIC > Fabric Policies** を選択します。
- ステップ 2 ナビゲーション ウィンドウで、**Pod Policies > Policies** を選択します。
Date and Time オプションが **Navigation** ウィンドウに表示されます。
- ステップ 3 **Navigation** ウィンドウで、**Date and Time** を右クリックして **Create Date and Time Policy** を選択します。
Create Date and Time Policy ダイアログが **Work** ウィンドウに表示されます。
- ステップ 4 [Create Date and Time Policy] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) 環境内のさまざまな NTP 設定を区別するポリシーの名前を入力します。
- b) **Server State** オプションで、**enabled** をクリックします。

Server State によって、スイッチを NTP サーバとして動作し、下流のクライアントに NTP 時間情報を提供できるようにします。

(注)

サーバ機能をサポートする場合、サーバは常にピア設定にすることを推奨します。これにより、サーバはクライアントに対し、一貫した時間を提供できるようになります。

Server State を有効にすると、次のことが可能になります:

- NTPサーバは、上流のサーバに同期するスイッチに対し、時刻情報とともにストラタム番号を送信します。この番号はシステムのピアのストラタム番号から 1 つ増えたものになります。
- スwitchのクロックが上流サーバに同期していない場合、サーバは時刻情報とストラタム 16 を送信します。クライアントはこのサーバに同期することはできません。

(注)

サーバ機能をサポートする場合、サーバは常にピア設定にすることを推奨します。ピア設定では、クライアントに対し一貫した時間を提供できます。

- c) **Master Mode** オプションで、**enabled** をクリックします。

Master Mode を使用すれば、指定された NTP サーバが、下流のクライアントに対し、設定されたストラタム番号とともに、調整されていないローカルクロック時刻を提供することが可能になります。たとえば、NTP サーバとして動作しているリーフスイッチは、クライアントとして動作しているリーフスイッチに対し、調整されていないローカルクロック時刻を提供できます。

(注)

- **Master Mode** が適用できるのは、サーバのクロックが調整されていない場合のみです。
- デフォルトのマスターモードの **Stratum Value** は 8 です。

- d) **Stratum Value** フィールドには、NTP クライアントが同期した時刻を取得するときのストラタム番号を指定します。範囲は 1 ~ 14 です。
- e) **Next** をクリックします。
- f) [+] 記号をクリックし、使用する NTP サーバ情報 (プロバイダー) を指定します。
- g) [Create Providers] ダイアログボックスで、次のフィールドを含めて、すべての関連情報を入力します。[Name]、[Description]、[Minimum Polling Intervals]、[Maximum Polling Intervals]。
 - 複数のプロバイダーを作成する場合は、最も信頼できる NTP 時刻源の [Preferred] チェックボックスをオンにします。
 - ファブリックのすべてのノードがアウトオブバンド管理によって NTP サーバに到達できる場合は、[Management EPG] ドロップダウンリストで、[Out-of-Band] を選択しま

す。インバンド管理を導入した場合は、インバンド管理NTPの詳細を参照してください。[OK] をクリックします。

作成するプロバイダーごとに、この手順を繰り返します。

- ステップ 5** **Navigation** ウィンドウで、**Pod Policies** を選択し、**Policy Groups** を右クリックします。
Create Pod Policy Group ダイアログが表示されます。
- ステップ 6** [Work] ペインで、[Actions] > [Create Pod Policy Group] の順に選択します。
- ステップ 7** [Create Pod Policy Group] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- ポリシー グループの名前を入力します。
 - [Date Time Policy] フィールドのドロップダウンリストから、前に作成した NTP ポリシーを選択します。[Submit] をクリックします。
ポッドポリシーグループが作成されます。または、デフォルトのポッドポリシーグループを使用することもできます。
- ステップ 8** [Navigation] ペインで、[Pod Policies] > [Profiles] の順に選択します。
- ステップ 9** [Work] ペインで、目的のポッドセレクト名をダブルクリックします。
- ステップ 10** [Properties] 領域の [Fabric Policy Group] ドロップダウンリストから、作成したポッドポリシーグループを選択します。
- ステップ 11** [送信 (Submit)] をクリックします。

GUI を使用した日時形式の設定

ここでは、Cisco APIC GUI を使用して日時形式を設定する方法を示します。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] を選択します。
- ステップ 2** ナビゲーションペインで [日付と時間 (Date and Time)] をクリックします。
- ステップ 3** [作業 (Work)] ペインで、次のオプションから選択します。
- [表示形式 (Display Format)] : [local] をクリックして日時を現地時間で表示するか、[utc] をクリックして日時を UTC で表示します。デフォルトは [local] です。
 - [タイムゾーン (Time Zone)] : ドロップダウン矢印をクリックして、ドメインのタイムゾーンを選択します。デフォルトは [協定世界時 (Coordinated Universal Time)] です。

- [オフセット状態 (Offset State)] : [有効 (enable)] または [無効 (disable)] をクリックします。有効にすると、ローカル時刻と基準時刻の差が表示されます。デフォルトは [有効 (enable)] です。

DHCP リレー ポリシーの設定

DHCP リレー ポリシーは、DHCP クライアントとサーバが異なるサブネット上にある場合に使用できます。

Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) fabric は DHCP リレーとして動作するとき、DHCP オプション 82 (DHCP Relay Agent Information Option) を、クライアントの代わりに中継する DHCP 要求に挿入します。応答 (DHCP オファー) がオプション 82 なしで DHCP サーバから返された場合、その応答はファブリックによってサイレントにドロップされます。したがって、Cisco ACI fabric が DHCP リレーとして動作するときは、Cisco ACI fabric に接続されたノードを計算するために IP アドレスを提供している DHCP サーバはオプション 82 をサポートする必要があります。

オプション 79 : DHCPv6 のクライアント リンク層アドレス オプション

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) リリース 5.2(4) 以降、DHCPv6 オプション 79 を含むように DHCP リレー エージェントとして構成されたブリッジドメインを構成できるようになりました。オプション 79 が有効になっている場合、ブリッジドメインがリレー エージェントとして設定されているリーフスイッチには、DHCPv6 リレーパケットのオプション 79 を介してクライアントのリンク層アドレスが含まれます。

オプション 79 を選択すると、DHCP パケットのペイロードにクライアントの MAC アドレス (クライアント リンク層アドレス) が含まれるようになります。オプション 79 には、デバイスの実際のリンク層アドレスが含まれています。リレーメッセージは、クライアントから送信される実際の DHCP パケットのイーサネット送信元 MAC アドレスを使用し、イーサネットソースを示す 00:01 のプレフィックスを付けてから、これらの 8 バイト (クライアント MAC アドレス) をオプション 79 にコピーします。

DHCPv6 のクライアント リンク層アドレス オプションの詳細については、RFC 6939 を参照してください。

オプション 79 を使用する利点

デュアルスタック シナリオ (IPv6 と IPv4 をサポート) では、DHCPv4 および DHCPv6 メッセージを同じクライアントインターフェイスに関連付ける必要がある場合、オプション 79 は、RFC 標準に準拠して、DHCPv6 リレーパケットにクライアント MAC アドレスを含めて送信します。

DHCP サーバー設定フィールドについて



(注) 以下は、このセクションで使用されるいくつかの用語の定義です。

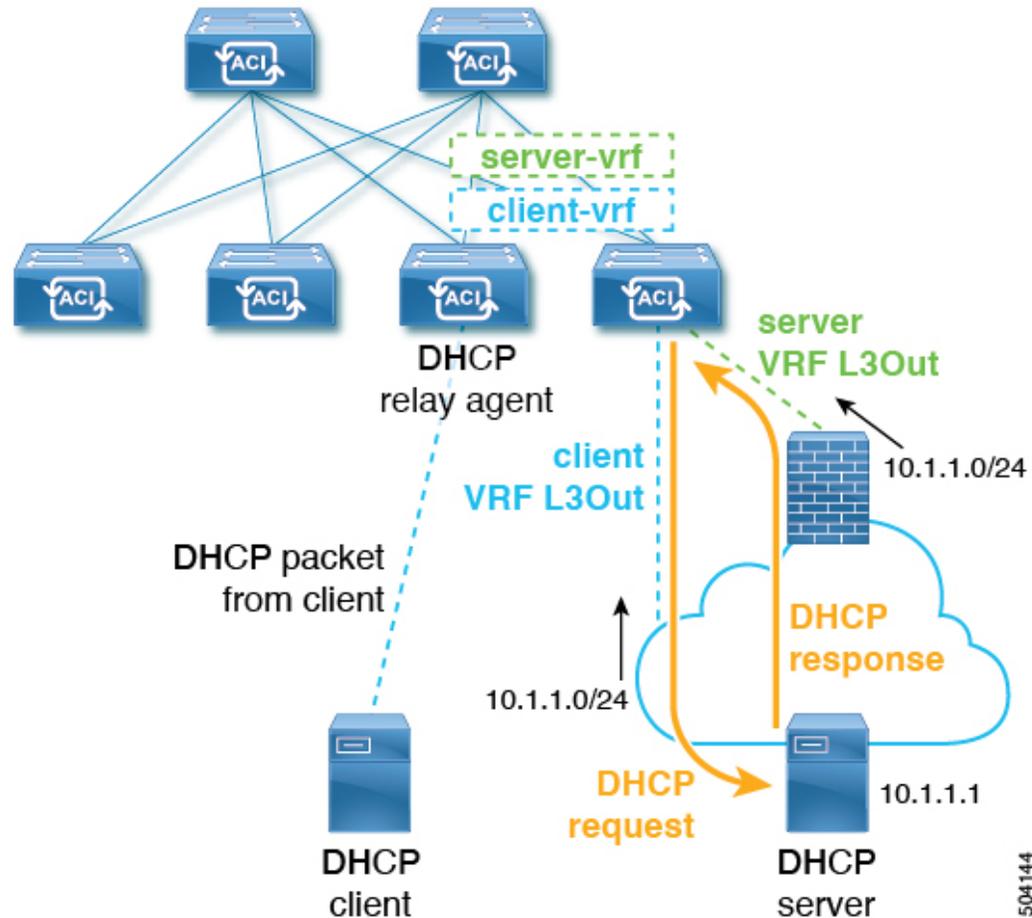
- **クライアント VRF** : DHCP 要求を開始するホストが配置されている VRF。
- **サーバ VRF** : DHCP サーバが配置されている VRF インスタンス、または DHCP サーバに (たとえば L3Out 経由で) 到達するためのパスを提供する VRF インスタンス。
- **クライアント EPG** : DHCP 要求を開始するホストが配置されている EPG。
- **サーバ EPG** : DHCP サーバが接続されている EPG (または、DHCP サーバが Cisco ACI ファブリックの外部にある場合は外部 EPG)。

Cisco APICリリース 5.2(4) では、DHCP リレー プロバイダーの設定時の `use-vrf` オプションのサポートが追加されています。この機能は、DHCP プロバイダ EPG (たとえば、DHCP サーバが接続されている EPG) または、DHCP サーバに到達するために使用されるレイヤ 3 外部ネットワークが、DHCP 要求を開始するホストが存在するブリッジ ドメイン (DHCP ポリシーを DHCP リレー ラベルとして参照しているブリッジ ドメイン) とは異なる VRF インスタンスにある場合に使用されます。この機能は、NX-OS で使用可能な DHCP リレー `use-vrf` オプションに相当します。`use-vrf` オプションが DHCP リレー プロバイダに対して有効になっている場合、DHCP クライアントが配置されているリーフ スイッチは、DHCP クライアントの VRF インスタンスの代わりに、構成された DHCP プロバイダ EPG (または、DHCP サーバに到達できるように構成された L3Out) の VRF インスタンスを経由して、DHCP リレー パケットをルーティングします。

リリース 5.2(4) より前の Cisco APIC リリースでは、EPG 内、または DHCP クライアントが存在する VRF インスタンスとは異なる VRF インスタンスのレイヤ 3 外部ネットワークでの DHCP リレー プロバイダ (サーバ) の指定をサポートしています。この VRF 間リレー ポリシーは、VRF 間コントラクトに依存しており、また DHCP サーバへ到達可能な VRF インスタンス (サーバ VRF と呼ばれる) から DHCP クライアントが存在する VRF インスタンス (クライアント VRF と呼ばれる) への DHCP サーバ ネットワークのルート リークにも依存しています。DHCP リレー パケットはクライアント VRF インスタンスからルーティングされ、VRF 間ルート リークを使用して、サーバ VRF インスタンスから DHCP サーバに到達します。一部のシナリオでは、DHCP サーバ ネットワークがクライアント VRF インスタンスからも到達できる場合 (たとえば、DHCP サーバ ネットワークにも到達できるクライアント VRF インスタンスにローカル L3Out がある場合)、DHCP リレー パケットがサーバ VRF インスタンスをバイパスすることがあります。DHCP リレー ポリシー プロバイダが、クライアント VRF インスタンスの 1 つとは異なるレイヤ 3 外部ネットワークを使用するように構成されている場合、DHCP リレー パケットのソース IP アドレスは、サーバ VRF インスタンスの L3Out (プロバイダ L3Out と呼ばれる) から選択されます。これらの DHCP リレー パケットが、サーバ VRF インスタンスの L3Out ではなくクライアント VRF インスタンスの L3Out からルーティングされる場合 (クライアント VRF インスタンスの L3Out も DHCP サーバへのルートを持っている場合に生じる可能性があります)、DHCP サーバの応答はサーバ VRF インスタンスの L3Out に送り返されます。DHCP リレー パケットの IP アドレスが、サーバ VRF インスタンスの L3Out の IP アドレスに構成されているためです。これにより、DHCP リレー パケットの非対称転送が発生

し、ファイアウォールなどのステートフルデバイスによってドロップされる可能性があります。

次の図は、このシナリオの例を示しています。



このシナリオ例では、外部DHCPサーバネットワークは、クライアントとサーバの両方のVRFインスタンスを介して、ACIファブリックで到達可能です。DHCPリレーパッケージは、クライアントVRFインスタンスからルーティングされ、クライアントVRFインスタンスのL3Out経由で送信されます。DHCPリレーパッケージの送信元IPアドレスは、DHCPリレーポリシーに従って、サーバVRFインスタンスのL3Outから選択されます。サーバからのDHCPリレー応答はDHCPサーバL3Outにルーティングされるため、非対称フローになります。

この問題を解決するため、リリース5.2(4)以降では、[サーバVRFを使用 (Use Server VRF)]というオプションが、[DHCPサーバ設定 (DHCP Server Preference)]フィールドで使用できるようになりました。[サーバVRFを使用 (Use Server VRF)]オプションを有効にすると、DHCPリレーパッケージは常にサーバVRFインスタンスからルーティングされます。このオプションは、VRF間コントラクトとルートリークの要件も削除します。

[DHCPサーバ設定 (DHCP Server Preference)]フィールドで選択したオプションに基づいて、リーフスイッチは、DHCPリレーパッケージをクライアントVRFインスタンスまたはサーバVRFインスタンスのどちらからルーティングするかを決定します。

- **[なし (None)]**: これはデフォルトのオプションで、リリース 5.2(4) より前の動作を反映しています。**[なし (None)]** オプションを選択すると、スイッチは常にクライアント VRF インスタンスから DHCP リレー パケットをルーティングします。VRF 間 DHCP リレーに使用する場合、サーバ VRF インスタンス ネットワークをクライアント VRF インスタンスにリークするには、共有サービス コントラクトが必要です。
- **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]**: このオプションは、リリース 5.2(4) で導入された新しい動作を反映しています。**[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションを選択すると、スイッチは、DHCP クライアントが存在する EPG と DHCP サーバが存在する EPG (または DHCP サーバが到達可能な L3Out のレイヤー 3 外部) の間にコントラクトがあるかどうかには関わりなく、サーバ VRF インスタンスからの DHCP リレー パケットをルーティングします。

VRF 間構成の場合、**[DHCP サーバ設定 (DHCP Server Preference)]** フィールドで **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションを選択すると、ルート ルックアップのため、サーバ サブネット ルートは、クライアント リーフ スwitch のサーバ VRF インスタンス内でプログラムされます。クライアント リーフ スwitch の DHCP プロセスは、その後、DHCP リレー パケットをサーバ VRF インスタンス経由で送信します。このため、サーバ VRF インスタンスを、クライアント ブリッジ ドメインが展開されているすべてのリーフ スwitch 上に、少なくとも 1 つの IP アドレスを使用して展開しておく必要があります。

DHCP リレー ポリシーの注意事項と制約事項

- インフラまたは共通テナントで作成された DHCP リレー ポリシーは、ブリッジ ドメインで DHCP リレーを設定するときに他のテナントで使用できません。テナント間 DHCP リレー通信の場合は、[グローバル DHCP リレー ポリシーの作成 \(216 ページ\)](#) の説明に従ってグローバル DHCP リレー ポリシーを作成します。
- DHCP リレー IP アドレスは、常にプライマリ SVI IP アドレスに設定されます。
- クライアントとサーバが L3Out EPG を介して接続されている場合は、DHCP リレー ポリシーを使用できません。クライアントまたはサーバのいずれか (または両方) が通常の (非 L3Out) EPG に存在する必要があります。
- DHCP リレー プロバイダ EPG が L3Out 外部 EPG であり、クライアント ブリッジ ドメインとは異なる VRF インスタンスで構成されている場合、DHCP リレー パケットは、L3Out で構成された各インターフェイスから送信されます。これには、ノードのルータ ID アドレスとすべての L3Out インターフェイス IP アドレスが含まれます。
- L3Out SVI またはフローティング SVI が DHCP リレー エージェントとして構成されている場合、(DHCP リレー ラベル) DHCP サーバ/プロバイダは、L3Out SVI が展開されているのと同じリーフ スwitch に接続しないでください。フローティング SVI の場合、これにはすべてのアンカー スwitch と非アンカー スwitch が含まれます。

GUI を使用した APIC インフラストラクチャに対する DHCP サーバポリシーの設定

この手順では、エンドポイント グループ (EPG) の DHCP リレー ポリシーを展開します。

次の注意事項および制約事項を確認します。

- アプリケーション エンドポイント グループで使用されるポートおよびカプセル化は、物理または VM マネージャ (VMM) ドメインに属している必要があります。ドメインにそれらの関連付けが確立されていない場合、APIC では EPG の展開を続行しますが障害が発生します。
- Cisco APIC は、IPv4 と IPv6 の両方のテナント サブネットに DHCP リレーをサポートします。DHCP サーバアドレスには IPv4 または IPv6 を使用できます。DHCPv6 リレーは、ファブリック インターフェイスで IPv6 が有効になっており、1 つ以上の DHCPv6 リレーサーバが設定されている場合にのみ、発生します。
- シスコ APIC では、プライマリ IP アドレス プールに対してのみ DHCP リレーをサポートしています。
- 次の注意事項と制約事項は、リリース 5.2(4) で導入された **[DHCP サーバ プリファレンス (DHCP Server Preference)]** フィールドに適用されます。
 - L3Out 用に DHCP リレーが設定されている場合 (たとえば、DHCP サーバが L3Out の背後にあり、DHCP リレー ポリシーが **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションに設定されている場合 (**[DHCP サーバ プリファレンス (DHCP Server Preference)]** フィールドにおいて))、EPG/サーバ VRF にインターフェイスがまだ存在しなければ、クライアントブリッジドメインが展開されているリーフスイッチへ EPG/ブリッジドメイン/ブリッジドメインサブネットを展開する必要があります。
 - EPG の背後にある DHCP サーバに対して、DHCP リレーポリシーが **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションに設定されている場合 (**[DHCP サーバ プリファレンス (DHCP Server Preference)]** フィールド)、IPv4 および IPv6 ルートの両方と、サーバブリッジドメイン SVI がクライアントリーフスイッチに作成されます。
 - **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションは、サイト間 DHCP トラフィックではサポートされていません。
- オプション 79 には、以下の制限が適用されます。
 - オプション 79 は DHCPv6 でのみサポートされています。
 - オプション 79 はインフラ テナントではサポートされていません。

始める前に

レイヤ 2 またはレイヤ 3 管理接続が設定されていることを確認します。

手順

- ステップ 1** メニュー バーで、[テナント (Tenant)] > [テナント名 (tenant_name)] を選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインの [テナント (Tenant)] [テナント名 (tenant_name)] の下で、[ポリシー (Policies)] > [プロトコル (Protocol)] > [DHCP] を展開します。
- ステップ 3** [Relay Policies] を右クリックし、[Create DHCP Relay Policy] をクリックします。
- ステップ 4** [Create DHCP Relay Policy] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- [Name] フィールドに、DHCP リレー プロファイル名 (DhcpRelayP) を入力します。
この名前では最大 64 文字までの英数字を使用できます。
 - (任意) [説明 (Description)] フィールドに、DHCP リレー ポリシーの説明を入力します。
説明には最大 128 文字までの英数字を使用できます。
 - [Providers] を展開します。
[DHCP プロバイダーの作成 (Create DHCP Provider)] ダイアログボックスが表示されます。
 - [Create DHCP Provider] ダイアログボックスの [EPG Type] フィールドで、DHCP サーバがどこで接続されているかによって適切なオプション ボタンをクリックします。
選択する EPG タイプのオプションは、EPG タイプによって異なります。
 - EPG タイプとして [アプリケーション EPG (Application EPG)] を選択すると、次のオプションが [アプリケーション EPG (Application EPG)] 領域に表示されます。
 - [テナント (Tenant)] フィールドで、ドロップダウンリストから、テナントを選択します。(infra)
 - [Application Profile] フィールドで、ドロップダウンリストから、アプリケーションを選択します。(access)
 - [EPG] フィールドで、ドロップダウンリストから、EPG を選択します。(デフォルト)
 - EPG タイプとして [L2 外部ネットワーク (L2 External Network)] を選択すると、[L2 外部ネットワーク領域 (L2 External Network)] に次のオプションが表示されます。
 - [テナント (Tenant)] フィールドで、ドロップダウンリストから、テナントを選択します。
 - [L2 Out] フィールドで、ドロップダウンリストから [L2 Out] を選択します。
 - [External Network (外部ネットワーク)] フィールドで、ドロップダウンリストから外部ネットワークを選択します。

- EPG タイプとして **[L3 外部ネットワーク (L3 External Network)]** を選択すると、**[L3 外部ネットワーク (L3 External Network)]** 領域に次のオプションが表示されます。
 - **[テナント (Tenant)]** フィールドで、ドロップダウンリストから、テナントを選択します。
 - **[L3 Out]** フィールドで、ドロップダウンリストから **[L3 Out]** を選択します。
 - **[External Network (外部ネットワーク)]** フィールドで、ドロップダウンリストから外部ネットワークを選択します。
- EPG タイプとして **[DN]** を選択した場合は、ターゲットエンドポイントグループの識別名を入力します。

- e) **[DHCP サーバアドレス (DHCP Server Address)]** フィールドに、DHCP サーバの IP アドレスを入力します。
- f) **[DHCP サーバ プレファレンス (DHCP Server Preference)]** フィールドで、このプロバイダーの管理設定値を選択します。

[DHCP サーバ プレファレンス (DHCP Server Preference)] フィールドは、リリース 5.2(4) 以降で使用できます。リーフスイッチは、このフィールドの値を基に、クライアント VRF またはサーバ VRF のどちらから DHCP リレー パケットをルーティングするかを決定します。詳細については、[DHCP サーバ設定フィールドについて \(165 ページ\)](#) を参照してください。

- **[なし (None)]**: これはデフォルトのオプションで、リリース 5.2(4) より前の動作を反映しています。**[なし (None)]** オプションを選択すると、スイッチは常にクライアント VRF からの DHCP リレー パケットをルーティングします。VRF 間 DHCP リレーに使用する場合、サーバ VRF ネットワークをクライアント VRF にリークするには、共有サービス コントラクトが必要です。
- **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]**: このオプションは、リリース 5.2(4) で導入された新しい動作を反映しています。**[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションを選択すると、スイッチは、DHCP クライアントが存在する EPG と DHCP サーバが存在する EPG (または DHCP サーバが到達可能な L3Out のレイヤー 3 外部) の間にコントラクトがあるかどうかには関わりなく、サーバ VRF からの DHCP リレー パケットをルーティングします。

VRF 間設定の場合、**[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプション (**[DHCP サーバ プレファレンス (DHCP Server Preference)]** フィールド) を選択すると、ルートルックアップのため、サーバサブネットルートは、クライアントリーフスイッチのサーバ - VRF 内でプログラムされます。クライアントリーフスイッチの DHCP プロセスは、それ以後、DHCP リレー パケットをサーバ VRF 経由で送信します。このため、サーバ VRF は、クライアントブリッジドメインが展開されているすべてのリーフスイッチに少なくとも 1 つの IP アドレスを使用して展開する必要があります。

- g) **[OK]** をクリックします。

[DHCP リレー ポリシーの作成 (Create DHCP Relay Policy)] ウィンドウに戻ります。

h) [Submit] をクリックします。

DHCP リレー ポリシーが作成されます。

ステップ 5

ステップ 6 [Navigation] ペインで、[Networking] > [Bridge Domains] > [default] > [DHCP Relay Labels] を展開します。

ステップ 7 [DHCP Relay Labels] を右クリックし、[Create DHCP Relay Label] をクリックします。

ステップ 8 [Create DHCP Relay Label] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) [Scope] フィールドで、テナントのオプション ボタンをクリックします。
このアクションにより、[Name] フィールドのドロップダウン リストに、以前に作成した DHCP リレー ポリシーが表示されます。
- b) [Name] フィールドのドロップダウン リストから、作成済みの DHCP ポリシーの名前 (DhcpRelayP) を選択するか、[Create DHCP Relay Policy] を選択して新しいリレー ポリシーを作成します。
- c) [DHCP Option Policy] で、既存のオプション ポリシーを選択するか、[Create DHCP Option Policy] を選択して新しいオプション ポリシーを作成します。

オプション 79 を呼び出すには、ID として 79 を使用して以前に作成した DHCP オプション ポリシーを選択します。

新しいオプション ポリシーを作成する場合は、[DHCP オプションポリシー作成 (Create DHCP Option Policy)] ウィンドウの [オプション (Options)] ペインで、ID として 79 を入力してください。

d) [Submit] をクリックします。

DHCP サーバがブリッジ ドメインに関連付けられます。

ステップ 9 [Navigation] ペインで、[Networking] > [Bridge Domains] > [default] > [DHCP Relay Labels] を展開し、作成された DHCP サーバを表示します。

REST API を使用してオプション 79 を設定する

REST API を使用して DHCP オプション ポリシーのオプション 79 を設定するには：

POST URL: `https://apic-ip-address/api/mo/uni.xml`

```
<dhcpOptionPol dn="uni/tn-dhcp_client/dhcptpol-dhcp_option_policy"
name="dhcp_option_policy" status="">
<dhcpOption data="" id="79" name="option_79"/>
</dhcpOptionPol>
```

NX-OS スタイル CLI を使用した APIC インフラストラクチャの DHCP サーバ ポリシーの設定

- アプリケーション エンドポイント グループで使用されるポートおよびカプセル化は、物理または VM マネージャ (VMM) ドメインに属している必要があります。ドメインにそれらの関連付けが確立されていない場合、APIC では EPG の展開を続行しますが障害が発生します。
- Cisco APIC は、IPv4 と IPv6 の両方のテナント サブネットに DHCP リレーをサポートします。DHCP サーバアドレスには IPv4 または IPv6 を使用できます。DHCPv6 リレーは、ファブリック インターフェイスで IPv6 が有効になっており、1 つ以上の DHCPv6 リレーサーバが設定されている場合にのみ、発生します。

始める前に

DHCP サーバアドレスに到達するためにレイヤ 2 またはレイヤ 3 接続が設定されていることを確認します。

手順

APIC インフラストラクチャ トラフィックの DHCP サーバ ポリシー設定を設定します。

例 :

エンドポイントグループの DHCP リレー ポリシー

```
apic1(config)# tenant infra
apic1(config-tenant)# template dhcp relay policy DhcpRelayP
apic1(config-tenant-template-dhcp-relay)# ip address 10.0.0.1 tenant infra application access epg default
apic1(config-tenant-template-dhcp-relay)# exit
apic1(config-tenant)# interface bridge-domain default
apic1(config-tenant-interface)# dhcp relay policy tenant DhcpRelayP
apic1(config-tenant-interface)# exit
```

例 :

レイヤ 3 Outside の DHCP リレー ポリシー

```
ifav28-ifc2(config)# tenant dhcpTn
ifav28-ifc2(config-tenant)# template dhcp relay policy DhcpRelayPol
ifav28-ifc2(config-tenant-template-dhcp-relay)# ip address 11.1.1.11 tenant dhcpTn application ap epg serverEpg
ifav28-ifc2(config-tenant-template-dhcp-relay)# exit
ifav28-ifc2(config-tenant)# exit
ifav28-ifc2(config)# leaf 2001
ifav28-ifc2(config-leaf)# interface ethernet 1/4
ifav28-ifc2(config-leaf-if)# no switchport
ifav28-ifc2(config-leaf-if)# vrf member tenant dhcpTn vrf v1
ifav28-ifc2(config-leaf-if)# dhcp relay policy tenant DhcpRelayPol
ifav28-ifc2(config-leaf-if)# exit
```

GUI を使用した APIC インフラストラクチャ用 DHCP サーバポリシーの設定

- このタスクは、vShield ドメイン プロファイルを作成するユーザの前提条件です。
- アプリケーション エンドポイント グループで使用されるポートおよびカプセル化は、物理または VM マネージャ (VMM) ドメインに属している必要があります。ドメインにそれらの関連付けが確立されていない場合、APIC では EPG の展開を続行しますが障害が発生します。
- Cisco APIC は、IPv4 と IPv6 の両方のテナントサブネットに DHCP リレーをサポートします。DHCP サーバアドレスには IPv4 または IPv6 を使用できます。DHCPv6 リレーは、ファブリック インターフェイスで IPv6 が有効になっており、1 つ以上の DHCPv6 リレーサーバが設定されている場合にのみ、発生します。

始める前に

レイヤ 2 またはレイヤ 3 管理接続が設定されていることを確認します。

手順

インフラストラクチャ テナントの DHCP サーバポリシーとして APIC を設定します。

(注)

このリレーポリシーは、接続エンティティプロファイルの設定を使用した接続されたハイパーバイザであるすべてのリーフポートにプッシュされます。接続エンティティプロファイルによる設定の詳細については、VMM ドメインプロファイルの作成に関連する例を参照してください。

例：

EPG の DHCP リレー ポリシー

```
<!-- api/policymgr/mo/.xml -->
<polUni>

POST https://apic-ip-address/api/mo/uni.xml

<fvTenant name="infra">

  <dhcpRelayP name="DhcpRelayP" owner="tenant">
    <dhcpRsProv tDn="uni/tn-infra/ap-access/epg-default" addr="10.0.0.1" />
  </dhcpRelayP>

  <fvBD name="default">
    <dhcpLbl name="DhcpRelayP" owner="tenant"/>
  </fvBD>

</fvTenant>
</polUni>
```

例：

レイヤ 3 Outside の DHCP リレー ポリシー

(注)

l3extLifP で適切な名前とオーナーを使用して DHCP リレー ラベルを指定する必要があります。

```
<polUni>
  <fvTenant name="dhcpTn">
    <l3extOut name="Out1" >
      <l3extLNodeP name="NodeP" >
        <l3extLifP name="Intf1">
          <dhcpLbl name="DhcpRelayPol" owner="tenant" />
        </l3extLifP>
      </l3extLNodeP>
    </l3extOut>
  </fvTenant>
</polUni>
```

POST https://apic-ip-address/api/mo/uni.xml

例：

DHCP サーバー プリファレンスを [サーバー VRF を使用] オプションに設定する

```
<!-- api/policymgr/mo/.xml -->
<polUni>

POST https://apic-ip-address/api/mo/uni.xml

<dhcpRelayP descr="" dn="uni/tn-dhcp_client/relayp-dhcp_relay_pol" status="">
  <dhcpRsProv addr="100.1.1.1/24" pref="use-server-vrf"
  tDn="uni/tn-dhcp_server/ap-ap_server/epg-epg_server"/>
</dhcpRelayP>
```

例：

DHCP サーバー プリファレンスを [なし] オプションに設定する

```
<!-- api/policymgr/mo/.xml -->
<polUni>

POST https://apic-ip-address/api/mo/uni.xml

<dhcpRelayP descr="" dn="uni/tn-dhcp_client/relayp-dhcp_relay_pol" status="">
  <dhcpRsProv addr="100.1.1.1/24" pref=""
  tDn="uni/tn-dhcp_server/ap-ap_server/epg-epg_server"/>
</dhcpRelayP>
```

DNS サービス ポリシーの設定

DNS ポリシーは、ホスト名で外部サーバ (AAA、RADIUS、vCenter、サービスなど) に接続するために必要です。DNS サービス ポリシーは共有ポリシーであるため、このサービスを使用するすべてのテナントと VRF を特定の DNS プロファイル ラベルで設定する必要があります。

す。ACI ファブリックの DNS ポリシーを設定するには、次のタスクを完了する必要があります。

- 管理 EPG が DNS ポリシー用に設定されていることを確認してください。設定されていない場合、このポリシーはスイッチで有効になりません。



(注) 管理 EPG では、デフォルトの DNS ポリシーのみがサポートされます。

- DNS プロバイダーと DNS ドメインに関する情報が含まれる DNS プロファイル（デフォルト）を作成します。
- DNS プロファイル（デフォルトまたは別の DNS プロファイル）の名前を必要なテナントで DNS ラベルに関連付けます。

テナントごと、VRF ごとの DNS プロファイル設定を設定することができます。適切な DNS ラベルを使用して、追加の DNS プロファイルを作成して、特定のテナントの特定の VRF に適用できます。たとえば、名前が acme の DNS プロファイルを作成する場合、テナント設定で acme の DNS ラベルを適切な [Networking] > [VRF] ポリシー設定に追加できます。

インバンド DNS サービス ポリシーによる外部宛先の設定

次のように、サービスに対して外部宛先を設定します。

ソース	インバンド管理	アウトオブバンド管理	外部サーバの場所
APIC	IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN)	IP アドレスまたは FQDN	Anywhere
リーフ スイッチ	IP アドレス	IP アドレスまたは FQDN (注) DNS ポリシーは、DNS サーバの到達可能性に対するアウトオブバンド管理 EPG を指定する必要があります。	Anywhere

ソース	インバンド管理	アウトオブバンド管理	外部サーバの場所
スパイン スイッチ	IP アドレス	IP アドレスまたは FQDN (注) DNS ポリシーは、DNS サーバの到達可能性に対するアウトオブバンド管理 EPG を指定する必要があります。	リーフスイッチに直接接続されます

次に示すのは、外部サーバのリストです。

- Call Home SMTP サーバ
- Syslog サーバ
- SNMP トラップの宛先
- 統計情報のエクスポートの宛先
- エクスポートの設定の宛先
- Techsupport のエクスポートの宛先
- コア エクスポートの宛先

推奨されるガイドラインは次のとおりです。

- 外部サーバは、リーフ アクセス ポートに接続する必要があります。
- 管理ポートの追加の配線を避けるために、リーフスイッチにはインバンド接続を使用します。
- スパインスイッチにはアウトオブバンド管理接続を使用します。スパインスイッチとリーフスイッチが外部サーバの同じセットに到達できるように、スパインスイッチのこのアウトオブバンドネットワークをインバンド管理の仮想ルーティングおよび転送 (VRF) 機能があるリーフポートの1つに接続します。
- 外部サーバには IP アドレスを使用します。

デュアルスタック IPv4 および IPv6 DNS サーバ

DNS サーバには、A レコード (IPv4) または AAAA レコード (IPv6) のプライマリ DNS レコードがあります。A および AAAA レコードは、ドメイン名を特定の IP アドレス (IPv4 または IPv6) と関連付けます。

ACI ファブリックは、IPv4 で実行する信頼できるパブリック DNS サーバを使用するように設定できます。これらのサーバは、A レコード (IPv4) または AAAA レコード (IPv6) で解決および応答できます。

純粋な IPv6 環境では、システム管理者は IPv6 DNS サーバを使用する必要があります。IPv6 DNS サーバは、`/etc/resolv.conf` に追加することによって有効化されます。

より一般的な環境では、デュアルスタック IPv4 および IPv6 DNS サーバを使用します。デュアルスタックの場合、IPv4 と IPv6 の両方が `/etc/resolv.conf` にリストされます。ただし、デュアルスタック環境で、単純に IPv6 DNS サーバをリストに追加すると、DNS 解決の大きな遅延を引き起こす可能性があります。これは、デフォルトで IPv6 プロトコルが優先されるため、IPv4 DNS サーバに接続できないためです (`/etc/resolv.conf` で最初にリストされている場合)。この解決法は、IPv4 DNS サーバの前に IPv6 DNS サーバをリストすることです。また、IPv4 と IPv6 両方のルックアップで同一ソケットを使用できるようにするために、「`options single-request-reopen`」を追加します。

IPv6 DNS サーバが最初にリストされているデュアルスタック IPv4 および IPv6 DNS サーバの `resolv.conf` の例を次に示します。「`single-request-reopen`」オプションにも注意してください。

```
options single-request-reopen
nameserver 2001:4860:4680::8888
nameserver 2001:4860:4680::8844
nameserver 8.8.8.8
nameserver 8.8.4.4
```

デュアルスタック IPv4 および IPv6 環境

ACI ファブリックの管理ネットワークが IPv4 と IPv6 の両方をサポートする場合、Linux システムアプリケーション (glibc) では、`getaddrinfo()` が IPv6 を最初に返すため、IPv6 ネットワークをデフォルトで使用します。

ただし、特定の条件下では IPv4 アドレスが IPv6 アドレスよりも推奨されることがあります。Linux IPv6 スタックには、IPv6 にマッピングされた IPv4 アドレス (`::ffff/96`) を使用して、IPv6 アドレスとしてマッピングされた IPv4 アドレスを有効にする機能があります。これは、IPv6 対応アプリケーションが IPv4 と IPv6 両方を受け入れまたは接続するためにシングルソケットのみ使用できるようにします。これは `/etc/gai.conf` の `getaddrinfo()` の glibc IPv6 選択項目によって制御されます。

`/etc/hosts` を使用する場合は glibc が複数のアドレスを返すようにするために、`/etc/hosts` ファイルに「`multi on`」を追加する必要があります。追加しないと、最初に一致したものだけを返す場合があります。

アプリケーションが IPv4 と IPv6 の両方が存在するかどうかを認識していない場合、異なるアドレスファミリを使用するフォールバック試行が実行されないことがあります。このようなアプリケーションでは、フォールバックの実装が必要な場合があります。

DNS プロファイルの IPv4 または IPv6 の優先順位のポリシー

DNS プロファイルは、IPv4 と IPv6 のバージョン優先順位の選択をサポートします。ユーザーインターフェイスを使用して、優先順位を有効にすることができます。IPv4 がデフォルトです。

次の例は、Postman REST API を使用したポリシーベースの設定を示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- api/node/mo/uni/fabric/dnsp-default.xml -->
<dnsProfile dn="uni/fabric/dnsp-default" IPVerPreference="IPv6" childAction="" descr=""
>
</dnsProfile>
```

gai.conf の設定は、宛先アドレス選択を制御します。ファイルには、ラベル テーブル、優先順位テーブル、IPv4 範囲テーブルが含まれます。IPv4 または IPv6 をもう一方よりも優先付けする変更は、優先順位テーブルのエントリに含める必要があります。Linux システムで多数のフレーバーに使用されている標準ファイルの内容例を下に示します。ファイルの precedence ラベルの一行でデフォルト設定を上書きします。

次の例は、IPv4 を IPv6 よりも優先させるための gai.conf です。

```
# Generated by APIC
label ::1/128      0
label ::/0        1
label 2002::/16   2
label ::/96       3
label ::ffff:0:0/96 4
precedence  ::1/128      50
precedence  ::/0        40
precedence  2002::/16   30
precedence  ::/96       20
# For APICs preferring IPv4 connections, change the value to 100.
precedence  ::ffff:0:0/96 10
```

GUI を使用した DNS プロバイダーと接続するための DNS サービス ポリシーの設定

始める前に

レイヤ 2 またはレイヤ 3 管理接続が設定されていることを確認します。

手順

-
- ステップ 1 メニュー バーで、**[FABRIC] > [Fabric Policies]** を選択します。[Navigation] ペインで、**[Global Policies] > [DNS Profiles]** を展開し、デフォルトの DNS プロファイルをクリックします。
 - ステップ 2 [Work] ペインの [Management EPG] フィールドで、ドロップダウン リストから、適切な管理 EPG (デフォルト (Out-of-Band)) を選択します。
 - ステップ 3 [DNS Providers] を展開し、次の操作を実行します。
 - a) [Address] フィールドに、プロバイダー アドレスを入力します。
 - b) [Preferred] カラムで、優先するプロバイダーとしてこのアドレスが必要な場合は、チェックボックスをオンにします。
優先するプロバイダーは 1 つだけ指定できます。
 - c) [Update] をクリックします。

- d) (任意) セカンダリ DNS プロバイダーを追加するには、[DNS Providers] を展開し、[Address] フィールドで、プロバイダー アドレスを入力します。[Update] をクリックします。

ステップ 4 [DNS Domains] を展開し、次の操作を実行します。

- a) [Name] フィールドに、ドメイン名 (cisco.com) を入力します。
- b) [Default] カラムで、チェックボックスをオンにしてこのドメインをデフォルト ドメインにします。
デフォルトとして指定できるドメイン名は 1 つだけです。
- c) [Update] をクリックします。
- d) (任意) セカンダリ DNS ドメインを追加するには、[DNS Domains] を展開します。[Address] フィールドに、セカンダリ ドメイン名を入力します。Update をクリックします。

ステップ 5 [Submit] をクリックします。
DNS サーバが設定されます。

ステップ 6 メニュー バーで、[TENANTS] > [mgmt] をクリックします。

ステップ 7 [Navigation] ペインで、[Networking] > [VRF] > [oob] の順に展開し、[oob] をクリックします。

ステップ 8 [Work] ペインの [Properties] 下で、[DNS labels] フィールドに、適切な DNS ラベル (デフォルト) を入力します。[Submit] をクリックします。
DNS プロファイル ラベルがテナントおよび VRF で設定されました。

カスタム証明書の設定

カスタム証明書の設定のガイドライン

- Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) で証明書署名要求 (CSR) を生成するために使用される秘密キーのエクスポートはサポートされていません。証明書の CSR を生成するために使用された秘密キーを共有することにより、「Subject Alternative Name (SAN)」フィールドのワイルドカード (「* cisco.com」など) を介して複数のサーバで同じ証明書を使用する場合は、秘密キーを Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックの外部に配置し、Cisco ACI ファブリックにインポートします。
- 証明書署名要求 (CSR) を生成する前に、公開中間証明書とルート CA 証明書をダウンロードしてインストールする必要があります。ルート CA 証明書は技術的には CSR を生成するために必要ではありませんが、シスコでは、対象とする CA 機関と CSR への署名に使用される実物の間の不一致を防ぐために、CSR を生成する前にルート CA 証明書が必要です。Cisco APIC は、送信された証明書が設定された CA によって署名されていることを確認します。
- 更新された証明書の生成に同じ公開キーと秘密キーを使用するには、次のガイドラインを満たす必要があります。
 - 元の CSR にはキー リング内の秘密キーとペアになる公開キーが含まれているため、元の CSR を維持する必要があります。

- Cisco APIC で公開キーと秘密キーを再使用する場合は、元の証明書に使用されたものと同じ CSR を更新された証明書に再送信する必要があります。
- 更新された証明書に同じ公開キーと秘密キーを使用する場合は、元のキーリングを削除しないでください。キーリングを削除すると、CSR で使用されている関連秘密キーが自動的に削除されます。
- Cisco ACI マルチサイト、VCPlugin、VRA、および SCVMM は、証明書ベースの認証ではサポートされません。
- Cisco APIC クラスタごとに 1 つの SSL 証明書のみが許可されます。
- 以降のリリースからリリース 4.0(1) にダウングレードする前に、証明書ベースの認証を無効にする必要があります。
- 証明書ベースの認証セッションを終了するには、ログアウトして CAC カードを削除する必要があります。
- Cisco APIC に設定されたカスタム証明書は、リーフ スイッチとスパイン スイッチに展開されます。ファブリック ノードに接続するために使用される URL または DN が [サブジェクト (Subject)] または [サブジェクト代替名 (Subject Alternative Name)] フィールド内にある場合、ファブリック ノードは証明書でカバーされます。
- Cisco APIC GUI は、最大サイズが 4k バイトの証明書を受け入れることができます。
- HTTPS アクセスに使用している自己署名 SSL 証明書の有効期限が切れると、証明書は自動的に更新されます。

GUI を使用した Cisco ACI HTTPS アクセス用カスタム証明書の設定



注意 ダウンタイムの可能性があるので、メンテナンス時間中にのみこのタスクを実行してください。

ダウンタイムは外部ユーザまたはシステムからの Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) APIC クラスタおよびスイッチへのアクセスには影響しますが、Cisco APIC とスイッチの接続には影響しません。スイッチで実行されている NGINX プロセスのため、外部接続にも影響が及びますが、ファブリックのデータプレーンには影響ありません。Cisco APIC、設定、管理、トラブルシューティングなどへのアクセスは影響を受けることとなります。Cisco APIC およびスイッチで実行されている NGINX Web サーバーは、この操作中に再起動されます。

始める前に

適切な認証局を作成できるように、信頼できる証明書を取得する機関を決定します。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、**[Admin] > [AAA]** の順にクリックします。
- ステップ 2 **[ナビゲーション (Navigation)]** ペインで、**[セキュリティ (Security)]** を選択します。
- ステップ 3 作業ペインで、**[認証局 (Certificate Authorities)] > [アクション (Actions)] > [認証局の作成 (Create Certificate Authority)]** の順に選択します。
- ステップ 4 **[認証局の作成 (Create Certificate Authority)]** 画面で、**[Name (名前)]** フィールドに、認証局の名前を入力します。
- ステップ 5 (オプション) 認証局の **[説明 (Description)]** を入力します。
- ステップ 6 **[証明書チェーン (Certificate Chain)]** フィールドで、Cisco APIC の証明書署名要求 (CSR) に署名する認証局の中間証明書とルート証明書をコピーします。

証明書は、Base64 エンコード X.509 CER (Cisco Emergency Responder) フォーマットである必要があります。中間証明書はルート CA 証明書の前に配置されます。次の例のようになります。

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----  
<Intermediate Certificate>  
-----END CERTIFICATE-----  
-----BEGIN CERTIFICATE-----  
<Root CA Certificate>  
-----END CERTIFICATE-----
```

- ステップ 7 **[保存 (Save)]** をクリックします。
- ステップ 8 作業ペインで、**[キーリング (Key Rings)] > [アクション (Actions)] > [キーリングの作成 (Create Key Ring)]** の順に選択します。
- キーリングを使用すると、以下を管理できます。
1. 秘密キー (外部デバイスからインポートされた、または Cisco APIC で内部的に生成されたもの)。
 2. 秘密キーによって生成された CSR。
 3. CSR を通じて署名された証明書。
- ステップ 9 **[Create Key Ring]** ダイアログボックスで、**[Name]** フィールドに、名前を入力します。
- ステップ 10 (オプション) キーリングの **[説明 (Description)]** を入力します。
- ステップ 11 **[認証局 (Certificate Authority)]** フィールドで、**[認証局の選択 (Select Certificate Authority)]** をクリックし、以前に作成した認証局を選択するか、**[認証局の作成 (Create Certificate Authority)]** を選択します。
- ステップ 12 **[秘密キー (Private Key)]** フィールドで必要なラジオボタンを選択します。次のオプションがあります。
1. 新しいキーの生成 (Generate New Key)
 2. 既存キーのインポート (Import Existing Key.)

- ステップ 13** 秘密キーを入力します。このオプションは、[秘密キー (Private Key)] の [既存キーのインポート (Import Existing Key)] オプションを選択した場合にのみ表示されます。
- ステップ 14** [秘密キー (Private Key)] フィールドで [新しいキーの生成 (Generate New Key)] オプションを選択した場合は、[キー タイプ (Key Type)] で必要なラジオ ボタンを選択します。選択できる基準は、次のとおりです。
1. [RSA] (Rivest、Shamir、および Adelman)
 2. [ECC] (楕円曲線暗号)。ECDSA (楕円曲線デジタル署名アルゴリズム) とも呼ばれます。
- ステップ 15** キーリングで Cisco APIC を使用して CSR を生成する場合は、その内容を [証明書 (Certificate)] フィールドに追加しないでください。前の手順で Cisco APIC を使用せずに秘密キーおよび CSR を生成していて、CA によって署名された証明書がある場合は、その内容を [証明書 (Certificate)] フィールドに追加します。
- ステップ 16** 暗号に必要なキー強度を選択します。このオプションは、[秘密キー (Secret Key)] で [新しいキーの生成 (Generate New Key)] オプションを選択した場合にのみ表示されます。RSA の場合は [モジュラス (Modulus)] ドロップダウンリストで、ECC [キー タイプ (Key Type)] の場合は [ECC カーブ (ECC Curve)] ラジオ ボタンで選択します。
- a) [キー タイプ (Key Type)] で [RSA] を選択した場合は、[モジュラス (Modulus)] ドロップダウンリストからモジュラス値を選択します。
 - b) [キー タイプ (Key Type)] で [ECC] を選択した場合は、[ECC 曲線 (ECC Curve)] ラジオ ボタンのリストから適切な曲線を選択します。
- ステップ 17** [保存 (Save)] ([キーリングの作成 (Create Key Ring)] 画面) をクリックします。
- ステップ 18** [作業 (Work)] ペインで、[キーリング (Key Rings)] > [キーリング名] を選択します (または、必要なキーリングの行をダブルクリックします)。
- 署名付き証明書と秘密キーを入力していない場合は、[作業 (Work)] ペインの [キーリング (Key Rings)] 領域で、作成されたキーリングの [管理状態 (Admin State)] に [開始 (Started)] と表示され、CSR が生成されるのを待ちます。手順 19 に進みます。
- 署名付き証明書と秘密キーの両方を入力した場合は、[キーリング (Key Rings)] 領域に、作成されたキーリングの [管理状態 (Admin State)] が [完了 (Completed)] と表示されます。手順 22 に進みます。
- (注)
- キーリングは削除しないでください。キーリングを削除すると、CSR で使用されている関連秘密キーが自動的に削除されます。
- 展開ボタンをクリックすると、新しい画面に選択したキーリングが表示されます。
- ステップ 19** [証明書要求 (Certificate Request)] ペインで、[証明書要求の作成 (Create Certificate Request)] をクリックします。
- [証明書要求 (Certificate Request)] ウィンドウが表示されます。
- a) [サブジェクト (Subject)] フィールドに、CSR の共通名 ([CN]) を入力します。

ワイルドカードを使用して Cisco APIC の完全修飾ドメイン名 (FQDN) を入力することもできますが、新しいタイプの証明書では、識別可能な証明書の名前を入力し、**[代替サブジェクト名 (Alternate Subject Name)]** フィールド (*[SAN]* フィールド) にすべての Cisco APIC の FQDN を入力することを推奨します (多くの最新のブラウザは、*[SAN]* フィールドに FQDN が入力されていることを想定しています)。

- b) **[代替サブジェクト名 (Alternate Subject Name)]** フィールドに、「DNS:apic1.example.com, DNS:apic2.example.com, DNS:apic3.example.com」や「DNS:*example.com」など、すべての Cisco APIC の FQDN を入力します。

または、SAN を IP アドレスと一致させる場合は、Cisco APIC の IP アドレスを次の形式で入力します。

IP:192.168.2.1

このフィールドには、DNS 名、IPv4 アドレス、またはその両方を組み合わせて使用できます。IPv6 アドレスはサポートされていません。

- c) **[地域 (Locality)]** フィールドに、組織の市または町を入力します。
d) **[州 (State)]** フィールドに、組織が所在する州を入力します。
e) **[国 (Country)]** フィールドに、組織の所在地の国を表す 2 文字の ISO コードを入力します。
f) **[組織名 (Organization Name)]** を入力し、**[組織単位名 (Organization Unit Name)]** に単位を入力します。
g) 組織の連絡担当者の **[電子メール (Email)]** アドレスを入力します。
h) **[パスワード (Password)]** に入力し、**[パスワードの確認 (Confirm Password)]** フィールドにもう一度入力します。
i) **[OK]** をクリックします。

ステップ 20 [証明書要求の設定 (Certificate Request Settings)] ペインに、上で入力した情報が表示されず (手順 19)。

ステップ 21 [作業 (Work)] ペインで、**[キーリング (Key Rings)]** > **[キーリング名]** を選択します (または、必要なキーリングの行をダブルクリックします)。

新しい画面に選択した **キーリング** が表示されます。

(注)

キーリングに示されている認証局によって署名されていない CSR、または MS-DOS 形式の行末を持つ CSR は受け入れられません。エラーメッセージが表示されたら、MS-DOS の行末を削除して解決します。

キーが正常に確認されて、**[作業 (Work)]** ペインの **[管理状態 (Admin State)]** が **[完了済み (Completed)]** に変わり、HTTP ポリシーで使用できるようになります。

ステップ 22 メニューバーで、**[ファブリック (Fabric)]** > **[ファブリック ポリシー (Fabric Policies)]** を選択します。

ステップ 23 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、**[ポリシー (Policies)]** > **[ポッド (Pod)]** > **[管理アクセス (Management Access)]** > **[デフォルト (default)]** をクリックします。

ステップ 24 [Work] ペインの [Admin Key Ring] ドロップダウンリストで目的のキーリングを選択します。

- ステップ 25** (オプション) 証明書ベースの認証では、[Client Certificate TP] ドロップダウン リストで、以前に作成したローカル ユーザ ポリシーを選択し、[Client Certificate Authentication state] の [Enabled] をクリックします。
- ステップ 26** [Submit] をクリックします。
すべての Web サーバーがリスタートし、証明書がアクティブになり、デフォルト以外のキーリングは HTTPS アクセスに関連付けられます。

次のタスク

証明書の失効日には注意し、期限切れになる前に必要な措置を取ってください。更新された証明書に同じキー ペアを保持するには、CSR を保持します。CSR にはキーリング内の秘密キーとペアになる公開キーが含まれています。証明書が期限切れになる前に、同じ CSR を再送信してください。削除したり、新しいキーリングを作成したりしないでください。キーリングを削除すると、Cisco APICに保存されている秘密キーが削除されます。

ファブリック全体のシステム設定のプロビジョニング

APIC インバンドまたはアウトオブバンド接続設定 (preferences) の設定

このトピックでは、APIC サーバ認証サーバまたは ACI ファブリックに外部 SNMP サーバなどのデバイスの管理アクセスのインバンドおよびアウトオブバンド接続の間で切り替える方法について説明します。有効化 **インバンド** ACI ファブリックのリーフスイッチからの外部デバイスに APIC サーバ間のインバンド管理接続を実行します。有効化 **ooband** ACI ファブリックに外部接続の外部デバイスに APIC サーバ間のアウトオブバンド管理接続を実行します。

始める前に

インバンドおよびアウトバンド管理ネットワークを構成します。詳細については、「管理」(『Cisco APIC 基本設定ガイド、リリース 3.x』)を参照してください。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、**System > System Settings** の順にクリックします。
- ステップ 2** ナビゲーション バーで、をクリックして **APIC 接続設定 (preferences)**。
- ステップ 3** ポリシーを有効にするにはクリックして **インバンド** または **ooband**。
- ステップ 4** [送信 (Submit)] をクリックします。

クォータ管理ポリシーの設定

Application Policy Infrastructure Controller (APIC) リリース 2.3(1) 移行から、テナント管理者が設定できるオブジェクトの数に制限が設けられました。これにより、管理者は、テナントを超えてグローバルに追加される管理対象オブジェクトの数を制限できるようになりました。

この機能は、テナントまたはテナントのグループが、リーフごと、またはファブリックごとの ACI の最大数を超えないようにする点で、または利用可能なリソースの大部分を不当に消費して、同じファブリックの他のテナントに影響を及ぼすことがないようにする点で役立ちます。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、**System > System Settings** をクリックします。
 - ステップ 2 **Quota** を右クリックして、**Create Quota Configuration** を選択します。
 - ステップ 3 **Class** フィールドで、クォータによる制限を掛けるオブジェクトのタイプを選択します。
 - ステップ 4 **Container Dn** フィールドに、クラスを説明する識別名 (DN) を入力します。
 - ステップ 5 **Exceed Action** フィールドで、**Fail Transaction Action** または **Raise Fault Action** を選択します。
 - ステップ 6 **Max Number** フィールドで、作成できる管理対象オブジェクトの最大数を入力します。これを超えると、超過アクションが適用されることとなります。
 - ステップ 7 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

適用 BD 例外リストの作成

このトピックでは、適用対象のブリッジドメインには従わない、サブネットのグローバルな例外リストの作成方法について説明します。適用 BD の機能を設定している場合、対象のエンドポイントグループ (EPG) が ping を送信できるのは、関連付けられたブリッジドメイン内のサブネットゲートウェイだけです。

例外 IP アドレスは、すべての VRF のすべての BD ゲートウェイに ping を送信できます。

L3Out 用に設定されたループバックインターフェイスでは、対象のループバックインターフェイスに合わせて設定された IP アドレスへの到達可能性は適用されません。

EBGP ピアとなる IP アドレスが、L3Out インターフェイスのサブネットとは異なるサブネットに存在している場合には、許容例外サブネットにピアサブネットを追加する必要があります。そうしないと、送信元 IP アドレスが L3Out インターフェイスのサブネットとは異なるサブネットに存在するため、eBGP トラフィックがブロックされます。

始める前に

適用対象のブリッジドメイン (BD) を作成します。

手順

-
- ステップ 1 メニュー バーで、**System > System Settings** を選択します。
 - ステップ 2 **BD Enforced Exception List** をクリックします。
 - ステップ 3 **Exception List** の [+] をクリックします。
 - ステップ 4 任意のサブネット ゲートウェイに ping を送信できるサブネットの IP アドレスとネットワーク マスクを追加します。
 - ステップ 5 これを繰り返して、適用ブリッジ ドメインの例外となるサブネットを追加します。
 - ステップ 6 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

BGP ルータ リフレクタ ポリシーとルート リフレクタ ノード エンドポイントの作成

このトピックでは、ACI ファブリック ルート リフレクタを作成する方法について説明します。リフレクタは、ファブリック内で外部ルートを配布するために、マルチ プロトコル BGP (MP-BGP) を使用します。ACI ファブリックでルート リフレクタをイネーブルにするには、ファブリックの管理者がルート リフレクタになるスパイン スイッチを選択して、自律システム (AS) 番号を提供する必要があります。ルート リフレクタが ACI ファブリックで有効になれば、管理者は、外部ネットワークへの接続を設定できます。

始める前に

必須項目：

- ACI ファブリックに外部ルータを接続するには、ファブリック インフラストラクチャの管理者がボーダー ゲートウェイ プロトコル (BGP) のルート リフレクタとしてスパイン ノードを設定する必要がある場合があります。
- 冗長性のために、複数のスパインがルート リフレクタ ノードとして設定されます (1 台のプライマリ リフレクタと 1 台のセカンダリ リフレクタ)。

手順

-
- ステップ 1 BGP ルート リフレクタ ポリシーを作成するには、次の手順を実行します:
 - a) メニュー バーで、**System > System Settings** をクリックします。
 - b) **BGP Route Reflector** をクリックします。
 - c) 入力自律システム番号を入力します。
 - d) **Route Reflector Nodes** で [+] をクリックします。

- e) スパインルート リフレクタ ノードの ID エンドポイントを入力し、**Submit** をクリックします。

ステップ 2 外部ルート リフレクタ ノードのエンドポイントを作成するには、次の手順に従います:

- a) **External Route Reflector Nodes** で [+] をクリックします。
- b) 外部ルート リフレクタ ノードのエンドポイントとして機能するスパインを選択します。
- c) これがマルチサイトによって管理されるサイトである場合には、インターサイトスパインルート リフレクタも指定できます。
- d) [送信 (Submit)] をクリックします。

ファブリック全体のコントロール プレーンの MTU ポリシーを設定する

このトピックでは、ファブリック全体のコントロールプレーン (CP) の MTU ポリシーを作成する方法について説明します。これは、ファブリックのノード (スイッチ) から送信されたコントロールプレーン パケットのグローバル MTU サイズを設定します。

マルチポッドトポロジでは、ファブリック外部ポートの MTU 設定は、CP MTU の値セット以上である必要があります。そうしないと、ファブリックの外部ポートが CP MTU パケットをドロップする可能性があります。



- (注)
- MTU を IPN から継承する L3Out インターフェイス プロファイルを設定するには 9150 にします。IPN 全体で使用される MTU を 2916 に構成する必要がある場合には、L3Out インターフェイス プロファイル内で明示的に構成する必要があります ([テナント (Tenants)] > *tenant-name* > [ネットワーキング (Networking)] > [外部ルート ネットワーク (External Routed Networks)] > [外のネットワークを作成 (Create Routed Outside)] > [ノードとインターフェイス プロトコル プロファイル (Nodes and Interface Protocol Profiles)] > [ノード プロファイルを作成 (Create Node Profile)] > [インターフェイス プロファイルを作成 (Create Interface Profile)] で構成します)。
 - Cisco APIC は、CP-MTU 設定に関係なく、常に 1496 バイト (TCP MSS 1456) の MTU でファブリック スイッチへの TCP 接続を確立します。リモート ポッドおよびリモート リーフ スイッチの IPN ネットワークは、ファブリック ディスカバリのために少なくとも 1500 バイトの MTU をサポートする必要があります。

IPN または CP MTU を変更する場合、Cisco では CP MTU 値を変更し、次にリモート ポッドのスパイン上の MTU 値を変更することをお勧めします。これで、MTU の不一致によりポッド間の接続が失われるリスクが減少します。

手順

-
- ステップ 1 メニュー バーで、**System > System Settings** をクリックします。
 - ステップ 2 **Control Plane MTU** をクリックします。
 - ステップ 3 ファブリック ポートの MTU を入力します。
 - ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

エンドポイント ループ保護の設定

エンドポイントのループ保護ポリシーでは、頻繁な MAC の移動を処理することによる、ループ検出の方法を指定します。EP ループ保護を設定するには、次の手順を実行します:

手順

-
- ステップ 1 メニュー バーで、**System > System Settings** を選択します。
 - ステップ 2 をクリックして **エンドポイント コントロール**。
 - ステップ 3 **Ep Loop Protection** タブをクリックします。
 - ステップ 4 ポリシーを有効にするには、**Enabled** をクリックします (**Administrative State** フィールドにあります)。
 - ステップ 5 オプション。ループを検出の間隔を設定します。これはループを検出するための時間を指定します。指定できる範囲は 30 ~ 300 秒です。デフォルトの設定は 60 秒です。
 - ステップ 6 ループ検出乗算係数を設定します。これは、ループ検出間隔内で単一の EP がポート間を移動した回数です。範囲は 1 ~ 255 です。デフォルトは 4 です。
 - ステップ 7 ループを検出したときに実行するアクションを選択します。
アクションとしては、次のものがあります:
 - **BD Learn Disable**
 - **Port Disable**デフォルトは **Port Disable** です。
 - ステップ 8 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

不正エンドポイント制御ポリシー

不正なエンドポイントの制御ポリシーについて

不正なエンドポイントは、リーフ スイッチを頻繁に攻撃し、異なるリーフ スイッチ ポートにパケットを繰り返し挿入し、802.1Q タグを変更する（エンドポイントの移動をエミュレートする）ことで、学習されたクラスと EPG ポートを変更します。誤設定により頻繁に IP アドレスと MAC アドレスが変更（移動する）されることとなります。

ファブリックの急速な移動などで、大きなネットワークの不安定状態、高い CPU 使用率、まれなケースでは、大量かつ長期のメッセージおよびトランザクションサービス (MTS) バッファ消費のため、エンドポイント マッパー (EPM) および EPM クライアント (EPMC) がクラッシュすることとなります。また、このような頻繁な移動により、EPM および EPMC ログが非常にすばやくロールオーバーされ、無関係なエンドポイントのデバッグを妨害する可能性があります。

不正なエンドポイントの制御機能は脆弱性にすばやく対処します。

- 急速に移動する MAC および IP エンドポイントの特定。
- エンドポイントを一時的に静的にして、エンドポイントを隔離することによって移動を停止します。
- 3.2(6) リリースより前：**不正 EP 検出間隔**のエンドポイントを静的に維持し、不正エンドポイントとの間のトラフィックをドロップします。この時間が経過すると、不正な MAC アドレスまたは IP アドレスが削除されます。
- 3.2(6) リリース以降：**不正な EP 検出間隔**のエンドポイントを静的に維持（この機能はトラフィックをドロップしなくなりました）。この時間が経過すると、不正な MAC アドレスまたは IP アドレスが削除されます。
- ホスト トラッキング パケットを生成して、影響を受ける MAC または IP アドレスをシステムが再学習できるようにします。
- 修正アクションを有効にするための障害の発生。

不正なエンドポイント制御ポリシーはグローバルに設定されており、他のループ防止方法とは異なり、個々のエンドポイント レベルの機能です (IP および MAC アドレス)。ローカルまたはリモートの移動を区別していません。いかなる種類のインターフェイスの変更も、エンドポイントを隔離する必要があるかどうかを決定する際に移動と見なされます。

不正なエンドポイント制御機能は、デフォルトで無効になっています。

不正エンドポイント制御ポリシーの制限事項

不正エンドポイント制御ポリシーを使用する際には、次の制限が適用されます：

- 不正エンドポイント制御ポリシーのパラメータを変更しても、既存の不正エンドポイントには影響しません。

- 不正エンドポイントが有効になっていても、ループ検出とブリッジドメイン移動頻度は有効になりません。
- 不正エンドポイント機能を無効にすると、すべての不正エンドポイントがクリアされます。
- エンドポイント マッパー (EPM) の値は、不正エンドポイントのパラメータに制限を課します。この範囲外のパラメータ値を設定すると、Cisco APIC 適切でないパラメータごとにエラーが発生します。
- 不正エンドポイント検出のサポートは、リモートリーフ ノードに接続されているエンドポイントではなく、ファブリックに接続されているエンドポイントに限定されます。
- 不正なエンドポイント機能は、Cisco ACI マルチサイト 展開の各サイト内で使用でき、サイト内でエンドポイントを移動させるサーバの設定ミスに役立ちます。不正エンドポイント機能は、エンドポイントがサイト間を移動する可能性があるシナリオ向けには設計されていません。
- Cisco APIC リリース 4.1 にアップグレードする前に、不正エンドポイント制御を無効にする必要があります。

GUI を使用した不正エンドポイント制御ポリシーの設定

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (Cisco APIC) GUI を使用して、不正なエンドポイントを検出して削除するようにファブリックの不正 EP 制御ポリシーを設定できます。このトピックには、アドホックのリーフスイッチで不正なエンドポイントをクリアする手順も含まれています。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、**System > System Settings** を選択します。
 - ステップ 2 ナビゲーションウィンドウで、**[エンドポイント制御 (Endpoint Controls)]** を選択します。
 - ステップ 3 **[ナビゲーション (Navigation)]** ペインで、**[不正な EP 制御 (Rogue EP Control)]** タブを選択します。
 - ステップ 4 **[Administrative State]** を **[Enabled]** に設定します。
 - ステップ 5 **[不正な EP 検出間隔 (Rogue EP Detection Interval)]**、**[不正な EP 検出倍数係数 (Rogue EP Detection Multiplication Factor)]**、および **[保持間隔 (秒) (Hold Interval (sec))]** を目的の値に設定します。
 - **不正な EP 検出間隔**：不正エンドポイントの検出間隔を設定します。これは、不正エンドポイントを検出する時間を指定します。有効な値は 0 ~ 65535 秒です。デフォルトは 60 です。
 - **不正な EP 検出倍数係数**：エンドポイントが不正かどうかを判断するための不正エンドポイント検出の乗数を設定します。エンドポイントがこの数よりも多く移動すると、エンド

ポイント検出間隔内で、エンドポイントは不正と宣言されます。有効値は 2 ～ 10 です。デフォルト値は 6 です。

- **保持間隔（秒）**：エンドポイントが不正であると宣言されてからの間隔（秒単位）。学習が防止され、不正なエンドポイントとの間のトラフィックがドロップされます。このインターバルが経過すると、エンドポイントは削除されます。5.2(3) リリースより前では、有効な値は 1800 ～ 3600 秒です。5.2(3) リリースより前では、有効な値は 1800 ～ 3600 秒です。デフォルト値は 1800 です。

ステップ 6 （任意）リーフスイッチの不正なエンドポイントをクリアするには、次の手順を実行します。

- a) Cisco APIC メニューバーで、**[Fabric] > [Inventory]** の順にクリックします。
- b) ナビゲーションバーで、**[Pod]** を展開し、不正なエンドポイントをクリアするリーフスイッチをクリックします。
- c) リーフスイッチ サマリが作業ウィンドウに表示されたら、ナビゲーションバーのリーフスイッチ名を右クリックし、**[Clear Rogue Endpoints]** を選択します。
- d) **[はい (Yes)]** をクリックします。

NX-OS スタイル CLI を使用している不正エンドポイント制御ポリシーの設定

NX-OS スタイルの CLI を使用して、不正なエンドポイントを検出および削除するように、ファブリックの不正エンドポイント制御ポリシーを設定できます。

手順

ステップ 1 グローバル コンフィギュレーション モードに入ります。

例：

```
apicl# configure
```

ステップ 2 グローバルな不正エンドポイント制御ポリシーを有効にします。

例：

```
apicl(config)# endpoint rogue-detect enable
```

ステップ 3 ホールド間隔を設定します。

保持間隔は、エンドポイントが不正であると宣言されてからエンドポイントが静的に保たれ、学習が防止され、エンドポイントとの間のトラフィックがドロップされた後の期間（秒）です。このインターバルが経過すると、エンドポイントは削除されます。リリース 5.2(2) 以前では、有効な値は 1800 ～ 3600 秒です。リリース 5.2(3) 以降では、有効な値は 300 ～ 3600 秒です。デフォルト値は 1800 です。

例：

```
apicl(config)# endpoint rogue-detect hold-interval 1800
```

ステップ 4 検出間隔を設定します。

検出間隔は、不正エンドポイント制御がエンドポイントの移動数をカウントしている間の期間（秒）です。この間隔の中のカウントが検出乗算係数で指定された値を超える場合、エンドポイントは不正であると宣言されます。有効な値は 0 ～ 65535 秒です。デフォルトは 60 です。

例：

```
apic1(config)# endpoint rogue-detect interval 60
```

ステップ 5 検出倍率を設定します。

エンドポイントが、検出間隔で指定された期間中に検出倍率で指定された値よりも多く移動した場合、エンドポイントは不正であると宣言されます。有効値は 2 ～ 10 です。デフォルト値は 6 です。

例：

```
apic1# endpoint rogue-detect factor 6
```

不正/COOP 例外リストについて

不正/COOP 例外リストを使用すると、エンドポイントが不正としてマークされる前に、不正エンドポイント制御によるエンドポイント移動の許容度を高くするエンドポイントの MAC アドレスを指定できます。不正/COOP 例外リストのエンドポイントは、10 分以内に 3000 回以上移動した場合にのみ不正としてマークされます。エンドポイントが不正としてマークされた後、学習を防ぐためにエンドポイントは静的なままになります。不正エンドポイントは 30 秒後に削除されます。

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) 6.0 (3) リリース以降では、グローバルな不正/COOP 例外リストを作成できます。このリストは、MAC アドレスが見つかるブリッジドメイン上の全ての不正エンドポイントコントロールから MAC アドレスを除外します。そして、L3Outs の不正/COOP 例外リストを作成できます。ブリッジドメインまたは L3Out のすべての MAC アドレスを除外することもできます。これにより、すべての MAC アドレスに対して例外を作成する場合に例外リストを簡単に作成できます。各アドレスを個別に入力する必要はありません。

不正/COOP 例外リストのガイドラインと制限事項

不正/COOP 例外リストを使用するとき、次の注意事項と制限事項が適用されます。

- MAC アドレス例外リスト機能は、レイヤ 2 ブリッジドメイン（IP ルーティングが有効になっていないブリッジドメイン）で動作します。これは、レイヤ 3 ブリッジドメイン（IP ルーティングが有効になっているブリッジドメイン）では、MAC アドレスとともに移動する IP アドレスがあった場合、最初に IP アドレスが放浪しているとしてマークされ、その後 IP アドレスと MAC アドレスの両方が検疫対象とされるためです。
- レイヤ 3 ブリッジドメインの場合、放浪エンドポイント制御から除外する特定の IP アドレスについては、サブネットごとのデータプレーン IP アドレス学習を無効にします。

サブネットごとのデータプレーン IP アドレス学習機能については、*Cisco APIC Layer 3 ネットワーキング設定ガイド*を参照してください。

- このリストに追加されている MAC アドレスの種類を完全に理解している必要があります。このリスト内の MAC アドレスが、ファブリック全体または、リーフスイッチごとの過剰な移動に寄与しないようにすることは、ユーザーの責任です。
- ブリッジ ドメインごとの例外リストには、ファブリック全体で最大 100 個の MAC アドレスを追加できます。6.0 (3) リリース以降では、特定のブリッジドメインのすべての MAC アドレスを不正なエンドポイント制御から除外することもできます。
- 6.0 (3) リリース以降、ファブリック全体で 100 個の外部 L3Out MAC アドレスを例外リストに追加できます。また、L3Out SVI ブリッジドメインのすべての MAC アドレスを不正なエンドポイント制御から除外することもできます。
- 6.0 (3) リリース以降、それらの MAC アドレスのエンドポイントの合計数が 6,000 以内であれば、最大 6,000 個の MAC アドレスをグローバル例外リストに追加できます。複数のブリッジドメインで検出された同じ MAC アドレスは、合計 6,000 のエンドポイントに対して、同じ数のブリッジドメインとしてカウントされます。たとえば、構成された MAC アドレスが 10 のブリッジドメインで検出された MAC エンドポイントとして表示される場合、MAC アドレスは 10 のエンドポイントとしてカウントされます。
- リーフスイッチの例外リストの免除は、放浪エンドポイント制御が有効になっている場合にのみ適用されます。放浪エンドポイント制御が無効になっている場合、MAC アドレス例外リストは、COOP ダンプニングでのみ使用されます。
- 不正/COOP 例外リストには、ブリッジドメインの MAC アドレスのみを含めることができ、VRF インスタンスの IP アドレスは含めることができません。ただし、IP アドレスのみの移動では、IP アドレスが通常の不正エンドポイント制御基準を満たす場合でも、IP アドレスが不正としてマークされる可能性があります。
- データパストラフィックに基づいて IP アドレスの不正検出およびマーキングをマスクするには、ブリッジドメインサブネット学習無効を使用します。ブリッジドメインサブネットラーニング無効化は、移動するたびに Cisco ACI が IP アドレスの場所を学習しなくなります。

GUI を使用したブリッジ ドメイン作成時の不正/COOP 例外リストの設定

次の手順では、ブリッジドメインの作成時に不正/COOP 例外リストを設定します。

始める前に

- ブリッジドメインを作成するテナントが必要です。
- 不正エンドポイント制御を有効にする必要があります。不正エンドポイント制御を有効にする手順については、[GUI を使用した不正エンドポイント制御ポリシーの設定 \(190 ページ\)](#) を参照してください。

手順

-
- ステップ 1** 目的のテナントで、ブリッジドメインを作成します。メニューバーで、[テナント (Tenants)] > [tenant_name] を選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ネットワークング (Networking)] > [ブリッジドメイン (Bridge Domains)] の順に選択します。
- ステップ 3** **Bridge Domains** を右クリックして、**Create Bridge Domain** を選択します。
- ステップ 4** [ブリッジドメインの作成 (Create Bridge Domain)] ダイアログで、[ステップ 1 (STEP 1)] の [メイン (MAIN)] および [ステップ 2 (STEP 2)] の [L3 設定 (L3 Configurations)] に必要なフィールドに入力します。
- ステップ 5** [STEP 3 (ステップ 3)] の [アドバンスド/トラブルシューティング (Advanced / Troubleshooting)] で、[不正/COOP 例外リスト (Rogue / Coop Exception List)] の [+] をクリックし、リストに追加するエンドポイントの MAC アドレスを入力して、[更新 (Update)] をクリックします。
- MAC アドレスの形式は AA:BB:CC:DD:EE:FF です。
- a) リストに追加するエンドポイントごとにこのステップを繰り返します。
- ステップ 6** (オプション) : Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) 6.0 (3) リリース以降、ブリッジドメインからの MAC アドレスを無視するために不正エンドポイントコントロール **BD の不正例外 MAC** を有効化 チェック ボックスをチェックします。
- ステップ 7** 必要に応じて、[ステップ 3 (STEP 3)] > [アドバンスド/トラブルシューティング (Advanced/Troubleshooting)] の残りのフィールドに入力します。
- ステップ 8** [完了 (Finish)] をクリックします。
-

GUI を使用した既存のブリッジ ドメインの不正/COOP 例外リストの設定

次の手順では、既存のブリッジドメインの不正/COOP 例外リストを設定します。

始める前に

- ブリッジドメインを持つテナントが必要です。
- 不正エンドポイント制御を有効にする必要があります。不正エンドポイント制御を有効にする手順については、[GUI を使用した不正エンドポイント制御ポリシーの設定 \(190 ページ\)](#) を参照してください。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[テナント (Tenants)] > [tenant_name] を選択します。

- ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ウィンドウで、[ネットワークング (Networking)] > [ブリッジドメイン (Bridge Domains)] > [bridge_domain_name]. を選択します。
- ステップ 3 [作業 (Work)] ペインで、[ポリシー (Policy)] > [アドバンスド/トラブルシューティング (Advanced/Troubleshooting)] を選択します。
- ステップ 4 [不正/COOP 例外リスト (Rogue / Coop Exception List)] で [+] をクリックし、リストに追加するエンドポイントの MAC アドレスを入力して、[更新 (Update)] をクリックします。
- MAC アドレスの形式は AA:BB:CC:DD:EE:FF です。
- a) リストに追加するエンドポイントごとにこのステップを繰り返します。
- ステップ 5 (オプション) : Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) 6.0 (3) リリース以降、ブリッジドメインからの MAC アドレスを無視するために不正エンドポイントコントロール **BD の不正例外 MAC を有効化** チェック ボックスをチェックします。
- ステップ 6 [送信 (Submit)] をクリックします。

GUI を使用した L3Out SVI の不正エンドポイント制御の例外リストの構成

このセクションの手順では、L3Out の選択されたスイッチ仮想インターフェイス (SVI) について、不正なエンドポイント制御機能が無視する MAC アドレスを設定します。

始める前に

- L3Out を持つテナントが必要です。
- 不正エンドポイント制御を有効にする必要があります。不正エンドポイント制御を有効にする手順については、[GUI を使用した不正エンドポイント制御ポリシーの設定 \(190 ページ\)](#) を参照してください。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[テナント (Tenants)] > [tenant_name] を選択します。
- ステップ 2 ナビゲーション ウィンドウで [ネットワークング (Networking)] > [L3Outs] > [L3Out_name] > [ロジカル ノード プロファイル (Logical Node Profiles)] > [node_profile_name] > [ロジカル インターフェイス プロファイル (Logical Interface Profiles)] > [interface_profile_name] を選択します。
- ステップ 3 ワーク ペインで、[ポリシー (Policy)] > SVI を選択します。
- ステップ 4 SVI テーブルで、[+] をクリックします。
- ステップ 5 [SVI を選択 (Select SVI)] ダイアログ内でいずれかの次のアクションを実行します：
- [不正除外 MAC グループ (Rogue Exception MAC Group)] で、既存のグループを選択するか、新しいグループを作成します。
- 不正例外 MAC グループは、同じ VLAN カプセル化を持つすべての SVI について、不正エンドポイント制御機能が無視する MAC アドレスを指定します。

- [不正 EP コントロールからの MAC を全て除外します (Exclude all MACs from Rogue EP Control)] ボックスをチェックします。

このオプションを有効にすると、不正エンドポイント制御機能は、同じ VLAN カプセル化を持つすべての SVI のすべての MAC アドレスを無視します。

ステップ 6 目的に応じて、残りのフィールドに入力します。

ステップ 7 [送信 (Submit)] をクリックします。

GUI を使用したファブリックの不正 エンドポイント制御の MAC アドレス 例外を構成

6.0 (3) リリース以降、ファブリック レベルで、不正なエンドポイント制御が無視する MAC アドレスを設定できます。不正エンドポイント制御は、MAC アドレスが属するブリッジドミアンまたは L3Out SVI に関係なく、指定した MAC アドレスを無視します。

始める前に

不正エンドポイント制御を有効にする必要があります。不正エンドポイント制御を有効にする手順については、[GUI を使用した不正エンドポイント制御ポリシーの設定 \(190 ページ\)](#) を参照してください。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] を選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、> [ポリシー (Policies)] > [ファブリック ワイルドカード不正例外 (Fabric Wildcard Rogue Exception)] を選択します。
- ステップ 3** [ワーク (Work)] ペインの [ファブリック ワイルドカード不正例外 (Fabric Wildcard Rogue Exception)] テーブルで、[+] をクリックします。
 - 無視する不正エンドポイント制御の MAC アドレスを入力し、[更新 (Update)] をクリックします。
 - 不正なエンドポイント制御で無視する MAC アドレスごとに、この手順を繰り返します。

最大 IP アドレス フロー制御について

3.2(6) リリースでは、最大 IP アドレスフロー制御機能が追加されています。これは、エンドポイントの動作不良を識別し、MAC アドレスに関連付けられている学習 IP アドレスの数に基づいて不正としてフラグを立てます。Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックは、MAC アドレスで最大 4,096 個の IP アドレスをサポートします。リーフスイッチが MAC アドレスに関連付けられた 4,096 を超える IP アドレスを学習した場合、MAC アドレスとすべての IP アドレスが不正として分類されます。

最大 IP アドレス フロー制御機能がエンドポイントを不正として識別した後、エンドポイントは隔離され、APIC で障害が発生し、このエンドポイントで新しい IP アドレスの学習は行われません。隔離期間は1時間です。標準の不正機能が有効になっている場合、隔離期間は標準の不正設定で設定された期間と同じです。

不正なエンドポイント制御ポリシー機能（移動による不正）は有効または無効に設定できますが、最大 IP アドレス フロー制御機能では明示的な設定を有効にする必要はありません。

この機能が導入される前は、設定可能な期間内に設定された回数だけロケーションを移動し続けた場合、ACI ファブリックはエンドポイントを不正と識別していました。この機能を使用すると、ACI ファブリックは、移動の数に基づいて、または MAC アドレスで 4,096 を超える IP アドレスを学習した場合に、エンドポイントを不正として識別できます。

COOP の設定

COOP について

Council of Oracle Protocol (COOP) は、スパイン スイッチ プロキシにマッピング情報（場所と ID）を通信するために使用されます。リーフ スイッチ（「citizen」）は、ゼロ メッセージ キュー（ZMQ）を使用して、エンドポイントアドレス情報をスパイン スイッチ（「oracle」）に転送します。スパイン ノードで実行している COOP によって、すべてのスパイン ノードが一貫性のあるエンドポイントアドレスとロケーション情報のコピーを維持することができ、さらに、ロケーションマッピングデータベースに対するエンドポイント ID の分散ハッシュテーブル（DHT）レポジトリを維持することができます。

COOP エンドポイントのダンプニング

悪意のある動作または誤った動作によって不要なエンドポイント更新が発生すると、COOP プロセスが過負荷になり、有効なエンドポイント更新の処理が妨げられる可能性があります。リーフ スイッチの不正エンドポイント検出機能により、多数の誤った更新がスパイン スイッチに到達するのを防ぐことができます。不正なエンドポイントの検出が不十分な場合、COOP プロセスはエンドポイントのダンプニングを呼び出します。COOP の負荷を軽減するために、スパイン スイッチはすべてのリーフ スイッチに、指定された期間、不正な動作をしているエンドポイントからの更新を無視するように要求します。これが発生すると、エンドポイントのダンプニング状態は「フリーズ」になり、障害が生成されます。



- (注) COOP エンドポイントダンプニングは、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) リリース 4.2(3) で導入され、デフォルトで有効になっています。

検出基準は、次の表に示すように、エンドポイント関連イベントのタイプに基づくペナルティ値の計算に基づきます。

イベント (Event)	ペナルティ値	注
新しい IP アドレスを確認する	0	新しい IP アドレスが学習されます。
追加の IP アドレスを確認する	2	追加の IP アドレスは、既存のエンドポイントの MAC アドレスで学習されます。
IP アドレスの削除	50	リモートエンドポイントの IP アドレスは、IP アドレスが学習されると削除されます。
削除された IP アドレスを確認する	50	IP アドレスが削除された後のリモート エンドポイントの IP アドレスを確認します。
IP アドレスの削除	400	IP アドレスが学習されたら、ローカル エンドポイントの IP アドレスを削除します。
削除された IP アドレスを確認する	400	IP アドレスが削除された後のローカル エンドポイント IP アドレスを確認します。
エンドポイントの移動	200	エンドポイントが別のインターフェイスに移動します。
IP アドレスの移動	200	IP アドレスが別の MAC アドレスに移動する。 このイベントでは、BGP へのルート更新が 2 回発生するため、ペナルティは高くなります。
URIB プログラミング	50	エンドポイントのスパインスイッチトンネルインターフェイスのステータス変更 (アップ/ダウン)。

ペナルティ値は IP アドレスごとに計算され、5 分ごとに 50% ずつ減少します。たとえば、エンドポイントのペナルティ値が 4000 で、エンドポイントの IP アドレスの数が 2 の場合、IP アドレスあたりのペナルティ値は $4000/2 = 2000$ です。IP アドレスあたりのペナルティ値がクリティカルしきい値 (4000) を超えると、エンドポイントの状態が [標準 (Normal)] から [クリティカル (Critical)] に変更されます。エンドポイントが 5 分を超えて [クリティカル (Critical)] 状態になっている場合、または IP アドレスあたりのペナルティ値がフリーズしきい値 (10000) を超えている場合、エンドポイントの状態は **フリーズ** (ダンプニング) になり、エンドポイントの更新は無視されます。IP アドレスあたりのペナルティ値が再利用しきい値 (2500) を下回ると、エンドポイントの状態は **Normal** (非ダンプニング) になります。ペナルティ値を 75% ($10000 * 0.5 * 0.5 = 2500$) 減らすには、10 分経過する必要があります。しきい値はユーザが設定することはできません。

COOP 認証

COOP データパス通信は、セキュアな接続を介した転送を優先します。悪意のあるトラフィックインジェクションから COOP メッセージを保護するために、Cisco APIC およびスイッチは COOP プロトコル認証をサポートしています。

COOP プロトコルは、次の 2 つの ZMQ 認証モードをサポートしています。

- **厳密モード**：COOP では、MD5 認証 ZMQ 接続のみ許可します。
- **互換性モード**：COOP ではメッセージの転送に MD5 認証接続と非認証 ZMQ 接続の両方を許可します。

COOP 認証の詳細については、『Cisco APIC セキュリティ設定ガイド』を参照してください。

GUI を使用した COOP 減衰エンドポイントの表示

スパイン ノードのすべての減衰エンドポイントを表示するには、この Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI 手順を使用します。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [インベントリ (Inventory)] をクリックします。

ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、パッドとスパイン ノードを展開します。

ステップ 3 [プロトコル (Protocols)] > [COOP] および [COOP] インスタンスを展開します。

ステップ 4 [エンドポイント データベース (Endpoint Database)] をクリックして、エンドポイントを表示します。

[減衰状態 (Dampened State)] カラムを調べて、減衰したエンドポイントを見つけます。次の状態があります。

- **Normal**：エンドポイントの更新は正常です。
- **Critical**：エンドポイントをフリーズ状態に移行できる十分な更新を受信しました。エンドポイントが 5 分以上 **Critical** 状態のままになると、状態は **Freeze** に変わります。
- **Freeze**：このエンドポイントからの更新は、頻繁に不要な更新が行われているため、現在無視されています。障害が生成されました。

スイッチ CLI を使用した COOP 減衰エンドポイントの表示

スパインまたはリーフ ノードのすべての減衰エンドポイントを表示するには、このスイッチ CLI 手順を使用します。

スパインまたはリーフ スイッチ CLI にログインし、次のコマンドを入力します。

```
show coop internal info repo ep dampening
```

GUI を使用した COOP 減衰エンドポイントのクリア

スパインまたはリーフノードのすべての減衰エンドポイントをクリアおよび回復するには、この Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI 手順を使用します。この操作は、すべてのスパインスイッチおよびエンドポイントの送信元リーフスイッチで実行する必要があります。減衰されたエンドポイントがリーフスイッチのエンドポイントテーブルにまだある場合、エンドポイントはスパインスイッチ COOP データベースにパブリッシュされます。そうでない場合、減衰したエンドポイントは、2分後にスパインスイッチ COOP データベースから削除されます。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [インベントリ (Inventory)] をクリックします。
 - ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、パッドとスパインまたはリーフノードを展開します。
 - ステップ 3 ノードを右クリックし、[減衰エンドポイントの消去 (Clear Dampened Endpoints)] を選択します。
 - ステップ 4 [はい (Yes)] をクリックして、アクションを確認します。
-

スイッチ CLI を使用した COOP 減衰エンドポイントのクリア

スパインまたはリーフノードの減衰エンドポイントをクリアして回復するには、次の手順を使用します。この手順では、ダンプニング状態が **Freeze** である単一のエンドポイントを回復します。この操作は、すべてのスパインスイッチおよびエンドポイントの送信元リーフスイッチで実行する必要があります。

スパインまたはリーフスイッチ CLI にログインし、次のコマンドを入力します。

```
clear coop internal info repo ep dampening key <bd> <mac>
```

RESTAPI を使用した COOP エンドポイント ダンプニングの無効化

この手順では、APIC REST API を使用して COOP EP ダンプニングを無効または有効にする方法を示します。

COOP エンドポイントのダンプニングはデフォルトで有効になっていますが、場合によっては無効にする必要があります。たとえば、1つの MAC アドレスに対して多数の IP 更新が予想され、それらの更新を無視するとネットワークが中断される場合があります。

次の API を使用し、`disableEpDampening = "true"` を設定して COOP エンドポイント ダンプニングを無効にします。

```
<!-- api/policymgr/mo/.xml -->
<polUni>
```

```
<infraInfra>
  <infraSetPol disableEpDampening="true"></infraSetPol>
</infraInfra>
</polUni>
```

ファブリック内のすべてのノードは COOP エンドポイント ダンプニングを無効にし、ダンプ状態が「フリーズ」である既存のエンドポイントを回復します。

APIC GUI を使用した COOP 認証の設定

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[System] > [System Settings] の順に選択します。
- ステップ 2 [ナビゲーション] ペインで [COOP グループ] をクリックします。
- ステップ 3 [作業] ペインの [タイプ] フィールドにある [ポリシー プロパティ] 領域で、[互換性のあるタイプ] および [ストリクト タイプ] オプションから希望のタイプを選択します。
- ステップ 4 [Submit] をクリックします。
これにより、COOP 認証ポリシー設定を完了します。

Cisco NX OS スタイル CLI を使用した COOP 認証の設定

手順

ストリクト モード オプションを使用して、COOP 認証ポリシーを設定します。

例：

```
apic1# configure
apic1(config)# coop-fabric
apic1(config-coop-fabric)# authentication type ?
compatible Compatible type
strict Strict type
apic101-apic1(config-coop-fabric)# authentication type strict
```

REST API を使用した COOP 認証の設定

手順

COOP 認証ポリシーを設定します。

例では、ストリクト モードが選択されます。

例 :

```
https://172.23.53.xx/api/node/mo/uni/fabric/pol-default.xml
```

```
<coopPol type="strict">  
</coopPol>
```

エンドポイント リッスン ポリシー

エンドポイント リッスン ポリシーについて

エンドポイント リッスン ポリシーを設定して、ポリシーが適用されていない Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) のリーフ スイッチに匿名エンドポイントから送信されるタグなしトラフィックを検出できます。デフォルトでは、ポートにポリシーが展開されていない場合、すべてのエンドポイントトラフィックがそのポートでドロップされます。エンドポイントリッスンポリシーを設定すると、このポリシーは、適用されている既存のポリシーがないすべてのリーフ スイッチ ポートに展開されます。エンドポイント リッスン ポリシーでは、Cisco ACI でこれらのポートに着信するタグなしトラフィックを検出できます。これにより、Cisco ACI で匿名エンドポイントの MAC アドレスまたは IP アドレスがわかります。これにより、Cisco ACI 管理者はこれらのエンドポイントを配置する EPG を決定できます。Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI は、検出されたすべての匿名エンドポイントを **グローバル エンドポイント** 設定画面に表示します。



(注) エンドポイント リッスン ポリシーはベータ機能です。この機能が意図したとおりに動作する保証はありません。自己責任で使用してください。

GUI を使用したエンドポイント リッスン ポリシーの設定

この手順では、エンドポイント リッスン ポリシーを設定します。このポリシーは、匿名エンドポイントから、適用されたポリシーがない Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) リーフ スイッチに送信されるタグなしトラフィックを検出します。



(注) エンドポイント リッスン ポリシーはベータ機能です。この機能が意図したとおりに動作する保証はありません。自己責任で使用してください。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[システム (System)] > [システム設定 (System Settings)] の順に選択します。

- ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[グローバル エンドポイント (Global Endpoints)] を選択します。
- ステップ 3 [作業 (Work)] ペインで、[エンドポイント リッスン ポリシー (End Point Listen Policy)] チェックボックスをオンにします。
- ステップ 4 [エンドポイント リッスン エンキャップ (End Point Listen Encap)] ドロップダウンリストで、[VLAN] を選択します。
- ステップ 5 [エンドポイント リッスン エンキャップ (End Point Listen Encap)] テキストフィールドに、VLAN ID を入力します。有効な値は 1 ~ 4094 です。これは予約済みの VLAN カプセル化である必要があります、どの EPG でも使用できません。
- ステップ 6 [送信 (Submit)] をクリックします。

IP エージングの設定

このトピックでは、IP エージング ポリシーを有効にする方法について説明します。有効な場合、IP エージング ポリシーは、エンドポイント上の未使用の IP を 5 します。

管理状態が有効になっているときに、IP エージング ポリシーは、エンドポイントの IP アドレスを追跡する (IPv4) の ARP 要求と (IPv6) のネイバー要請を送信します。応答が指定されていない場合、ポリシーは、未使用の IP を 5 します。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、**System > System Settings** を選択します。
- ステップ 2 をクリックして **エンドポイント コントロール** 。
- ステップ 3 **Ip Aging** タブをクリックします。
- ステップ 4 ポリシーを有効にするにはクリックして **Enabled** で、**Administrative State** フィールド。

次のタスク

、 、 エンドポイント上の IP アドレスを追跡するために使用されるタイマーを指定する必要がありますあるエンドポイント保持ポリシーを作成します。移動 **テナント > テナント名 > > ポリシー > プロトコル > エンドポイント保持** 。

リモート エンドポイントの学習を無効にする

このトピックでは、有効化または IP エンドポイント ラーニングを無効にする方法について説明します。

このポリシーの適用範囲は、ファブリック全体です。を設定した後、ポリシーは起動に各リーフ スイッチにプッシュされます。

Cisco Nexus 9000 シリーズのスイッチで 93128 を含むファブリックでは、このポリシーを有効にする必要がありますが正常に APIC リリース 2.2(2x) にアップグレードされた以降のすべてのノードが表示された後の N9K M12PQ アップリンク モジュール、TX、9396 PX または 9396 TX がスイッチします。

次の設定の変更のいずれか後に、手動で以前に学習された IP エンドポイントをフラッシュする必要があります。

- リモート IP エンドポイント ラーニングが無効になっています
- 入力ポリシーの適用、VRF が設定されています。
- VRF に少なくとも 1 つのレイヤ 3 インターフェイスが存在します

以前に学習された IP エンドポイントを手動でフラッシュ、VPC ピアの両方で、次のコマンドを入力します: vsh-c"システム内部 epm エンドポイントの vrf をクリア<vrf-name>リモート「 </vrf-name>。

IP エンドポイントの学習を有効または無効にするには、次の手順を実行します:

手順

ステップ 1 メニューバーで、**[System] > [System Settings]** の順にクリックします。

ステップ 2 **[Fabric Wide Setting]** をクリックします。

ステップ 3 チェック ボックスをクリックして **リモート EP 学習の無効化**。

ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。

サブネットチェックのグローバルな適用

このトピックでは、サブネットチェックを有効または無効にする方法について説明します。有効にすると、ある VRF で設定されたサブネットの外、つまり他のすべての VRF では、IP 学習が無効になります。

このポリシーの適用範囲は、ファブリック全体です。を設定した後、ポリシーは起動に各リーフスイッチにプッシュされます。

手順

ステップ 1 メニューバーで、**[System] > [System Settings]** の順にクリックします。

ステップ 2 **[Fabric Wide Setting]** をクリックします。

ステップ 3 **Enforce Subnet Check** チェック ボックスをオンにします。

ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。

GIPo の再割り当て

このトピックでは、非ストレッチブリッジドメインの GIPos の再割り当てを有効にして、ストレッチブリッジドメイン用のスペースを確保する方法について説明します。

Cisco ACI Multi-Site の導入により、GIPo 割り当て方式を変更して次の利点を提供する必要がありますがありました。

1. 同じ GIPo を持つブリッジドメインの数を最小限に抑えます。
2. Cisco ACI Multi-Site 拡張ブリッジドメインに割り当てられた GIPos は、非拡張ブリッジドメインに割り当てられた GIPos と重複しません。

この割り当てを実現するために、Cisco ACI では、ストレッチされたブリッジドメインとストレッチされていないブリッジドメインの量に基づいてサイズが異なる複数のプールが導入されました。

Cisco ACI の新規インストールの場合、Cisco APIC は #1 と #2 の両方が実行されることを保証します。2.3(1) よりも前のリリースからの Cisco ACI のアップグレード中は、既存の GIPo が非ストレッチブリッジドメインにすでに使用されている可能性があるため、ファブリックの中断を避けるために古いスキーマが維持されます。その結果、Cisco ACI は #2 が完了したことを保証できません。

Cisco APIC のファブリック全体の設定ポリシーで [GIPo の再割り当て (Reallocate GIPo)] ノブを有効にすると、Cisco APIC は GIPos を再割り当てし、新しい割り当て方式を使用します。ノブの有効化は1回限りの操作です。その後、GIPos はオーバーラップしません。このノブは、2.3(1) より前のリリースから 3.0(1) 以降のリリースにアップグレードする場合にのみ、Cisco ACI Multi-Site Orchestrator の導入に関連します。

このポリシーの適用範囲は、ファブリック全体です。を設定した後、ポリシーは起動に各リーフスイッチにプッシュされます。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[システム (System)]>>[システム設定 (System Settings)] を選択します。

ステップ 2 [Fabric Wide Setting] をクリックします。

ステップ 3 [Reallocate Gipo] のチェック ボックスをオンにします。

ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。

ドメインの検証のグローバルな適用

このトピックでは、ドメインの検証を適用する方法について説明します。有効な場合、静的なパスを追加すると、EPGに関連付けられたドメインがないかどうか判断するために、検証チェックが実行されます。

このポリシーの適用範囲は、ファブリック全体です。を設定した後、ポリシーは起動に各リーフスイッチにプッシュされます。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、**[System]** > **[System Settings]** の順にクリックします。
 - ステップ 2 **[Fabric Wide Setting]** をクリックします。
 - ステップ 3 **Enforce Domain Validation** チェック ボックスをオンにします。
 - ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

OpFlex クライアント認証を有効にする

このトピックでは、GOLF および Linux 用の OpFlex クライアント認証を有効にする方法について説明します。

クライアントの ID がネットワークによって保証されない環境で GOLF または Linux Opflex クライアントをデプロイするには、クライアント証明書に基づいてクライアントの ID を動的に検証できます。



-
- (注) 証明書の適用を有効にすると、クライアント認証をサポートしていない GOLF または Linux Opflex クライアントとの接続が無効になります。
-

このポリシーの適用範囲は、ファブリック全体です。を設定した後、ポリシーは起動に各リーフスイッチにプッシュされます。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、**[System]** > **[System Settings]** の順にクリックします。
 - ステップ 2 **[Fabric Wide Setting]** をクリックします。
 - ステップ 3 **OpFlex Client Authentication** のチェック ボックスをクリックして、GOLF および Linux Opflex クライアントのクライアント証明書認証を有効または無効にします。
 - ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

ファブリック ロード バランシング

Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックでは、利用可能なアップリンク リンク間のトラフィックを平衡化するためのロード バランシング オプションがいくつか提供されます。ここでは、リーフからスパインへのスイッチ トラフィックのロード バランシングについて説明します。

スタティック ハッシュ ロード バランシングは、各フローが5タプルのハッシュに基づいてアップリンクに割り当てられるネットワークで使用される従来のロード バランシング機構です。このロード バランシングにより、使用可能なリンクにほぼ均等な流量が分配されます。通常、流量が多いと、流量の均等な分配により帯域幅も均等に分配されます。ただし、いくつかのフローが残りよりも多くと、スタティック ロード バランシングにより完全に最適ではない結果がもたらされる場合があります。

Cisco ACI ファブリック ダイナミック ロード バランシング (DLB) は、輻輳レベルに従ってトラフィック 割り当てを調整します。DLB では、使用可能なパス間の輻輳が測定され、輻輳状態が最も少ないパスにフローが配置されるので、データが最適またはほぼ最適に配置されます。

DLB は、フローまたはフローレットの粒度を使用して使用可能なアップリンクにトラフィックを配置するように設定できます。フローレットは、時間の大きなギャップによって適切に区切られるフローからのパケットのバーストです。パケットの2つのバースト間のアイドル間隔が使用可能なパス間の遅延の最大差より大きい場合、2番目のバースト（またはフローレット）を1つ目とは異なるパスに沿ってパケットのリオーダーなしで送信できます。このアイドル間隔は、フローレット タイマーと呼ばれるタイマーによって測定されます。フローレットにより、パケットリオーダーを引き起こすことなくロード バランシングに対する粒度の高いフローの代替が提供されます。

DLB 動作モードは積極的または保守的です。これらのモードは、フローレット タイマーに使用するタイムアウト値に関係します。アグレッシブ モードのフローレット タイムアウトは比較的小さい値です。この非常に精密なロード バランシングはトラフィックの分配に最適ですが、パケットリオーダーが発生する場合があります。ただし、アプリケーションのパフォーマンスに対する包括的なメリットは、保守的なモードと同等かそれよりも優れています。保守的なモードのフローレット タイムアウトは、パケットが並び替えられないことを保証する大きな値です。新しいフローレットの機会の頻度が少ないので、トレードオフは精度が低いロード バランシングです。DLB は常に最も最適なロード バランシングを提供できるわけではありませんが、スタティック ハッシュ ロード バランシングより劣るということはありません。



- (注) すべての Nexus 9000 シリーズ スイッチには DLB のハードウェア サポートがありますが、DLB 機能は、第2世代プラットフォーム (EX、FX、およびFX2 サフィックスを持つスイッチ) の現在のソフトウェア リリースでは有効になっていません。

Cisco ACI ファブリックは、リンクがオフラインまたはオンラインになったことで使用可能なリンク数が増えると、トラフィックを調整します。ファブリックは、リンクの新しいセットでトラフィックを再分配します。

スタティックまたはダイナミックのロードバランシングのすべてのモードでは、トラフィックは、Equal Cost Multipath (ECMP) の基準を満たすアップリンクまたはパス上でのみ送信され、これらのパスはルーティングの観点から同等で最もコストがかかりません。

ロードバランシング技術ではありませんが、Dynamic Packet Prioritization (DPP) は、スイッチで DLB と同じメカニズムをいくつか使用します。DPP の設定は DLB 専用です。DPP は、長いフローよりも短いフローを優先します。短いフローは約 15 パケット未満です。短いフローは長いフローよりも遅延の影響を受けやすいため、DPP はアプリケーション全体のパフォーマンスを向上させることができます。

6.0 (1) および 6.0 (2) リリースでは、イントラリーフスイッチトラフィックの場合、カスタム QoS 構成に関係なく、すべての DPP 優先トラフィックが CoS 0 とマークされます。リーフ間スイッチトラフィックの場合、カスタム QoS 構成に関係なく、すべての DPP 優先トラフィックが CoS 3 とマークされます。6.0 (3) リリース以降、イントラリーフスイッチおよびインターリーフスイッチのトラフィックでは、カスタム QoS 構成に関係なく、すべての DPP 優先トラフィックが CoS 0 とマークされます。

GPRS トンネリングプロトコル (GTP) は、主にワイヤレスネットワークでデータを配信するために使用されます。Cisco Nexus スイッチは Telcom データセンター内の場所です。パケットがデータセンターの Cisco Nexus 9000 スイッチを介して送信される場合、トラフィックは GTP ヘッダーに基づいてロードバランシングされる必要があります。ファブリックがリンクバンドルを介して外部ルータに接続されている場合、トラフィックはすべてのバンドルメンバー（たとえば、レイヤ 2 ポートチャネル、レイヤ 3 ECMP リンク、レイヤ 3 ポートチャネル、およびポートチャネル上の L3Out）に均等に分散される必要があります。GTP トラフィックのロードバランシングは、ファブリック内でも実行されます。

GTP ロードバランシングを実現するために、Cisco Nexus 9000 シリーズスイッチは 5 タプルのロードバランシングメカニズムを使用します。ロードバランシングメカニズムでは、パケットの送信元 IP、宛先 IP、プロトコル、レイヤ 4 リソース、および宛先ポート（トラフィックが TCP または UDP の場合）フィールドが考慮されます。GTP トラフィックの場合は、これらのフィールドへの一意の値の数が限られていると、トンネルでのトラフィックロードの均等分散が制限されます。

ロードバランシングにおける GTP トラフィックの極性を回避するために、GTP ヘッダーのトンネルエンドポイント ID (TEID) が UDP ポート番号の代わりに使用されます。TEID がトンネルごとに異なるため、トラフィックをバンドルの複数のリンク間で均等にロードバランシングすることができます。

GTP ロードバランシングは、GTPU パケットに存在する 32 ビット TEID 値で送信元および宛先ポート情報を上書きします。

GTP トンネルのロードバランシング機能により、次のサポートが追加されます。

- 物理インターフェイスでの IPv4/IPv6 トランスポートヘッダーによる GTP
- UDP ポート 2152 を使用した GTPU

Cisco ACI ファブリックのデフォルト構成では、従来の静的なハッシュが使用されます。スタティックなハッシュ機能により、アップリンク間のトラフィックがリーフスイッチからスパイ

ンスイッチに分配されます。リンクがダウンまたは起動すると、すべてのリンクのトラフィックが新しいアップリンク数に基づいて再分配されます。

リーフ/スパインスイッチ ダイナミック ロード バランシング アルゴリズム

次の表に、リーフ/スパインスイッチ ダイナミック ロード バランシングで使用されるデフォルトの設定不可能なアルゴリズムを示します。

表 6: Cisco ACIリーフ/スパインスイッチ ダイナミック ロード バランシング

Traffic Type	データ ポイントのハッシュ
リーフ/スパイン IP ユニキャスト	<ul style="list-style-type: none"> • 送信元 MAC アドレス • 宛先 MAC アドレス • 送信元 IP アドレス • 宛先 IP アドレス • プロトコル タイプ • 送信元レイヤ 4 ポート • 宛先レイヤ 4 ポート • セグメント ID (VXLAN VNID) または VLAN ID
リーフ/スパイン レイヤ 2	<ul style="list-style-type: none"> • 送信元 MAC アドレス • 宛先 MAC アドレス • セグメント ID (VXLAN VNID) または VLAN ID

Cisco APIC GUI を使用したロード バランサ ポリシーの作成

このトピックでは、デフォルトのロードバランサーポリシーを構成する方法について説明します。

ロードバランシングポリシー オプションは、利用可能なアップリンクポート間でトラフィックのバランスをとります。スタティックハッシュロードバランシングは、各フローが5タブルのハッシュに基づいてアップリンクに割り当てられるネットワークで使用される従来のロードバランシング機構です。このロードバランシングにより、使用可能なリンクにほぼ均等な流量が分配されます。通常、流量が多いと、流量の均等な分配により帯域幅も均等に分配されます。ただし、いくつかのフローが残りよりも多いと、スタティックロードバランシングにより完全に最適ではない結果がもたらされる場合があります。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[System] > [System Settings] の順にクリックします。

ステップ 2 [Load Balancer] をクリックします。

ステップ 3 [Dynamic Load Balancing Mode] を選択します。

ダイナミック ロード バランシング (DLB) モードは、輻輳レベルに応じてトラフィックの割り当てを調整します。DLB では、使用可能なパス間の輻輳が測定され、輻輳状態が最も少ないパスにフローが配置されるので、データが最適またはほぼ最適に配置されます。DLB は、フローまたはフローレットの粒度を使用して使用可能なアップリンクにトラフィックを配置するように設定できます。フローレットは、間隔で区切られたフローからのパケットのバーストです。モードは [Aggressive], [Conservative], または [Off] (デフォルト)。

ステップ 4 [オン (On)] または [オフ (Off)] (デフォルト) を選択して、ダイナミック パケットの優先順位付けを有効または無効にします。

Dynamic Packet Prioritization (DPP) は、長いフローよりも短いフローを優先します。短いフローは約 15 です。短いフローは、長いフローより遅延に敏感です。DPP により、アプリケーション全体のパフォーマンスが向上します。

ステップ 5 [Load Balancing Mode] を選択します。モードは、**Link Failure** または **Traditional** (デフォルト) です。

ロードバランサーの管理状態。スタティックまたはダイナミックのロードバランシングのすべてのモードでは、トラフィックは、Equal Cost Multipath (ECMP) の基準を満たすアップリンクまたはパス上でのみ送信され、これらのパスはルーティングの観点から同等で最もコストがかりません。

ステップ 6 [送信 (Submit)] をクリックします。

CLI を使用したロード バランサ ポリシーの作成

CLI を使用したダイナミック ロード バランサ ポリシーの作成

ダイナミックアグレッシブ と ダイナミック保守 の2つのダイナミック ロード バランサ モードがあります。ダイナミックアグレッシブ モードでは、より短い flowlet タイムアウト間隔が有効になり、ダイナミック保守モードでは、より長い flowlet タイムアウト間隔が有効になります。これらのコマンドの詳細については、『Cisco APIC NX-OS スタイル CLI コマンド資料』を参照してください。

このセクションでは、CLI を使用してダイナミック ロード バランサ ポリシーを設定する方法を示します。

手順

ステップ 1 アグレッシブ モードのダイナミック ロード バランシングを有効にするには、次の手順を実行します。

```
apic1# conf t
apic1# (config)# system dynamic-load-balance mode dynamic-aggressive
```

ステップ 2 保守モードのダイナミック ロード バランシングを有効にするには、次の手順を実行します。

```
apic1# conf t
apic1# (config)# system dynamic-load-balance mode dynamic-conservative
```

CLI を使用したダイナミック パケット優先順位付けポリシーの作成

ここでは、CLI を使用してダイナミック パケットの優先順位付けを有効にする方法を示します。このコマンドの詳細については、『Cisco APIC NX-OS スタイル CLI コマンド資料』を参照してください。

手順

ダイナミック パケット優先性を有効にします。

```
apic1# conf t
apic1# (config)# system dynamic-load-balance mode packet-prioritization
```

CLI を使用した GTP ロード バランサ ポリシーの作成

このセクションでは、CLI を使用して GTP ロード バランサ ポリシーを作成する方法を示します。このコマンドの詳細については、『Cisco APIC NX-OS スタイル CLI コマンド資料』を参照してください。

手順

ダイナミック パケット優先性を有効にします。

```
apic1# conf t
apic1# (config)# ip load-sharing address source_destination gtpu
```

REST API を使用したロードバランサ ポリシーの作成

このセクションでは、DLB、DPP、および GTP ロードバランサ ポリシーを有効にする方法を示します。使用可能なすべてのプロパティ値のリストについては、『Cisco APIC 管理情報モデル資料』を参照してください。

手順

DLB、DPP、および GTP ロードバランサ ポリシーを有効にするには、次の手順を実行します。

```
https://apic-ip-address/api/mo/uni.xml
<polUni>
<fabricInst>
  <lbpPol name="default" hashGtp="yes" pri="on" dlbMode="aggressive">
  </lbpPol>
</fabricInst>
</polUni>
```

時間精度ポリシーの有効化

このトピックでは、ネットワーク上の分散ノードの時間同期プロトコルである Precision Time Protocol (PTP) を有効にする方法について説明します。そのハードウェアのタイムスタンプ機能は、ネットワーク タイム プロトコル (NTP) などの他の時刻同期プロトコルより高い精度を実現します。

PTPは、システムのリアルタイムPTPクロックが相互に同期する方法を指定する分散プロトコルです。これらのクロックは、グランドマスタークロック（階層の最上部にあるクロック）を持つマスター/メンバー同期階層に編成され、システム全体の時間基準を決定します。同期は、タイミング情報を使用して階層のマスターの時刻にクロックを調整するメンバーと、PTP タイミングメッセージを交換することによって実現されます。PTPは、PTP ドメインと呼ばれる論理範囲内で動作します。

リリース 4.2 (5) より前は、PTP 機能はCisco ACIファブリック内でのみサポートされていました。リリース 4.2 (5) 以降、PTP 機能はCisco ACIファブリックの外部でサポートされるようになりました。Cisco ACIファブリック外部のグランドマスターとクライアントは、Cisco ACIファブリック内のスイッチの前面パネルポートに接続できます。



- (注) グランドマスター スwitchのクライアントとして構成されているCisco ACIファブリック内のスイッチに接続できる外部グランドマスタースイッチは1つだけです。現時点では、複数の外部グランドマスター スwitchを単一のクライアント スwitchに接続することはサポートされていません。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[システム (System)] >> [システム設定 (System Settings)] を選択します。

ステップ 2 **Precision Time Protocol** をクリックします。

ステップ 3 **Enabled** または **Disabled** を選択します。

PTP を無効にするように選択した場合は、NTP の時間がファブリックを同期するために使用されます。PTP を有効にすると、サイト全体を同期するためのマスターとしてあるスパインが自動的に選択されます。

ステップ 4 [送信 (Submit)] をクリックします。

グローバル システム GIPo ポリシーの有効化

このトピックでは、インフラ テナント GIPo をシステム GIPo として使用する方法について説明します。

ACI マルチポッドを導入するには、239.255.255.240 のシステム グローバル IP アウトサイド (GIPo) を、インターポッドネットワーク (IPN) 上で、PIM BIDIR の範囲として設定する必要があります。この、IPN デバイス上での 239.255.255.240 PIM BIDIR 範囲の設定は、インフラ GIPo をシステム GIPo として使用することによって回避できます。

始める前に

リーフ スイッチおよびスパイン スイッチを含む、ACI ファブリックのすべてのスイッチを、最新の APIC リリースにアップグレードします。

手順

ステップ 1 メニューバーで、**System > System Settings** の順にクリックします。

ステップ 2 **Enabled** または **Disabled (デフォルト)** を、**Use Infra GIPo as System GIPo** で選択します。

ステップ 3 [送信 (Submit)] をクリックします。

ファブリック ポート トラッキング ポリシーの設定

アップリンク障害検出は、ファブリック アクセスファブリック ポート トラッキング ポリシーで有効にできます。ポート トラッキング ポリシーは、リーフ スイッチとスパイン スイッチ間のリンクの状態を監視します。有効なポート トラッキング ポリシーがトリガーされると、リーフ スイッチは、EPG によって導入されたスイッチ上のすべてのアクセス インターフェイスを

ダウンさせます。ファブリック ポートトラッキングの詳細については、*Cisco APIC Layer 2 Networking Configuration Guide*を参照してください。

手順

-
- ステップ 1 メニューバーで、[システム (System)] >> [システム設定 (System Settings)] を選択します。
 - ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポートトラッキング (Port Tracking)] を選択します。
 - ステップ 3 **Port tracking state** を **on** に設定して、ポートトラッキングを有効にします。
 - ステップ 4 (任意) [毎日の復元タイマー (Daily restore timer)] の値を変更します。
 - ステップ 5 ポートトラッキングパラメータをトリガーするアクティブなスパインリンクの数を設定します。
 - ステップ 6 [送信 (Submit)] をクリックします。
-

グローバルファブリックアクセスポリシーのプロビジョニング

グローバル接続可能アクセス エンティティ プロファイルの作成

接続可能エンティティ プロファイル (AEP) は、同様のインフラストラクチャ ポリシー要件を持つ外部エンティティのグループを表します。インフラストラクチャ ポリシーは、Cisco Discovery Protocol (CDP)、Link Layer Discovery Protocol (LLDP)、Link Aggregation Control Protocol (LACP) などのさまざまなプロトコル オプションを設定する物理インターフェイス ポリシーで構成されます。

AEP は、リーフ スイッチで VLAN プールを展開するのに必要です。カプセル化ブロック (および関連 VLAN) は、リーフ スイッチで再利用可能です。AEP は、VLAN プールの範囲を物理インフラストラクチャに暗黙的に提供します。

次の AEP の要件と依存関係は、さまざまな設定シナリオ (ネットワーク接続、VMM ドメイン、マルチポッド設定など) でも考慮する必要があります。

- AEP は許容される VLAN の範囲を定義しますが、それらのプロビジョニングは行いません。EPG がポートに展開されていない限り、トラフィックは流れません。AEP で VLAN プールを定義しないと、EPG がプロビジョニングされても VLAN はリーフポートでイネーブルになりません。
- リーフポートで静的にバインディングしている EPG イベントに基づいて、または VMware vCenter や Microsoft Azure Service Center Virtual Machine Manager (SCVMM) などの外部コ

ントローラからのVMイベントに基づいて、特定のVLANがリーフポート上でプロビジョニングされるかイネーブルになります。

- 添付されているエンティティプロファイルに関連付けられているすべてのポートに関連付けられているアプリケーションEpgを導入するアプリケーションEpgに直接と関連付けることができますプロファイルのエンティティが添付されています。AEPでは、アタッチ可能なエンティティプロファイルに関連付けられているセクタの一部であるすべてのインターフェイスで導入されているEPG (infraRsFuncToEpg) との関係が含まれている設定可能な一般的な機能 (infraGeneric) があります。

Virtual Machine Manager (VMM) ドメインは、AEP のインターフェイス ポリシー グループから物理インターフェイス ポリシーを自動的に取得します。

始める前に

接続されているエンティティ プロファイルに関連付けられるテナント、VRF インスタンス、アプリケーションプロファイルおよびEPGを作成します。

手順

-
- ステップ1 メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順にクリックします。
 - ステップ2 ナビゲーションバーで、**Policies** と **Global** を展開します。
 - ステップ3 [接続可能なアクセス エンティティ プロファイル] を右クリックして、[接続可能なアクセス エンティティ プロファイルの作成] を選択します。
 - ステップ4 ポリシーの名前を入力します。
 - ステップ5 [ドメイン] テーブル上の [+] アイコンをクリックします。
 - ステップ6 物理ドメイン、以前に作成した物理、レイヤ2、レイヤ3、ファイバチャネルドメインを入力するか、新規作成します。
 - ステップ7 ドメインのカプセル化を入力して、[更新] をクリックします。
 - ステップ8 [EPG 展開] テーブルの [+] アイコンをクリックします。
 - ステップ9 テナント、アプリケーションプロファイル、EPG カプセル化 (vlan-1 など)、プライマリカプセル化 (プライマリカプセル化番号)、インターフェイスモードを入力します (トランク、802.1P またはアクセス (タグなし))。
 - ステップ10 **Update** をクリックします。
 - ステップ11 [Next] をクリックします。
 - ステップ12 接続可能なエンティティプロファイルに関連付けるインターフェイスを選択します。
 - ステップ13 [完了 (Finish)] をクリックします。
-

■ QoS クラスのグローバル ポリシーを設定します。

QoS クラスのグローバル ポリシーを設定します。

グローバル QoS クラス ポリシーを使用できます。

- CoS を保持する、CoS 値を保証するために、優先度レベル 802.1 P のパケット数を入力し、ACI ファブリックを通過するが保持されます。802.1 P CoS の保持は単一のポッドおよび multipod トポロジでサポートされます。Multipod トポロジは、CoS の保持を使用できますポッド 1 を入力して、ポッド 2 外からの 802.1 P トラフィックの優先順位の QoS の設定を保持したいですが、CoS の保持を行わない/interpod の DSCP 設定のネットワーク (IPN) トラフィックポッド間。CoS を保持するために multipod トラフィックが通信中、IPN の DSCP 設定を使用して、DSCP ポリシー/(で設定されている テナント > インフラ > > ポリシー > プロトコル > DSCP クラス-cos L3 トラフィックのポリシーの変換)
- 次のように、デフォルトの QoS クラス レベルのプロパティをリセットします **MTU**、**キュー制限**、または **スケジューリング アルゴリズム**。

手順

-
- ステップ 1** メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順にクリックします。
 - ステップ 2** ナビゲーション バーで、**Policies** と **Global** を展開します。
 - ステップ 3** **QOS Class** をクリックします。
 - ステップ 4** CoS 802.1 P の有効化にして、をクリックして、**保持 COS** チェック ボックス。
 - ステップ 5** QoS クラスのデフォルト設定を変更するには、それをダブルクリックします。新しい設定を入力し、**Submit** をクリックします。
-

グローバル DHCP リレー ポリシーの作成

グローバル DHCP リレー ポリシーは、ファブリック全体の異なるテナントのブリッジ ドメインによって参照できる DHCP リレー サーバを識別します。テナント DHCP リレーでは、プロバイダ EPG が common テナントにある場合でも、各テナントで DHCP リレー ポリシーを構成する必要があります。グローバル DHCP リレー ポリシーは、任意のテナントから参照でき、各テナントで DHCP リレー ポリシーを構成する必要がないという点で、テナントの DHCP リレー ポリシーとは異なります。

手順

-
- ステップ 1** メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順にクリックします。
 - ステップ 2** ナビゲーション バーで、**Policies** と **Global** を展開します。

ステップ 3 DHCP Relay を右クリックし、**Create DHCP Relay Policy** を選択します。

ステップ 4 [Create DHCP Relay Policy] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) [Name] フィールドに、DHCP リレー プロファイル名 (DhcpRelayP) を入力します。

この名前では最大 64 文字までの英数字を使用できます。

- b) (任意) [説明 (Description)] フィールドに、DHCP リレー ポリシーの説明を入力します。

説明には最大 128 文字までの英数字を使用できます。

- c) [Providers] を展開します。

[DHCP プロバイダーの作成 (Create DHCP Provider)] ダイアログボックスが表示されます。

- d) [Create DHCP Provider] ダイアログボックスの [EPG Type] フィールドで、DHCP サーバがどこで接続されているかによって適切なオプション ボタンをクリックします。

選択する EPG タイプのオプションは、EPG タイプによって異なります。

- EPG タイプとして **[アプリケーション EPG (Application EPG)]** を選択すると、次のオプションが **[アプリケーション EPG (Application EPG)]** 領域に表示されます。
 - **[テナント (Tenant)]** フィールドで、ドロップダウンリストから、テナントを選択します。(infra)
 - **[Application Profile]** フィールドで、ドロップダウンリストから、アプリケーションを選択します。(access)
 - **[EPG]** フィールドで、ドロップダウンリストから、EPG を選択します。(デフォルト)
- EPG タイプとして **[L2 外部ネットワーク (L2 External Network)]** を選択すると、**[L2 外部ネットワーク領域 (L2 External Network)]** に次のオプションが表示されます。
 - **[テナント (Tenant)]** フィールドで、ドロップダウンリストから、テナントを選択します。
 - **[L2 Out]** フィールドで、ドロップダウンリストから [L2 Out] を選択します。
 - **[External Network (外部ネットワーク)]** フィールドで、ドロップダウンリストから外部ネットワークを選択します。
- EPG タイプとして **[L3 外部ネットワーク (L3 External Network)]** を選択すると、**[L3 外部ネットワーク (L3 External Network)]** 領域に次のオプションが表示されます。
 - **[テナント (Tenant)]** フィールドで、ドロップダウンリストから、テナントを選択します。
 - **[L3 Out]** フィールドで、ドロップダウンリストから [L3 Out] を選択します。

- **[External Network (外部ネットワーク)]** フィールドで、ドロップダウン リストから外部ネットワークを選択します。
 - EPG タイプとして **[DN]** を選択した場合は、ターゲットエンドポイントグループの識別名を入力します。
- e) **[DHCP サーバアドレス (DHCP Server Address)]** フィールドに、DHCP サーバの IP アドレスを入力します。
- f) **[DHCP サーバ設定 (DHCP Server Preference)]** フィールドで、**[なし (None)]** または **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** を選択します。

[DHCP サーバ プレファレンス (DHCP Server Preference)] フィールドは、リリース 5.2(4) 以降で使用できます。リーフスイッチは、このフィールドの値を基に、クライアント VRF またはサーバ VRF のどちらから DHCP リレー パケットをルーティングするかを決定します。詳細については、[DHCP サーバ設定フィールドについて \(165 ページ\)](#) を参照してください。

- **[なし (None)]**: これはデフォルトのオプションで、リリース 5.2(4) より前の動作を反映しています。**[なし (None)]** オプションを選択すると、スイッチは常にクライアント VRF からの DHCP リレー パケットをルーティングします。VRF 間 DHCP リレーに使用する場合、サーバ VRF ネットワークをクライアント VRF にリークするには、共有サービス コントラクトが必要です。
- **[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]**: このオプションは、リリース 5.2(4) で導入された新しい動作を反映しています。**[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプションを選択すると、スイッチは、DHCP クライアントが存在する EPG と DHCP サーバが存在する EPG (または DHCP サーバが到達可能な L3Out のレイヤー 3 外部) の間にコントラクトがあるかどうかには関わりなく、サーバ VRF からの DHCP リレー パケットをルーティングします。

VRF 間設定の場合、**[サーバ VRF を使用 (Use Server VRF)]** オプション (**[DHCP サーバ プリファレンス (DHCP Server Preference)]** フィールド) を選択すると、ルートルックアップのため、サーバサブネットルートは、クライアントリーフスイッチのサーバ - VRF 内でプログラムされます。クライアントリーフスイッチの DHCP プロセスは、それ以後、DHCP リレー パケットをサーバ VRF 経由で送信します。このため、サーバ VRF は、クライアントブリッジドメインが展開されているすべてのリーフスイッチに少なくとも 1 つの IP アドレスを使用して展開する必要があります。

- g) **[OK]** をクリックします。
- [DHCP リレー ポリシーの作成 (Create DHCP Relay Policy)]** ウィンドウに戻ります。
- h) **[Submit]** をクリックします。
- DHCP リレー ポリシーが作成されます。

グローバル MCP インスタンス ポリシーの有効化にします。

グローバル Mis-Cabling プロトコル (MCP) インスタンス ポリシーを有効にします。現在の実装では、システムで MCP の 1 つだけのインスタンスが実行されます。

手順

- ステップ 1** メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順にクリックします。
- ステップ 2** ナビゲーションバーで、**Policies** と **Global** を展開します。
- ステップ 3** をクリックして **MCP インスタンス ポリシーのデフォルト**。
- ステップ 4** **Admin State** を **Enabled** に変更します。
- ステップ 5** 必要に応じて、ファブリックの他のプロパティを設定します。
- ステップ 6** [送信 (Submit)] をクリックします。

次のタスク

作成エラーには、回復ポリシーが無効になっています

エラーディセーブル回復ポリシーは、1 つ以上の事前定義されたエラー状態が無効になっていたポートを再度有効にするポリシーを指定します。

手順

- ステップ 1** メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順にクリックします。
- ステップ 2** ナビゲーションバーで、**Policies** と **Global** を展開します。
- ステップ 3** をクリックして **エラーには、回復ポリシーが無効になっている**。
- ステップ 4** 回復ポリシーを有効にするイベントをダブルクリックします。
- ステップ 5** チェック ボックスをクリックし、をクリックして **更新**。
- ステップ 6** オプション。その他のイベントについて、ステップ 4 と 5 を繰り返します。
- ステップ 7** オプション。リセット、**エラー復旧間隔 (秒) の無効化**。
- ステップ 8** [送信 (Submit)] をクリックします。

ポート単位ポリシー

ポート単位ポリシーについて

ポート単位ポリシーは、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI を使用してリーフスイッチのインターフェイスを設定するために使用する暗黙的なポリシーです。ポート単位ポリシーは、標準のポリシーベース モデルと比較して単純化されています。これは、Cisco APIC を使用する方法を学習し続けています。この簡素化のため、既存のポリシーに新しいポートを追加することはできません。代わりに、インターフェイスごとにポリシーの新しいチャンクのみを作成できます。

ポート単位のポリシーペインでは、バックグラウンドで NX-OS CLI を使用して、暗黙的および明示的なオブジェクトを作成します。たとえば、新しいポートチャンネルを作成すると、明示的なポート チャンネルポリシー グループと暗黙的なオーバーライドが作成されます。明示的なポリシー グループへの変更は、暗黙的なポリシー グループが削除されるまでポートに適用されません。CLI と GUI を組み合わせて使用しないことを推奨します。再利用可能なポリシー設定の高度な使用例に移行する場合は、ポートポリシー ウィザードを使用して Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ポリシー モデルについて学習し、同じウィザードからポートを設定解除します。

ポート単位のポリシーは、次の GUI の場所からのみ作成できます。

[ファブリック (Fabric)] > [インベントリ (Inventory)] > [Pod-#] > [leaf-switch-name] > [インターフェイス タブ (Interface)] タブ



(注) [インターフェイス (Interface)] タブは、作業ペインの [インターフェイス (Interface)] タブを参照します。これは、ナビゲーションペインの [インターフェイス (Interfaces)] フォルダではありません。

GUI を使用したポート ポリシーごとの設定

この手順では、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI を使用して、ポートポリシーごとのポリシーを作成します。

手順

- ステップ 1 メニューバーで、[Fabric] > [Inventory] を選択します。
- ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、*pod-#* > *leaf-switch-name* を選択します。
- ステップ 3 [作業 (Work)] ペインで、[インターフェイス (Interface)] タブを選択します。
- ステップ 4 [モード (Mode)] ドロップダウンリストで、[設定 (Configuration)] を選択します。

- ステップ 5** インターフェイス番号を 1 つ以上クリックして、それらのインターフェイスを選択します。
[作業 (Work)] ペインのタブのすぐ下にあるボタンが、選択したインターフェイスに設定できるコンポーネントでアクティブになります。
- ステップ 6** 設定するコンポーネントのいずれかのボタンをクリックします。
[作業 (Work)] ペインにはそのコンポーネントのプロパティが表示されます。
- ステップ 7** コンポーネントのプロパティを必要に応じて設定します。
- ステップ 8** [送信 (Submit)] をクリックします。
- ステップ 9** 選択したインターフェイスの追加コンポーネントを設定するか、別のインターフェイスを選択してコンポーネントを設定します。

GUI を使用したポート ポリシーごとの確認

この手順では、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI を使用してポート単位ポリシーを検証する方法について説明します。

始める前に

非表示ポリシーを表示するには、Cisco APIC を設定する必要があります。デフォルトでは、ポート単位のポリシーは Cisco APIC に表示されません。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[Fabric] > [Inventory] を選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、*pod-# > leaf-switch-name* を選択します。
- ステップ 3** [作業 (Work)] ペインで、[インターフェイス (Interface)] タブを選択します。
- ステップ 4** [モード (Mode)] ドロップダウンリストで、[設定 (Configuration)] を選択します。
- ステップ 5** インターフェイス数を選択する場合は、そのインターフェイス名をクリックします。
[作業 (Work)] ペインのタブのすぐ下にあるボタンが、選択したインターフェイスに設定できるコンポーネントでアクティブになります。
- ステップ 6** プロパティを表示するコンポーネントのいずれかのボタンをクリックします。
[作業 (Work)] ペインに、そのコンポーネントのプロパティが表示されます。
- ステップ 7** プロパティが正しく設定されていることを確認し、目的の設定に対して正しくない値を変更します。
- ステップ 8** 変更を加えた場合は、[送信 (Submit)] をクリックします。アンインストールしない場合は、[キャンセル (Cancel)] をクリックします。
-

GUI を使用した非表示ポリシーの表示

デフォルトでは、ポート単位のポリシーなどの一部のポリシーは Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) に表示されません。これらのポリシーを表示するには、非表示のポリシーを表示するように Cisco APIC を設定する必要があります。

手順

ステップ 1 GUI の右上隅にある [マイ プロファイルの管理 (Manage My Profile)] > [設定 (Settings)] を選択します。

[アプリケーション設定 (Application Settings)] ダイアログが開きます。

ステップ 2 [非表示ポリシーの表示 (Show Hidden Policies)] ボックスにチェックを付けます。

ステップ 3 [OK] をクリックします。

GUI を使用した誤配線プロトコルインターフェイスポリシーの作成 (任意)

誤配線プロトコル (MCP) は、Link Layer Discovery Protocol (LLDP)、スパニングツリープロトコル (STP) が検出できない設定ミス进行处理するために設計されました。MCP には、それを使用するレイヤ 2 パケットがあり、MCP はファブリック内のループを形成するポートを無効にします。Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリック リーフ スイッチはスパニングツリープロトコル (STP) に参加せず、STP に関してハブとして動作します。MCP パケットが送信された後、ファブリックがパケットが戻ったことを確認し、ループが存在することを認識した場合、ファブリックはそのイベントに基づいてアクションを実行します。これが発生するとエラーとイベントが生成されます。MCP は、グローバルに、およびインターフェイスごとに有効にできます。デフォルトでは、MCP がグローバルに無効にされ、各ポートで有効になっています。MCP が機能するには、インターフェイス単位の設定に関係なく、グローバルに有効にする必要があります。

次の手順では、GUI を使用して MCP インターフェイス ポリシーを作成します。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[ファブリック (FABRIC)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順に選択します。

ステップ 2 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー (Policies)] > [インターフェイス (Interface)] > [MCP インターフェイス (MCP Interface)] の順に選択します。

ステップ 3 [作業 (Work)] ペインで、[アクション (Actions)] > [誤配線プロトコルインターフェイス ポリシーの作成 (Create Mis-cabling Protocol Interface Policy)] の順に選択します。

ステップ 4 [Create Mis-cabling Protocol Interface Policy] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。

- a) ポリシーの名前を入力します。
- b) (任意) ポリシーの説明を入力します。
- c) [管理状態 (Admin State)] に対して、ポリシーを有効にするには [有効 (Enable)] を選択し、ポリシーを無効にするには [無効 (Disable)] を選択します。
- d) MCP の操作モードとして [精密 (Strict)] または [非精密 (Non-strict)] を選択します。

[精密 (Strict)] を選択すると、次の追加フィールドが表示されます。

- [初期遅延時間 (秒) (Initial Delay Time (sec)]: 外部レイヤ 2 ネットワークでの STP コンバージェンスの時間。デフォルト値は 0 です (レイヤ 2 ネットワークで STP が無効になっている場合)。STP が有効になっている場合、STP が収束するまでの初期遅延時間の範囲は、スケールトポロジにもよりますが、45 ~ 60 秒です。
- [送信頻度 (秒、ミリ秒) (Transmission Frequency (sec, msec)]: 各レイヤ 2 インターフェイスの猶予期間まで、MCP パケットが送信される頻度を定めるタイマー。デフォルトの値は 500 ミリ秒です。
- 猶予期間 (秒、ミリ秒): 早期ループ検出が行われる猶予期間の時間。ポートは、ループ検出に使用される MCP パケットを積極的に送信します。デフォルトの猶予期間の値は 3 秒です。

ステップ 5 [送信 (Submit)] をクリックします。

■ GUI を使用した誤配線プロトコルインターフェイス ポリシーの作成 (任意)



第 7 章

基本ユーザ テナント設定

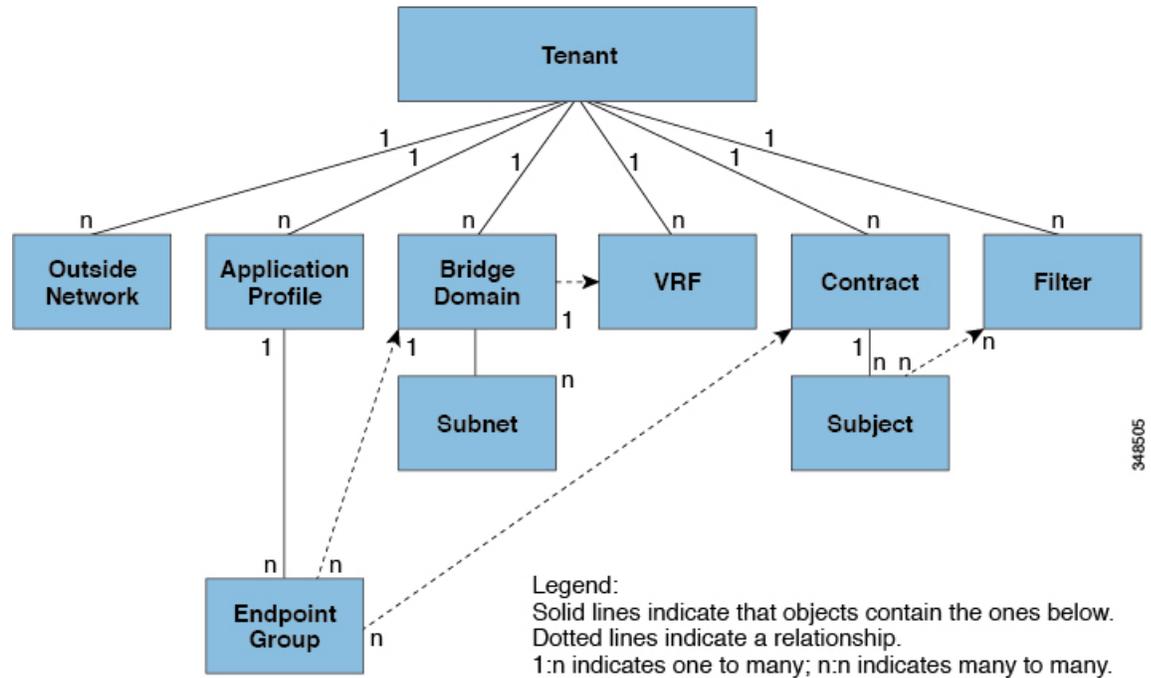
この章は、次の内容で構成されています。

- [テナント \(225 ページ\)](#)
- [テナント内のルーティング \(226 ページ\)](#)
- [テナント、VRF、およびブリッジドメインの作成 \(239 ページ\)](#)
- [EPG の導入 \(242 ページ\)](#)
- [マイクロセグメント EPG \(249 ページ\)](#)
- [アプリケーションプロファイルと契約の導入 \(254 ページ\)](#)
- [コントラクトパフォーマンスの最適化 \(264 ページ\)](#)
- [契約とサブジェクトの例外 \(268 ページ\)](#)
- [EPG 内契約 \(270 ページ\)](#)
- [EPG のコントラクト継承 \(279 ページ\)](#)
- [優先グループ契約 \(284 ページ\)](#)
- [許可ルールと拒否ルールを含む契約 \(288 ページ\)](#)

テナント

テナント(fvTenant)は、アプリケーションポリシーの論理コンテナで、管理者はドメインベースのアクセスコントロールを実行できます。テナントはポリシーの観点から分離の単位を表しますが、プライベートネットワークは表しません。テナントは、サービスプロバイダーの環境ではお客様を、企業の環境では組織またはドメインを、または単にポリシーの便利なグループ化を表すことができます。次の図は、管理情報ツリー(MIT)のテナント部分の概要を示します。

図 2: テナント



テナントは相互に分離することも、リソースを共有することもできます。テナントに含まれる主要な要素は、フィルタ、コントラクト、外部ネットワーク、ブリッジドメイン、仮想ルーティングおよび転送 (VRF) インスタンス、エンドポイントグループ (EPG) を含むアプリケーションプロファイルです。テナントのエンティティはそのポリシーを継承します。VRF はコンテキストとも呼ばれ、それぞれを複数のブリッジドメインに関連付けることができます。



(注) APIC GUI のテナントナビゲーションパスでは、VRF (コンテキスト) はプライベートネットワークと呼ばれます。

テナントはアプリケーションポリシーの論理コンテナです。ファブリックには複数のテナントを含めることができます。レイヤ4~7のサービスを展開する前に、テナントを設定する必要があります。ACIファブリックは、テナントネットワークに対してIPv4、IPv6、およびデュアルスタック構成をサポートします。

テナント内のルーティング

アプリケーションセントリックインフラストラクチャ (ACI) のファブリックでは、テナントのデフォルトゲートウェイ機能が提供され、ファブリックの Virtual Extensible Local Area (VXLAN) ネットワーク間のルーティングが行えます。各テナントについて、APIC でサブネットが作成されるたびに、ファブリックは仮想デフォルトゲートウェイまたはスイッチ仮想インターフェイス (SVI) を提供します。これは、そのテナントサブネットの接続エンドポイ

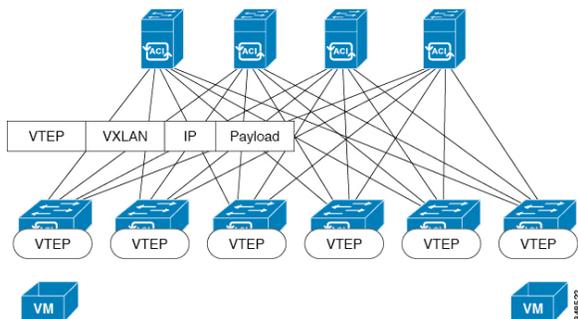
ントがあるすべてのスイッチにわたります。各入力インターフェイスはデフォルトのゲートウェイインターフェイスをサポートし、ファブリック全体のすべての入力インターフェイスは任意のテナントサブネットに対する同一のルータのIPアドレスとMACアドレスを共有します。

サブネット間のテナントトラフィックの転送を促進するレイヤ3VNID

ACI ファブリックは、ACI ファブリック VXLAN ネットワーク間のルーティングを実行するテナントのデフォルトゲートウェイ機能を備えています。各テナントに対して、ファブリックはテナントに割り当てられたすべてのリーフスイッチにまたがる仮想デフォルトゲートウェイを提供します。これは、エンドポイントに接続された最初のリーフスイッチの入力インターフェイスで提供されます。各入力インターフェイスはデフォルトゲートウェイインターフェイスをサポートします。ファブリック全体のすべての入力インターフェイスは、特定のテナントサブネットに対して同一のルータのIPアドレスとMACアドレスを共有します。

ACI ファブリックは、エンドポイントのルータまたは VXLAN トンネルエンドポイント (VTEP) アドレスで定義された場所から、テナントエンドポイントアドレスとその識別子を切り離します。ファブリック内の転送は VTEP 間で行われます。次の図は、ACI で切り離された ID と場所を示します。

図 3: ACI によって切り離された ID と場所



VXLAN は VTEP デバイスを使用してテナントのエンドデバイスを VXLAN セグメントにマッピングし、VXLAN のカプセル化およびカプセル化解除を実行します。各 VTEP 機能には、次の 2 つのインターフェイスがあります。

- ブリッジングを介したローカルエンドポイント通信をサポートするローカル LAN セグメントのスイッチインターフェイス
- 転送 IP ネットワークへの IP インターフェイス

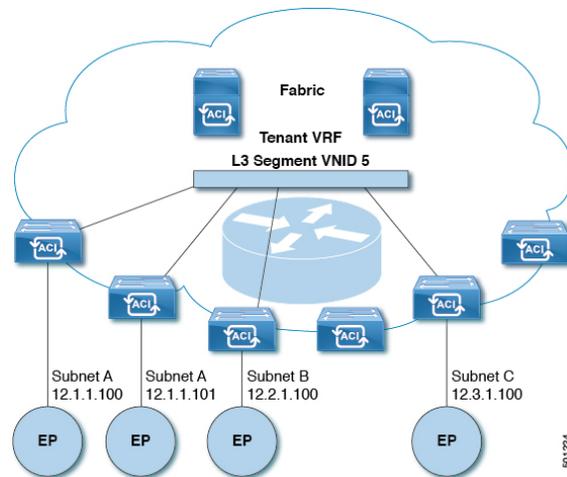
IP インターフェイスには一意の IP アドレスがあります。これは、インフラストラクチャ VLAN として知られる、転送 IP ネットワーク上の VTEP を識別します。VTEP デバイスはこの IP アドレスを使用してイーサネットフレームをカプセル化し、カプセル化されたパケットを、IP インターフェイスを介して転送ネットワークへ送信します。また、VTEP デバイスはリモート VTEP で VXLAN セグメントを検出し、IP インターフェイスを介してリモートの MAC Address-to-VTEP マッピングについて学習します。

ACIのVTEPは分散マッピングデータベースを使用して、内部テナントのMACアドレスまたはIPアドレスを特定の場所にマッピングします。VTEPはルックアップの完了後に、宛先リーフスイッチ上のVTEPを宛先アドレスとして、VXLAN内でカプセル化された元のデータパケットを送信します。宛先リーフスイッチはパケットをカプセル化解除して受信ホストに送信します。このモデルにより、ACIはスパニングツリープロトコルを使用することなく、フルメッシュでシングルホップのループフリートポロジを使用してループを回避します。

VXLANセグメントは基盤となるネットワークトポロジに依存しません。逆に、VTEP間の基盤となるIPネットワークは、VXLANオーバーレイに依存しません。これは送信元IPアドレスとして開始VTEPを持ち、宛先IPアドレスとして終端VTEPを持っており、外部IPアドレスヘッダーに基づいてパケットをカプセル化します。

次の図は、テナント内のルーティングがどのように行われるかを示します。

図4: ACIのサブネット間のテナントトラフィックを転送するレイヤ3 VNID



ACIはファブリックの各テナントVRFに単一のL3 VNIDを割り当てます。ACIは、L3 VNIDに従ってファブリック全体にトラフィックを転送します。出力リーフスイッチでは、ACIによってL3 VNIDからのパケットが出力サブネットのVNIDにルーティングされます。

ACIのファブリックデフォルトゲートウェイに送信されてファブリック入力に到達したトラフィックは、レイヤ3 VNIDにルーティングされます。これにより、テナント内でルーティングされるトラフィックはファブリックで非常に効率的に転送されます。このモデルを使用すると、たとえば同じ物理ホスト上の同じテナントに属し、サブネットが異なる2つのVM間では、トラフィックが(最小パスコストを使用して)正しい宛先にルーティングされる際に経由する必要があるは入力スイッチインターフェイスのみです。

ACIルートリフレクタは、ファブリック内での外部ルートの配布にマルチプロトコルBGP (MP-BGP)を使用します。ファブリック管理者は自律システム(AS)番号を提供し、ルートリフレクタにするスパインスイッチを指定します。



(注) Cisco ACI は IP フラグメンテーションをサポートしていません。したがって、外部ルータへのレイヤ 3 Outside (L3Out) 接続、または Inter-Pod Network (IPN) を介したマルチポッド接続を設定する場合は、インターフェイス MTU がリンクの両端で適切に設定することを推奨します。

IGP プロトコルパケット (EIGRP、OSPFv3) は、インターフェイス MTU サイズに基づいてコンポーネントによって構築されます。Cisco ACI では、CPU MTU サイズがインターフェイス MTU サイズよりも小さく、構築されたパケットサイズが CPU MTU より大きい場合、パケットはカーネルによってドロップされます (特に IPv6)。このような制御パケットのドロップを回避するには、コントロールプレーンとインターフェイスの両方で常に同じ MTU 値を設定します。

Cisco ACI、Cisco NX-OS、および Cisco IOS などの一部のプラットフォームでは、設定可能な MTU 値はイーサネットヘッダー (一致する IP MTU、14-18 イーサネットヘッダーサイズを除く) を考慮していません。また、IOS XR などの他のプラットフォームには、設定された MTU 値にイーサネットヘッダーが含まれています。設定された値が 9000 の場合、Cisco ACI、Cisco NX-OS および Cisco IOS の最大 IP パケットサイズは 9000 バイトになりますが、IOS-XR のタグなしインターフェイスの最大 IP パケットサイズは 8986 バイトになります。

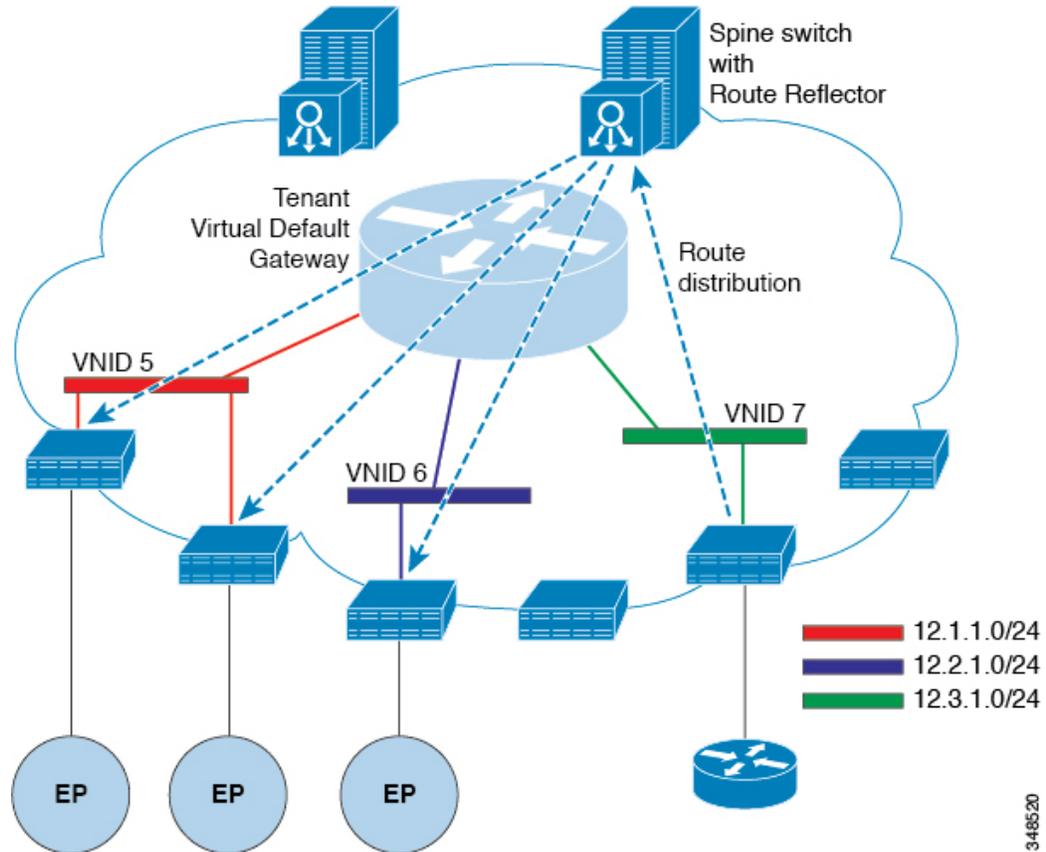
各プラットフォームの適切な MTU 値については、それぞれの設定ガイドを参照してください。

CLI ベースのコマンドを使用して MTU をテストすることを強く推奨します。たとえば、Cisco NX-OS CLI で、コマンド、`ping 1.1.1.1 df-bit packet-size 9000 source-interface ethernet 1/1` を使用してください。

ルータ ピアリングおよびルート配布

次の図に示すように、ルーティングピアモデルを使用すると、リーフスイッチインターフェイスが外部ルータのルーティングプロトコルとピアリングするように静的に設定されます。

図 5: ルータのピアリング

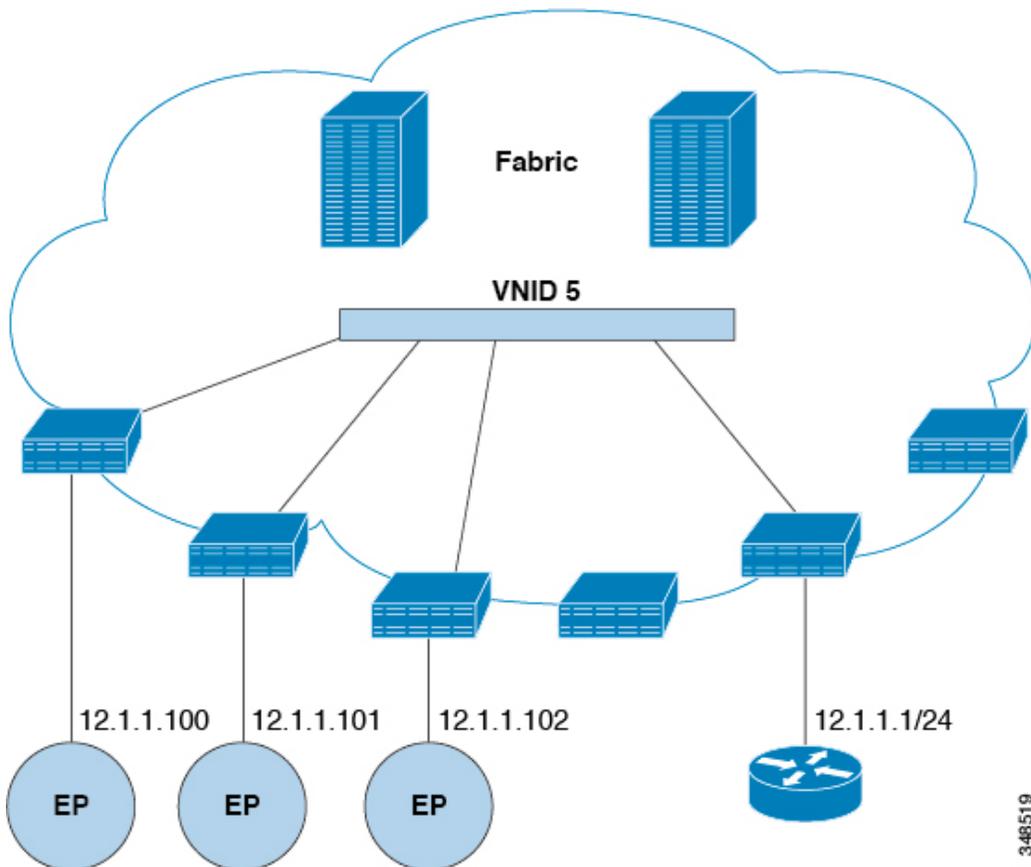


ピアリングによって学習されるルートは、スパインスイッチに送信されます。スパインスイッチはルートリフレクタとして動作し、外部ルータを同じテナントに属するインターフェイスを持つすべてのリーフスイッチに配布します。これらのルートは、最長プレフィクス照合(LPM)により集約されたアドレスで、外部ルータが接続されているリモートのリーフスイッチのVTEP IP アドレスが含まれるリーフスイッチの転送テーブルに配置されます。WAN ルートには転送プロキシはありません。WAN ルートがリーフスイッチの転送テーブルに適合しない場合、トラフィックはドロップされます。外部ルータがデフォルトゲートウェイではないため、テナントのエンドポイント (EP) からのパケットは ACI ファブリックのデフォルトゲートウェイに送信されます。

外部ルータへのブリッジドインターフェイス

次の図に示すように、リーフスイッチのインターフェイスがブリッジドインターフェイスとして設定されている場合、テナント VNID のデフォルトゲートウェイが外部ルータとなります。

図 6: ブリッジ外部ルータ



ACI ファブリックは、外部ルータの存在を認識せず、APIC はリーフスイッチのインターフェイスを EPG に静的に割り当てます。

ルートリフレクタの設定

ACI ファブリックのルートリフレクタは、マルチプロトコル BGP (MP-BGP) を使用してファブリック内に外部ルートを配布します。ACI ファブリックでルートリフレクタをイネーブルにするには、ファブリックの管理者がルートリフレクタになるスパインスイッチを選択して、自律システム (AS) 番号を提供する必要があります。冗長性を確保するために、ポッドあたり少なくとも 2 つのスパインノードを MP-BGP ルートリフレクタとして設定することを推奨します。

ルートリフレクタが ACI ファブリックで有効になったら、管理者は、レイヤ 3 Out (L3Out) というコンポーネントを使用してリーフノードを介して外部ネットワークへの接続を設定できます。L3Out で設定されたリーフノードは、境界リーフと呼ばれます。境界リーフは、L3Out で指定されたルーティングプロトコルを介して、接続された外部デバイスとルートを交換します。L3Out 経由でスタティックルートを設定することもできます。

L3Out とスパインルート リフレクタの両方が展開されると、境界リーフ ノードは L3Out を介して外部ルートを学習し、それらの外部ルートはスパイン MP-BGP ルート リフレクタを介してファブリック内のすべてのリーフ ノードに配布されます。

リーフでサポートされるルートの最大数については、ご使用のリリースの『Cisco APICの検証済みスケーラビリティ ガイド』を参照してください。

Layer 3 Out を使用した外部接続の設定

この項では、ACI ファブリックが L3Out および MP-BGP ルート リフレクタを介して外部ルーテッド ネットワークに接続するために必要な手順を段階的に説明します。

この例では、Open Shortest Path First (OSPF) を「mgmt」テナント下の L3Out のルーティング プロトコルとして使用します。

GUI を使用した MP-BGP ルート リフレクタの設定

手順

-
- ステップ 1** メニュー バーで、[System] > [System Settings] の順に選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[BGP ルート リフレクタ (BGP Route Reflector)] を右クリックして、[ルート リフレクタ ノードの作成 (Create Route Reflector Node)] をクリックします。
- ステップ 3** [ルート リフレクタ ノードの作成 (Create Route Reflector Node)] ダイアログボックスで、[スパイン ノード (Spine Node)] ドロップダウンリストから、適切なスパイン ノードを選択します。 **Submit** をクリックします。
- (注)
必要に応じてスパイン ノードを追加するには、上記の手順を繰り返してください。
- スパイン スイッチがルート リフレクタ ノードとしてマークされます。
- ステップ 4** **BGP Route Reflector** プロパティ エリアの **Autonomous System Number** フィールドで、適切な番号を選択します。 **Submit** をクリックします。
- (注)
自律システム番号は、Border Gateway Protocol (BGP) がルータに設定されている場合は、リーフが接続されたルータ設定に一致する必要があります。スタティックまたは Open Shortest Path First (OSPF) を使用して学習されたルートを使用している場合は、自律システム番号値を任意の有効な値にできます。
- ステップ 5** メニュー バーで、[ファブリック (Fabric)] > [ファブリック ポリシー (Fabric Policies)] > [ポッド (Pods)] > [ポリシー グループ (Policy Groups)] をクリックします。
- ステップ 6** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ポリシー グループ (Policy Groups)] を展開して右クリックし、[POD ポリシー グループの作成 (Create POD Policy Group)] をクリックします。

- ステップ 7** [ポッドポリシーグループの作成 (Create Pod Policy Group)] ダイアログボックスで、[名前 (Name)] フィールドに、ポッドポリシーグループの名前を入力します。
- ステップ 8** [BGP Route Reflector Policy] ドロップダウンリストで、適切なポリシー (デフォルト) を選択します。[Submit] をクリックします。
BGP ルートリフレクタのポリシーは、ルートリフレクタのポッドポリシーグループに関連付けられ、BGP プロセスはリーフスイッチでイネーブルになります。
- ステップ 9** メニューバーで、[ファブリック (Fabric)] > [ファブリックポリシー (Fabric Policies)] > [プロファイル (Profiles)] > [ポッドプロファイルデフォルト (Pod Profile default)] > [デフォルト (default)] を選択します。
- ステップ 10** [Work] ペインで、[Fabric Policy Group] ドロップダウンリストから、前に作成されたポッドポリシーを選択します。[Submit] をクリックします。
ポッドポリシーグループが、ファブリックポリシーグループに適用されました。

ACI ファブリックの MP-BGP ルートリフレクタの設定

ACI ファブリック内のルートを配布するために、MP-BGP プロセスを最初に実行し、スパインスイッチを BGP ルートリフレクタとして設定する必要があります。

次に、MP-BGP ルートリフレクタの設定例を示します。



- (注) この例では、BGP ファブリック ASN は 100 です。スパインスイッチ 104 と 105 が MP-BGP ルートリフレクタとして選択されます。

```
apicl(config)# bgp-fabric
apicl(config-bgp-fabric)# asn 100
apicl(config-bgp-fabric)# route-reflector spine 104,105
```

REST API を使用した MP-BGP ルートリフレクタの設定

手順

- ステップ 1** スパインスイッチをルートリフレクタとしてマークします。

例：

```
POST https://apic-ip-address/api/policymgr/mo/uni/fabric.xml
```

```
<bgpInstPol name="default">
  <bgpAsP asn="1" />
  <bgpRRP>
    <bgpRRNodePEp id="<spine_id1"/>"/>
    <bgpRRNodePEp id="<spine_id2"/>"/>
  </bgpRRP>
</bgpInstPol>
```

ステップ2 次のポストを使用してポッドセクタをセットアップします。

例：

FuncP セットアップの場合：

```
POST https://apic-ip-address/api/policymgr/mo/uni.xml

<fabricFuncP>
  <fabricPodPGrp name="bgpRRPodGrp">
    <fabricRsPodPGrpBGPRRP tnBgpInstPolName="default" />
  </fabricPodPGrp>
</fabricFuncP>
```

例：

PodP セットアップの場合：

```
POST https://apic-ip-address/api/policymgr/mo/uni.xml

<fabricPodP name="default">
  <fabricPodS name="default" type="ALL">
    <fabricRsPodPGrp tDn="uni/fabric/funcprof/podpgrp-bgpRRPodGrp"/>
  </fabricPodS>
</fabricPodP>
```

MP-BGP ルートリフレクタ設定の確認

手順

ステップ1 次の操作を実行して、設定を確認します。

- a) セキュアシェル (SSH) を使用して、必要に応じて各リーフスイッチへの管理者としてログインします。
- b) `show processes | grep bgp` コマンドを入力して、状態が **S** であることを確認します。
状態が **NR** (実行していない) である場合は、設定が正常に行われませんでした。

ステップ2 次の操作を実行して、自律システム番号がスパインスイッチで設定されていることを確認します。

- a) SSH を使用して、必要に応じて各スパインスイッチへの管理者としてログインします。
- b) シェルウィンドウから次のコマンドを実行します。

例：

```
cd /mit/sys/bgp/inst
```

例：

```
grep asn summary
```

設定した自律システム番号が表示される必要があります。自律システム番号の値が **0** と表示される場合は、設定が正常に行われませんでした。

GUI を使用した管理テナントの OSPF L3Out の作成

- ルータ ID と論理インターフェイスプロファイルの IP アドレスが異なっていて重複していないことを確認します。
- 次の手順は、管理テナントの OSPF L3Out を作成するためのものです。テナントの OSPF L3Out を作成するには、テナントを選択し、テナント用の VRF を作成する必要があります。
- 詳細については、『Cisco APIC and Transit Routing』を参照してください。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[Tenants] > [mgmt] の順に選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ネットワークング (Networking)] > [L3Outs] を展開します。
- ステップ 3** [L3Outs] を右クリックし、[L3Out の作成 (Create L3Out)] をクリックします。
[L3Out の作成 (Create L3Out)] ウィザードが表示されます。
- ステップ 4** [L3Out の作成 (Create L3Out)] ウィザードの [識別 (Identity)] ウィンドウで、次の操作を実行します。
- [Name] フィールドに、名前 (RtdOut) を入力します。
 - [VRF] フィールドのドロップダウン リストから、VRF (inb) を選択します。
(注)
このステップでは、ルーテッド Outside をインバンド VRF に関連付けます。
 - [L3 ドメイン (L3 Domain)] ドロップダウン リストから、適切なドメインを選択します。
 - [OSPF] チェックボックスをオンにします。
 - [OSPF Area ID] フィールドに、エリア ID を入力します。
 - [OSPF Area Control] フィールドで、適切なチェックボックスをオンにします。
 - [OSPF Area Type] フィールドで、適切なエリア タイプを選択します。
 - [OSPF Area Cost] フィールドで、適切な値を選択します。
 - [次へ (Next)] をクリックします。
[ノードとインターフェイス (Nodes and Interfaces)] ウィンドウが表示されます。
- ステップ 5** [ノードとインターフェイス (Nodes and Interfaces)] ウィンドウで、次の操作を実行します。
- [デフォルトを使用 (Use Defaults)] ボックスをオフにします。
これにより、[ノードプロファイル名 (Node Profile Name)] フィールドを編集できます。
 - [ノードプロファイル名 (Node Profile Name)] フィールドに、ノードプロファイルの名前を入力します (borderLeaf)。

- c) [Node ID] フィールドで、ドロップダウンリストから、最初のノードを選択します (leaf1)。
- d) [Router ID] フィールドに、一意のルータ ID を入力します。
- e) ループバック アドレスにルータ ID を使用しない場合は、[ループバック アドレス (Loopback Address)] フィールドで別の IP アドレスを使用するか、空のままにします。
(注)
[ルータ ID (Router ID)] フィールドに入力したエン트리と同じ内容が [ループバック アドレス (Loopback Address)] フィールドに自動で入力されます。これは以前のビルドでの [ループバック アドレスのルータ ID の使用 (Use Router ID for Loopback Address)] と同等です。ループバック アドレスにルータ ID を使用しない場合は、別の IP アドレスを使用するか、このフィールドを空のままにします。
- f) 必要に応じて、このノードの [インターフェイス (Interface)]、[IP アドレス (IP Address)]、[インターフェイス プロファイル名 (Interface Profile Name)]、および [MTU] フィールドに適切な情報を入力します。
- g) [ノード (Nodes)] フィールドで、[+] アイコンをクリックして、別のノードの 2 番目のフィールドセットを追加します。
(注)
2 つ目のノード ID を追加します。
- h) [Node ID] フィールドで、ドロップダウンリストから、最初のノードを選択します (leaf1)。
- i) [Router ID] フィールドに、一意のルータ ID を入力します。
- j) ループバック アドレスにルータ ID を使用しない場合は、[ループバック アドレス (Loopback Address)] フィールドで別の IP アドレスを使用するか、空のままにします。
(注)
[ルータ ID (Router ID)] フィールドに入力したエン트리と同じ内容が [ループバック アドレス (Loopback Address)] フィールドに自動で入力されます。これは以前のビルドでの [ループバック アドレスのルータ ID の使用 (Use Router ID for Loopback Address)] と同等です。ループバック アドレスにルータ ID を使用しない場合は、別の IP アドレスを使用するか、このフィールドを空のままにします。
- k) 必要に応じて、このノードの [インターフェイス (Interface)]、[IP アドレス (IP Address)]、[インターフェイス プロファイル名 (Interface Profile Name)]、および [MTU] フィールドに適切な情報を入力します。
- l) [次へ (Next)] をクリックします。
[プロトコル (Protocols)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 6 [プロトコル (Protocols)] ウィンドウの [ポリシー (Policy)] 領域で、[デフォルト (default)] をクリックし、[次 (Next)] をクリックします。

[外部 EPG (External EPG)] ウィンドウが表示されます。

ステップ 7 [外部 EPG (External EPG)] ウィンドウで次のアクションを実行します。

- a) [Name] フィールドに、外部ネットワークの名前 (extMgmt) を入力します。
 - b) [すべての外部ネットワークのデフォルト EPG (Default EPG for all external network)] フィールドをオフにします。
[サブネット (Subnets)] 領域が表示されます。
 - c) [+] をクリックして [サブネットの作成 (Create Subnet)] ダイアログ ボックスにアクセスします。
 - d) [サブネットの作成 (Create Subnet)] ダイアログ ボックスで、[IP アドレス (IP address)] フィールドに、サブネットの IP アドレスとマスクを入力します。
 - e) [Scope] フィールドで、目的のチェックボックスをオンにします。[OK] をクリックします。
 - f) [外部 EPG (External EPG)] ダイアログ ボックスで、[完了 (Finish)] をクリックします。
- (注)
[作業 (Work)] ペインの [L3Outs] 領域に、[L3Out] アイコン (RtdOut) が表示されます。

NX-OS CLI を使用したテナントの OSPF 外部ルーテッドネットワークの作成

外部ルーテッドネットワーク接続の設定には、次のステップがあります。

1. テナントの下に VRF を作成します。
2. 外部ルーテッドネットワークに接続された境界リーフ スイッチの VRF の L3 ネットワーキング構成を設定します。この設定には、インターフェイス、ルーティングプロトコル (BGP、OSPF、EIGRP)、プロトコルパラメータ、ルートマップが含まれています。
3. テナントの下に外部 L3 EPG を作成してポリシーを設定し、これらの EPG を境界リーフ スイッチに導入します。ACI ファブリック内で同じポリシーを共有する VRF の外部ルーテッドサブネットが、1つの「外部 L3 EPG」または1つの「プレフィクス EPG」を形成します。

設定は、2つのモードで実現されます。

- テナント モード : VRF の作成および外部 L3 EPG 設定
- リーフ モード : L3 ネットワーキング構成と外部 L3 EPG の導入

次の手順は、テナントの OSPF 外部ルーテッドネットワークを作成するためのものです。テナントの OSPF 外部ルーテッドネットワークを作成するには、テナントを選択してからテナント用の VRF を作成する必要があります。



- (注) この項の例では、テナント「exampleCorp」の「OnlineStore」アプリケーションの「web」epg に外部ルーテッド接続を提供する方法について説明します。

手順

ステップ 1 VLAN ドメインを設定します。

例：

```
apic1(config)# vlan-domain dom_exampleCorp
apic1(config-vlan)# vlan 5-1000
apic1(config-vlan)# exit
```

ステップ 2 テナント VRF を設定し、VRF のポリシーの適用を有効にします。

例：

```
apic1(config)# tenant exampleCorp
apic1(config-tenant)# vrf context
  exampleCorp_v1
apic1(config-tenant-vrf)# contract enforce
apic1(config-tenant-vrf)# exit
```

ステップ 3 テナント BD を設定し、ゲートウェイ IP を「public」としてマークします。エントリ「scope public」は、このゲートウェイアドレスを外部 L3 ネットワークのルーティングプロトコルによるアドバタイズに使用できるようにします。

例：

```
apic1(config-tenant)# bridge-domain exampleCorp_b1
apic1(config-tenant-bd)# vrf member exampleCorp_v1
apic1(config-tenant-bd)# exit
apic1(config-tenant)# interface bridge-domain exampleCorp_b1
apic1(config-tenant-interface)# ip address 172.1.1.1/24 scope public
apic1(config-tenant-interface)# exit
```

ステップ 4 リーフの VRF を設定します。

例：

```
apic1(config)# leaf 101
apic1(config-leaf)# vrf context tenant exampleCorp vrf exampleCorp_v1
```

ステップ 5 OSPF エリアを設定し、ルート マップを追加します。

例：

```
apic1(config-leaf)# router ospf default
apic1(config-leaf-ospf)# vrf member tenant exampleCorp vrf exampleCorp_v1
apic1(config-leaf-ospf-vrf)# area 0.0.0.1 route-map map100 out
apic1(config-leaf-ospf-vrf)# exit
apic1(config-leaf-ospf)# exit
```

ステップ 6 VRF をインターフェイス (この例ではサブインターフェイス) に割り当て、OSPF エリアを有効にします。

例：

(注)

サブインターフェイスの構成では、メイン インターフェイス (この例では、`ethernet 1/11`) は、「no switchport」によって L3 ポートに変換し、サブインターフェイスが使用するカプセル化 VLAN を含む `vlan` ドメイン (この例では `dom_exampleCorp`) を割り当てる必要があります。サブインターフェイス `ethernet1/11.500` で、500 はカプセル化 VLAN です。

```
apicl(config-leaf)# interface ethernet 1/11
apicl(config-leaf-if)# no switchport
apicl(config-leaf-if)# vlan-domain member dom_exampleCorp
apicl(config-leaf-if)# exit
apicl(config-leaf)# interface ethernet 1/11.500
apicl(config-leaf-if)# vrf member tenant exampleCorp vrf exampleCorp_v1
apicl(config-leaf-if)# ip address 157.10.1.1/24
apicl(config-leaf-if)# ip router ospf default area 0.0.0.1
```

ステップ 7 外部 L3 EPG ポリシーを設定します。これは、外部サブネットを特定し、epg 「web」と接続する契約を消費するために一致させるサブネットが含まれます。

例：

```
apicl(config)# tenant t100
apicl(config-tenant)# external-l3 epg l3epg100
apicl(config-tenant-l3ext-epg)# vrf member v100
apicl(config-tenant-l3ext-epg)# match ip 145.10.1.0/24
apicl(config-tenant-l3ext-epg)# contract consumer web
apicl(config-tenant-l3ext-epg)# exit
apicl(config-tenant)#exit
```

ステップ 8 リーフ スイッチの外部 L3 EPG を導入します。

例：

```
apicl(config)# leaf 101
apicl(config-leaf)# vrf context tenant t100 vrf v100
apicl(config-leaf-vrf)# external-l3 epg l3epg100
```

テナント、VRF、およびブリッジドメインの作成

テナントの概要

- テナントには、承認されたユーザのドメインベースのアクセスコントロールをイネーブルにするポリシーが含まれます。承認されたユーザは、テナント管理やネットワーク管理などの権限にアクセスできます。
- ユーザは、ドメイン内のポリシーにアクセスしたりポリシーを設定するには読み取り/書き込み権限が必要です。テナントユーザは、1つ以上のドメインに特定の権限を持つことができます。
- マルチテナント環境では、リソースがそれぞれ分離されるように、テナントによりグループユーザのアクセス権限が提供されます(エンドポイントグループやネットワークな

どのため)。これらの権限では、異なるユーザが異なるテナントを管理することもできます。

テナントの作成

テナントには、最初にテナントを作成した後に作成できるフィルタ、契約、ブリッジドメイン、およびアプリケーションプロファイルなどのプライマリ要素が含まれます。

VRF およびブリッジドメイン

テナントの VRF およびブリッジドメインを作成および指定できます。定義されたブリッジドメイン要素のサブネットは、対応するレイヤ3 コンテキストを参照します。

IPv6 ネイバー探索を有効にする方法については、『*Cisco APIC Layer 3 Networking Guide*』の「*IPv6 and Neighbor Discovery*」を参照してください。

GUI を使用したテナント、VRF およびブリッジドメインの作成

外部ルーテッドを設定するときにパブリックサブネットがある場合は、ブリッジドメインを外部設定と関連付ける必要があります。

手順

ステップ 1 メニューバーで、[テナント (Tenants)] > [テナントの追加 (Add Tenant)] を選択します。

ステップ 2 [Create Tenant] ダイアログボックスで、次のタスクを実行します。

- [Name] フィールドに、名前を入力します。
- [セキュリティドメイン (Security Domains)] セクションで、[+] をクリックして、[セキュリティドメインの作成 (Create Security Domain)] ダイアログボックスを開きます。
- [名前 (Name)] フィールドに、セキュリティドメインの名前を入力し、[送信 (Submit)] をクリックします。
- [テナントの作成 (Create Tenant)] ダイアログボックスで、作成したセキュリティドメインの [更新 (Update)] をクリックします。
- 必要に応じて他のフィールドに入力します。
- [送信 (Submit)] をクリックします。

テナント名 > [ネットワークング (Networking)] 画面が表示されます。

ステップ 3 [作業 (Work)] ペインで、[VRF] アイコンをキャンバスにドラッグして [Create VRF] ダイアログボックスを開き、次の操作を実行します。

- [Name] フィールドに、名前を入力します。
- 必要に応じて他のフィールドに入力します。
- [送信 (Submit)] をクリックして VRF インスタンスの設定を完了します。

ステップ 4 [作業 (Work)] ペインで、VRF インスタンスを囲む円内のキャンバスに [ブリッジ ドメイン (Bridge Domain)] アイコンをドラッグして、2 つを接続します。[Create Bridge Domain] ダイアログボックスが表示されたら、次のタスクを実行します。

- a) [Name] フィールドに、名前を入力します。
- b) 必要に応じて他のフィールドに入力します。
- c) [次へ (Next)] をクリックします。
- d) [サブネット (Subnets)] セクションで、[+] をクリックして、[サブネットの作成 (Create Subnet)] ダイアログボックスを開きます。
- e) [ゲートウェイ IP (Gateway IP)] フィールドに、IP アドレスとサブネット マスクを入力します。
- f) 必要に応じて他のフィールドに入力します。
- g) [OK] をクリックします。
- h) [ブリッジ ドメインの作成 (Create Bridge Domain)] ダイアログボックスに戻り、必要に応じて他のフィールドに入力します。
- i) [次へ (Next)] をクリックします。
- j) 必要に応じてフィールドに入力します。
- k) [OK] をクリックしてブリッジ ドメインの設定を完了します。

ステップ 5 [作業 (Work)] ペインで、VRF インスタンスを囲む円内のキャンバスに [L3] アイコンをドラッグして、2 つを接続します。[Create Routed Outside] ダイアログボックスが表示されたら、次のタスクを実行します。

- a) [Name] フィールドに、名前を入力します。
- b) [ノードとインターフェイス プロトコル プロファイル (Nodes And Interfaces Protocol Profiles)] セクションで、[+] をクリックして [ノード プロファイルの作成 (Create Node Profile)] ダイアログボックスを開きます。
- c) [Name] フィールドに、名前を入力します。
- d) [ノード (Nodes)] セクションで、[+] をクリックして [ノードの選択 (Select Node)] ダイアログボックスを開きます。
- e) [ノード ID (Node ID)] ドロップダウン リストから、ノードを選択します。
- f) [Router ID] フィールドに、ルータ ID を入力します。
- g) [スタティック ルート (Static Routes)] セクションで、[+] をクリックして [スタティック ルートの作成 (Create Static Routes)] ダイアログボックスを開きます。
- h) [Prefix] フィールドに、IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを入力します。
- i) [ネクスト ホップ アドレス (Next Hop Addresses)] セクションで、[+] をクリックして [ネクスト ホップの作成 (Create Next Hop)] ダイアログボックスを開きます。
- j) [ネクスト ホップ アドレス (Next Hop Addresses)] フィールドを展開し、IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを入力します。
- k) [設定 (Preference)] フィールドに、数値を入力します。
- l) 必要に応じて他のフィールドに入力します。
- m) [OK] をクリックします。
- n) [静的ルートの作成 (Create Static Route)] ダイアログボックスで、必要に応じて他のフィールドに入力します。
- o) [OK] をクリックします。

- p) [ノードの選択 (Select Node)] ダイアログ ボックスで、必要に応じて他のフィールドに入力します。
- q) [OK] をクリックします。
- r) [ノード プロファイルの作成 (Create Node Profile)] ダイアログ ボックスで、必要に応じて他のフィールドに入力します。
- s) [OK] をクリックします。
- t) 必要に応じて [BGP]、[OSPF]、または [EIGRP] チェックボックスをオンにします。
- u) 必要に応じて他のフィールドに入力します。
- v) [次へ (Next)] をクリックします。
- w) 必要に応じてフィールドに入力します。
- x) [OK] をクリックしてレイヤ 3 の設定を完了します。

レイヤ 3 の設定を確認するには、[ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[ネットワークング (Networking)] > [VRF] の順に展開します。

EPG の導入

特定のポートへの EPG の静的な導入

このトピックでは、Cisco APIC を使用しているときに特定のポートに EPG を静的に導入する一般的な方法の例を示します。

GUI を使用して特定のノードまたはポートへ EPG を導入する

始める前に

EPG を導入するテナントがすでに作成されていること。

特定のノードまたはノードの特定のポートで、EPG を作成することができます。

手順

- ステップ 1 Cisco APIC にログインします。
- ステップ 2 [Tenants] > [tenant] を選択します。
- ステップ 3 左側のナビゲーション ウィンドウで、*tenant*、**Application Profiles**、および *application profile* を展開します。
- ステップ 4 **Application EPGs** を右クリックし、**Create Application EPG** を選択します。
- ステップ 5 **Create Application EPG STEP 1 > Identity** ダイアログボックスで、次の操作を実行します:
 - a) **Name** フィールドに、EPG の名前を入力します。
 - b) **Bridge Domain** ドロップダウンリストから、ブリッジ ドメインを選択します。

- c) [Statically Link with Leaves/Paths] チェックボックスをオンにします。
このチェック ボックスを使用して、どのポートに EPG を導入するかを指定できます。
- d) [Next] をクリックします。
- e) [Path] ドロップダウンリストから、宛先 EPG への静的パスを選択します。

ステップ 6 **Create Application EPG STEP 2 > Leaves/Paths** ダイアログボックスで、**Physical Domain** ドロップダウンリストから物理ドメインを選択します。

ステップ 7 次のいずれかの手順を実行します。

オプション	説明
次のものに EPG を展開する場合、	次を実行します。
ノード	<ol style="list-style-type: none"> Leaves エリアを展開します。 [Node] ドロップダウン リストから、ノードを選択します。 Encap フィールドで、適切な VLAN を入力します。 (オプション)Deployment Immediacy ドロップダウンリストで、デフォルトの On Demand のままにするか、Immediate を選択します。 (オプション) [Mode] ドロップダウンリストで、デフォルトの [Trunk] のままにするか、別のモードを選択します。
ノード上のポート	<ol style="list-style-type: none"> Paths エリアを展開します。 Path ドロップダウンリストから、適切なノードおよびポートを選択します。 (オプション) Deployment Immediacy フィールドのドロップダウンリストで、デフォルトの On Demand のままにするか、Immediate を選択します。 (オプション) [Mode] ドロップダウンリストで、デフォルトの [Trunk] のままにするか、別のモードを選択します。 Port Encap フィールドに、導入するセカンダリ VLAN を入力します。 (オプション)Primary Encap フィールドで、展開するプライマリ VLAN を入力します。

ステップ 8 **Update** をクリックし、**Finish** をクリックします。

ステップ 9 左側のナビゲーション ウィンドウで、作成した EPG を展開します。

ステップ 10 次のいずれかの操作を実行します:

- ノードで EPG を作成した場合は、**Static Leafs** をクリックし、作業ウィンドウで、静的パスの詳細を表示します。

- ノードのポートで EPG を作成した場合は、**Static Ports** をクリックし、作業ウィンドウで、静的バインドパスの詳細を表示します。

特定のポートに EPG を導入するためのドメイン、接続可能アクセス エンティティ プロファイル、および VLAN の作成

このトピックでは、特定のポートに EPG を導入する場合に必須である物理ドメイン、接続可能アクセス エンティティ プロファイル (AEP)、および VLAN を作成する方法の典型的な例を示します。

すべてのエンドポイント グループ (EPG) にドメインが必要です。また、インターフェイス ポリシー グループを接続可能アクセス エンティティ プロファイル (AEP) に関連付ける必要があります。AEP と EPG が同じドメインに存在する必要がある場合は、AEP をドメインに関連付ける必要があります。EPG とドメイン、およびインターフェイス ポリシー グループとドメインの関連付けに基づいて、EPG が使用するポートと VLAN が検証されます。以下のドメインタイプが EPG に関連付けられます。

- アプリケーション EPG
- レイヤ 3 Outside 外部ネットワーク インスタンス EPG
- レイヤ 2 Outside 外部ネットワーク インスタンス EPG
- アウトオブバンドおよびインバンドアクセスの管理 EPG

APIC は、これらのドメインタイプのうち 1 つまたは複数に EPG が関連付けられているかどうかを確認します。EPG が関連付けられていない場合、システムは設定を受け入れますが、エラーが発生します。ドメインの関連付けが有効でない場合、導入された設定が正しく機能しない可能性があります。たとえば、VLAN のカプセル化を EPG で使用することが有効でない場合、導入された設定が正しく機能しない可能性があります。



- (注) スタティック バインディングを使用しない AEP との EPG アソシエーションは、一方のエンドポイントが同じ EPG の下でタグgingをサポートし、もう一方のエンドポイントが同じ EPG 内で VLAN タグgingをサポートしないような AEP の下では、EPG を **トランク** として設定するシナリオで機能させることはできません。EPG で AEP を関連付ける際には、トランク、アクセス (タグ付き)、またはアクセス (タグなし) として設定できます。

GUI を使用して特定のポートに EPG を展開するためのドメインおよび VLAN の作成

始める前に

- EPG を導入するテナントがすでに作成されていること。
- EPG は特定のポートに静的に導入されます。

手順

- ステップ 1** メニューバーで、[ファブリック (FABRIC)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] の順に選択します。
- ステップ 2** [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[クイックスタート (Quick Start)] をクリックします。
- ステップ 3** [作業 (Work)] ペインで、[インターフェイスの設定 (Configure Interfaces)] をクリックします。
- ステップ 4** [インターフェイスの設定 (Configure Interfaces)] ダイアログで、以下のアクションを実行します。
- [ノードタイプ (Node Type)] で、[リーフ (Leaf)] をクリックします。
 - [ポートタイプ (Port Type)] で、[アクセス (Access)] をクリックします。
 - [インターフェイスタイプ (Interface Type)] で、目的のタイプを選択します。
 - [インターフェイス集約タイプ (Interface Aggregation Type)] で、[個別 (Individual)] を選択します。
 - [ノード (Node)] で、[ノードの選択 (Select Node)] をクリックし、目的のノードのボックスにチェックを入れて、[OK] をクリックします。複数のノードを選択できます。
 - [すべてのスイッチのインターフェイス (Interfaces For All Switches)] で、目的のインターフェイスの範囲を入力します。
 - [リーフアクセスポートポリシーグループ (Leaf Access Port Policy Group)] の場合は、[リーフアクセスポートポリシーグループの選択 (Select Leaf Access Port Policy Group)] をクリックします。
 - [リーフアクセスポートポリシーグループの選択 (Select Leaf Access Port Policy Group)] ダイアログで、[リーフアクセスポートポリシーグループの作成 (Create Leaf Access Port Policy Group)] をクリックします。
 - [リーフアクセスポートポリシーグループの作成 (Create Leaf Access Port Policy Group)] ダイアログの [リンクレベルポリシー (Link Level Policy)] で、[リンクレベルポリシーの選択 (Select Link Level Policy)] をクリックします。
 - リンクレベルポリシーを選択して [選択 (Select)] を選択するか、[リンクレベルポリシーの作成 (Create Link Level Policy)] をクリックし、必要に応じてフィールドに入力して、[保存 (Save)] をクリックします。
 - [保存 (Save)] をクリックします。
- ステップ 5** 以下のアクションを実行して、ドメインと VLAN プールを作成します。
- [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[物理ドメインと外部ドメイン (Physical and External Domains)] を展開します。
 - [物理ドメイン (Physical Domains)] を右クリックし、適切な [物理ドメインの作成 (Create Physical Domain)] を選択します。
 - [名前 (Name)] に、ドメインの名前を入力します。
 - [VLAN プール (VLAN Pool)] で、[VLAN プールの作成 (Create VLAN Pool)] を選択し、必要に応じてフィールドに入力して、[送信 (Submit)] をクリックします。

AEP を使用してアプリケーション EPG を複数のポートに展開する

- e) 目的に応じて、残りのフィールドに入力します。
- f) [送信 (Submit)] をクリックします。

ステップ 6 メニューバーで、[テナント (Tenants)] > [すべてのテナント (ALL Tenants)] の順に選択します。

ステップ 7 [作業 (Work)] ペインで、目的のテナントをダブルクリックします。

ステップ 8 [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、テナント名 > [アプリケーション プロファイル (Application Profiles)] > プロファイル名 > [アプリケーション EPG (Application EPGs)] > EPG 名を展開し、以下の操作を実行します。

- a) [ドメイン (Domains) (VM またはベアメタル)] を右クリックし、[物理ドメインの関連付けの追加 (Add Physical Domain Association)] をクリックします。
- b) [物理ドメインの関連付けの追加 (Add Physical Domain Association)] ダイアログで、[物理ドメインのプロファイル (Physical Domain Profile)] ドロップダウンリストから、前に作成したドメインを選択します。
- c) [Submit] をクリックします。

AEP は、ノード上の特定のポート、およびドメインに関連付けられます。物理ドメインは VLAN プールに関連付けられ、テナントはこの物理ドメインに関連付けられます。

スイッチ プロファイルとインターフェイス プロファイルが作成されます。インターフェイス プロファイルのポート ブロックにポリシー グループが作成されます。AEP が自動的に作成され、ポート ブロックおよびドメインに関連付けられます。ドメインは VLAN プールに関連付けられ、テナントはドメインに関連付けられます。

AEP を使用してアプリケーション EPG を複数のポートに展開する

APIC GUI と REST API を使用して、接続可能エンティティ プロファイルをアプリケーション EPG に直接関連付けることができます。これにより、単一の構成の接続可能エンティティ プロファイルに関連付けられたすべてのポートに、関連付けられたアプリケーション EPG を導入します。

APIC GUI を使用した AEP による複数のインターフェイスへの EPG の導入

アプリケーション EPG を接続可能アクセス エンティティ プロファイルに関連付けて、その接続可能アクセス エンティティ プロファイルに関連付けられたすべてのポートに EPG を導入することができます。

始める前に

- ターゲット アプリケーション EPG が作成されている。
- AEP での EPG 導入に使用する VLAN の範囲が含まれている VLAN プールが作成されている。
- 物理ドメインが作成され、VLAN プールと AEP にリンクされている。

- ターゲットの接続可能アクセス エンティティ プロファイルが作成され、アプリケーション EPG を導入するポートに関連付けられている。
- Cisco APIC 6.1(3) よりも前は、アクセス ポリシー階層を介してのみ、アプリケーションを接続可能アクセスエンティティプロファイルに関連付けることができました。Cisco APIC 6.1(3)以降は、テナント階層またはアクセスポリシー階層を介して、アプリケーションを接続可能アクセス エンティティ プロファイルに関連付けることができるようになりました。



(注) これらの特定の階層のいずれかを使用して AEP アタッチメントを作成する場合は、後続の変更操作も、作成された階層でのみ実行する必要があります。操作に重複がある場合、Cisco APIC はこの設定を拒否します。

手順

ステップ 1 次のいずれかの方法を使用して、アプリケーション EPG を接続可能アクセス エンティティ プロファイルに関連付けることができます。

- 使用するアプリケーション EPG のページを開きます。GUI で、[テナント (Tenant)] > [tenant_name] > [アプリケーション プロファイル (Application Profiles)] > [epg_name] > [静的 AAEP (Static AAEP)] をクリックします。
- [静的 AAEP (Static AAEP)] ウィンドウで、ターゲット接続可能アクセス エンティティ プロファイルをアプリケーション EPG に関連付けます。

フィールド	アクション (Action)
名前	AEP の名前を選択します。
Encap	ターゲットアプリケーション EPG の通信に使用される VLAN の ID を入力します。
Primary Encap	(オプション) アプリケーション EPG にプライマリ VLAN が必要な場合は、プライマリ VLAN の ID を入力します。
展開の緊急性	[直ちに展開 (Deployment Immediacy)] フィールドのドロップダウンリストで、デフォルトの [オンデマンド (On Demand)] のままにするか、[即座 (Immediate)] を選択します。
モード (Mode)	データを送信するモードを指定します： <ul style="list-style-type: none"> • [トランク (Trunk)] : ホストからのトラフィックに VLAN ID がタグ付けされている場合に選択します。 • [トランク (ネイティブ) (Trunk (Native))] : ホストからのトラフィックに 802.1p タグがタグ付けされている場合に選択します。

フィールド	アクション (Action)
	<ul style="list-style-type: none"> • [アクセス (タグなし) (Access (Untagged))] : ホストからのトラフィックがタグ付けされていない場合に選択します。

ステップ 2 または、この方法を使用して、アプリケーション EPG を接続エンティティ プロファイルに関連付けます。

- 使用する接続可能アクセス エンティティ プロファイルのページを開きます。[ファブリック (Fabric)] > [アクセス ポリシー (Access Policies)] > [ポリシー (Policies)] > [グローバル (Global)] > [接続可能アクセス エンティティ プロファイル (Attachable Access Entity Profiles)] に移動します。
- ターゲットの接続エンティティプロファイルをクリックして、[接続可能アクセスエンティティプロファイル (Attachable Access Entity Profiles)] ウィンドウを開きます。
- [使用方法を表示 (Show Usage)] ボタンをクリックして、この接続可能アクセスエンティティプロファイルに関連付けられたリーフスイッチとインターフェイスを表示します。

この接続エンティティ プロファイルに関連付けられたアプリケーション EPG が、この接続エンティティプロファイルに関連付けられたすべてのスイッチ上のすべてのポートに展開されます。

- [アプリケーション EPG (Application EPGs)] テーブルに基づき、この接続可能アクセスエンティティプロファイルにターゲットアプリケーション EPG を関連付けます。アプリケーション EPG エントリを追加するには、[+] をクリックします。各エントリに次のフィールドがあります。

フィールド	アクション (Action)
Application EPG	ドロップダウンを使用して、関連付けられたテナント、アプリケーションプロファイル、およびターゲットアプリケーション EPG を選択します。
Encap	ターゲットアプリケーション EPG の通信に使用される VLAN ID の名前を入力します。
Primary Encap	(オプション) アプリケーション EPG にプライマリ VLAN が必要な場合は、プライマリ VLAN ID の名前を入力します。
モード	ドロップダウンを使用して、データを送信するモードを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • [Trunk] : ホストからのトラフィックに VLAN ID がタグ付けされている場合に選択します。 • [トランク (ネイティブ) (Trunk (Native))] : ホストからのトラフィックに 802.1p タグがタグ付けされている場合に選択します。 • [アクセス (タグなし) (Access (Untagged))] : ホストからのトラフィックがタグ付けされていない場合に選択します。

ステップ 3 [送信 (Submit)] をクリックします。

この接続可能アクセス エンティティ プロファイルに関連付けられたアプリケーション EPG が、この接続可能アクセス エンティティ プロファイルに関連付けられたすべてのスイッチ上のすべてのポートに展開されます。

マイクロセグメント EPG

ベアメタルでのネットワークベースの属性によるマイクロセグメンテーションの使用

Cisco APIC を使用して Cisco ACI でのマイクロセグメンテーションを設定し、ネットワークベースの属性、MAC アドレス、または 1 つ以上の IP アドレスを使用した新しい属性ベースの EPG を作成できます。ネットワークベースの属性を使用して Cisco ACI でのマイクロセグメンテーションを設定し、単一のベース EPG または複数の EPG 内で VM または物理エンドポイントを分離できます。

IP ベースの属性の使用

IP ベースのフィルタを使用して、単一のマイクロセグメントで単一 IP アドレス、サブネット、または多様な非連続 IP アドレスを分離できます。ファイアウォールの使用と同様に、セキュリティゾーンを作成するための迅速かつ簡単な方法として、IP アドレスに基づいて物理エンドポイントを分離できます。

MAC ベースの属性の使用

MAC ベースのフィルタを使用して、単一 MAC アドレスまたは複数の MAC アドレスを分離できます。不適切なトラフィックをネットワークに送信するサーバがある場合はこの方法を推奨します。MAC ベースのフィルタを使用してマイクロセグメントを作成することで、このサーバを分離できます。

GUI を使用したベアメタル環境でのネットワークベースのマイクロセグメント EPG の設定

Cisco APIC を使用してマイクロセグメンテーションを設定し、異なる複数のベース EPG または同一の EPG に属する物理エンドポイント デバイスを新しい属性ベースの EPG に配置できます。

手順

- ステップ 1 Cisco APIC にログインします。
- ステップ 2 [Tenants] を選択し、マイクロセグメントを作成するテナントを選択します。

- ステップ 3** テナントのナビゲーションウィンドウで、テナントフォルダ、[Application Profiles] フォルダ、[Profile] フォルダ、および [Application EPGs] フォルダを展開します。
- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。
- 同じベース EPG の物理エンドポイント デバイスを新しい属性ベースの EPG に配置するには、物理エンドポイント デバイスを含むベース EPG をクリックします。
 - 異なる複数のベース EPG の物理エンドポイント デバイスを新しい属性ベースの EPG に配置するには、物理エンドポイント デバイスを含むベース EPG の 1 つをクリックします。
- ベース EPG のプロパティが作業ウィンドウに表示されます。
- ステップ 5** 作業ウィンドウで、画面の右上にある [Operational] タブをクリックします。
- ステップ 6** [Operational] タブの下の [Client End-Points] タブがアクティブになっていることを確認します。作業ウィンドウに、ベース EPG に属するすべての物理エンドポイントが表示されます。
- ステップ 7** 新しいマイクロセグメントに配置するエンドポイント デバイス (複数可) の IP アドレスまたは MAC アドレスを書き留めます。
- ステップ 8** 異なる複数のベース EPG のエンドポイント デバイスを新しい属性ベースの EPG に配置する場合は、各ベース EPG に対してステップ 4 ~ 7 を繰り返します。
- ステップ 9** テナントのナビゲーションウィンドウで、[uSeg EPGs] フォルダを右クリックし、[Create uSeg EPG] を選択します。
- ステップ 10** 以下の一連の手順を実行し、エンドポイント デバイス グループの 1 つに対して属性ベースの EPG の作成を開始します。
- [Create uSeg EPG] ダイアログボックスで、[Name] フィールドに名前を入力します。
新しい属性ベースの EPG はマイクロセグメントであることを示す名前を選択することを推奨します。
 - [intra-EPG isolation] フィールドで [enforced] または [unenforced] を選択します。
[enforced] を選択した場合は、ACI によってこの uSeg EPG 内のエンドポイント デバイス間の通信がすべて阻止されます。
 - [Bridge Domain] エリアで、ドロップダウン リストからブリッジ ドメインを選択します。
 - [uSeg Attributes] 領域で、ダイアログボックスの右側にある [+] ドロップダウン リストから [IP Address Filter] または [MAC Address Filter] を選択します。
- ステップ 11** フィルタを設定するには、次のいずれかの一連の手順を実行します。

項目	結果
IP ベースの属性	<ol style="list-style-type: none"> [Create IP Attribute] ダイアログボックスで、[Name] フィールドに名前を入力します。 名前については、フィルタ機能を反映したものを選択するよう推奨します。 [IP Address] フィールドに、適切なサブネット マスクの IP アドレスまたはサブネットを入力します。 [OK] をクリックします。

項目	結果
	<p>4. (オプション) ステップ 10 c ~ 11 c を繰り返して、2 番目の IP アドレスフィルタを作成します。</p> <p>この手順で、マイクロセグメントに不連続の IP アドレスを含めることができます。</p> <p>5. [Create uSeg EPG] ダイアログボックスで、[Submit] をクリックします。</p>
MAC ベースの属性	<p>1. [Create MAC Attribute] ダイアログボックスで、[Name] フィールドに名前を入力します。</p> <p>名前については、フィルタ機能を反映したものを選択するよう推奨します。</p> <p>2. [MAC Address] フィールドに、MAC アドレスを入力します。</p> <p>3. [OK] をクリックします。</p> <p>4. [Create uSeg EPG] ダイアログボックスで、[Submit] をクリックします。</p>

ステップ 12 次の手順を実行して uSeg EPG を物理ドメインに関連付けます。

- [Navigation] ペインで、uSeg EPG フォルダが開いていることを確認し、作成したマイクロセグメントのコンテナを開きます。
- [Domains (VMs and Bare-Metals)] フォルダをクリックします。
- 作業ウィンドウの右側にある [Actions] をクリックし、ドロップダウンリストから [Add Physical Domain Association] を選択します。
- [Add Physical Domain Association] ダイアログボックスで、[Physical Domain Profile] ドロップダウンリストからプロファイルを選択します。
- [Deploy Immediacy] エリアで、デフォルトの [On Demand] を受け入れます。
- [Resolution Immediacy] エリアで、デフォルトの [Immediate] を受け入れます。
- [Submit] をクリックします。

ステップ 13 uSeg EPG を適切なリーフスイッチに関連付けます。

- ナビゲーションウィンドウで、uSeg EPG フォルダが開いていることを確認して [Static Leafs] をクリックします。
- [Static Leafs] ウィンドウで、[Actions] > [Statically Link with Node] をクリックします。
- [Statically Link With Node] ダイアログで、リーフノードとモードを選択します。
- Submit** をクリックします。

ステップ 14 作成するその他のネットワーク属性ベースの EPG すべてに対してステップ 9 ~ 13 を繰り返します。

次のタスク

属性ベースの EPG が正しく作成されたことを確認します。

IP ベースまたは MAC ベースの属性を設定する場合は、新しいマイクロセグメントに配置したエンドポイント デバイスでトラフィックが動作していることを確認します。

共有リソースとしての IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG

IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG を VRF（この EPG が配置されている）の内外からアクセスできるリソースとして設定できます。この場合は、既存の IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG にサブネット（ユニキャスト IP アドレスが割り当てられている）を設定し、そのサブネットをこの EPG が属する VRF 以外の VRF にあるデバイスでアドバタイズおよび共有できるようにします。次に、EPG を共有サブネットの IP アドレスに関連付けるオプションを有効にした状態で IP 属性を定義します。

GUI を使用した共有リソースとしての IP ベースのマイクロセグメント EPG の設定

VRF および現在のファブリック外のクライアントがアクセス可能な共有サービスとして、32 ビットマスクの IP アドレスを持つマイクロセグメント EPG を設定できます。

始める前に

設定に関する次の GUI の説明では、サブネット マスクが /32 に設定された IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG が事前設定されていることを前提としています。



- (注)
- 物理環境で IP アドレスベースの EPG を設定する手順については、次を参照してください。[ベアメタルでのネットワークベースの属性によるマイクロセグメンテーションの使用 \(249 ページ\)](#)
 - 仮想環境で IP アドレスベースの EPG を設定する手順については、『*Cisco ACI Virtualization Guide*』の「*Configuring Microsegmentation with Cisco ACI*」を参照してください。

手順

ステップ 1 ターゲットとなる IP アドレスベースの EPG に移動します。

- APIC GUI で、**[Tenant]** > **[tenant_name]** > **[uSeg EPGs]** > **[uSeg_epg_name]** をクリックして EPG の **[Properties]** ダイアログを表示します。

ステップ 2 ターゲット EPG では、EPG のサブネット アドレスに一致するように IP 属性を設定します。

- [Properties]** ダイアログで、**[uSeg Attributes]** テーブルを見つけて **[+]** をクリックします。プロンプトが表示されたら、**[IP Address Filter]** を選択して **[Create IP Attribute]** ダイアログを表示します。
- [Name]** フィールドに名前を入力します。
- [Use FV Subnet]** のチェックボックスをオンにします。

このオプションを有効にすることで、IP 属性値が共有サブネットの IP アドレスに一致することを示します。

d) **[Submit]** をクリックします。

ステップ 3 ターゲット EPG の共有サブネットを作成します。

- a) ターゲットとなる IP アドレスベースの uSeg EPG のフォルダを APIC のナビゲーションウィンドウで開いたまま、**[Subnets]** フォルダを右クリックして **[Create EPG Subnets]** を選択します。
- b) **[Default Gateway]** フィールドに、IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG の IP アドレスまたはマスクを入力します。

(注)

- いずれの場合もサブネット マスクは /32 である必要があります。
 - IP アドレスベースの EPG に関しては、実際にゲートウェイのデフォルトアドレスを入力するのではなく、共有 EPG サブネットの IP アドレスを入力します。
- c) **[Treat as a virtual IP address]** を選択します。
 - d) **[Scope]** で **[Advertised Externally]** と **[Shared between VRFs]** を選択します。
 - e) **[送信 (Submit)]** をクリックします。

GUI を使用した共有リソースとしての IP ベースのマイクロセグメント EPG の設定解除

共有サービスとして設定された IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG を設定解除するには、共有サブネットを削除し、さらにそのサブネットを共有リソースとして使用するオプションを無効にする必要があります。

始める前に

共有サービスとして設定された IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG を設定解除するには、次の情報を確認しておく必要があります。

- IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG の共有サービス アドレスとして設定されているサブネット。
- **Use FV Subnet** オプションが有効な状態で設定されている IP 属性。

手順

ステップ 1 IP アドレスベースのマイクロセグメント EPG からサブネットを削除します。

- a) APIC GUI で、**[Tenant] > [tenant_name] > [Application Profiles] > [epg_name] > [uSeg EPGs] > [uSeg EPGs] > [uSeg_epg_name]** をクリックします。

- b) ターゲットとなる IP アドレスベースの uSeg EPG のフォルダを APIC のナビゲーションウィンドウで開いたまま、[Subnets] フォルダをクリックします。
- c) **Subnets** ウィンドウで、アドバタイズされて他の VRF と共有されるサブネットを選択し、**Actions > Delete** をクリックします。
- d) [Yes] をクリックして削除を確定します。

ステップ 2 [Use FV Subnet] オプションを無効にします。

- a) ターゲットとなる IP アドレスベースの uSeg EPG のフォルダを APIC のナビゲーションウィンドウで開いたまま、マイクロセグメント EPG の名前をクリックして EPG の [Properties] ダイアログを表示します。
- b) [Properties] ダイアログで、[uSeg Attributes] テーブルから [Use FV Subnet] オプションが有効になっている IP 属性の項目を見つけます。
- c) その項目をダブルクリックして **Edit IP Attribute** ダイアログを表示します。
- d) [Edit IP Attribute] ダイアログで、[Use FV Subnet] オプションを選択解除します。
- e) [IP Address] フィールドに別の IP アドレス属性を指定します。

(注)

このアドレスは、32 ビット マスクのユニキャストアドレスである必要があります (例: 124.124.124.123/32)。

- f) [送信 (Submit)] をクリックします。

アプリケーションプロファイルと契約の導入

セキュリティポリシーの適用

トラフィックは前面パネルのインターフェイスからリーフスイッチに入り、パケットは送信元 EPG の EPG でマーキングされます。リーフスイッチはその後、テナントエリア内のパケットの宛先 IP アドレスでフォワーディングルックアップを実行します。ヒットすると、次のシナリオのいずれかが発生する可能性があります。

1. ユニキャスト (/32) ヒットでは、宛先エンドポイントの EPG と宛先エンドポイントが存在するローカルインターフェイスまたはリモートリーフスイッチの VTEP IP アドレスが提供されます。
2. サブネットプレフィクス (/32 以外) のユニキャストヒットでは、宛先サブネットプレフィクスの EPG と宛先サブネットプレフィクスが存在するローカルインターフェイスまたはリモートリーフスイッチの VTEP IP アドレスが提供されます。
3. マルチキャストヒットでは、ファブリック全体の VXLAN カプセル化とマルチキャストグループの EPG で使用するローカルレシーバのローカルインターフェイスと外側の宛先 IP アドレスが提供されます。



- (注) マルチキャストと外部ルータのサブネットは、入力リーフスイッチでのヒットを常にもたらし、セキュリティ ポリシーの適用は、宛先 EPG が入力リーフ スイッチによって認識されるとすぐに発生します。

転送テーブルの誤りにより、パケットがスパインスイッチの転送プロキシに送信されます。転送プロキシはその後、転送テーブル検索を実行します。これが誤りである場合、パケットはドロップされます。これがヒットの場合、パケットは宛先エンドポイントを含む出力リーフ スイッチに送信されます。出力リーフ スイッチが宛先の EPG を認識するため、セキュリティ ポリシーの適用が実行されます。出力リーフ スイッチは、パケット送信元の EPG を認識する必要があります。ファブリック ヘッダーは、入力リーフ スイッチから出力リーフ スイッチに EPG を伝送するため、このプロセスをイネーブルにします。スパイン スイッチは、転送プロキシ機能を実行するときに、パケット内の元の EPG を保存します。

出力リーフ スイッチでは、送信元 IP アドレス、送信元 VTEP、および送信元 EPG 情報は、学習によってローカルの転送テーブルに保存されます。ほとんどのフローが双方向であるため、応答パケットがフローの両側で転送テーブルに入力し、トラフィックが両方向で入力フィルタリングされます。

セキュリティ ポリシー仕様を含むコントラクト

ACI セキュリティ モデルでは、コントラクトに EPG 間の通信を管理するポリシーが含まれます。コントラクトは通信内容を指定し、EPG は通信の送信元と宛先を指定します。コントラクトは次のように EPG をリンクします。

EPG 1 ----- コントラクト ----- EPG 2

コントラクトで許可されていれば、EPG 1 のエンドポイントは EPG 2 のエンドポイントと通信でき、またその逆も可能です。このポリシーの構造には非常に柔軟性があります。たとえば、EPG 1 と EPG 2 間には多くのコントラクトが存在でき、1 つのコントラクトを使用する EPG が 3 つ以上存在でき、コントラクトは複数の EPG のセットで再利用できます。

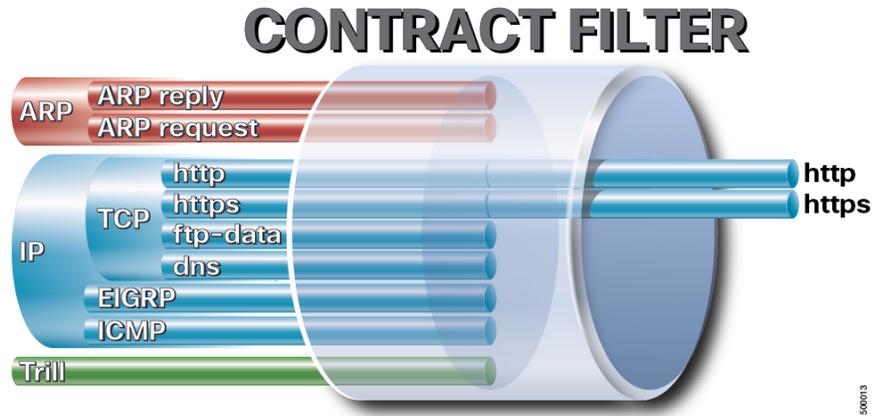
また EPG とコントラクトの関係には方向性があります。EPG はコントラクトを提供または消費できます。コントラクトを提供する EPG は通常、一連のクライアント デバイスにサービスを提供する一連のエンドポイントです。そのサービスによって使用されるプロトコルはコントラクトで定義されます。コントラクトを消費する EPG は通常、そのサービスのクライアントである一連のエンドポイントです。クライアント エンドポイント (コンシューマ) がサーバ エンドポイント (プロバイダー) に接続しようとする時、コントラクトはその接続が許可されるかどうかを確認します。特に指定のない限り、そのコントラクトは、サーバがクライアントへの接続を開始することを許可しません。ただし、EPG 間の別のコントラクトが、その方向の接続を簡単に許可する場合があります。

この提供/消費の関係は通常、EPG とコントラクト間を矢印を使って図で表されます。次に示す矢印の方向に注目してください。

EPG 1 <----- 消費 ----- コントラクト <----- 提供 ----- EPG 2

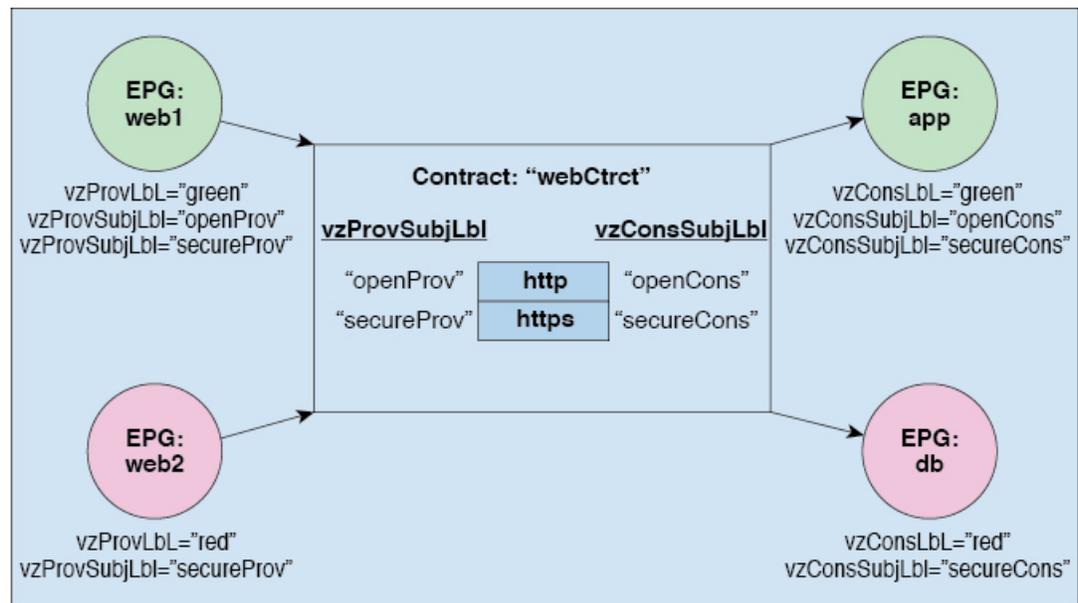
コントラクトは階層的に構築されます。1つ以上のサブジェクトで構成され、各サブジェクトには1つ以上のフィルタが含まれ、各フィルタは1つ以上のプロトコルを定義できます。

図7: コントラクトフィルタ



次の図は、コントラクトが EPG の通信をどのように管理するかを示します。

図8: EPG/EPG 通信を決定するコントラクト



たとえば、TCP ポート 80 とポート 8080 を指定する HTTP と呼ばれるフィルタと、TCP ポート 443 を指定する HTTPS と呼ばれる別のフィルタを定義できます。その後、2 セットの情報カテゴリを持つ webCtct と呼ばれるコントラクトを作成できます。openProv と openCons are が HTTP フィルタが含まれる情報カテゴリです。secureProv と secureCons は HTTPS フィルタが含まれる情報カテゴリです。この webCtct コントラクトは、Web サービスを提供する EPG とそのサービスを消費するエンドポイントを含む EPG 間のセキュアな Web トラフィックと非セキュアな Web トラフィックの両方を可能にするために使用できます。

これらの同じ構造は、仮想マシンのハイパーバイザを管理するポリシーにも適用されます。EPGがVirtual Machine Manager (VMM) のドメイン内に配置されると、APICはEPGに関連付けられたすべてのポリシーをVMMドメインに接続するインターフェイスを持つリーフスイッチにダウンロードします。VMMドメインの完全な説明については、『*Application Centric Infrastructure Fundamentals*』の「*Virtual Machine Manager Domains*」の章を参照してください。このポリシーが作成されると、APICはEPGのエンドポイントへの接続を可能にするスイッチを指定するVMMドメインにそれをプッシュ（あらかじめ入力）します。VMMドメインは、EPG内のエンドポイントが接続できるスイッチとポートのセットを定義します。エンドポイントがオンラインになると、適切なEPGに関連付けられます。パケットが送信されると、送信元EPGおよび宛先EPGがパケットから取得され、対応するコントラクトで定義されたポリシーでパケットが許可されたかどうかを確認されます。許可された場合は、パケットが転送されます。許可されない場合は、パケットはドロップされます。

コントラクトは1つ以上のサブジェクトで構成されます。各サブジェクトには1つ以上のフィルタが含まれます。各フィルタには1つ以上のエントリが含まれます。各エントリは、アクセスコントロールリスト(ACL)の1行に相当し、エンドポイントグループ内のエンドポイントが接続されているリーフスイッチで適用されます。

詳細には、コントラクトは次の項目で構成されます。

- 名前：テナントによって消費されるすべてのコントラクト (**common** テナントまたはテナント自体で作成されたコントラクトを含む) にそれぞれ異なる名前が必要です。
- サブジェクト：特定のアプリケーションまたはサービス用のフィルタのグループ。
- フィルタ：レイヤ2～レイヤ4の属性(イーサネットタイプ、プロトコルタイプ、TCPフラグ、ポートなど)に基づいてトラフィックを分類するために使用します。
- アクション：フィルタリングされたトラフィックで実行されるアクション。次のアクションがサポートされます。
 - トラフィックの許可 (通常のコントラクトのみ)
 - トラフィックのマーク (DSCP/CoS) (通常のコントラクトのみ)
 - トラフィックのリダイレクト (サービス グラフによる通常のコントラクトのみ)
 - トラフィックのコピー (サービス グラフまたはSPANによる通常のコントラクトのみ)
 - トラフィックのブロック (禁止コントラクトのみ)

Cisco APIC リリース 3.2(x) および名前が EX または FX で終わるスイッチでは、標準コントラクトで代わりに件名 [拒否] アクションまたは [コントラクトまたは件名の除外] を使用して、指定のパターンを持つトラフィックをブロックできます。
- トラフィックのログ (禁止コントラクトと通常のコントラクト)
- エイリアス：(任意)変更可能なオブジェクト名。オブジェクト名は作成後に変更できませんが、エイリアスは変更できるプロパティです。

このように、コントラクトによって許可や拒否よりも複雑なアクションが可能になります。コントラクトは、所定のサブジェクトに一致するトラフィックをサービスにリダイレクトした

り、コピーしたり、その QoS レベルを変更したりできることを指定可能です。具象モデルでアクセスポリシーをあらかじめ入力すると、APIC がオフラインまたはアクセスできない場合でも、エンドポイントは移動でき、新しいエンドポイントをオンラインにでき、通信を行うことができます。APIC は、ネットワークの単一の障害発生時点から除外されます。ACI ファブリックにパケットが入力されると同時に、セキュリティポリシーがスイッチで実行している具象モデルによって適用されます。

Three-Tier アプリケーションの展開

フィルタは、フィルタを含むコントラクトにより許可または拒否されるデータプロトコルを指定します。コントラクトには、複数のサブジェクトを含めることができます。情報カテゴリは、単方向または双方向フィルタの作成に使用できます。単方向フィルタは、コンシューマからプロバイダー方向 (IN) またはプロバイダーからコンシューマ方向 (OUT) のどちらかに対して使用されます。双方向フィルタは、両方の方向で使用されます。これは、再帰的ではありません。

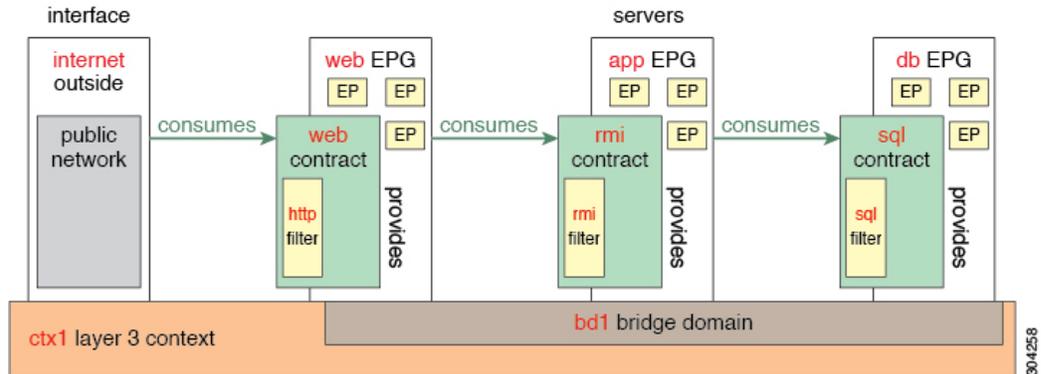
コントラクトは、エンドポイントグループ間 (EPG 間) の通信をイネーブルにするポリシーです。このポリシーは、アプリケーション層間の通信を指定するルールです。コントラクトが EPG に添付されていない場合は、EPG 間通信がデフォルトで無効になります。EPG 内の通信は常に許可されているので、EPG 内の通信には契約は必要ありません。

アプリケーションプロファイルでは、APIC がその後ネットワークおよびデータセンターのインフラストラクチャで自動的にレンダリングするアプリケーション要件をモデル化することができます。アプリケーションプロファイルでは、管理者がインフラストラクチャの構成要素ではなくアプリケーションの観点から、リソースプールにアプローチすることができます。アプリケーションプロファイルは、互いに論理的に関連する EPG を保持するコンテナです。EPG は同じアプリケーションプロファイル内の他の EPG および他のアプリケーションプロファイル内の EPG と通信できます。

アプリケーションポリシーを展開するには、必要なアプリケーションプロファイル、フィルタ、および契約を作成する必要があります。通常、APIC ファブリックは、テナントネットワーク内の Three-Tier アプリケーションをホストします。この例では、アプリケーションは 3 台のサーバ (Web サーバ、アプリケーションサーバ、およびデータベースサーバ) を使用して実行されます。Three-Tier アプリケーションの例については、次の図を参照してください。

Web サーバには HTTP フィルタがあり、アプリケーションサーバには Remote Method Invocation (RMI) フィルタがあり、データベースサーバには Structured Query Language (SQL) フィルタがあります。アプリケーションサーバは、SQL コントラクトを消費してデータベースサーバと通信します。Web サーバは、RMI コントラクトを消費して、アプリケーションサーバと通信します。トラフィックは Web サーバから入り、アプリケーションサーバと通信します。アプリケーションサーバはその後、データベースサーバと通信し、トラフィックは外部に通信することもできます。

図 9: Three-Tier アプリケーションの図



http 用のフィルタを作成するパラメータ

この例での http 用のフィルタを作成するパラメータは次のとおりです。

パラメータ名	http のフィルタ
名前	http
エントリの数	2
エントリ名	Dport-80 Dport-443
Ethertype	IP
プロトコル	tcp tcp
宛先ポート	http https

rmi および sql 用のフィルタを作成するパラメータ

この例での rmi および sql 用のフィルタを作成するパラメータは次のとおりです。

パラメータ名	rmi のフィルタ	sql のフィルタ
名前	rmi	sql
エントリの数	1	1
エントリ名	Dport-1099	Dport-1521
Ethertype	IP	IP

パラメータ名	rmi のフィルタ	sql のフィルタ
プロトコル	tcp	tcp
宛先ポート	1099	1521

アプリケーション プロファイル データベースの例

この例のアプリケーション プロファイル データベースは次のとおりです。

EPG	提供されるコントラクト	消費されるコントラクト
web	web	rmi
app	rmi	sql
db	sql	--

GUI を使用したアプリケーション プロファイルの作成

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[TENANTS] を選択します。[Navigation] ペインで、テナントを展開し、[Application Profiles] を右クリックし、[Create Application Profile] をクリックします。
- ステップ 2** [Create Application Profile] ダイアログボックスで、[Name] フィールドに、アプリケーション プロファイル名 (OnlineStore) を追加します。
-

GUI を使用した EPG の作成

EPG が使用するポートは、VM マネージャ (VMM) ドメインまたは EPG に関連付けられた物理 ドメインのいずれか 1 つに属している必要があります。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[Tenants]、EPG を作成するテナントの順に選択します。
- ステップ 2** ナビゲーション ペインで、テナントのフォルダ、[Application Profiles] フォルダ、アプリケーション プロファイルのフォルダの順に展開します。
- ステップ 3** [Application EPG] フォルダを右クリックし、[Create Application EPG] ダイアログボックスで次の操作を実行します。
- a) [Name] フィールドに、EPG の名前 (db) を追加します。

- b) [Bridge Domain] フィールドで、ドロップダウンリストからブリッジドメイン (bd1) を選択します。
- c) [Associate to VM Domain Profiles] チェックボックスをオンにします。[Next] をクリックします。
- d) [STEP 2 > Domains] エリアで、[Associate VM Domain Profiles] を展開し、ドロップダウンリストから対象の VMM ドメインを選択します。
- e) [Deployment Immediacy] ドロップダウンリストで、デフォルト値を受け入れるか、いつポリシーが Cisco APIC から物理リーフスイッチに展開されるかを選択します。
- f) [Resolution Immediacy] ドロップダウンリストで、いつポリシーが物理リーフスイッチから仮想リーフに展開されるかを選択します。

Cisco AVS がある場合には、**Immediate** または **On Demand** を選択します。Cisco ACI Virtual Edge または VMware VDS がある場合には、**Immediate**、**On Demand**、または **Pre-provision** を選択します。

- g) (オプション) [Delimiter] フィールドに、|、~、!、@、^、+、または=のいずれかの記号を入力します。
記号を入力しなかった場合、システムは VMware ポートグループ名のデリミタとしてデフォルトの|を使用します。
- h) Cisco ACI Virtual Edge または Cisco AVS を利用している場合は、[Encap Mode] ドロップダウンリストからカプセル化モードを選択します。

次のいずれかのカプセル化モードを選択できます。

- **VXLAN** : これはドメインの VLAN 設定を上書きし、EPG は VXLAN カプセル化を使用します。ただし、ドメインでマルチキャストプールが設定されていない場合は、EPG に対してエラーが発生します。
- **VLAN** : これはドメインの VXLAN 設定を上書きし、EPG は VLAN カプセル化を使用します。ただし、ドメインで VLAN プールが設定されていない場合は、EPG に対してエラーがトリガーされます。
- **自動** : EPG は、VMM ドメインと同じカプセル化モードを使用します。これはデフォルトの設定です。

- i) Cisco ACI Virtual Edge がある場合、**Switching Mode** ドロップダウンリストで、**native** または **AVE** を選択します。

native を選択した場合、EPG は VMware VDS を通して切り替えられます。**AVE** を選択した場合、EPG は Cisco ACI Virtual Edge を通して切り替えられます。デフォルトは **native** です。

- j) **Update** をクリックし、**Finish** をクリックします。

ステップ 4 Create Application Profile ダイアログボックスで、EPG をさらに 2 つ作成します。同じブリッジドメイン、同じデータセンター内に、3 つの EPG を作成します。これらは、db、app、および web です。

APIC GUI を使用したコントラクトの設定

コントラクトとフィルタの注意事項と制約事項

ファブリックが Cisco Nexus 93128TX、93120TX、9396TX、9396PX、9372PX、9372PX-E、9372TX-E などの第1世代の Cisco Nexus 9300 リーフスイッチで構成されている場合、**EtherType** 一致としての **IP** のみがコントラクトフィルタでサポートされます。コントラクトフィルタの **[EtherType]** フィールドで、より詳細なオプション (**IPv4** や **IPv6** など) を照合する機能は、スイッチ名の末尾に -EX、-FX、または -FX2 が指定されたリーフスイッチモデルでのみサポートされます。

GUI を使用したフィルタの作成

3つの個別のフィルタを作成します。この例では、HTTP、RMI、SQL です。このタスクでは、HTTP フィルタを作成する方法を示します。このタスクは、他のフィルタを作成するタスクと同じです。

始める前に

テナント、ネットワーク、およびブリッジドメインが作成されていることを確認します。

手順

- ステップ1 メニューバーで、[テナント] を選択します。
- ステップ2 **Navigation** ウィンドウで、*tenant-name* > **Contracts** を選択し、**Filters** を選択し、**Create Filter** を選択します。
- ステップ3 [Create Filter] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
 - a) [Name] フィールドに、フィルタ名 (**http**) を入力します。
 - b) [**エントリ (Entries)**] テーブル内で+をクリックして、[名前 (**Name**)] フィールドに、名前 (Dport-80) を入力します。
 - c) [EtherType] ドロップダウンリストから、EtherType (**IP**) を選択します。
 - d) [IP Protocol] ドロップダウンリストから、プロトコル (**tcp**) を選択します。
 - e) [Destination Port/Range] ドロップダウンリストから、[From] フィールドと [To] フィールドで、[**http**] を選択します。 (**http**)
 - f) [**Update**] をクリックし、[**Submit**] をクリックします。
新しく追加されたフィルタが、[Navigation] ペインと [Work] ペインに表示されます。

(注)
[**エントリ (Entries)**] テーブルでは、**ARP フラグ**には機能がなく、設定できません。このフィールドは使用しません。
- ステップ4 [Name] フィールドの [Entries] を展開します。同じプロセスを実行して、別のエントリを宛先ポートとして **HTTPS** で追加し、[Update] をクリックします。

この新しいフィルタ ルールが追加されます。

- ステップ 5** さらに2つのフィルタ (rmi および sql) を作成し、[rmi および sql 用のフィルタを作成するパラメータ \(259ページ\)](#) に示すパラメータを使用するには、上記手順の同じプロセスを実行します。

GUI を使用した契約の作成

手順

- ステップ 1** メニューバーで **Tenants** を選択し、実行するテナント名を選択します。 **Navigation** ウィンドウで、*tenant-name* > **Contracts** を展開します。
- ステップ 2** **Standard** > **Create Contract** を右クリックします。
- ステップ 3** **Create Contract** ダイアログボックスで、次のタスクを実行します:
- [Name] フィールドに、契約名 (web) を入力します。
 - [Subjects] の横の [+] 記号をクリックし、新しいサブジェクトを追加します。
 - [Create Contract Subject] ダイアログボックスで、[Name] フィールドにサブジェクト名を入力します。 (web)
 - (注)
この手順では、契約のサブジェクトで前に作成されたフィルタを関連付けます。

[Filter Chain] 領域で、[Filters] の横の [+] 記号をクリックします。
- e) ダイアログボックスで、ドロップダウンメニューから、フィルタ名 (http) を選択し、[Update] をクリックします。
- ステップ 4** [Create Contract Subject] ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。
- ステップ 5** この手順と同じステップに従って、rmi と sql 用の契約をさらに2つ作成します。rmi 契約の場合は rmi サブジェクトを選択し、sql の場合は sql サブジェクトを選択します。

GUI を使用した契約の消費と提供

EPG 間のポリシー関係を作成するために、前に作成した契約を関連付けることができます。

提供するコントラクトと使用するコントラクトに名前を付けるときは、提供するコントラクトと使用するコントラクトの両方に同じ名前を付けてください。

手順

- ステップ 1** (注)
db、app、および web EPG は、アイコンで表示されます。

APIC GUI ウィンドウをクリックして db EPG から app EPG にドラッグします。

[Add Consumed Contract] ダイアログボックスが表示されます。

- ステップ 2** [Name] フィールドで、ドロップダウン リストから、**sql** 契約を選択します。[OK] をクリックします。
この手順により、db EPG は sql 契約を提供でき、app EPG は sql 契約を消費することができます。
- ステップ 3** APIC GUI 画面 をクリックして、app ePG から web EPG にドラッグします。
[Add Consumed Contract] ダイアログボックスが表示されます。
- ステップ 4** [Name] フィールドで、ドロップダウン リストから、**rmi** 契約を選択します。[OK] をクリックします。
この手順により、app EPG は rmi 契約を提供でき、web EPG は rmi 契約を消費することができます。
- ステップ 5** web EPG のアイコンをクリックし、[Provided Contracts] 領域の [+] 記号をクリックします。
[Add Provided Contract] ダイアログボックスが表示されます。
- ステップ 6** [Name] フィールドで、ドロップダウン リストから、**web** 契約を選択します。[OK] をクリックします。[送信 (Submit)] をクリックします。
OnlineStore と呼ばれる 3 層アプリケーションプロファイルが作成されました。
- ステップ 7** 確認するには、[Navigation] ペインで、[Application Profiles] 下の [OnlineStore] に移動してクリックします。
[Work] ペインで、3 つの EPG app、db および web が表示されていることを確認できます。
- ステップ 8** [Work] ペインで、[Operational] > [Contracts] を選択します。
消費/提供される順番で表示された EPG と契約を確認できます。

コントラクトパフォーマンスの最適化

契約のパフォーマンスの最適化

Cisco APIC、リリース 3.2 で始まるより効率的なハードウェア契約データの TCAM ストレージをサポートしている双方向契約を設定できます。最適化を有効になっている、両方向の統計情報を契約は統合します。

TCAM 最適化は、第 2 世代 Cisco Nexus 9000 シリーズのトップオブブラック (TOR) スイッチでサポートされます。これは、EX、FX、および FX2 以降のサフィックスが付いたものです (たとえば、N9K-C93180LC-EX または N9K-C93180YC-FX)。

TCAM 契約の効率的なデータ ストレージを設定するには、次のオプションが有効にします。

- プロバイダとコンシューマの間で両方向に適用されるコントラクトをマークします。
- IP TCP または UDP プロトコルを使用するフィルタの場合は、リバースポートオプションを有効にします。

- コントラクトサブジェクトを設定する場合は、[ポリシー圧縮の有効化 (Enable Policy Compression)] デイレクティブを選択します。これにより、`actrl:Rule` 管理対象オブジェクトのアクション属性に `no_stats` オプションが追加されます。

制限事項

[ポリシー圧縮の有効化 (Enable Policy Compression)] (`no_stats`) オプションを選択すると、ルールごとの統計情報が失われます。ただし、両方の方向の複合ルール統計情報は、ハードウェア統計情報に存在します。

Cisco APIC 3.2(1) にアップグレードした後、`no_stats` オプションをアップグレード前のコントラクトサブジェクト (フィルタまたはフィルタ エントリを含む) に追加するには、コントラクトサブジェクトを削除し、**Enable Policy Compression** デイレクティブで再設定する必要があります。そうしないと、圧縮は行われません。

双方向サブジェクトフィルタを使用するコントラクトごとに、Cisco NX-OS は2つのルールを作成します。

- `sPcTag` および `dPcTag` が含まれ、`direction=bi-dir` とマークされているルール。これはハードウェアでプログラミングされます。
- プログラミングされていない `direction=uni-dir-ignore` でマークされたルール

次の設定とルールは圧縮されません。

- ルールの優先順位を持つ `fully_qual`
- ルールの反対側 (双 `dir` および `uni dir` 無視 マーク) と同一ではないプロパティは、次のように **アクション** を含む **統制**、**prio**、**qos** または **markDscp**
- ルール 暗黙的 または `implarp` フィルタ
- ルール アクションで `Deny`、`Redir`、`コピー`、または `Deny ログ`

次の月クエリ出力は、圧縮のと見なされる、契約の2つのルールを示します。

```
apic1# moquery -c actrlRule
Total Objects shown: 2

# actrl.Rule
scopeId          : 2588677
sPcTag           : 16388
dPcTag           : 49156
fltId            : 67
action           : no_stats, permit
actrlCfgFailedBmp :
actrlCfgFailedTs : 00:00:00:00.000
actrlCfgState    : 0
childAction      :
ctrctName        :
descr            :
direction        : bi-dir
dn               : sys/actrl/scope-2588677/rule-2588677-s-16388-d-49156-f-67
id               : 4112
lcOwn            : implicit
```

```

markDscp          : unspecified
modTs             : 2019-04-27T09:01:33.152-07:00
monPolDn         : uni/tn-common/monepg-default
name              :
nameAlias        :
operSt           : enabled
operStQual       :
prio             : fully_qual
qosGrp           : unspecified
rn               : rule-2588677-s-16388-d-49156-f-67
status           :
type             : tenant

# actrl.Rule
scopeId          : 2588677
sPcTag          : 49156
dPcTag          : 16388
fltId           : 64
action          : no_stats,permit
actrlCfgFailedBmp :
actrlCfgFailedTs : 00:00:00:00.000
actrlCfgState   : 0
childAction     :
ctrctName       :
descr           :
direction       : uni-dir-ignore
dn              : sys/actrl/scope-2588677/rule-2588677-s-49156-d-16388-f-64
id              : 4126
lcOwn           : implicit
markDscp        : unspecified
modTs           : 2019-04-27T09:01:33.152-07:00
monPolDn        : uni/tn-common/monepg-default
name            :
nameAlias       :
operSt          : enabled
operStQual      :
prio            : fully_qual
qosGrp          : unspecified
rn              : rule-2588677-s-49156-d-16388-f-64
status          :
type            : tenant

```

表 7: 圧縮マトリクス

リバース フィルタ ポートが有効	TCP または UDP 発信元 ポート	TCP または UCP 宛先 ポート	圧縮
はい	ポート A	ポート B	○
○	未指定	ポート B	○
○	ポート A	未指定	○
○	未指定	未指定	○
非対応	ポート A	ポート B	いいえ
いいえ	未指定	ポート B	いいえ

リバース フィルタ ポートが有効	TCP または UDP 発信元 ポート	TCP または UCP 宛先 ポート	圧縮
いいえ	ポート A	未指定	いいえ
いいえ	未指定	未指定	はい

GUI を使用して TCAM の使用が最適化された契約を設定する

この手順は、ハードウェア上の TCAM による契約データの保存を最適化する契約を設定する方法について説明します。

始める前に

- テナント、VRF、およびを提供し、契約を消費する Epg を作成します。
- この契約で許可または拒否されるトラフィックを定義する、1 つ以上のフィルタを作成します。

手順

ステップ 1 メニュー バーで **Tenants** を選択し、実行するテナント名を選択します。 **Navigation** ウィンドウで、*tenant-name* および **Contracts** を展開します。

ステップ 2 **Standard > Create Contract** を右クリックします。

ステップ 3 **Create Contract** ダイアログボックスで、次のタスクを実行します:

- Name** フィールドに、契約名を入力します。
- + アイコン (**Subjects** の隣にあるもの) をクリックして、新しい情報カテゴリを追加します。
- [Create Contract Subject] ダイアログボックスで、[Name] フィールドにサブジェクト名を入力します。
(注)
この手順では、フィルタを契約の情報カテゴリに関連付けます。
- TCAM の契約し状況強最適化機能を有効にするには、**Apply Both Directions** および **Reverse Filter Ports** が有効になっていることを確認します。
- + アイコンをクリックして **Filters** を展開します。
- ダイアログボックスで、ドロップダウンメニューから、デフォルトのフィルタを指定します。すでに設定したフィルタを選択するか、**Create Filter** で新しいフィルタを作成します。
- [指令 (**Directives**)] フィールドで、[ポリシー圧縮の有効化 (**Enable Policy Compression**)] を選択します。
- Action** フィールドで、**Permit** または **Deny** を選択します。

(注)

現在のところ、**Deny** アクションはサポートされていません。最適化は **Permit** アクションに対してのみ行われます。

- i) (任意) **Priority** フィールドで、優先度レベルを選択します。
- j) **Update** をクリックします。

ステップ 4 Create Contract Subject ダイアログボックスで、**OK** をクリックします。

ステップ 5 Create Contract ダイアログボックスで、**Submit** をクリックします。

契約とサブジェクトの例外

コントラクトまたはコントラクトの件名の例外の設定

Cisco APIC リリース 3.2(1) では、EPG 間のコントラクトが拡張され、コントラクトに参加しているコントラクトプロバイダまたはコンシューマのサブネットを拒否できます。インター EPG コントラクトおよび内部 EPG コントラクトは、この機能でサポートされます。

プロバイダ EPG の件名を有効にして、件名またはコントラクトの例外で一致基準が設定されているものを除くすべてのコンシューマ EPG との通信が可能になります。たとえば、サブセットを除く、テナントのすべての EPG にサービスを提供するために EPG を有効にする場合、これら EPG を除外できます。これを設定するには、コントラクトまたはそのコントラクトの件名のいずれかで例外を作成します。サブセットがコントラクトの提供または消費のアクセスを拒否します。

ラベル、カウンタ、許可および拒否ログは、コントラクトおよび件名の例外でサポートされています。

コントラクトのすべての件名に例外を適用するには、コントラクトに例外を追加します。コントラクトの単一の件名にのみ例外を適用する場合、件名に例外を追加します。

件名にフィルタを追加する場合、フィルタのアクションを設定できます（フィルタ条件に一致するオブジェクトを許可または拒否する）。また、**[拒否]** フィルタについては、フィルタの優先順位を設定することができます。**[許可]** フィルタは常にデフォルトの優先順位があります。自動拒否の件名-フィルタ関係をマーキングすると、件名に一致している場合、各 EPG のペアに適用されます。コントラクトと件名には、複数の件名-フィルタ関係を含むことができます。これは、フィルタに一致するオブジェクトを許可または拒否するように独自に設定できます。

例外タイプ

コントラクトと件名の例外は次のタイプに基づき、* ワイルドカードなどの正規表現を含むことができます。

例外の条件は、[コンシューマ正規表現] および [プロバイダ正規表現] のフィールドで定義されているように、これらのオブジェクトを除外します。	例	説明
テナント	<pre><vzException consRegex= "common" field= "Tenant" name= "excep03" provRegex= "t1" /></pre>	この例では、common テナントを使用して、EPG が t1 テナントにより提供されるコントラクトを消費しないように除外します。
VRF	<pre><vzException consRegex= "ctx1" field= "Ctx" name= "excep05" provRegex= "ctx1" /></pre>	この例では、ctx1 のメンバーが同じ VRF から提供されるサービスを使用しないように除外します。
EPG	<pre><vzException consRegex= "EPgPa.*" field= "EPg" name= "excep03" provRegex= "EPg03" /></pre>	この例では、名前が EPgPa から始まる複数の EPG が存在すると仮定し、EPg03 により提供されているコントラクトのコンシューマとしてすべて拒否される必要があります。
Dn	<pre><vzException consRegex= "uni/tn-t36/ap-customer/epg-epg193" field= "Dn" name="excep04" provRegex= "uni/tn-t36/ap-customer/epg-epg200" /></pre>	この例では、epg193 が epg200 により提供されたコントラクトを消費しないように除外します。
タグ	<pre><vzException consRegex= "red" field= "Tag" name= "excep01" provRegex= "green" /></pre>	例では、red タグでマークされているオブジェクトが消費することと、green タグでマークされているオブジェクトがコントラクトに参加しないように除外します。

GUI を使用したコントラクトまたはサブジェクトの例外の設定

このタスクでは、EPG のほとんどに対して通信を許可するものの、その一部のアクセスは拒否するコントラクトを設定します。

始める前に

コントラクトを提供し、利用するために、テナント、VRF、アプリケーションプロファイルと EPG を設定します。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで **[テナント]** > **[すべてテナント]** をクリックします。
- ステップ 2** コントラクトを作成しているテナントをダブルクリックします。
- ステップ 3** ナビゲーションバーで、**[コントラクト]** を展開し、**[フィルタ]** を右クリックして、**[フィルタの作成]** を選択します。
- フィルタでは、コントラクト経由のアクセスを許可または拒否するトラフィックを定義するアクセス制御リスト (ACL) に重要です。許可または拒否できるオブジェクトを定義する複数のフィルタを作成することができます。
- ステップ 4** フィルタ名を入力し、許可または拒否するトラフィックを定義する条件を追加して、**[送信]** をクリックします。
- ステップ 5** **[コントラクト]** を右クリックし、**[コントラクトの作成]** を選択します。
- ステップ 6** コントラクト名を入力し、範囲を設定して、**[+]** アイコンをクリックし件名を追加します。
- ステップ 7** 繰り返して別の件名を追加します。
- ステップ 8** **[Submit]** をクリックします。
- ステップ 9** コントラクトのすべての件名の例外を追加する手順は、次のとおりです。
- コントラクトをクリックし、**[コントラクトの例外]** をクリックします。
 - 件名を追加し、許可または拒否するように設定します。
 - [+]** アイコンをクリックしてコントラクトを追加します。
 - 例外の名前とタイプを入力します。
 - 正規表現を **[コンシューマ Regex]** および **[プロバイダ Regex]** フィールドに追加し、コントラクトのすべての件名から除外する EPG を定義します。
- ステップ 10** コントラクトの 1 つの件名の例外を追加する手順は、次のとおりです。
- 件名をクリックし、**[件名の例外]** をクリックします。
 - [+]** アイコンをクリックしてコントラクトを追加します。
 - 例外の名前とタイプを入力します。
 - 正規表現を **[コンシューマ Regex]** および **[プロバイダ Regex]** に追加し、コントラクトのすべての件名から除外する EPG を定義します。
-

EPG 内契約

EPG 内契約

EPG 間の通信を制御するには、契約を設定します。Cisco APIC リリース 3.0(1) 以降では、EPG 内の契約を設定できます。

EPG 内契約がない場合、EPG のエンドポイント間の通信は、完全に可能か不可能かになります。通信はデフォルトでは無制限ですが、エンドポイント間の通信を禁止するために、EPG 内分離を設定することができます。

ただし、EPG 内契約を使用すれば、同じ EPG のエンドポイント間の通信を制御して、いくつかのトラフィックを許可し、残りの部分を禁止することができます。たとえば、Web トラフィックを許可し、残りの部分をブロックすることが必要な場合があります。または、すべての ICMP トラフィックと TCP ポート 22 のトラフィックを許可し、他のすべてのトラフィックをブロック中することができます。

EPG 内契約の注意事項と制約事項

EPG 内契約を計画する場合は、次の注意事項と制約事項に従ってください。

- EPG 内契約は、VMware VDS、Open vSwitch (OVS)、およびベアメタル サーバ上のアプリケーション EPG とマイクロセグメント EPG (uSeg) で設定できます。



(注) OVS は、Kubernetes 統合 Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) 機能で使用できます。Kubernetes では、EPG を作成し、それらに名前空間を割り当てることができます。VMware VDS またはベアメタル サーバと同様、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) では、EPG 内ポリシーを EPG に適用することができます。

- EPG 内契約では、リーフ スイッチがプロキシによる Address Resolution Protocol (ARP) をサポートしていることが必要です。EPG 間契約が、モデル名や後発のモデルの最後に EX または EX が付く、Cisco Nexus 9000 シリーズ スイッチでサポートされています。
- EPG 内契約は、Cisco Application Virtual Switch、Cisco ACI Virtual Edge、および Microsoft ドメインではサポートされていません。EPG 内契約を設定してこれらのドメインに適用しようとすると、ポートがブロック状態になる可能性があります。
- サービス グラフでの EPG 内コントラクト：
 - サービス グラフを拒否のアクションを含む EPG 内契約のサブジェクトと関連付けることはできません。
 - サービス グラフで EPG 内契約がサポートされるのは、シングル ノード ワンアーム モードのポリシーベース リダイレクトおよびコピー サービスに限られます。
- Cisco APIC リリース 5.2(1)以降、EPG 内コントラクトは L3Out EPG でサポートされます。
 - アクションは [許可 (permit)]、[拒否 (deny)]、または [リダイレクト (redirect)] です。リダイレクトアクションには、ポリシーベース リダイレクト (PBR) を使用したサービス グラフが必要です。

- IP アドレスとサブネットが 0.0.0.0/0 または 0::0 の L3Out EPG は、EPG 内コントラクトも EPG 内分離も使用できません。Cisco APIC は、これらの場合に障害を発生させます。ただし、代わりに L3Out EPG の IP アドレスとサブネット 0.0.0.0/1 および 128.0.0.0/1 を使用してすべてのトラフィックを捕捉できます。
- EPG の EPG 内コントラクトとは異なり、L3Out EPG の EPG 内コントラクトには暗黙の拒否ルールが自動的に追加されません。他のトラフィックを拒否するには、EPG 内分離を有効にする必要があります。L3Out EPG の EPG 内分離は、VRF インスタンスが強制モードの場合にのみ機能します。
- Cisco ACI では、トラフィックが L3Out 内適用の Cisco ACI 境界リーフ スイッチに到達する方法を制御できません。

GUI を使用したアプリケーション EPG への EPG 内契約の追加

コントラクトを設定した後、EPG 内コントラクトとして EPG にコントラクトを追加できます。この手順は、VMware VDS、OVS、およびベアメタルサーバと同じです。

始める前に

- アプリケーション EPG が設定済みである必要があります。
- このアプリケーション用のフィルタが設定された契約が必要です。「[GUI を使用した契約の作成 \(263 ページ\)](#)」を参照してください。

手順

-
- ステップ 1** メニューバーで、[テナント (Tenants)]>>[すべてのテナント (ALL Tenants)] の順に選択します。
- ステップ 2** [Work] ペインで、テナントの名前をダブルクリックします。
- ステップ 3** EPG のタイプに応じて、次の一連の手順のいずれかを実行します。

EPG 内コントラクトに適用する場合 :	結果
アプリケーション EPG	<ol style="list-style-type: none"> 1. 左のナビゲーションペインで、<i>[tenant_name]</i>>[アプリケーション プロファイル (Application Profiles)]>[アプリケーション プロファイル (<i>application profile</i>)]>[アプリケーション EPG (Application EPGs)]><i>[epg]</i>を展開します。 2. [コントラクト]フォルダを右クリックして、[EPG 内コントラクトの追加]を選択します。

EPG 内コントラクトに適用する場合 :	結果
	<ol style="list-style-type: none"> 3. [Ext-EPG 内コントラクトの追加 (Add Intra Ext-EPG Contract)] ダイアログボックスで[コントラクト (Contract)] ドロップダウンリストからコントラクトを選択します。 4. [送信 (Submit)] をクリックします。`
USeg EPG	<ol style="list-style-type: none"> 1. 左のナビゲーション ペインで、[tenant_name]>[アプリケーション プロファイル (Application Profiles)]>[アプリケーション プロファイル (application profile)]>[uSeg EPGs]>[epg]を展開します。 2. [コントラクト] フォルダを右クリックして、[EPG 内コントラクトの追加]を選択します。 3. [Ext-EPG 内コントラクトの追加 (Add Intra Ext-EPG Contract)] ダイアログボックスで[コントラクト (Contract)] ドロップダウンリストからコントラクトを選択します。 4. [送信 (Submit)] をクリックします。`
L3Out EPG	<ol style="list-style-type: none"> 1. [ナビゲーション (Navigation)] ペインで、[tenant_name]>[ネットワーキング (Networking)]>[L3Outs]>[L3Out_name]>[外部 EPG (External EPGs)]>[ext_epg_name]を選択します。 2. [作業 (Work)] ペインの [Ext-EPG 内分離 (Intra Ext-EPG Isolation)] で、[適用 (Enforced)] を選択します。 3. [送信 (Submit)] をクリックします。` 4. [作業 (Work)] ペインで、[ポリシー (Policy)]>[コントラクト (Contracts)] タブを選択します。 5. アクションメニューで、[Ext-EPG 内コントラクトの追加 (Add Intra Ext-EPG Contract)] を選択します。 6. [Ext-EPG 内コントラクトの追加 (Add Intra Ext-EPG Contract)] ダイアログボックスで[コントラクト (Contract)] ドロップダウンリストからコントラクトを選択します。 7. [送信 (Submit)] をクリックします。` 選択した契約が、[作業 (Work)] ペインの [コントラクト タイプ : EPG 内コントラクト (Contract Type : Intra EPG Contract)] セクションに表示されます。

NX-OS スタイル CLI を使用したアプリケーション EPG への EPG 内契約の追加

契約を設定した後、内通 EPG 契約として、契約を設定できます。手順は VMware VDS、OVS、およびベアメタルサーバで同じです。

始める前に

- 設定されている、EPG は必須です。
- フィルタを持つ契約を設定している必要があります。

手順

ステップ 1 コンフィギュレーション モードを開始します。

例：

```
apic1# configure
```

ステップ 2 テナントを作成または選択します。

例：

```
apic1(config)# tenant Tenant-13out
```

ステップ 3 外部 Layer 3 EPG を作成または選択します。

例：

```
apic1(config-tenant)# external-13 epg ext-epg
```

ステップ 4 外部 EPG を VRF インスタンスにバインドします。

例：

```
apic1(config-tenant-13ext-epg)# vrf member vrf1
```

ステップ 5 EPG 内で分離を有効にします。

例：

```
(config-tenant-13ext-epg)# isolation enforce
```

その後、必要に応じて、コマンドの前に `no` を付けて EPG 内分離を無効にできます。

例：

```
(config-tenant-13ext-epg)# no isolation enforce
```

ステップ 6 エンドポイント間の目的のトラフィックを許可する契約を内部 EPG に割り当てます。

例：

```
apic1(config-tenant-13ext-epg)# contract intra-epg contr-intra
```

REST API を使用したアプリケーション EPG への EPG 内契約の追加

コントラクトを設定した後、EPG内コントラクトとして EPG にコントラクトを追加できます。この手順は、VMware VDS、OVS、およびベアメタル サーバと同じです。

始める前に

- EPG が設定済みである必要があります。
- フィルタが設定されたコントラクトが必要です。

手順

ステップ 1 次の例のような XML POST 要求を使用してセクタを設定します。

例 :

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<polUni>
  <infraInfra>
    <infraAccPortP name="Ports-1-12" status="deleted"/>

    <!-- VMM VLAN range -->
    <fvnsVlanInstP name="test" allocMode="dynamic">
      <fvnsEncapBlk name="encap" from="vlan-10" to="vlan-100"/>
    </fvnsVlanInstP>

    <!-- Static VLAN range -->
    <fvnsVlanInstP name="test" allocMode="static">
      <fvnsEncapBlk name="default" from="vlan-101" to="vlan-4095"/>
    </fvnsVlanInstP>

    <infraAttEntityP name="test">
      <infraRsDomP tDn="uni/phys-test"/>
      <infraRsDomP tDn="uni/l3dom-test"/>
      <infraRsDomP tDn="uni/vmmp-VMware/dom-test"/>
    </infraAttEntityP>

    <!-- Node profile -->
    <infraNodeP name="test">
      <infraLeafS name="test" type="range">
        <infraNodeBlk name="default" from_="101" to_="102"/>
      </infraLeafS>
      <infraRsAccPortP tDn="uni/infra/accportprof-test"/>
    </infraNodeP>

    <!-- Port profile -->
    <infraAccPortP name="test">
      <!-- 12 regular ports -->
      <infraHPortS name="ports1Through12" type="range">
        <infraPortBlk name="default" fromCard="1" toCard="1" fromPort="1" toPort="12"/>
        <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accportgrp-test"/>
      </infraHPortS>

      <!-- 2 ports in PC -->
      <infraHPortS name="portsForPc1" type="range">
        <infraPortBlk name="default" fromCard="1" toCard="1" fromPort="13" toPort="14"/>
      </infraHPortS>
    </infraAccPortP>
  </infraInfra>
</polUni>
```

```

    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accbundle-testPc"/>
  </infraHPortS>

  <!-- 2 ports in PC -->
  <infraHPortS name="portsForPc2" type="range">
    <infraPortBlk name="blk1" fromCard="1" toCard="1" fromPort="15" toPort="16"/>
    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accbundle-pc"/>
  </infraHPortS>

  <!-- 2 ports in PC for FEX -->
  <infraHPortS name="portsForFex" type="range">
    <infraPortBlk name="blk1" fromCard="1" toCard="1" fromPort="17" toPort="18"/>
    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/fexprof-default/fexbundle-test" fexId="111"/>
  </infraHPortS>

  <!-- 2 ports in PC for VPC -->
  <infraHPortS name="portsForVpc" type="range">
    <infraPortBlk name="blk1" fromCard="1" toCard="1" fromPort="19" toPort="20"/>
    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accbundle-testVpc"/>
  </infraHPortS>
</infraAccPortP>

<!-- FEX profile -->
<infraFexP name="default">
  <infraFexBndlGrp name="default"/>

  <!-- 12 FEX ports -->
  <infraHPortS name="ports1Through12" type="range">
    <infraPortBlk name="default" fromCard="1" toCard="1" fromPort="1" toPort="12"/>
    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accpportgrp-test"/>
  </infraHPortS>

  <!-- 3 ports in FEX PC -->
  <infraHPortS name="portsForPc" type="range">
    <infraPortBlk name="blk1" fromCard="1" toCard="1" fromPort="13" toPort="16"/>
    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accbundle-testPcOnFex"/>
  </infraHPortS>

  <!-- 3 ports in FEX VPC -->
  <infraHPortS name="portsForVpc" type="range">
    <infraPortBlk name="blk1" fromCard="1" toCard="1" fromPort="17" toPort="19"/>
    <infraRsAccBaseGrp tDn="uni/infra/funcprof/accbundle-testVpcOnFex"/>
  </infraHPortS>
</infraFexP>

<!-- Functional profile -->
<infraFuncP>
  <!-- Regular port group -->
  <infraAccPortGrp name="test">
    <infraRsAttEntP tDn="uni/infra/attentp-test"/>
  </infraAccPortGrp>

  <!-- PC -->
  <infraAccBndlGrp name="testPc" lagT="link">
    <infraRsLacpPol tnLacpLagPolName="testPc"/>
    <infraRsAttEntP tDn="uni/infra/attentp-test"/>
  </infraAccBndlGrp>

  <!-- VPC -->
  <infraAccBndlGrp name="testVpc" lagT="node">
    <infraRsLacpPol tnLacpLagPolName="testVpc"/>
    <infraRsAttEntP tDn="uni/infra/attentp-test"/>
  </infraAccBndlGrp>

```

```

<!-- PC on FEX -->
<infraAccBndlGrp name="testPcOnFex" lagT="link">
  <infraRsLacpPol tnLacpLagPolName="testPcOnFex"/>
  <infraRsAttEntP tDn="uni/infra/attentp-test"/>
</infraAccBndlGrp>

<!-- VPC on FEX -->
<infraAccBndlGrp name="testVpcOnFex" lagT="node">
  <infraRsLacpPol tnLacpLagPolName="testVpcOnFex"/>
  <infraRsAttEntP tDn="uni/infra/attentp-test"/>
</infraAccBndlGrp>
</infraFuncP>

<!-- Link aggregation policies -->
<lacpLagPol name="testPc" minLinks='1' maxLinks='10'/>
<lacpLagPol name="testVpc" minLinks='1' maxLinks='10'/>
<lacpLagPol name="testPcOnFex" minLinks='2' maxLinks='5'/>
<lacpLagPol name="testVpcOnFex" minLinks='2' maxLinks='10'/>
</infraInfra>

<fabricInst>
  <fabricProtPol name="testVpc">
    <fabricExplicitGEp name="testVpc" id="101">
      <fabricNodePEp id="101"/>
      <fabricNodePEp id="102"/>
    </fabricExplicitGEp>
  </fabricProtPol>
</fabricInst>

<physDomP name="test">
  <infraRsVlanNs tDn="uni/infra/vlanns-test-static"/>
</physDomP>

<l3extDomP name="test">
  <infraRsVlanNs tDn="uni/infra/vlanns-test-static"/>
</l3extDomP>
</polUni>

```

ステップ 2 次の例のような XML POST 要求を使用してテナントを設定します。

例 :

```

<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<polUni>
  <fvTenant name="Tenant-l3out">
    <vzBrCP intent="install" name="contr-intra" scope="context">
      <vzSubj consMatchT="AtleastOne" name="subj" revFltPorts="yes">
        <vzRsSubjFiltAtt action="permit" priorityOverride="default"
          tnVzFilterName="flt-ssh" />
      </vzSubj>
    </vzBrCP>
    <vzBrCP intent="install" name="contr2" scope="context">
      <vzSubj consMatchT="AtleastOne" name="contr2-subj" revFltPorts="yes">
        <vzRsSubjFiltAtt action="permit" priorityOverride="default"
          tnVzFilterName="flt-ftp" />
      </vzSubj>
    </vzBrCP>
    <vzBrCP intent="install" name="contr1" scope="context">
      <vzSubj consMatchT="AtleastOne" name="subj-http" revFltPorts="yes">
        <vzRsSubjFiltAtt action="deny" priorityOverride="default"
          tnVzFilterName="flt-http" />
      </vzSubj>
    </vzBrCP>
    <l3extOut enforceRtctrl="export" mplsEnabled="no" name="l3out1">

```

```

<l3extRsL3DomAtt tDn="uni/l3dom-test" />
<l3extRsEctx tnFvCtxName="vrf1" />
<l3extLNodeP name="l3out1_nodeProfile" tag="yellow-green">
  <l3extRsNodeL3OutAtt rtrId="172.16.0.1" rtrIdLoopBack="yes"
    tDn="topology/pod-1/node-101" />
  <l3extLIIfP name="l3out1_interfaceProfile" tag="yellow-green">
    <l3extRsPathL3OutAtt addr="192.168.15.1/24" autostate="disabled"
      encap="unknown" encapScope="local" ifInstT="l3-port" ipv6Dad="enabled"
      isMultiPodDirect="no" llAddr="::" mac="00:22:BD:F8:19:FF"
      mode="regular" mtu="inherit"
      tDn="topology/pod-1/paths-101/pathep-[eth1/10]" />
  </l3extLIIfP>
</l3extLNodeP>

<!--
  Set pcEnfPref to "enforced" to enable intra-Ext-EPG isolation.
  Set pcEnfPref to "unenforced" to disable intra-Ext-EPG isolation.
-->
<l3extInstP floodOnEncap="disabled" matchT="AtleastOne"
  name="l3epg1" pcEnfPref="unenforced" prefGrMemb="exclude">
  <l3extSubnet ip="172.16.0.0/16" scope="import-security" />
  <fvRsCons tnVzBrCPName="contr2" />
  <fvRsIntraEpg tnVzBrCPName="contr-intra" />
</l3extInstP>
</l3extOut>
<fvCtx bdEnforcedEnable="no" ipDataPlaneLearning="enabled" knwMcastAct="permit"
  name="vrf1" pcEnfDir="egress" pcEnfPref="unenforced" vrfIndex="0">
  <fvRsVrfValidationPol />
  <vzAny matchT="AtleastOne" prefGrMemb="disabled" />
</fvCtx>
<fvBD OptimizeWanBandwidth="no" arpFlood="yes" epClear="no" hostBasedRouting="no"
  intersiteBumTrafficAllow="no" intersiteL2Stretch="no" ipLearning="yes"
  ipv6McastAllow="no" limitIpLearnToSubnets="yes" llAddr="::"
  mac="00:22:BD:F8:19:FF" mcastAllow="no" multiDstPktAct="bd-flood" name="bd-web"
  type="regular" unicastRoute="yes" unkMacUcastAct="proxy" unkMcastAct="flood"
  v6unkMcastAct="flood" vmac="not-applicable">
  <fvSubnet ip="192.168.1.254/24" ipDPLearning="enabled" preferred="no"
    scope="private" virtual="no" />
  <fvRsCtx tnFvCtxName="vrf1" />
  <fvRsBdToEpRet resolveAct="resolve" />
</fvBD>
<fvBD OptimizeWanBandwidth="no" arpFlood="yes" epClear="no" hostBasedRouting="no"
  intersiteBumTrafficAllow="no" intersiteL2Stretch="no" ipLearning="yes"
  ipv6McastAllow="no" limitIpLearnToSubnets="yes" llAddr="::"
  mac="00:22:BD:F8:19:FF" mcastAllow="no" multiDstPktAct="bd-flood" name="bd-app"
  type="regular" unicastRoute="yes" unkMacUcastAct="proxy" unkMcastAct="flood"
  v6unkMcastAct="flood" vmac="not-applicable">
  <fvSubnet ip="192.168.2.254/24" ipDPLearning="enabled" preferred="no"
    scope="private" virtual="no" />
  <fvRsCtx tnFvCtxName="vrf1" />
  <fvRsBdToEpRet resolveAct="resolve" />
</fvBD>
<vzFilter name="flt-ftp">
  <vzEntry applyToFrag="no" arpOpc="unspecified" dFromPort="ftpData"
    dToPort="ftpData" etherT="ipv4" icmpv4T="unspecified" icmpv6T="unspecified"
    matchDscp="unspecified" name="ftp" prot="tcp" sFromPort="unspecified"
    sToPort="unspecified" stateful="no" />
</vzFilter>
<vzFilter name="flt-ssh">
  <vzEntry applyToFrag="no" arpOpc="unspecified" dFromPort="ssh" dToPort="ssh"
    etherT="ipv4" icmpv4T="unspecified" icmpv6T="unspecified"
    matchDscp="unspecified" name="ssh" prot="tcp" sFromPort="unspecified"
    sToPort="unspecified" stateful="no" />
</vzFilter>

```

```

<vzFilter name="flt-http">
  <vzEntry applyToFrag="no" arpOpc="unspecified" dFromPort="http" dToPort="http"
    etherT="ipv4" icmpv4T="unspecified" icmpv6T="unspecified"
    matchDscp="unspecified" name="flt1" prot="tcp" sFromPort="unspecified"
    sToPort="unspecified" stateful="no" />
</vzFilter>
<fvAp name="ap-app1">
  <fvAEPg floodOnEncap="disabled" hasMcastSource="no" isAttrBasedEPg="no"
    matchT="AtleastOne" name="epg-app" pcEnfPref="unenforced"
    prefGrMemb="exclude" shutdown="no">
    <fvRsProv intent="install" matchT="AtleastOne" tnVzBrCPName="contr2" />
    <fvRsProv intent="install" matchT="AtleastOne" tnVzBrCPName="contr1" />
    <fvRsPathAtt encap="vlan-103" instrImedcy="immediate" mode="native"
      primaryEncap="unknown" tDn="topology/pod-1/paths-101/pathep-[eth1/3]" />
    <fvRsDomAtt bindingType="none" classPref="encap" encap="unknown"
      encapMode="auto" epgCos="Cos0" epgCosPref="disabled" instrImedcy="lazy"
      netflowDir="both" netflowPref="disabled" numPorts="0" portAllocation="none"

      primaryEncap="unknown" primaryEncapInner="unknown" resImedcy="immediate"
      secondaryEncapInner="unknown" switchingMode="native" tDn="uni/phys-test"
      untagged="no" vnetOnly="no" />
    <fvRsBd tnFvBDName="bd-app" />
  </fvAEPg>
  <fvAEPg floodOnEncap="disabled" hasMcastSource="no"
    isAttrBasedEPg="no" matchT="AtleastOne" name="epg-web" pcEnfPref="unenforced"

    prefGrMemb="exclude" shutdown="no">
    <fvRsPathAtt encap="vlan-104" instrImedcy="immediate" mode="native"
      primaryEncap="unknown" tDn="topology/pod-1/paths-101/pathep-[eth1/4]" />
    <fvRsDomAtt bindingType="none" classPref="encap" encap="unknown"
      encapMode="auto" epgCos="Cos0" epgCosPref="disabled" instrImedcy="lazy"
      netflowDir="both" netflowPref="disabled" numPorts="0" portAllocation="none"

      primaryEncap="unknown" primaryEncapInner="unknown" resImedcy="immediate"
      secondaryEncapInner="unknown" switchingMode="native" tDn="uni/phys-test"
      untagged="no" vnetOnly="no" />
    <fvRsCons intent="install" tnVzBrCPName="contr1" />
    <fvRsBd tnFvBDName="bd-web" />
  </fvAEPg>
</fvAp>
</fvTenant>
</polUni>

```

EPG のコントラクト継承

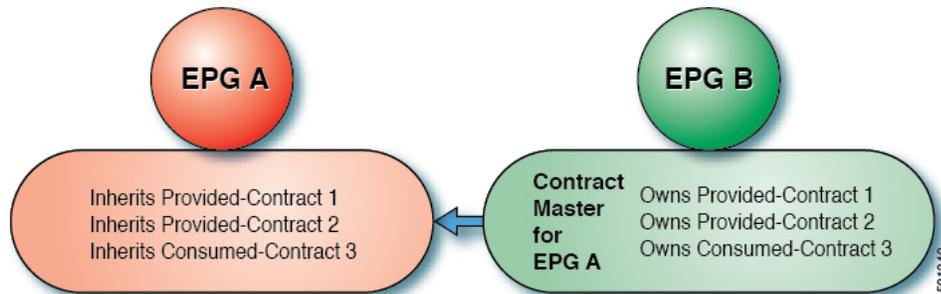
コントラクト継承について

関連する契約を新しい EPG に統合するため、EPG を有効にして同じテナントの別の EPG に直接関連する契約すべて（提供済み/消費済み）を継承できます。コントラクトの継承は、アプリケーション EPG、マイクロセグメント EPG、L2Out EPG、および L3Out EPG に設定できます。

リリース 3.x では、EPG 間の提供済み/消費済みの両方の契約に、契約を継承する設定も可能です。EPG 間契約が、モデル名や後発のモデルの最後に EX または EX が付く、Cisco Nexus 9000 シリーズ スイッチでサポートされています。

EPG を有効にし、APIC GUI、NX-OS スタイル CLI、REST API を使用して、別の EPG に直接関連する契約すべてを継承できます。

図 10: コントラクトの継承



上の図で、EPG A は EPG B から（EPG A の契約マスター）提供済みの契約 1 および 2、消費済みの契約 3 を継承するように設定されています。

コントラクト継承を設定する際は、次のガイドラインに従ってください。

- コントラクト継承は、アプリケーション EPG、マイクロセグメント（uSeg） EPG、外部 L2Out EPG、および外部 L3Out EPG 用に設定できます。コントラクト関係は同じタイプの EPG 間で確立する必要があります。
- 関係が確立されると、提供するコントラクトと消費するコントラクトの両方がコントラクトマスターから継承されます。
- コントラクトマスターとコントラクトを継承する EPG は同じテナント内にある必要があります。
- マスター契約への変更は、すべての継承に伝播されます。新しい契約がマスターに追加される場合、継承先にも追加されます。
- EPG は、複数のコントラクトマスターからコントラクトを継承することができます。
- コントラクト継承は単一のレベルでのみサポートされ（連結できない）、コントラクトマスターがコントラクトを継承することはできません。
- コントラクト継承のラベルがサポートされます。EPG A が EPG B からコントラクトを継承するとき、EPG A と EPG B で異なるサブジェクトラベルが設定されている場合、APIC は EPG B から継承されたコントラクトの EPG B で設定されたラベルを使用します。APIC は EPG A が直接関与するコントラクトに対し、EPG A の下で設定されたラベルを使用します。
- EPG が契約に直接関連付けられている、または契約を継承しているかどうかに関わらず、TCAM 内のエントリが消費されます。したがって契約スケールガイドラインが引き続き

適用されます。詳細については、お使いのリリースの「検証されたスケーラビリティガイド」を参照してください。

- vzAny セキュリティ コントラクトとタブー コントラクトはサポートされません。
- Cisco APIC リリース 5.0(1) および 4.2(6) 以降、コントラクトと EPG が同じテナントにある場合、サービス グラフによるコントラクトの継承がサポートされます。

契約の継承設定および継承済みおよびスタンドアロン契約を表示することに関する詳細は、「Cisco APIC の基本設定ガイドを参照してください。

GUI を使用した EPG のコントラクト継承の設定

GUI を使用したアプリケーション EPG のコントラクト継承の設定

アプリケーション EPG のコントラクト継承を設定するには、APIC の基本または拡張モード GUI で次の手順を使用します。

始める前に

EPG が使用するテナントとアプリケーション プロファイルを設定します。

オプション。コントラクトを継承する EPG が使用するブリッジ ドメインを設定します。

EPG コントラクト マスターとして機能するように、少なくとも 1 つのアプリケーション EPG を設定します。

共有するコントラクトを設定し、コントラクト マスターに関連付けます。

手順

- ステップ 1** [Tenants] > [tenant-name] > [Application Profiles] に移動して、[AP-name] を展開します。
- ステップ 2** [Application EPGs] を右クリックし、[Create Application EPG] を選択します。
- ステップ 3** **EPG コントラクト マスター**からコントラクトを継承する EPG の名前を入力します。
- ステップ 4** [Bridge Domain] フィールドで、共通/デフォルトのブリッジ ドメインまたは以前に作成したブリッジ ドメインを選択するか、この EPG のブリッジ ドメインを作成します。
- ステップ 5** [EPG Contract Master] フィールドで、+ 記号をクリックして事前に設定したアプリケーション プロファイルと EPG を選択し、[Update] をクリックします。
- ステップ 6** [Finish] をクリックします。
- ステップ 7** EPG に関する情報（コントラクト マスターなど）を表示するには、[Tenants] > [tenant-name] > [Application Profiles] > [AP-name] > [Application EPGs] > [EPG-name] に移動します。EPG コントラクト マスターを表示するには、[General] をクリックします。

- ステップ 8 継承されるコントラクトに関する情報を表示するには、[EPG-name] を展開して [Contracts] をクリックします。

GUI を使用した uSeg EPG のコントラクト継承の設定

uSeg EPG のコントラクト継承を設定するには、APIC の基本または拡張モード GUI で次の手順を使用します。

始める前に

EPG が使用するテナントとアプリケーションプロファイルを設定します。

オプション。コントラクトを継承する EPG が使用するブリッジドメインを設定します。

EPG コントラクト マスターとして機能するように uSeg EPG を設定します。

共有するコントラクトを設定し、コントラクトマスターに関連付けます。

手順

- ステップ 1 [Tenants] > [tenant-name] > [Application Profiles] に移動して、[AP-name] を展開します。
- ステップ 2 [uSeg EPGs] を右クリックし、[Create uSeg EPG] を選択します。
- ステップ 3 コントラクト マスターからコントラクトを継承する EPG の名前を入力します。
- ステップ 4 [Bridge Domain] フィールドで、共通/デフォルトのブリッジドメインまたは以前に作成したブリッジドメインを選択するか、この EPG のブリッジドメインを作成します。
- ステップ 5 [uSeg-EPG-name] をクリックします。[EPG Contract Master] フィールドで、+記号をクリックしてアプリケーションプロファイルと EPG（コントラクトマスターとして機能する）を選択し、[Update] をクリックします。
- ステップ 6 [Finish] をクリックします。
- ステップ 7 契約に関する情報を表示するには、[Tenants] > テナント名 > [Application Profiles] > AP 名 > [uSeg EPGs] > に移動し、EPG 名を展開して [Contracts] をクリックします。

GUI を使用した L2Out EPG のコントラクト継承の設定

外部 L2Out EPG のコントラクト継承を設定するには、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI で次の手順を実行します。

始める前に

EPG が使用するテナントとアプリケーションプロファイルを設定します。

Layer 2 Outside (L2Out) と、**L2Out Contract Master** として機能する外部 L2Out EPG (L2extInstP) を設定します。

共有するコントラクトを設定し、コントラクト マスターに関連付けます。

手順

- ステップ 1 [テナント (Tenants)] > [tenant_name] > [ネットワーキング (Networking)] > [L2Outs] に移動します。
- ステップ 2 [L2Out-name] を展開します。
- ステップ 3 [外部 EPG (External EPGs)] を右クリックし、[外部 EPG の作成 (Create External EPG)] を選択します。
- ステップ 4 外部ネットワークの名前を入力し、必要に応じてその他の属性を追加します。
- ステップ 5 **Submit** をクリックします。
- ステップ 6 外部 EPG (External EPGs)] を展開します。
- ステップ 7 *external-epg-name* をクリックします。
- ステップ 8 [外部 EPG (External EPG)] パネルで、[L2Out コントラクト マスター (L2Out Contract Masters)] フィールドの [+] 記号をクリックします。
- ステップ 9 この外部 L2Out EPG の L2Out および L2Out コントラクト マスターを選択します。
- ステップ 10 [更新 (Update)] をクリックします。
- ステップ 11 この外部 L2Out EPG によって継承されたコントラクトを表示するには、外部 EPG 名をクリックし、[コントラクト (Contracts)] > [継承コントラクト (Inherited Contracts)] をクリックします。

GUI を使用して外部 L3Out EPG コントラクト継承

外部 L3Out EPG のコントラクト継承を設定するには、Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) GUI で次の手順を使用します。

始める前に

EPG が使用するテナントとアプリケーションプロファイルを設定します。

外部ルーテッドネットワーク (L3Out) と、**L3Out コントラクト マスター**として機能する外部 L3Out EPG (L3extInstP) を設定します。

共有するコントラクトを設定し、コントラクト マスターに関連付けます。

手順

- ステップ 1 外部 L3Out EPG のコントラクト継承を設定するには、[テナント (Tenants)] > [tenant-name] > [ネットワーキング (Networking)] > [L3Outs] に移動します。
- ステップ 2 外部 L3Out EPG につながる [L3Out-name] を展開します。

- ステップ 3 [外部 EPG (External EPGs)] を右クリックし、[外部 EPG の作成 (Create External EPG)] を選択します。
- ステップ 4 外部 EPG の名前を入力し、オプションでサブネットおよびその他の属性を追加します。
- ステップ 5 **Submit** をクリックします。
- ステップ 6 [Networks] を展開します。
- ステップ 7 [network-name] をクリックします。
- ステップ 8 [外部 EPG (External EPG)] パネルで、[L3Out コントラクト マスター (L3Out Contract Masters)] フィールドの [+] 記号をクリックします。
- ステップ 9 この外部 L3Out EPG の L3Out コントラクト マスターとして機能する L3Out および外部 EPG を選択します。
- ステップ 10 [更新 (Update)] をクリックします。
- ステップ 11 この外部 L3Out EPG によって継承されたコントラクトを表示するには、外部 EPG 名をクリックし、[コントラクト (Contracts)] > [継承コントラクト (Inherited Contracts)] をクリックします。

優先グループ契約

契約優先グループについて

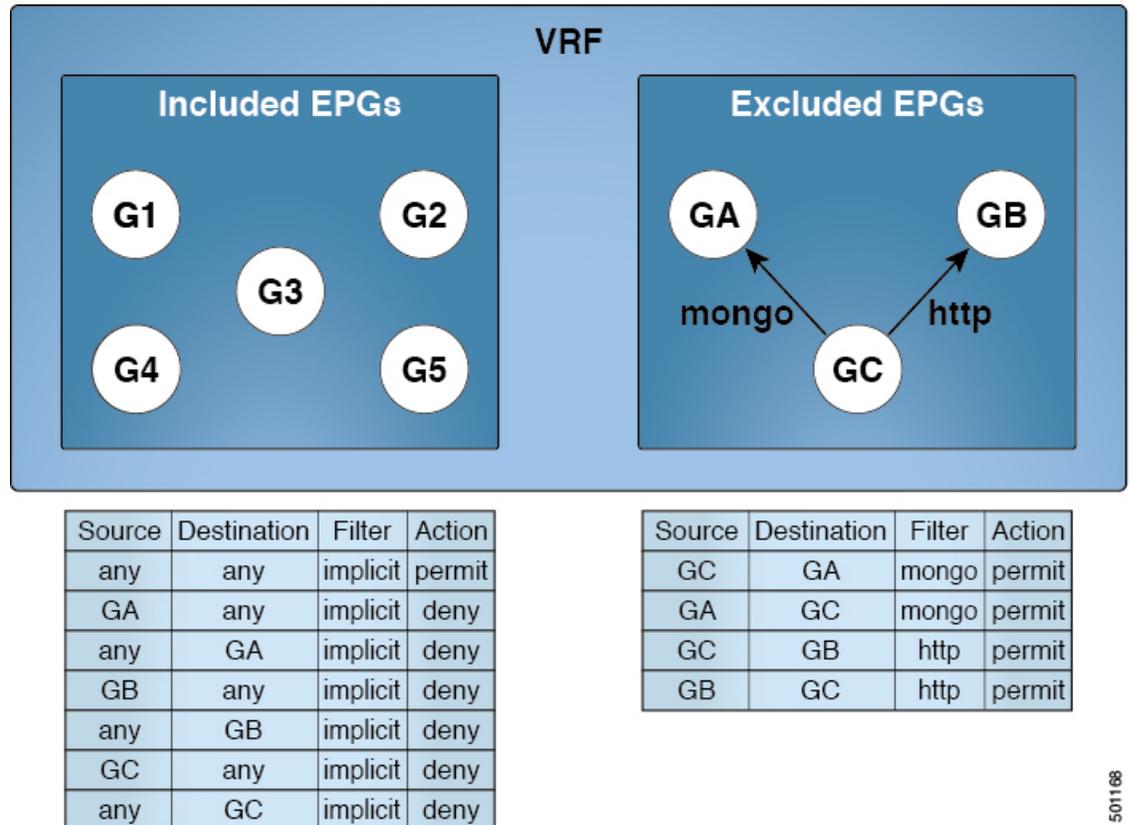
契約優先グループが設定されている VRF で、EPG に利用可能なポリシー適用には 2 種類あります。

- EPG を含む：EPG が契約優先グループのメンバーシップを持っている場合、EPG は契約をせずにお互いに自由に通信できます。これは、source-any-destination-any-permit デフォルトルールに基づくものです。
- EPG を除外：優先グループのメンバーではない EPG は、相互に通信するために契約が必要です。そうしない場合、デフォルトの source-any-destination-any-deny ルールが適用されます。

契約優先グループ機能では、VRF で EPG 間のより高度な通信の制御が可能です。VRF の EPG のほとんどはオープン通信ですが、一部には他の EPG との制限がある場合、契約優先グループとフィルタ付きの契約の組み合わせを設定し、EPG 内の通信を正確に制御できます。

優先グループから除外されている EPG は、source-any-destination-any-deny デフォルトルールを上書きする契約がある場合にのみ、他 EPG と通信できます。

図 11: 契約優先グループの概要



Source	Destination	Filter	Action
any	any	implicit	permit
GA	any	implicit	deny
any	GA	implicit	deny
GB	any	implicit	deny
any	GB	implicit	deny
GC	any	implicit	deny
any	GC	implicit	deny

Source	Destination	Filter	Action
GC	GA	mongo	permit
GA	GC	mongo	permit
GC	GB	http	permit
GB	GC	http	permit

501168

サービス グラフ サポート

APIC リリース 4.0(1) 以降では、サービス グラフによって作成された EPG を優先契約グループに含めることができます。優先グループ メンバーシップのタイプ (include または exclude) を定義する新しいポリシー (サービス EPG ポリシー) が使用可能です。設定後は、デバイス選択ポリシーまたはサービス グラフ テンプレートのアプリケーションを通じて適用できます。

また、シャドウ EPG を優先グループに含めるか、優先グループから除外するかも設定できるようになりました。

制限事項

以下の制限が契約優先グループに適用されます。

- L3Out およびアプリケーション EPG が契約優先グループで設定されており、EPG が VPC でのみ展開されているトポロジで、VPC の 1 つのリーフ スイッチのみに L3Out のプレフィックス エントリがあることがわかります。この場合、VPC の他のリーフ スイッチにはエントリがなく、そのためトラフィックをドロップします。

この問題を回避するには、次のいずれかを行います。

- VRF の契約グループを無効および再度有効にします。

- L3Out EPG のプレフィックス エントリを削除し再度作成します。
- また、サービス グラフ契約のプロバイダまたはコンシューマ EPG が契約グループに含まれる場合、シャドウ EPG は契約グループから除外できません。シャドウ EPG は契約グループで許可されますが、シャドウ EPG が展開されているノードで契約グループポリシーの展開をトリガしません。ノードに契約グループポリシーをダウンロードするには、契約グループ内にダミー EPG を展開します。
- CSCvm63145 により、コントラクト優先グループの EPG は共有サービス コントラクトを使用できますが、L3Out EPG をコンシューマとして使用する共有サービス コントラクトのプロバイダになることはできません。

契約優先グループの注意事項

契約優先グループを設定する際には、次の注意事項を参照してください:

- (s, g) エントリが境界リーフスイッチにインストールされている場合、次の条件を満たすと、ファブリックからファブリック外部の送信元に送られたユニキャストトラフィックでドロップが生じることがあります。
 - 優先グループが L3Out EPG で使用されている
 - 送信元のユニキャスト ルーティング テーブルでデフォルト ルート 0.0.0.0/0 が使用されている

これは予想された動作です。

- 契約優先グループに含まれる EPG は、外部 EPG (InstP) の 0/0 プレフィックスではサポートされていません。外部 EPG (InstP) からテナント EPG に対し、契約優先グループで使用するために 0/0 プレフィックスが必要な場合には、0/0 を 0/1 と 128/1 に分割することができます。
- 契約優先グループ EPG は、GOLF 機能ではサポートされていません。アプリケーション EPG と GOLF の L3Out EPG との間の通信は、明示的な契約によって制御する必要があります。

GUI を使用した契約優先グループの設定

始める前に

テナントと VRF、および契約優先グループを使用する EPG を作成します。

手順

ステップ 1 メニュー バーで、[Tenants] > テナント名をクリックします。

- ステップ2 [Navigation] ペインで、テナント、[Networking]、[VRFs]の順に展開します。
- ステップ3 コントラクト優先グループを設定するVRF名をクリックします。
- ステップ4 **Preferred Group Member** フィールドで、**Enabled** をクリックします。
- ステップ5 **Submit** をクリックします。
- ステップ6 **Navigation** ウィンドウで、**Application Profiles** を展開し、テナントVRFのアプリケーションプロファイルを作成するか、展開します。
- ステップ7 **Application EPGs** を展開し、契約優先グループを使用するEPGをクリックします。
- ステップ8 [Policy] および [General] タブを選択します。
- ステップ9 **Preferred Group Member** フィールドで、**Include** をクリックします。
- ステップ10 **Submit** をクリックします。

次のタスク

このEPGと無制限の通信を行う、他のEPGの優先グループのメンバーシップを有効にします。また、優先グループのEPGとメンバーではないかもしれない他のEPGの間の通信を制御する、適切な契約を設定することもできます。



- (注) L4-L7サービスグラフを介して優先グループメンバーをサポートする場合は、L4-L7サービスEPGポリシーを作成する必要があります。L4-L7サービスEPGポリシーの作成に関する詳細については、[GUIを使用したL4-L7サービスEPGポリシーの作成 \(287ページ\)](#) を参照してください。

GUIを使用したL4-L7サービスEPGポリシーの作成

このタスクでは、EPGを優先グループに含めるか、優先グループから除外するかを定義するポリシーを作成します。優先グループメンバーシップにより、エンドポイントは契約がなくても相互に通信できます。作成したポリシーは、EPGにサービスグラフテンプレートを適用するときに選択できます。

始める前に

テナントを作成しておく必要があります。

手順

- ステップ1 メニューバーで、[Tenant] > テナント名を選択します。
- ステップ2 [Navigation] ペインで、[Policies] > [Protocol] > [L4-L7 Service EPG Policy] を選択します。
- ステップ3 [Navigation] ペインで、[L4-L7 Service EPG Policy] を右クリックして [Create L4-L7 Service EPG Policy] を選択します。

[Create L4-L7 Service EPG Policy] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 4 [Name] フィールドにポリシーの一意の名前を入力します。

ステップ 5 オプション。[Description] フィールドにポリシーの説明を入力します。

ステップ 6 [Preferred Group Member] フィールドで、EPG を除外するか優先メンバーとして含めるかを選択します。

ステップ 7 [Submit] をクリックします。

新しく作成したポリシーが [L4-L7 Service EPG Policy] 作業ウィンドウリストに表示されます。作業ウィンドウでポリシーを編集するには、ポリシーを含む行をダブルクリックします。

次のタスク

サービスグラフを EPG に適用するときに、サービスグラフテンプレートで新しい L4-L7 サービス EPG ポリシーを選択できるようになりました。『Cisco APIC Layer 4 to Layer 7 Services Deployment Guide』の「Using the GUI」の章で「Applying a Service Graph Template to Endpoint Groups Using the GUI」を参照してください。

許可ルールと拒否ルールを含む契約

許可ルールおよび拒否ルールを含む契約の概要

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (Cisco APIC) リリース 3.2 以降では、許可だけではなく、許可と拒否の両方のアクションを含む契約を設定できます。さまざまな優先順位（デフォルト、高、中、低）の拒否アクションを設定できます。

ルールの競合は次のように解決されます。

- 暗黙の否定には、すべてのルールの中で最も低い優先順位が割り当てられます。
- VzAny 間の契約には暗黙の拒否より高い優先順位が割り当てられます。
- EPG 間の契約のルールは vzAny 間のルールより優先順位が高いため、特定の EPG ペア間の契約は vzAny の契約よりも優先されます。
- 特定の EPG ペア間の契約に含まれるデフォルト優先順位の拒否ルールは、その EPG ペアの許可ルールと優先順位レベルが同じです。同じ優先順位の許可ルールと拒否ルールの両方がトラフィックに一致する場合は、拒否ルールが優先されます。
- vzAny 間の契約に含まれるデフォルト優先順位の拒否ルールは、その vzAny ペアの許可ルールと優先順位レベルが同じです。同じ優先順位の許可ルールと拒否ルールの両方がトラフィックに一致する場合は、拒否ルールが優先されます。
- 優先順位が最も高い拒否ルールは、EPG 間の契約と同じレベルで処理されます。
- 優先順位が中の拒否ルールは、vzAny-EPG 間の契約と同じレベルで処理されます。

- 優先順位が最も低い拒否ルールは、vzAny 間の契約と同じレベルで処理されます。
- EPG 間の契約で拒否の優先順位を下げると、EPG 間の許可ルールの一致が拒否よりも優先されます。

GUI を使用してACL 契約の許可とロギングの拒否を有効にする

次の手順では、GUI を使用してACL 契約の許可とロギングの拒否を有効にする方法を表示します。



- (注) 許可ロギングを含むテナントは、EPG が関連する VRF を含むテナントです。これは必ずしも EPG と同じテナントや関連する契約である必要はありません。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[Tenants] > [<tenant name>] の順に選択します。
- ステップ 2 [Navigation] ペインで、[Contracts] を展開し、[Standard] を右クリックして [Create Contract] を選択します。
- ステップ 3 [Create Contract] ダイアログボックスで、次の作業を実行します。
 - a) [Name] フィールドに、契約の名前を入力します。
 - b) [Scope] フィールドで、そのスコープ ([VRF]、[Tenant]、または [Global]) を選択します
 - c) オプション。契約に適用するターゲット DSCP または QoS クラスを設定します。
 - d) [+] アイコンをクリックして、[Subject] を展開します。
- ステップ 4 [Create Contract Subject] ダイアログボックスで、次の操作を実行します。
- ステップ 5 件名の名前と詳細な説明を入力します。
- ステップ 6 オプション。ターゲット DSCP のドロップダウンリストから、件名に適用する DSCP を選択します。
- ステップ 7 契約を両方向でなくコンシューマからプロバイダの方向にのみ適用するのでない限り、[Apply Both Directions] はオンにしたままにしておきます。
- ステップ 8 [Apply Both Directions] をチェックしてない場合 [Reverse Filter Ports] をチェックしたままにして、ルールがプロバイダから消費者に適用されるようにレイヤ4ソースと宛先ポートを交換します。
- ステップ 9 [+] アイコンをクリックして、[Filters] を展開します。
- ステップ 10 [Name] ドロップダウンリストで、たとえば、**arp**、**default**、**est**、**icmp** などオプションを選択するか、以前設定したフィルタを選択します。
- ステップ 11 [Directives] ドロップダウンリストで、[log] をクリックします。
- ステップ 12 (任意) この件名で実行するアクションを [Deny] に変更します (またはアクションをデフォルトの [Permit] のままにします)。

Directive : ログ有効化により、この件名のアクションが [Permit] になっている場合、ACL は件名と契約により制御されているフローとパケットを追跡します。この件名のアクションが [Deny] の場合、ACL の拒否ログはフローとパケットを追跡します。

- ステップ 13 (任意) 件名の優先順位を設定します。
- ステップ 14 [Update] をクリックします。
- ステップ 15 [OK] をクリックします。
- ステップ 16 [送信 (Submit)] をクリックします。
ロギングがこの契約に対して有効になります。

NX-OS CLI を使用した ACL 契約許可ロギングの有効化

次の例は、NX-OS CLI を使用して契約許可ロギングを有効にする方法を示しています。

手順

- ステップ 1 契約許可ルールにより送信できたパケットまたはフローのロギングを有効にするには、次のコマンドを使用します。

```
configure
tenant <tenantName>
contract <contractName> type <permit>
subject <subject Name>
access-group <access-list> <in/out/both> log
```

例 :

次に例を示します。

```
apic1# configure
apic1(config)# tenant BDMoDel
apic1(config-tenant)# contract Logicmp type permit
apic1(config-tenant-contract)# subject icmp
apic1(config-tenant-contract-subj)# access-group arp both log
```

- ステップ 2 許可ロギングを無効にするには、**no** 形式の **access-group** コマンドを使用します。たとえば、**no access-group arp both log** コマンドを使用します。

REST API を使用した ACL 契約許可ロギングの有効化

次の例は、REST API を使用して許可および拒否ロギングを有効にする方法を示しています。この例では、ACL の許可を設定し、件名 Permit 設定し、設定されたアクションを拒否するには、契約のロギングを拒否します。

手順

この設定では、次の例のように XML で post を送信します。

例：

```
<vzBrCP dn="uni/tn-Tenant64/brc-C64" name="C64" scope="context">
  <vzSubj consMatchT="AtleastOne" name="HTTPSsbj" provMatchT="AtleastOne"
  revFltPorts="yes" rn="subj-HTTPSsbj">
    <vzRsSubjFiltAtt action="permit" directives="log" forceResolve="yes"
  priorityOverride="default"
  rn="rbsubjFiltAtt-PerHTTPS" tDn="uni/tn-Tenant64/flt-PerHTTPS" tRn="flt-PerHTTPS"
  tnVzFilterName="PerHTTPS"/>
  </vzSubj>
  <vzSubj consMatchT="AtleastOne" name="httpSbj" provMatchT="AtleastOne"
  revFltPorts="yes" rn="subj-httpSbj">
    <vzRsSubjFiltAtt action="deny" directives="log" forceResolve="yes"
  priorityOverride="default"
  rn="rbsubjFiltAtt-httpFilter" tDn="uni/tn-Tenant64/flt-httpFilter" tRn="flt-httpFilter"
  tnVzFilterName="httpFilter"/>
  </vzSubj>
  <vzSubj consMatchT="AtleastOne" name="subj64" provMatchT="AtleastOne" revFltPorts="yes"
  rn="subj-subj64">
    <vzRsSubjFiltAtt action="permit" directives="log" forceResolve="yes"
  priorityOverride="default"
  rn="rbsubjFiltAtt-icmp" tDn="uni/tn-common/flt-icmp" tRn="flt-icmp" tnVzFilterName="icmp"/>
  </vzSubj>
</vzBrCP>
```

GUI を使用した禁止契約拒否ロギングの有効化

次の手順は、GUI を使用して禁止コントラクトの拒否ロギングを有効にする方法を示しています。

手順

- ステップ 1 メニュー バーで、[Tenants] > [<tenant name>] の順に選択します。
- ステップ 2 [Navigation] ペインで、[Contracts] を展開します。
- ステップ 3 [Taboos] を右クリックし、[Create Taboo Contract] を選択します。
- ステップ 4 [Create Taboo Contract] ダイアログ ボックスで、次の操作を実行して禁止契約を指定します。
 - a) [Name] フィールドに、契約の名前を入力します。
 - b) オプション。[Description] フィールドに、禁止契約の説明を入力します。
 - c) [+] アイコンをクリックして、[Subject] を展開します。
- ステップ 5 [Create Taboo Contract Subject] ダイアログ ボックスで、次の操作を実行します。
 - a) [Specify Identity of Subject] 領域に、名前と説明（オプション）を入力します。

- b) [+] アイコンをクリックして、[Filters] を展開します。
- c) [Name] ドロップダウンリストから、<tenant_name>/arp、<tenant_name>/default、<tenant_name>/est、<tenant_name>/icmp などのデフォルト値のいずれかを選択し、以前作成したフィルタか [Create Filter] を選択します。

(注)

[Specify Filter Identity] 領域で [Create Filter] を選択した場合、次の操作を実行して、ACL 拒否ルールの基準を指定します。

1. 名前とオプションの説明を入力します。
2. [Entries] を展開し、ルールの名前を入力して、拒否するトラフィックを定義する条件を選択します。
3. [Directives] ドロップダウンリストで [log] を選択します。
4. [Update] をクリックします。
5. [OK] をクリックします。

ステップ 6 [送信 (Submit)] をクリックします。
ロギングがこの禁止契約に対して有効になります。

NX-OS CLI を使用した禁止契約拒否ロギングの有効化

次の例は、NX-OS CLI を使用して禁止契約拒否ロギングを有効にする方法を示しています。

手順

ステップ 1 禁止契約拒否ルールのためにドロップされたパケットまたはフローのロギングを有効にするには、次のコマンドを使用します。

```
configure
tenant <tenantName>
contract <contractName> type <deny>
subject <subject Name>
access-group <access-list> <both> log
```

例：

次に例を示します。

```
apic1# configure
apic1(config)# tenant BDMoel
apic1(config-tenant)# contract dropFTP type deny
apic1(config-tenant-contract)# subject dropftp
apic1(config-tenant-contract-subj)# access-group ftp both log
```

ステップ 2 拒否ログを無効にするには、**no** 形式の **access-group** コマンドを使用します。たとえば、**no access-group https both log** コマンドを使用します。

REST API を使用した禁止契約拒否ログの有効化

次の例は、REST API を使用して禁止契約拒否ログを有効にする方法を示しています。

手順

タブ契約を設定するログを拒否する、次の例のように XML で post を送信します。

例：

```
<vzTaboo dn="uni/tn-Tenant64/taboo-TCtrctPrefix" name="TCtrctPrefix" scope="context">
  <vzTSubj name="PrefSubj" rn="tsubj-PrefSubj">
    <vzRsDenyRule directives="log" forceResolve="yes" rn="rsdenyRule-default"
    tCl="vzFilter"
    tDn="uni/tn-common/flt-default" tRn="flt-default"/>
  </vzTSubj>
</vzTaboo>
```

GUI を使用した ACL 許可および拒否ログの表示

次の手順は、GUI を使用して、トラフィック フローの ACL 許可および拒否ログを（有効になっていれば）表示する方法を示しています。

手順

ステップ 1 メニューバーで、**[Tenants] > [<tenant name>]** の順に選択します。

ステップ 2 **[Navigation]** ペインで、**[Tenant <tenant name>]** をクリックします。

ステップ 3 **Tenants <tenant name> [Work]** ペインで、**[Operational]** タブをクリックします。

ステップ 4 **[Operational]** タブの下で、**[Flows]** タブをクリックします。

[Flows] タブの下で、いずれかのタブをクリックして、レイヤ 2 許可ログ (**[L2 Permit]**)、レイヤ 3 許可ログ (**[L3 Permit]**)、レイヤ 2 拒否ログ (**[L2 Drop]**)、またはレイヤ 3 拒否ログ (**[L3 Drop]**) のログデータを表示します。各タブで、トラフィックがフローしていれば、ACL ログデータを表示できます。データポイントは、ログタイプと ACL ルールに応じて異なります。たとえば、**[L3 Permit]** ログおよび **[L3 Deny]** ログには次のデータポイントが含まれます。

- VRF
- Alias
- 送信元 IP アドレス

- 宛先 IP アドレス
- プロトコル
- 送信元ポート
- 宛先ポート
- 送信元 MAC アドレス
- 宛先 MAC アドレス
- Node
- 送信元インターフェイス
- VRF Encap
- 送信元 EPG
- 宛先 EPG
- 送信元 PC タグ
- 宛先 PC タグ

(注)

また、[Flows] タブの横の [Packets] タブを使用して、シグニチャ、送信元、および宛先が同じであるパケットのグループ（最大 10 個）の ACL ログにアクセスできます。送信されたりドロップされたりするパケットのタイプを確認できます。

REST API を使用した ACL 許可および拒否ログ

次の例は、REST API を使用して、トラフィック フローのレイヤ 2 拒否ログ データを表示する方法を示しています。次の MO を使用してクエリを送信することができます。

- `aclogDropL2Flow`
- `aclogPermitL2Flow`
- `aclogDropL3Flow`
- `aclogPermitL3Flow`
- `aclogDropL2Pkt`
- `aclogPermitL2Pkt`
- `aclogDropL3Pkt`
- `aclogPermitL3Pkt`

始める前に

ACL 契約許可および拒否ログのデータを表示する前に、許可または拒否ロギングを有効にする必要があります。

手順

レイヤ 3 ドロップ ログ データを表示するには、REST API を使用して次のクエリを送信します。

```
GET https://apic-ip-address/api/class/aclogDropL3Flow
```

例：

次の例では、サンプル出力をいくつか示します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<imdata totalCount="2">
  <aclogPermitL3Flow childAction=""
dn="topology/pod-1/node-101/ndbgs/aclog/tn-common/ctx-inb
/permitl3flow-spctag-333-dpctag-444-sepname-unknown-depname-unknown-sip-[100:c000:a00:700:b00:0:f00:0]
-dip-[19.0.2.10]-proto-udp-sport-17459-dport-8721-smac-00:00:15:00:00:28-dmac-00:00:12:00:00:25-sintf-
[port-channel5]-vrfencap-VXLAN: 2097153" dstEpgName="unknown" dstIp="19.0.2.10"
dstMacAddr="00:00:12:00:00:25"
dstPcTag="444" dstPort="8721" lcOwn="local" modTs="never" monPolDn=""
protocol="udp" srcEpgName="unknown"
srcIntf="port-channel5" srcIp="100:c000:a00:700:b00:0:f00:0"
srcMacAddr="00:00:15:00:00:28" srcPcTag="333"
srcPort="17459" status="" vrfEncap="VXLAN: 2097153"/>
  <aclogPermitL3Flow childAction=""
dn="topology/pod-1/node-102/ndbgs/aclog/tn-common/ctx-inb
/permitl3flow-spctag-333-dpctag-444-sepname-unknown-depname-unknown-sip-[100:c000:a00:700:b00:0:f00:0]-dip-
[19.0.2.10]-proto-udp-sport-17459-dport-8721-smac-00:00:15:00:00:28-dmac-00:00:12:00:00:25-sintf-
[port-channel5]-vrfencap-VXLAN: 2097153" dstEpgName="unknown" dstIp="19.0.2.10"
dstMacAddr="00:00:12:00:00:25"
dstPcTag="444" dstPort="8721" lcOwn="local" modTs="never" monPolDn=""
protocol="udp" srcEpgName="unknown"
srcIntf="port-channel5" srcIp="100:c000:a00:700:b00:0:f00:0"
srcMacAddr="00:00:15:00:00:28" srcPcTag="333"
srcPort="17459" status="" vrfEncap="VXLAN: 2097153"/>
</imdata>
```

NX-OS CLI を使用した ACL 許可および拒否ログの表示

次の手順は、NX-OS スタイル CLI `show aclog` コマンドを使用して ACL ログの詳細を表示する方法を示しています。

レイヤ 3 コマンドの構文は、**show acllog {permit | deny} l3 {pkt | flow} tenant <tenant_name> vrf <vrf_name> srcip <source_ip> dstip <destination_ip> srcport <source_port> dstport <destination_port> protocol <protocol> srcintf <source_interface> start-time <startTime> end-time <endTime> detail** です。

レイヤ 2 コマンドの構文は、**show acllog {permit | deny} l2 {flow | pkt} tenant <tenant_name> vrf <VRF_name> srcintf <source_interface> vlan <VLAN_number> detail** です。



- (注) **show acllog** コマンドの完全な構文は、第二世代 Cisco Nexus 9000 シリーズ スイッチ (N9K-C93180LC-EX など名前の最後に EX または FX がつく。もしくはそれ以降のシリーズ) および Cisco APIC リリース 3.2 以降でのみ使用できます。第一世代のスイッチ (名前の最後に EX または FX が付かない) または 3.2 以前の Cisco APIC リリースでは、使用可能な構文は上記の通りです。

Cisco APIC 3.2 以降では、追加のキーワードが **detail keyword:[dstEpgName <destination_EPG_name> | dstmac <destination_MAC_address> | dstpctag <destination_PCTag> | srcEpgName <source_EPG_name> | srcmac <source_MAC_address> | srcpctag <source_PCTag>]** とともにコマンドの両方のバージョンに追加されます。

手順

- ステップ 1** 次の例では、**show acllog drop l3 flow tenant common vrf default detail** コマンドを使用して、共通テナントのレイヤ 3 拒否ログに関する詳細情報を表示する方法を示します。

例：

```
apic1# show acllog deny l3 flow tenant common vrf default detail
SrcPcTag   : 49153
DstPcTag   : 32773
SrcEPG     : uni/tn-TSW_Tenant0/ap-tsw0AP0/epg-tsw0ctx0BD0epg6
DstEPG     : uni/tn-TSW_Tenant0/ap-tsw0AP0/epg-tsw0ctx0BD0epg5
SrcIp      : 16.0.2.10
DstIp      : 19.0.2.10
Protocol   : udp
SrcPort    : 17459
DstPort    : 8721
SrcMAC     : 00:00:15:00:00:28
DstMAC     : 00:00:12:00:00:25
Node       : 101
SrcIntf    : port-channel15
VrfEncap   : VXLAN: 2097153
```

この例では第二世代のスイッチまたは 3.2 以前の Cisco APIC リリースでの出力を示します。

- ステップ 2** 次の例では、**show acllog deny l2 flow tenant common vrf tsw0connctx0 detail** コマンドを使用して、共通テナントのレイヤ 3 拒否ログに関する詳細情報を表示する方法を示します。

例：

```
apic1# show acllog deny l2 flow tenant common vrf tsw0connctx0 detail
SrcPcTag DstPcTag SrcEPG           DstEPG           SrcMAC           DstMAC
Node     SrcIntf   vlan
```

```

-----
-----
32773      49153      uni/tn-TSW      uni/tn-TSW  00:00:11:00:00:11  11:00:32:00:00:33
101      port-      2
          channel8
          _Tenant0/ap-      _Tenant0/ap-
          tsw0AP0/epg-      tsw0AP0/epg-
          tsw0ctx0BD0epg5      tsw0ctx0BD0epg6

```

この例では第二世代のスイッチまたは 3.2 以前の Cisco APIC リリースでの出力を示します。

ステップ 3 次の例では、**show acllog permit l3 pkt tenant <tenant name> vrf <vrf name> [detail]** コマンドを使用して、送信された一般的な VRF ACL レイヤ 3 許可パケットに関する詳細情報を表示する方法を示しています。

```

apic1# show acllog permit l3 pkt tenant common vrf default detail acllog permit l3 packets
detail:
srcIp      : 10.2.0.19
dstIp      : 10.2.0.16
protocol   : udp
srcPort    : 13124
dstPort    : 4386
srcIntf    : port-channel5
vrfEncap   : VXLAN: 2097153
pktLen     : 112
srcMacAddr : 00:00:15:00:00:28
dstMacAddr : 00:00:12:00:00:25
timeStamp  : 2015-03-17T21:31:14.383+00:00

```

この例では第一世代のスイッチまたは 3.2 以前の Cisco APIC リリースでの出力を示します。

ステップ 4 次の例では、**show acllog permit l2 pkt tenant <tenant name> vrf <vrf name> srcintf <s interface>** コマンドを使用して、インターフェイスポートチャンネル 15 から送信されたデフォルトの VRF レイヤ 2 パケットに関する情報を表示する方法を示しています。

```

apic1# show acllog permit l2 pkt tenant common vrf default srcintf port-channel5

acllog permit L2 Packets
  Node      srcIntf      pktLen      timeStamp
-----
          port-channel5      1      2015-03-17T21:
          31:14.383+00:00

```

この例では第一世代のスイッチまたは 3.2 以前の Cisco APIC リリースでの出力を示します。



付録 **A**

CLI を使用している Cisco APIC の設定

- クラスタ管理の注意事項 (299 ページ)
- CLI を使用した、クラスタ内の Cisco APIC の交換 (301 ページ)
- APIC クラスタのサイズ縮小 (302 ページ)
- Cisco APIC クラスタの縮小 (303 ページ)
- CLI を使用してスタンバイ apic 内でアクティブな APIC 経由でスイッチング (304 ページ)
- CLI を使用して Cold Standby ステータスを確認する (304 ページ)
- CLI を使用した未登録スイッチの登録 (305 ページ)
- CLI を使用したディスカバリ前のスイッチの追加 (305 ページ)
- CLI を使用してメンテナンス モードにスイッチを移行する (306 ページ)
- CLI を使用して操作モードにスイッチを挿入する (306 ページ)
- NX-OS スタイルの CLI を使用したリモート ロケーションの設定 (307 ページ)
- NX-OS CLI を使用したスイッチ インベントリの検索 (308 ページ)
- CLI を使用した Cisco APIC クラスタの確認 (310 ページ)

クラスタ管理の注意事項

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) クラスタは複数の Cisco APIC コントローラで構成され、Cisco Application Centric Infrastructure (ACI) ファブリックに対する統合されたリアルタイムモニタリング、診断および構成管理機能がオペレータに提供されます。最適なシステムパフォーマンスが得られるように、Cisco APIC クラスタを変更する場合は次のガイドラインに使用してください：

- クラスタへの変更を開始する前に、必ずその状態を確認してください。クラスタに対して計画した変更を実行するときは、クラスタ内のすべてのコントローラが正常である必要があります。クラスタ内の 1 つ以上の Cisco APIC のヘルス ステータスが「十分に正常」でない場合は、先に進む前にその状況を修復してください。また、Cisco APIC に追加されたクラスタ コントローラが Cisco APIC クラスタ内の他のコントローラと同じファームウェアバージョンを実行しているか確認してください。
- クラスタ内には少なくとも 3 つのアクティブな Cisco APIC があり、追加のスタンバイ Cisco APIC があることを推奨します。Cisco APIC クラスタには、3 ~ 7 個のアクティブな Cisco

APICを含めることができます。展開に必要なアクティブな Cisco APIC の数を確認するには、『[検証済みスケラビリティガイド](#)』を参照してください。

- 現在クラスタにない Cisco APIC からのクラスタ情報は無視します。正確なクラスタ情報ではありません。
- クラスタ スロットには Cisco APIC `ChassisID` を含みます。スロットを設定すると、割り当てられたシャーシ ID の Cisco APIC を解放するまでそのスロットは使用できません。
- Cisco APIC ファームウェア アップグレードが進行中の場合は、それが完了し、クラスタが完全に適合するまでクラスタへの他の変更はしないでください。
- Cisco APIC を移動する際は、最初に正常なクラスタがあることを確認します。Cisco APIC クラスタの状態を確認するには、後にシャットダウンする Cisco APIC を選択します。Cisco APIC をシャットダウンした後、Cisco APIC に移動し、再接続して、電源を入れます。GUI から、クラスタ内のすべてのコントローラが完全に適合状態に戻すことを確認します。



(注) 一度に 1 つの Cisco APIC のみ移動します。

- 一連のリーフ スイッチに接続されている Cisco APIC を別のリーフ スイッチのセットに移動する場合、または Cisco APIC を同じリーフ スイッチ内の別のポートに移動する場合は、まずクラスタが正常であることを確認します。Cisco APIC クラスタの状態を確認したら、移動してクラスタからデコミッションする Cisco APIC を選択します。Cisco APIC がデコミッションされたら、Cisco APIC を移動してコミッションします。
- Cisco APIC クラスタを設定する前に、すべての Cisco APIC のパフォーマンスが同じファームウェアバージョンを実行していることを確認します。異なるバージョンを実行して Cisco APIC のパフォーマンスの最初のクラスタ リングはサポートされていない動作し、クラスタ内の問題が発生する可能性があります。
- 他のオブジェクトとは異なり、ログ レコード オブジェクトは、いずれかの Cisco APIC のデータベースの 1 つのシャードにのみ保存されます。これらのオブジェクトは、使用停止または Cisco APIC 交換すると永久に失われます。
- Cisco APIC をデコミッションすると、Cisco APIC に保存されていたすべての障害、イベント、および監査ログ履歴が失われます。すべての Cisco APIC を交換すると、すべてのログ履歴が失われます。Cisco APIC を移行する前に、ログ履歴を手動でバックアップすることをお勧めします。

CLI を使用した、クラスタ内の Cisco APIC の交換



- (注)
- クラスタの管理の詳細については、「[クラスタ管理の注意事項 \(299 ページ\)](#)」を参照してください。
 - Cisco APIC を交換すると、パスワードは必ずクラスタから同期されます。APIC 1 を交換するときには、パスワードの入力を求められますが、そのパスワードはクラスタ内の既存のパスワードを優先して無視されます。Cisco APIC 2 または 3 を交換するときには、パスワードの入力は求められません。

始める前に

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) を交換する前に、交換用 Cisco APIC が、交換する Cisco APIC と同じファームウェアバージョンを実行していることを確認します。バージョンが同じでない場合は、開始する前に代替 Cisco APIC のファームウェアを更新する必要があります。異なるバージョンを実行して Cisco APIC のパフォーマンスの最初のクラスタリングはサポートされていない動作し、クラスタ内の問題が発生する可能性があります。

手順

ステップ 1 交換する Cisco APIC を特定します。

ステップ 2 `acidiag avread` コマンドを使用して、交換する Cisco APIC の設定の詳細を確認します。

ステップ 3 `decommission controller controller-id` コマンドを使用して Cisco APIC をデコミッションします。

Cisco APIC を解放すると、APIC ID とシャーシ ID のマッピングが削除されます。通常、新しい Cisco APIC には、異なる APIC ID があるので、クラスタに新しい Cisco APIC を追加するにはこのマップを削除する必要があります。

Cisco APIC リリース 6.0 (2) 以降、廃止操作を強制できるようにするために、オプションの引数 (`force`) が `decommission` コマンドに追加されました。改訂されたコマンドは `decommission controller controller-id [force]` で、次のように動作します。

- `force` を宣言しないと、クラスタが異常またはアップグレード状態の場合には廃止が適切でない可能性があるため、それ以外の場合にのみ廃止が続行されます。
- `force` を宣言すると、クラスタの状態に関係なく、廃止が続行されます。

たとえば、`decommission controller 3 force` は、クラスタの状態に関係なく、APIC3 を強制的にデコミッションします。

ステップ 4 新しい Cisco APIC をコミッションする手順は、次のとおりです。

- a) ファブリックから古い Cisco APIC を切断します。

- b) ファブリックに交換 Cisco APIC を接続します。

新しいCisco APIC [未認可コントローラ (Unauthorized Controllers)] リストの Cisco APIC GUI メニュー [システム (System)] > [コントローラ (Controllers)] > [apic_controller_name] > [ノードで確認するクラスタ (Cluster as Seen by Node)] に表示されます。

- c) **controller controller-id commission** コマンドを使用して新しい Cisco APIC をコミッションします。
- d) 新しい Cisco APIC を起動します。
- e) クラスタの残りの部分に新しい Cisco APIC 情報が伝播するまでに数分かかります。

新しいCisco APIC [現用系コントローラ (Active Controllers)] リストの Cisco APIC GUI メニュー [システム (System)] > [コントローラ (Controllers)] > [apic_controller_name] > [ノードで確認するクラスタ (Cluster as Seen by Node)] に表示されます。

次のタスク

解放した各コントローラにつき、そのコントローラの動作状態が未登録になり、すでにクラスタ内で稼動していないことを確認します。



- (注) デコミッションされたCisco APICがファブリックからすぐに削除されない場合、再検出される可能性があり、問題が発生する可能性があります。その場合、コントローラを削除するために [APIC クラスタのサイズ縮小 \(302 ページ\)](#) の説明に従います。

APIC クラスタのサイズ縮小

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) クラスタのサイズを縮小し、クラスタから削除されたCisco APICを解放するには、次のガイドラインに従います。



- (注) 縮小したクラスタからCisco APICを解放し、電源オフする正しい手順を実行しないと、予期しない結果を招く可能性があります。認識されていないCisco APICをファブリックに接続されたままにしないでください。
- クラスタサイズを縮小した場合、残りCisco APICの負荷が増加します。クラスタの同期がファブリックのワークロードの要求に影響しないときに、Cisco APICサイズの縮小を予定します。
 - クラスタ内の1つ以上のCisco APICのヘルスステータスが「十分に正常」でない場合は、先に進む前にその状況を修復してください。

- クラスタの目標サイズを新たな低い値に減らします。たとえば、既存のクラスタサイズが 6 で、3 台のコントローラを削除する場合は、クラスタの目標サイズを 3 に減らします。
- 既存のクラスタ内でコントローラ識別子の番号が最大のものから、APIC を 1 台ずつ、解放、電源オフ、接続解除し、クラスタが新規の小さい目標サイズになるまで行います。各コントローラを解放および削除するごとに、Cisco APIC はクラスタを同期します。



(注) クラスタから Cisco APIC をデコミッションした後に、直ちに電源をオフにし、再発見を予防するためにファブリックから切断します。サービスを回復する前に、全消去を実行して工場出荷時の状態にリセットします。

切断が遅延し、デコミッションされたコントローラが再検出された場合は、次の手順に従って削除します：

1. Cisco APIC の電源を切り、ファブリックから切断します。
2. [未承認コントローラ (Unauthorized Controllers)] のリストで、コントローラを拒否します。
3. GUI からコントローラを消去します。

- 既存の Cisco APIC が使用できなくなると、クラスタの同期が停止します。クラスタの同期を進める前に、この問題を解決します。
- コントローラの削除の際に Cisco APIC が同期すべきデータの量により、各コントローラの解放とクラスタの同期を完了するために要する時間は、コントローラごとに 10 分以上になる可能性があります。



(注) クラスタに追加の変更を行う前に、必要な解放手順全体を完了し、Cisco APIC がクラスタの同期を完了できるようにしてください。

Cisco APIC クラスタの縮小

Cisco APIC クラスタの縮小とは、正当な境界内で、クラスタ サイズ N から N-1 へサイズの不一致を軽減する動作です。縮小によってクラスタ内の残りの APIC の計算およびメモリの負荷が増大し、解放された APIC クラスタのスロットはオペレータ入力だけで使用できなくなります。

クラスタの縮小の際は、クラスタ内の最後の APIC を最初に解放し、以降逆順で連続的に行います。たとえば、APIC4 は APIC3 の前に解放し、APIC3 は APIC2 の前に解放する必要があります。

CLI を使用してスタンバイ apic 内でアクティブな APIC 経由でスイッチング

スタンバイ apic 内でアクティブな APIC 経由でスイッチするには、次の手順を使用します。

手順

ステップ 1 `replace-controller replace` ID 番号 バックアップ シリアル番号

スタンバイ APIC でアクティブな APIC に置き換えられます。

例 :

```
apic1#replace-controller replace 2 FCH1804V27L
Do you want to replace APIC 2 with a backup? (Y/n): Y
```

ステップ 2 `replace-controller reset` ID 番号

アクティブなコントローラのステータスをリセットが失敗します。

例 :

```
apic1# replace-controller reset 2
Do you want to reset failover status of APIC 2? (Y/n): Y
```

CLI を使用して Cold Standby ステータスを確認する

手順

APIC の `show controller` ステータスを確認するには、管理者として APIC にログインして、`Cold Standbyshow controllerCold Standby` コマンドを入力します。

```
apic1# show controller
Fabric Name       : vegas
Operational Size  : 3
Cluster Size      : 3
Time Difference   : 496
Fabric Security Mode : strict
```

ID	Pod	Address	In-Band IPv4	In-Band IPv6	OOB IPv4
	OOB IPv6		Version	Flags Serial Number	Health
1*	1	10.0.0.1	0.0.0.0	fc00::1	172.23.142.4
		fe80::26e9:b3ff:fe91:c4e0	2.2(0.172)	crva- FCH1748V0DF	fully-fit

```

2      1      10.0.0.2      0.0.0.0      fc00::1      172.23.142.6
      fe80::26e9:bf8f:fe91:f37c  2.2(0.172)      crva-  FCH1747V0YF      fully-fit
3      1      10.0.0.3      0.0.0.0      fc00::1      172.23.142.8
      fe80::4e00:82ff:fead:bc66  2.2(0.172)      crva-  FCH1725V2DK      fully-fit
21~   10.0.0.21
      ----- FCH1734V2DG

Flags - c:Commissioned | r:Registered | v:Valid Certificate | a:Approved | f/s:Failover
fail/success
(*)Current (~)Standby

```

CLI を使用した未登録スイッチの登録

この手順を使用して、CLI を使用して [ファブリック メンバーシップ (Fabric Membership)] 作業ウィンドウの [保留中ノードの登録 (Nodes Pending Registration)] タブからスイッチを登録します。



- (注) この手順は、「CLI を使用したディスカバリ前のスイッチの追加」と同じです。コマンドを実行すると、システムはノードが存在するかどうかを判断し、存在しない場合はそのノードを追加します。ノードが存在する場合、システムにより登録されます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	[no] system switch-id serial-number switch-id name pod id role leaf node-type tier-2-leaf	スイッチを保留中の登録リストに追加します。

CLI を使用したディスカバリ前のスイッチの追加

この手順を使用して、CLI を使用して [ファブリック メンバーシップ (Fabric Membership)] 作業ウィンドウの [保留中ノードの登録 (Nodes Pending Registration)] タブにスイッチを追加します。



- (注) この手順は、「CLI を使用した未登録スイッチの登録」と同じです。コマンドを実行すると、システムはノードが存在するかどうかを判断し、存在しない場合はそのノードを追加します。ノードが存在しない場合、システムにより登録されます。

手順

```
[no] system switch-id serial-number switch-id name pod id role leaf node-type tier-2-leaf
```

スイッチを保留中の登録リストに追加します。

CLI を使用してメンテナンス モードにスイッチを移行する

CLI を使用してメンテナンス モードにスイッチを移行するには、次の手順を使用します。



- (注) スイッチがメンテナンスモード中の場合、スイッチの CLI 「show」 コマンドでは、前面パネルポートがアップ状態であり、BGP プロトコルがアップ状態かつ実行中であることを示します。インターフェイスは実際にシャットダウンされ、BGP のその他すべての隣接関係がダウンしますが、表示されているアクティブ状態でデバッグが可能です。
-

手順

```
[no]debug-switch node_id or node_name
```

メンテナンス モードにスイッチを移行します。

CLI を使用して操作モードにスイッチを挿入する

この手順を使って、スイッチを CLI を使用している動作モードに挿入します。

手順

```
[no]no debug-switch node_id or node_name
```

動作モードにスイッチを挿入します。

NX-OS スタイルの CLI を使用したリモート ロケーションの設定

ACIファブリックでは、techsupportまたはコンフィギュレーションファイルをエクスポートする1つ以上のリモート宛先を設定できます。

手順

	コマンドまたはアクション	目的
ステップ 1	configure 例： apic1# configure	グローバル コンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 2	[no] remote path remote-path-name 例： apic1(config)# remote path myFiles	リモートパスのコンフィギュレーションモードを開始します。
ステップ 3	user username 例： apic1(config-remote)# user admin5	リモートサーバにログインするユーザー名を設定します。パスワードを入力するように求められます。
ステップ 4	path {ftp scp sftp} host[:port] [remote-directory] 例： apic1(config-remote)# path sftp filehost.example.com:21 remote-directory /reports/apic	リモートサーバへのパスとプロトコルを設定します。パスワードを入力するように求められます。

例

次に、ファイルをエクスポートするためにリモートパスを設定する例を示します。

```
apic1# configure
apic1(config)# remote path myFiles
apic1(config-remote)# user admin5
You must reset the password when modifying the path:
Password:
Retype password:
apic1(config-remote)# path sftp filehost.example.com:21 remote-directory /reports/apic
You must reset the password when modifying the path:
Password:
Retype password:
```

NX-OS CLI を使用したスイッチ インベントリの検索

このセクションでは、NX-OS CLI を使用してスイッチのモデルとシリアル番号を見つける方法について説明します。

手順

次のようにスイッチ インベントリを見つけます。

例：

```
switch# show hardware
Cisco Nexus Operating System (NX-OS) Software
TAC support: http://www.cisco.com/tac
Documents: http://www.cisco.com/en/US/products/ps9372/tsd_products_support_series_home.html
Copyright (c) 2002-2014, Cisco Systems, Inc. All rights reserved.
The copyrights to certain works contained in this software are
owned by other third parties and used and distributed under
license. Certain components of this software are licensed under
the GNU General Public License (GPL) version 2.0 or the GNU
Lesser General Public License (LGPL) Version 2.1. A copy of each
such license is available at
http://www.opensource.org/licenses/gpl-2.0.php and
http://www.opensource.org/licenses/lgpl-2.1.php

Software
  BIOS:          version 07.56
  kickstart:    version 12.1(1h) [build 12.1(1h)]
  system:       version 12.1(1h) [build 12.1(1h)]
  PE:           version 2.1(1h)
  BIOS compile time:      06/08/2016
  kickstart image file is: /bootflash/aci-n9000-dk9.12.1.1h.bin
  kickstart compile time: 10/01/2016 20:10:40 [10/01/2016 20:10:40]
  system image file is:   /bootflash/auto-s
  system compile time:    10/01/2016 20:10:40 [10/01/2016 20:10:40]

Hardware
  cisco N9K-C93180YC-EX ("supervisor")
  Intel(R) Xeon(R) CPU @ 1.80GHz with 16400384 kB of memory.
  Processor Board ID FDO20101H1W

  Device name: ifav41-leaf204
  bootflash:   62522368 kB

Kernel uptime is 02 day(s), 21 hour(s), 42 minute(s), 31 second(s)

Last reset at 241000 usecs after Sun Oct 02 01:27:25 2016
  Reason: reset-by-installer
  System version: 12.1(1e)
  Service: Upgrade

plugin
  Core Plugin, Ethernet Plugin
-----
Switch hardware ID information
-----
```

```
Switch is booted up
Switch type is : Nexus C93180YC-EX Chassis
Model number is N9K-C93180YC-EX
H/W version is 0.2010
Part Number is 73-15298-01
Part Revision is 1
Manufacture Date is Year 20 Week 10
Serial number is FDO20101H1W
CLEI code is 73-15298-01
```

```
-----
Chassis has one slot
-----
```

```
Module1 ok
Module type is : 48x10/25G
1 submodules are present
Model number is N9K-C93180YC-EX
H/W version is 0.2110
Part Number is 73-17776-02
Part Revision is 11
Manufacture Date is Year 20 Week 10
Serial number is FDO20101H1W
CLEI code is 73-17776-02
```

```
GEM ok
Module type is : 6x40/100G Switch
1 submodules are present
Model number is N9K-C93180YC-EX
H/W version is 0.2110
Part Number is 73-17776-02
Part Revision is 11
Manufacture Date is Year 20 Week 10
Serial number is FDO20101H1W
CLEI code is 73-17776-02
```

```
-----
Chassis has 2 PowerSupply Slots
-----
```

```
PS1 shut
Power supply type is : 54.000000W 220v AC
Model number is NXA-PAC-650W-PE
H/W version is 0.0
Part Number is 341-0729-01
Part Revision is A0
Manufacture Date is Year 19 Week 50
Serial number is LIT19500ZEK
CLEI code is 341-0729-01
```

```
PS2 ok
Power supply type is : 54.000000W 220v AC
Model number is NXA-PAC-650W-PE
H/W version is 0.0
Part Number is 341-0729-01
Part Revision is A0
Manufacture Date is Year 19 Week 50
Serial number is LIT19500ZEA
CLEI code is 341-0729-01
```

```
-----
Chassis has 4 Fans
-----
```

```

FT1 ok

Fan1(sys_fan1) (fan_model:NXA-FAN-30CFM-F)           is inserted
but info is not available

FT2 ok

Fan2(sys_fan2) (fan_model:NXA-FAN-30CFM-F)           is inserted
but info is not available

FT3 ok

Fan3(sys_fan3) (fan_model:NXA-FAN-30CFM-F)           is inserted
but info is not available

FT4 ok

Fan4(sys_fan4) (fan_model:NXA-FAN-30CFM-F)           is inserted
but info is not available

```

CLI を使用した Cisco APIC クラスターの確認

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) リリース 4.2.(1) では、Cisco APIC クラスターのステータスを段階的に確認できる **cluster_health** コマンドが導入されています。次の出力例は、非アクティブな 1 つのノード (ID 1002) を除いてすべてが問題ないシナリオを示しています。



(注) **cluster_health** コマンドを使用するには、管理者としてログインする必要があります。

手順

クラスター ステータスを確認する方法：

```

F1-APIC1# cluster_health
Password:

Running...

Checking Wiring and UUID: OK
Checking AD Processes: Running
Checking All Apics in Commission State: OK
Checking All Apics in Active State: OK
Checking Fabric Nodes: Inactive switches: ID=1002(IP=10.1.176.66/32)
Checking Apic Fully-Fit: OK
Checking Shard Convergence: OK
Checking Leadership Degration: Optimal leader for all shards
Ping OOB IPs:

```

```

APIC-1: 172.31.184.12 - OK
APIC-2: 172.31.184.13 - OK
APIC-3: 172.31.184.14 - OK
Ping Infra IPs:
APIC-1: 10.1.0.1 - OK
APIC-2: 10.1.0.2 - OK
APIC-3: 10.1.0.3 - OK
Checking APIC Versions: Same (4.2(0.261a))
Checking SSL: OK

Done!

```

表 8: Cluster_Health 検証手順

ステップ	説明
配線と UUID の確認	<p>リーフ スイッチは、Cisco APIC の LLDP を使用してを検出することにより、Cisco APIC 相互間のインフラ接続を提供します。この手順では、LLDP 検出中に検出されたリーフと Cisco APIC の間の配線の問題をチェックします。</p> <p>ここでの問題は、有効な情報がないため、リーフ スイッチが Cisco APIC にインフラ接続を提供できないことを意味します。たとえば、Cisco APIC の UUID の不一致は、新しい APIC2 の UUID が以前の既知の APIC2 とは異なることを意味します。</p> <p>UUID : Universally Unique ID、または一部の出力のシャーシ ID</p>
AD プロセスの確認	<p>Cisco APIC クラスタリングは、Cisco APIC のそれぞれの Appliance Director プロセスによって処理されます。このステップでは、プロセスが正しく実行されているかどうかを確認します。</p>
コミッション状態のすべての APIC のチェック	<p>Cisco APIC クラスタリングを完了するには、すべての Cisco APIC を試運転する必要があります。</p>
アクティブ状態のすべての APIC のチェック	<p>Cisco APIC クラスタリングを完了するには、コミッションされたすべての Cisco APIC がアクティブである必要があります。アクティブになっていない場合は、Cisco APIC がまだ起動していない可能性があります。</p>

ステップ	説明
ファブリック ノードの確認: 非アクティブ スイッチ	Cisco APIC の通信は、リーフ スイッチとスパイン スイッチによって提供されるインフラ接続を介して行われます。この手順では、非アクティブなスイッチをチェックして、スイッチがインフラ接続を提供していることを確認します。
APIC の完全フィットの確認	Cisco APIC は、インフラ ネットワークを介して相互に IP 到達可能性を確立すると、データベースを相互に同期します。同期が完了すると、すべて Cisco APIC のステータスが「Fully-Fit」になります。それ以外の場合、ステータスは「Data Layer Partially Diverged」などになります。
シャード収束の確認	Cisco APIC が完全に「Fully-Fit」でない場合、データベース シャードをチェックして、完全に同期されていないサービスを確認する必要があります。同期に問題のあるサービスがある場合は、Cisco TAC に連絡して、さらにトラブルシューティングを行ってください。
リーダーシップのデグレージョンの確認	ACI では、各データベース シャードに 1 つのリーダー シャードがあり、クラスタ内の Cisco APIC それぞれに分散されます。このステップは、すべてのシャードに最適なリーダーがあるかどうかを示します。すべての Cisco APIC が稼働しているときにここで問題が発生した場合は、Cisco TAC に連絡して、さらにトラブルシューティングを行ってください。
Ping OOB IP	この手順では、クラスタリングとは別に構成されている OOB IP に ping を実行して、すべての Cisco APIC が稼働しているかどうかを確認します。
Ping インフラ IP	この手順では、それぞれの Cisco APIC 間にインフラ接続があるかどうかを確認します。Cisco APIC クラスタリングは、OOB ではなくインフラ接続を介して実行されます。
APIC バージョンを確認する	クラスタリングを完了するには、すべての Cisco APIC が同じバージョンである必要があります。

ステップ	説明
SSL の確認	Cisco APIC をアプライアンスとして購入する場合、すべての Cisco APIC に有効な SSL を組み込む必要があります。有効な SSL がないと、サーバは Cisco APIC OS を正しく動作させることができません。



付録 **B**

REST API を使用した Cisco APIC の設定

- REST API を使用した APIC クラスタの拡大 (315 ページ)
- REST API を使用した APIC クラスタの縮小 (316 ページ)
- APIC クラスタのサイズ縮小 (318 ページ)
- REST API を使用してアクティブ APIC とスタンバイ APIC を切り替える (319 ページ)
- REST API を使用した未登録スイッチの登録 (320 ページ)
- REST API を使用したディスカバリ前のスイッチの追加 (320 ページ)
- REST API を使用して、メンテナンス モードにスイッチを削除 (321 ページ)
- REST API を使用した操作モードへのスイッチの挿入 (322 ページ)
- REST API を使用したリモート ロケーションの設定 (322 ページ)
- REST API を使用したオンデマンドテクニカル サポート ファイルの送信 (323 ページ)
- REST API を使用したスイッチ インベントリの検索 (323 ページ)

REST API を使用した APIC クラスタの拡大

クラスタは、実際のサイズを目標サイズに合わせます。目標サイズが実際のサイズよりも大きい場合、クラスタ サイズが拡大します。

手順

ステップ 1 APIC クラスタのサイズを拡大するために目標のクラスタ サイズを設定します。

例 :

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/uni/controller.xml
<infraClusterPol name='default' size=3/>
```

ステップ 2 クラスタに追加する APIC コントローラを物理的に接続します。

REST API を使用した APIC クラスタの縮小

コントローラを削除してクラスタサイズを縮小するには、次の手順を使用します。クラスタサイズの縮小の詳細については、[Cisco APIC クラスタの縮小 \(303 ページ\)](#) を参照してください。



(注) Cisco APIC リリース 6.0(2) 以降、デコミッション操作を強制できるようにするために、API コマンドに2つの追加プロパティが追加されました。新しいオブジェクトプロパティは次のとおりです。

- `infraClusterPol:shrink`
 - `false` : (デフォルト) ターゲットクラスタ サイズ (`infraClusterPol:size`) が現在の運用クラスタサイズより小さい場合、以前のリリースと同様に、削除する APIC を手動で廃止する必要があります。
 - `true` : ターゲットクラスタ サイズが現在の運用クラスタ サイズよりも小さい場合、クラスタ縮小デコミッションがトリガーされます。削除される APIC については、コントローラ ID 番号が最も大きい APIC から自動的にデコミッションされます。
- `infraWiNode:force`
 - `false` : (デフォルト) クラスタが異常な場合、またはアップグレード状態である場合には、デコミッションが適切でない可能性があるため、それ以外の場合にのみデコミッションを続行します。
 - `true` : クラスタの状態に関係なく、デコミッションを続行します。

次に、クラスタを3つの APIC コントローラから1つのコントローラに縮小する例を示します。ターゲットサイズを1にするには、APIC3 と APIC2 をこの順序で廃止する必要があります。

手順

ステップ 1 APIC クラスタのサイズを縮小するため、目標のクラスタ サイズを設定します。

`shrink='true'` を使用してクラスタサイズを縮小すると、削除される APIC は自動的にデコミッションされます。それ以外の場合は、手動でデコミッションする必要があります。

例 :

Cisco APIC リリース 6.0(1) 以前 :

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/uni/controller.xml
<infraClusterPol name='default' size=1 />
```

次の手順に示すように、削除する APIC を手動でデコミッションする必要があります。

例：

Cisco APIC リリース 6.0(2) 以降で「shrink」プロパティを使用する場合：

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/uni/controller.xml
<infraClusterPol name='default' size=1 shrink='true' />
```

shrink='true' を使用すると、次の手順をスキップできます。削除する APIC は自動的にデコミッションされます。

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/uni/controller.xml
<infraClusterPol name='default' size=1 shrink='false' />
```

shrink='false' を使用する場合には、次の手順に示すように、削除する APIC を手動でデコミッションする必要があります。

ステップ 2 クラスタ縮小のための APIC1 上の APIC3 の解放

例：

Cisco APIC リリース 6.0(1) 以前：

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/topology/pod-1/node-1/av.xml
<infraWiNode id=3 adminSt='out-of-service' />
```

デコミッションは、クラスターが正常な状態にある場合にのみ続行されます。

例：

Cisco APIC リリース 6.0(2) 以降で「force」プロパティを使用する場合：

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/topology/pod-1/node-1/av.xml
<infraWiNode id=3 adminSt='out-of-service' force='true' />
```

force='true' の場合、クラスターの状態に関係なくデコミッションが進行します。

ステップ 3 クラスタ縮小のための APIC1 上の APIC2 の解放

例：

Cisco APIC リリース 6.0(1) 以前：

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/topology/pod-1/node-1/av.xml
<infraWiNode id=2 adminSt='out-of-service' />
```

デコミッションは、クラスターが正常な状態にある場合にのみ続行されます。

例：

Cisco APIC リリース 6.0(2) 以降で「force」プロパティを使用する場合：

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/topology/pod-1/node-1/av.xml
<infraWiNode id=2 adminSt='out-of-service' force='false' />
```

`force='false'` の場合、クラスターが正常な状態にある場合にのみデコミッションが実行されます。

稼動クラスタのサイズが縮小するのは、最後のアプライアンスが解放されたときで、管理サイズを変更したときではありません。各コントローラを解放した後、そのコントローラの動作状態が未登録になり、すでにクラスタ内で稼動していないことを確認します。



- (注) デコミッションされた APIC コントローラがファブリックからすぐに削除されない場合、再検出される可能性があり、問題が発生する可能性があります。その場合、コントローラを削除するために [APIC クラスタのサイズ縮小 \(302 ページ\)](#) の説明に従います。

APIC クラスタのサイズ縮小

Cisco Application Policy Infrastructure Controller (APIC) クラスタのサイズを縮小し、クラスタから削除された Cisco APIC を解放するには、次のガイドラインに従います。



- (注) 縮小したクラスタから Cisco APIC を解放し、電源オフする正しい手順を実行しないと、予期しない結果を招く可能性があります。認識されていない Cisco APIC をファブリックに接続されたままにしないでください。
- クラスタサイズを縮小した場合、残り Cisco APIC の負荷が増加します。クラスタの同期がファブリックのワークロードの要求に影響しないときに、Cisco APIC サイズの縮小を予定します。
 - クラスタ内の 1 つ以上の Cisco APIC のヘルスステータスが「十分に正常」でない場合は、先に進む前にその状況を修復してください。
 - クラスタの目標サイズを新たな低い値に減らします。たとえば、既存のクラスタサイズが 6 で、3 台のコントローラを削除する場合は、クラスタの目標サイズを 3 に減らします。
 - 既存のクラスタ内でコントローラ識別子の番号が最大のものから、APIC を 1 台ずつ、解放、電源オフ、接続解除し、クラスタが新規の小さい目標サイズになるまで行います。各コントローラを解放および削除するごとに、Cisco APIC はクラスタを同期します。



(注) クラスタから Cisco APIC をデコミッションした後に、直ちに電源をオフにし、再発見を予防するためにファブリックから切断します。サービスを回復する前に、全消去を実行して工場出荷時の状態にリセットします。

切断が遅延し、デコミッションされたコントローラが再検出された場合は、次の手順に従って削除します：

1. Cisco APIC の電源を切り、ファブリックから切断します。
2. [未承認コントローラ (Unauthorized Controllers)] のリストで、コントローラを拒否します。
3. GUI からコントローラを消去します。

- 既存の Cisco APIC が使用できなくなると、クラスタの同期が停止します。クラスタの同期を進める前に、この問題を解決します。
- コントローラの削除の際に Cisco APIC が同期すべきデータの量により、各コントローラの解放とクラスタの同期を完了するために要する時間は、コントローラごとに 10 分以上になる可能性があります。



(注) クラスタに追加の変更を行う前に、必要な解放手順全体を完了し、Cisco APIC がクラスタの同期を完了できるようにしてください。

REST API を使用してアクティブ APIC とスタンバイ APIC を切り替える

REST API を使用してアクティブな APIC とスタンバイ APIC を切り替えるには、この手順を使用します。

手順

アクティブ APIC とスタンバイ APIC を切り替えます。

```
URL for POST: https://ip
address/api/node/mo/topology/pod-initiator_pod_id/node-initiator_id/av.xml
Body: <infraWiNode id=outgoing_apic_id targetMbSn=backup-serial-number/>
where initiator_id = id of an active APIC other than the APIC being replaced.
pod-initiator_pod_id = pod ID of the active APIC
backup-serial-number = serial number of standby APIC
```

例 :

```
https://ip address/api/node/mo/topology/pod-1/node-1/av.xml
<infraWNode id=2 targetMbSn=FCH1750V00Q/>
```

REST API を使用した未登録スイッチの登録

この手順を使用して、REST API を使用して [ファブリック メンバーシップ (Fabric Membership)] 作業ウィンドウの [保留中ノードの登録 (Nodes Pending Registration)] タブからスイッチを登録します。



- (注) この手順は、「REST API を使用したディスカバリ前のスイッチの追加」と同じです。コードを適用すると、システムはノードが存在するかどうかを判断し、存在しない場合はそのノードを追加します。ノードが存在しない場合、システムにより登録されます。

手順

スイッチ説明を追加します。

例 :

```
POST
https://<IP address>/api/policymgr/mo/uni.xml

<!-- /api/policymgr/mo/uni.xml -->
<polUni>
<ctrlrInst>
  <fabricNodeIdentPol>
    <fabricNodeIdentP nodeType="tier-2-leaf" podId="1" serial="XXXXXXXX"
      name="tier-2-leaf-leaf1" nodeId="101"/>
  </fabricNodeIdentPol>
</ctrlrInst>
</polUni>
```

REST API を使用したディスカバリ前のスイッチの追加

この手順を使用して、REST API を使用して [ファブリック メンバーシップ (Fabric Membership)] 作業ウィンドウの [保留中ノードの登録 (Nodes Pending Registration)] タブにスイッチを追加します。



- (注) この手順は、「REST API を使用した未登録スイッチの登録」と同じです。コードを適用すると、システムはノードが存在するかどうかを判断し、存在しない場合はそのノードを追加します。ノードが存在しない場合、システムにより登録されます。

手順

スイッチ説明を追加します。

例：

```
POST
https://<IP address>/api/policymgr/mo/uni.xml

<!-- /api/policymgr/mo/uni.xml -->
<polUni>
<ctrlrInst>
  <fabricNodeIdentPol>
    <fabricNodeIdentP nodeType="tier-2-leaf" podId="1" serial="XXXXXXXXX"
      name="tier-2-leaf1" nodeId="101"/>
  </fabricNodeIdentPol>
</ctrlrInst>
</polUni>
```

REST API を使用して、メンテナンス モードにスイッチを削除

REST API を使用して、メンテナンス モードにスイッチを削除するのには、次の手順を使用します。

手順

メンテナンス モードにスイッチを削除します。

例：

```
POST
https://<IP address>/api/node/mo/uni/fabric/outofsvc.xml

<fabricOOServicePol
  descr=""
  dn=""
  name="default"
  nameAlias=""
```

```

    ownerKey=""
    ownerTag="">
<fabricRsDecommissionNode
  debug="yes"
  dn=""
  removeFromController="no"
  tDn="topology/pod-1/node-102"/>
</fabricOOServicePol>

```

REST API を使用した操作モードへのスイッチの挿入

REST API を使用して操作モードにスイッチを挿入するには、次の手順を使用します。

手順

操作モードにスイッチを挿入します。

例：

```

POST
https://<IP address>/api/node/mo/uni/fabric/outofsvc.xml

```

```

<fabricOOServicePol
  descr=""
  dn=""
  name="default"
  nameAlias=""
  ownerKey=""
  ownerTag="">
<fabricRsDecommissionNode
  debug="yes"
  dn=""
  removeFromController="no"
  tDn="topology/pod-1/node-102"
  status="deleted"/>
</fabricOOServicePol>

```

REST API を使用したリモート ロケーションの設定

この手順では、REST API を使用してリモート ロケーションを作成する方法について説明します。

```

<fileRemotePath name="local" host="host or ip" protocol="ftp|scp|sftp" remotePath="path
to folder" userName="uname" userPasswd="pwd" />

```

REST API を使用したオンデマンド テクニカル サポート ファイルの送信

手順

ステップ 1 REST API を使用して次の例のような XML を POST 送信し、テクニカル サポート ファイルのリモート宛先を設定します。

例 :

```
<fileRemotePath userName="" remotePort="22" remotePath="" protocol="sftp" name="ToSupport"
  host="192.168.200.2"
  dn="uni/fabric/path-ToSupport" descr="">

<fileRsARemoteHostToEpg tDn="uni/tn-mgmt/mgmt-default/oob-default"/>

</fileRemotePath>
```

ステップ 2 REST API を使用して次のような XML を POST 送信し、オンデマンドのテクニカル サポート ファイルを生成します。

例 :

```
<dbgexpTechSupOnD upgradeLogs="no" startTime="unspecified" name="Tech_Support_9-20-16"
  exportToController="no" endTime="unspecified" dn="uni/fabric/tsod-Tech_Support_9-20-16"
  descr=""
  compression="gzip" category="forwarding" adminSt="untriggered">
  <dbgexpRsExportDest tDn="uni/fabric/path-ToSupport"/>
  <dbgexpRsTsSrc tDn="topology/pod-1/node-102/sys"/>
  <dbgexpRsTsSrc tDn="topology/pod-1/node-103/sys"/>
  <dbgexpRsTsSrc tDn="topology/pod-1/node-101/sys"/>
  <dbgexpRsData tDn="uni/fabric/tscont"/>
</dbgexpTechSupOnD>
<fabricFuncP>
  <fabricCtrlrPGrp name="default">
    <fabricRsApplTechSupOnDemand tnDbgexpTechSupOnDName=" Tech_Support_9-20-16"/>
  </fabricCtrlrPGrp>
</fabricFuncP>
```

REST API を使用したスイッチ インベントリの検索

このセクションでは、REST API を使用してスイッチのモデルとシリアル番号を見つける方法について説明します

手順

次のようにスイッチ インベントリを見つけます。

例 :

GET

<https://192.0.20.123/api/node/mo/topology/pod-1.json?query-target=children&target-subtree-class=fabricNode>

次の応答が返されます :

response:

```
{
  "totalCount": "8",
  "imdata":
  [{
    "fabricNode": {
      "attributes": {
        "adSt": "on",
        "childAction": "",
        "delayedHeartbeat": "no",
        "dn": "topology/pod-1/node-103",
        "fabricSt": "active",
        "id": "103",
        "lcOwn": "local",
        "modTs": "2016-10-08T14:49:35.665+00:00",
        "model": "N9K-C9396PX",
        "monPolDn": "uni/fabric/monfab-default",
        "name": "leaf3",
        "nameAlias": "",
        "role": "leaf",
        "serial": "TEP-1-103",
        "status": "", "uid": "0",
        "vendor": "Cisco Systems, Inc",
        "version": ""
      }
    },
    "fabricNode": {
      "attributes": {
        "adSt": "on",
        "childAction": "",
        "delayedHeartbeat": "no",
        "dn": "topology/pod-1/node-105",
        "fabricSt": "active",
        "id": "105",
        "lcOwn": "local",
        "modTs": "2016-10-08T14:47:52.011+00:00",
        "model": "N9K-C9508",
        "monPolDn": "uni/fabric/monfab-default",
        "name": "spine2",
        "nameAlias": "",
        "role": "spine",
        "serial": "TEP-1-105", "status": "",
        "uid": "0",
        "vendor": "Cisco Systems, Inc",
        "version": ""
      }
    },
    ...
  ]
}
```

[TRUNCATED]

```
} ...
```

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。